

# 山梨の技術・家庭科 40年の歩み



山梨県中学校技術・家庭科研究会

# 山梨の技術・家庭科

## 40年の歩み



第24回・第34回  
関ブロ・全日中山梨大会  
大会要録  
研究集録

山梨県中学校技術・家庭科研究会

# 山梨の技術・家庭科40年の歩み 目次 山梨県中学校技術・家庭科研究会

目次	1
1、巻頭言 山梨県中学校技術・家庭科研究会会長	岩間孝吉 2
2、写真で見る40年の歩み	河野仁美 3
3、山梨県中学校技術・家庭科教育年表	鈴木 昇 9
4、本会に寄せる言葉	全日本中学校技術・家庭科研究会会長 奈良治一 18
	文部省初等中等教育局視学官 河野公子 19
	山梨県教育委員会委員長 葭沢一富 20
	山梨大学教育学部教授 内藤道子 21
	山梨大学教育学部教授 上里正男 22
5、歴代会長・副会長、先輩の先生方の言葉	保坂元治、大沢保彦、望月教三、深沢六郎、宮川逸雄 23
	立川隆章、篠原 茂、長沼元江、藤原 完、山梨利果
	樋 敏雄、井上英信、横谷忠明、赤池 功、小沢せつ子
6、研究会活動の歩みを語る	
(1) 歴代事務局長	斎藤 章、小澤建二 38
	長久保 学、長田 靖
(2) 歴代の研究推進委員長・副委員長	清水禮子、山田順子、小宮山幸枝 42
	小澤建二、長久保 学
(3) 各支部活動の歩みと現在の状況	東山梨、東八代、中巨摩、西八代、南巨摩 47
	北巨摩、南都留、北都留、甲府
(4) 各専門部活動	調査資料部・長田 靖 65
	学習ノート編集部・三枝 修
(5) 関プロ山梨大会	第24回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会、山梨大会(斎藤章) 69
	第34回全日本中学校技術・家庭科研究大会、山梨大会(一木貞夫)
(6) 歴代の指導主事・研修主事の立場から	立川隆章、新藤一磨、葉袋 恒、日原 誠 97
	佐野よ志み、土屋満津子、神宮司真佐子、赤松 東
	中村公明、津金 猛、石川正昭、信田久江、秋山宏子、矢野由美子
(7) 本研究会年度別役員一覧	小澤建二 111
(8) 本研究会「会報」発行の記録	広瀬安男 115
7、技術・家庭科教育の歩み	
(1) 技術教育の思潮	古屋正賢(「20年史」より再録) 121
(2) 技術・家庭科教育の足あと	滝 愛子、岩間孝吉 130
(3) 技術・家庭科教育の現在と未来	入蔵靖彦、網倉玉枝 135
8、諸資料	
(1) 本研究会生徒作品展の歩み(昭和62年度～平成9年度)	加々本哲也 137
(2) 関プロ・全日中大会提案者、授業者、司会者、助言者一覧	三枝 修 141
(3) 教育研究全国集会参加者・報告主題一覧	山田順子 145
(4) 技術・家庭科担当指導主事・研修主事一覧	神宮司真佐子 148
(5) 平成9年度本研究会の会則、組織、事業報告と計画、会計報告と決算	長田 靖 149
(6) 三十年史の資料	横内京子 162
9、あとがき(編集後記)	岩間孝吉 166

\*表紙デザイン……………鈴木 昇

## 技術・家庭科教育の創造

山梨県中学校技術・家庭科研究会会長 岩間孝吉

昭和33年(1958年)に発足した技術・家庭科は、今年1998年(平成10年)で、満40年を迎える。

中学校教育課程(学習指導要領)改定の度毎に、大きな影響を受けてきた教科の一つである。昭和33年に発足した後、約3年の移行期間を経て、職業・家庭科から技術・家庭科へと転換されてきている。

発足当時の文部省『中学校技術・家庭指導書』(昭和34年)に——最近における科学技術や産業の目ざましい発展に伴い、国民全般の科学技術に関する教養を高め、わが国の産業や国民生活の発展向上を図ることが、きわめて重要になってきた。このため中学校に技術・家庭科が設けられ、青少年の近代技術に関する教養をいっそう充実することになったのである。(同指導書1ページ)——と教科設定の意図が記述されている。

この発足当初の教科目標は——1 生活に必要な基礎的技術を習得させ、創造し生産する喜びを味わわせ、近代技術に関する理解を与え、生活に処する基本的な態度を養う。(同指導書2ページ)——当時からすでに生活と生産(技術)との関わりの難しさが、感じられる目標設定のように思われる。

3回の改定を経て後、平成9年の教育課程審議会からの中間答申によれば——⑨家庭、技術・家庭(ア)生活と技術とのかかわり、家庭生活や家族関係、子育ての意義などを理解させるとともに、基礎的・基本的な知識・技術を確実に身に付けさせ、男女が協力して家庭生活をよりよくしようとする意欲と実践的な態度を育てることを重視する。(文部省『中等教育資料』平成10年1月号121

～122ページ)と述べられている。

生活と技術のかかわり、基礎的・基本的な技術の習得、男女の協力などは、一応継承されている点である。生産技術と日常生活あるいは生産と消費、生活と労働(職業)などとのかかわりについては、大きな変化のある点である。

技術・家庭科発足の昭和33年から、男女別学での学習形態路線が踏襲されたわけであり(職業・家庭科時代からの延長線上になおあり)、教科の名称は新しくなっても、単一教科理論としては弱みを残していた。また、大学の教員養成機構も技術と家庭別々のしくみであり、二教科的な性格が濃いと言わざるをえない状況が続いていた。

40年にわたる技術・家庭科の歩みを支えてきた教師たちの願いは、何といたっても実践的・体験的な学習活動の重視である。

単一教科理論を持つべきであるとする意見と、歴史的にも異なる経緯を持つ内容から二教科にならざるをえないとする意見、あるいはその中間的な意見などであろうが、教育現場の教師としては、日々の授業実践をこそ確かならしめてくれる教科理論を望む。

偏狭な縄張り意識や既成概念にとらわれた教育理論は、もう結構である。子ども(生徒)たちは、何より技術・家庭科が好きで情熱を燃やす先生と楽しい授業を期待している。技術・家庭科を好きな教師こそが、未来の技術・家庭科教育を創造していく力を持っている。「技術」の教員免許を持ち担当する女性教師がすでに多勢いるし、「家庭」の教員免許を持ち担当する男性教師も現われて、協力する時代がくるかもしれない。

## 2. 写真で見る 40 年の歩み

第 24 回関東甲信越地区

中学校技術・家庭科研究大会 山梨大会（昭和 60 年）

全体会



文 部 省

津止調査官



村田調査官



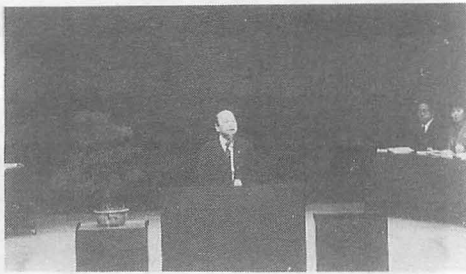
望月大会会長



表 彰



来賓祝辞（石川県教育長）



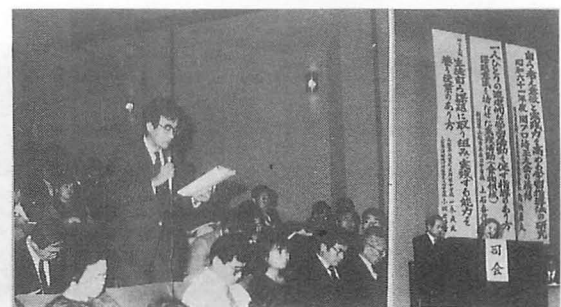
記念講演（渡辺茂教授）



研究発表



研究協議



第 24 回 関東甲信越地区 山梨大会 (昭和 60 年) 分科会授業風景

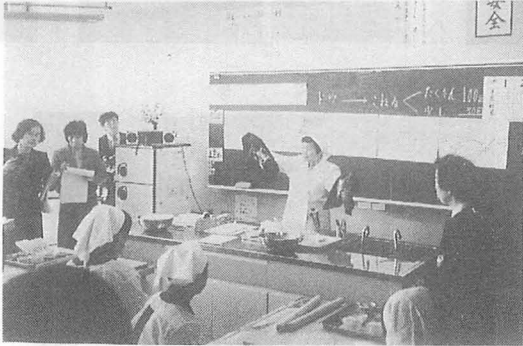
木材加工



金工



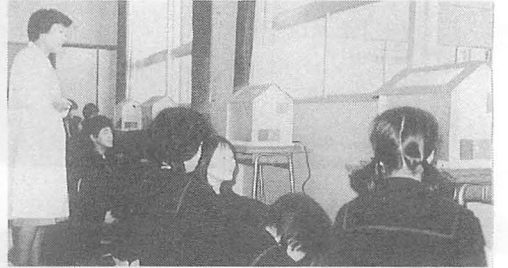
食物



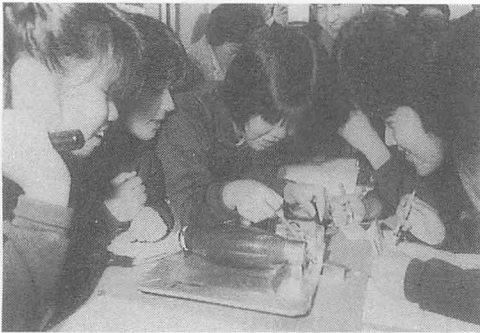
被服



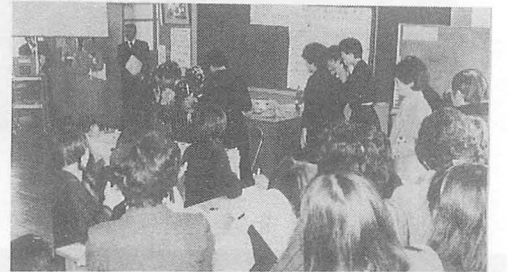
住居



教育課程



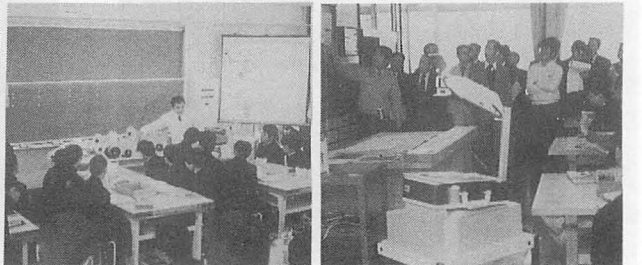
保育



栽培



機械 電気



第34回全日本 第34回関東甲信越地区  
中学校技術・家庭科研究大会 山梨大会 (平成7年)

料品の買取り・会大員登壇・会誌

会誌 買取り 会大員登壇

会大員登壇 買取り 会誌

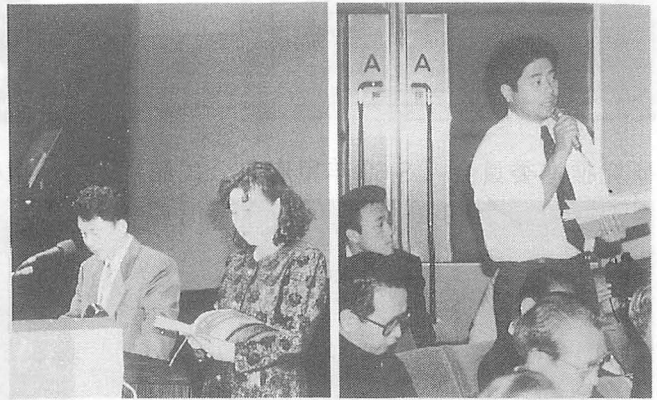
全体会

大宮会長挨拶



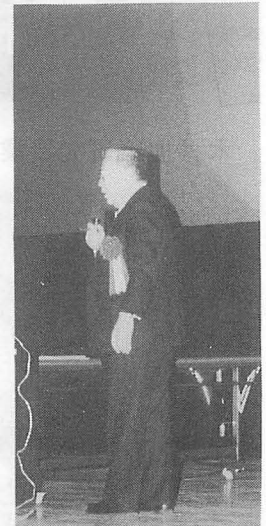
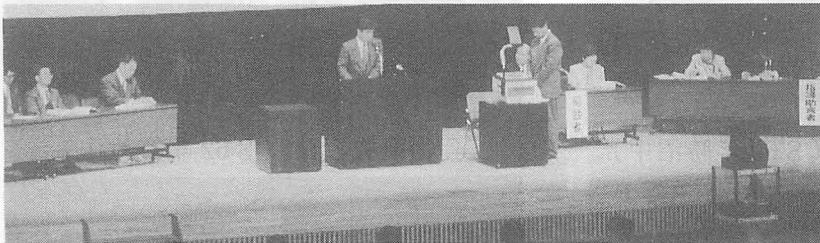
一木大会会長

研究発表・協議



研究発表ステージ

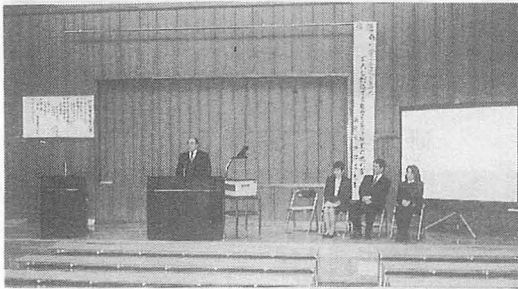
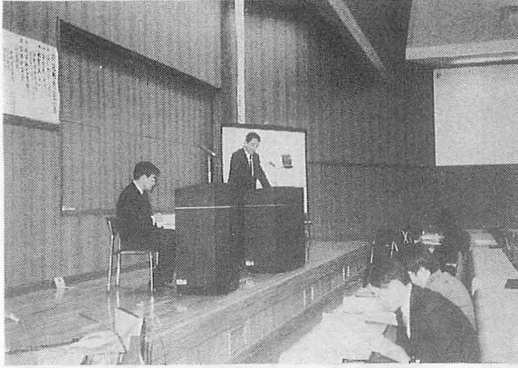
記念講演 (林英輔教授)



生徒作品



平成 5 年度研究発表大会



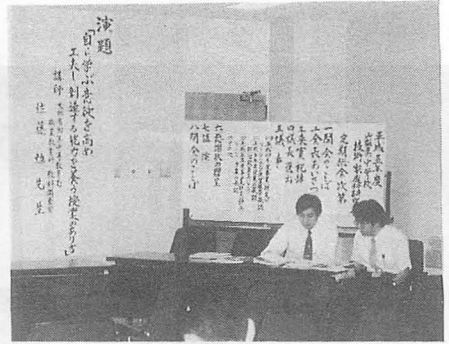
研究推進委員会 (S 60 年甲府北公民館)



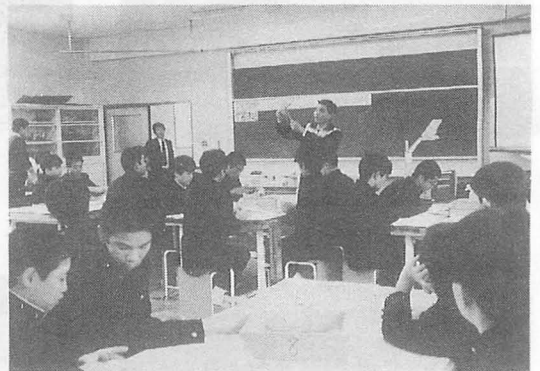
木材加工研究授業 (S 60 年勝沼中)



平成 8 年度 総会



機械研究授業 (S 60 年甲府南中)



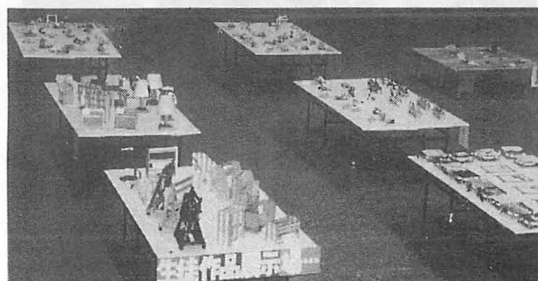
食物研究授業 (S 62 年富竹中)





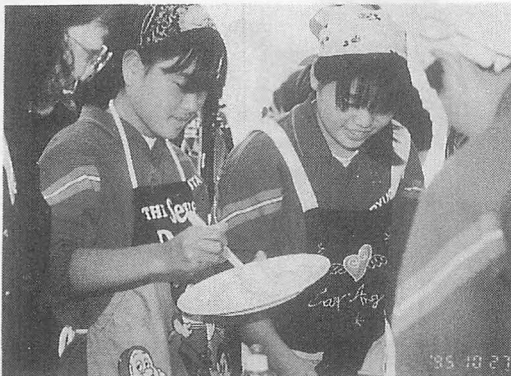
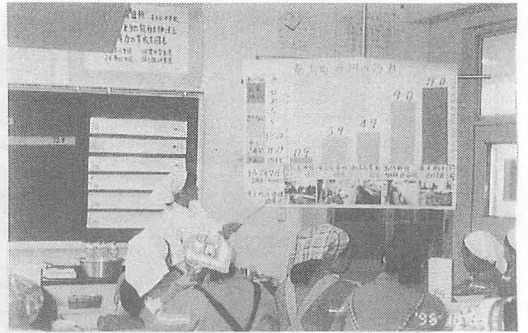
第34回全日本・関東甲信越地区山梨大会 (平成7年)

第4分科会 機械 授業風景および研究協議会



(関東甲信越地区山梨大会・機械)

(会場・山中湖村立山中湖中学校)



(対等中島中山立井島中山・議会)

(会場・竜王町立竜王北中学校)

### 3. 山梨県中学校技術・家庭科教育年表

年	研究会総会・研究発表大会	会長事務局	主な事柄	技術・家庭科の歩み 関プロと全国大会	日本の教育 その他
33	県下には、山梨県中学校産業教育連盟、中学校職業・家庭科研究会、日本職業指導協会山梨県支部、山教組研究サークルの4つの研究の流れがあった。職業・家庭科から技術・家庭科への移行の年を迎へ、この際一本化した研究団体をつくり、教育条件や指導技術の向上を図り技術教育…の規範確立に役立つものになりたいと県下各地区および各研究団体の代表が集って準備会をもち、昭和34年2月会則を制定、昭和36年2月11日県民会館大講堂において設立総会を開き山梨県中学校技術教育研究会が発足した		・職業・家庭科で進路指導をとりあつかつていた	・中学校学習指導要領改訂 ・職業・家庭科から、技術・家庭科へ (昭和37年度完全実施) ・職業・家庭科 週4時間	・小・中学校学習指導要領改訂
34			実技研修会 男子12日間 女子4日間 1年目始まる	・技術科免許状取得講習さかん ・職業・家庭科 週4時間	・移行措置要項公布 ・学校安全会法成立
35		若林 武	・女子向き被服の型紙刊行 ・実習ノート1年用作成 ・実技研修2年目	・技術・家庭科移行1年次 ・文部省中学校技術・家庭科設備参考例発表 ・日本産業教育学会創立	・学習指導要領に基づく移行1年目 ・教頭に管理職手当支給
36	・第2回定期総会 (甲府工業高校36. 7. 8) 予算 100. 000円 研究テーマ ・技術・家庭科の運営 ・技術・家庭科の指導 ・第1回研究発表大会 (甲府工業高校 36.12.3)	若林 武 芦沢季男 高木盈子	・研究会役員の形態整う ・実習ノート・2,3年用作成 ・実技研修3年目	・技術・家庭科へ移行2年次 ・中・高の教育課程に即応して免許取得方法について特例を設ける ・技術教育に関する本質論、さかん	・学習指導要領に基づく移行2年目 ・学校2, 3年生に全国統一学カテスト実施
37	・第3回定期総会(県民会館映画講堂37. 6. 30) 予算 102. 000円 研究テーマ ・技術・家庭科の運営 ・技術・家庭科の指導 ・第2回研究発表大会 (甲府工業高校37. 12. 9)	永井章次 進藤晴雄 今村ます	・実習ノート改訂 ・第2次実技研修はじまる ・関プロ研究会組織づくりの結成準備会(甲府 37. 6. 28) ・技術教育振興後援会設立(37. 12. 9)	・技術・家庭科新指導要領により完全実施 ・第1回全国・関プロ技術・家庭科研究大会群馬で開催 ・技術・家庭科の運営 ・技術・家庭科の指導 ・技術・家庭科週3時間	・昭和33年改訂の学習指導要領に基づき完全実施 ・全国小・中学校統一学カテスト実施
38	・第4回定期総会 (県民会館映画講堂 38. 6. 15) 予算 217. 572円 研究テーマ ・技術・家庭科の本質をふまえた学習指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか ・施設設備の管理運営 ・第3回研究発表大会 (甲府工業高校38. 12. 7)	吉岡忠喜 進藤晴雄 今村ます	・関プロ山梨大会にそなえ研究さかん ・技術・家庭科の学習指導の深化をはかる具体策として指導計画(A. B表)の作成	・技術・家庭科完全実施2年目 ・中学校技術・家庭科設備参考例改訂 ・中産審 技術・家庭科設備新基準建議 ・第2回関プロ千葉大会 ・技術・家庭科の運営 ・技術・家庭科の指導 ・第2回全国技術・家庭科岡山大会	・文相道徳教育の副読本の基準を文部省が示すと発言 ・義務教育諸学校の教科用図書は無償措置法公布

39	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術教育研究会を技術・家庭科研究会と改称</li> <li>・第5回定期総会 (県民会館映画講堂39. 5. 12)</li> <li>予算 260,092円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・技術・家庭科の本質をふまえた学習指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか</li> <li>・施設設備の管理運営</li> <li>・第4回研究発表大会兼関プロ山梨大会 (県民会館39. 10. 28~29)</li> </ul>	吉岡忠喜 進藤春雄 今村ます	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関プロ山梨大会にそなえて研究さかん</li> <li>・指導細案(C表)の編集と発行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業教育振興法施行令一部改正 (施設設備基準の改訂)</li> <li>・第3回関プロ山梨大会</li> <li>・技術・家庭科の本質をふまえた学習指導を効果的に行うには、どのようにしたらよいか</li> <li>・施設設備の管理運営</li> <li>・第3回全国技術・家庭科滋賀大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・義務教育諸学校の教科用図書は無償措置に関する法律施行令公布</li> </ul>
40	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第6回定期総会 (恩賜林記念会館40. 7. 11)</li> <li>予算 317,628円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・技術・家庭科の学習指導の深化をはかる具体策について</li> <li>・第5回研究発表大会 臨時総会 (遊亀会館40. 11. 25)</li> <li>・会則一部改正</li> </ul>	代永都志雄 三科一彦 秋山藤江 進藤晴雄	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各支部に研究助成をおこなう</li> <li>・研究会に専門部を設ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業教育振興法施行令一部改正 (施設設備基準の改訂)</li> <li>・産業教育80周年式典</li> <li>・第4回関プロ新潟大会</li> <li>・技術・家庭科における効果的な管理運営と効果的な学習指導</li> <li>・第4回全国技術・家庭科静岡大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中教審 期待される人間像の草案発表</li> <li>・小・中学校の教育課程の改善について文部大臣より教育課程審議会に諮問</li> </ul>
41	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第7回定期総会 (遊亀会館 41. 5. 28)</li> <li>予算 359,890円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・技術・家庭科教育における基礎的技術ならびに学習指導について</li> <li>・第6回研究発表大会 (遊亀会館 41. 11. 29)</li> </ul>	井上英信 金丸寿幸 早川初音 樋 敏雄 富田 潔	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノートを専門部(学習資料)でとりあつかう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第5回全国・関プロ技術・家庭科研究大会 東京大会</li> <li>・思考力を高めるための学習指導法と指導内容の精選</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中教審 期待される人間像を含めて後期中等教育のあり方について中間発表</li> </ul>
42	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第8回定期総会 (遊亀会館 42. 6. 28)</li> <li>予算 360,339円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・自主性を伸ばす学習はいかにすべきか</li> <li>・第7回研究発表大会 (遊亀会館 42. 12. 8)</li> </ul>	井上英信 金丸寿幸 早川初音	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領山梨試案まとまる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第6回関プロ長野大会</li> <li>・技術・家庭科の本質に基づく学習指導にたって指導内容をどのように改善したらよいか</li> <li>・第6回全国技術・家庭科宮城大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国統一学力テストとりやめとなる</li> <li>・教育課程審議会小学校の教育課程の改善について答申 学術審議会設置</li> </ul>

43	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第9回定期総会 (遊亀会館 43. 6. 11)</li> <li>予算 175, 350円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・主体的な実践をめざす学習指導</li> <li>・第8回研究発表大会 (遊亀会館 43. 12. 6)</li> </ul>	井上英信 金丸寿幸 窪田八千代	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術・家庭科の学級定員について陳情</li> <li>・実習教材の再検討すすむ</li> <li>・小・中教研技術・家庭科教育部会発足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省 技術・家庭科の改訂案発表(男子向き女子向きの2系列)</li> <li>・第7回全国関プロ技術・家庭科研究大会茨城大会</li> <li>・学習指導内容を定着させ創造的思考力の伸長をはかる学習指導の実証的研究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程審議会中間まとめを発表</li> <li>・教育課程審議会, 中学校の教育課程について答申</li> </ul>
44	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第10回定期総会 (遊亀会館 44. 6. 10)</li> <li>予算 189, 155円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・創造的な実践をめざす学習指導</li> <li>・第9回研究発表大会 (遊亀会館 44. 12. 2)</li> </ul>	保坂勝三 金丸寿幸 窪田八千代 立川隆章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門部や各支部の活動さかん</li> <li>・教育センター設置について陳情</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校学習指導要領改訂</li> <li>・技術・家庭科 週3時間</li> <li>・施設設備, 学級定員について陳情さかん</li> <li>・第8回関プロ埼玉大会</li> <li>・転移力を高めるための学習指導の実証的研究</li> <li>・第8回全国技術・家庭科大阪大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省 小・中学校学習指導要領告示</li> </ul>
45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第11回定期総会 (紫玉苑 45. 6. 4)</li> <li>予算 187, 899円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・主体的な学習を推進し, 工夫創造の能力を育てる学習指導の研究</li> <li>・第10回研究発表大会 (遊亀会館 46. 1. 19)</li> </ul>	保坂勝三 金丸寿幸 立川隆章 横谷忠明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育センター内に技術・家庭科研究室設置について陳情</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校学習指導要領に基づく移行1年次(新1年)</li> <li>・第9回全国・関プロ技術・家庭科研究大会神奈川大会</li> <li>・主体的な学習を推進し, 工夫創造の能力を育てるためには, どのように指導したらよいか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省教育白書</li> <li>わが国の教育水準を発刊</li> </ul>
46	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第12回定期総会 (遊亀会館 46. 6. 12)</li> <li>予算 253, 001円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・教材の精選と組織化をふまえた授業過程の研究</li> <li>・第11回研究発表大会 (遊亀会館 47. 1. 25)</li> </ul>	田中正三 宮川逸雄 立川隆章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究推進委員会発足</li> <li>・男女共学専門部設立</li> <li>・学習ノートの利用率95%</li> <li>・教育機器の利用とフロッチャートによる指導案づくりさかん</li> <li>・会報創刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校学習指導要領に基づく移行2年次(1・2年)</li> <li>・第10回全国・関プロ技術・家庭科研究大会東京大会</li> <li>・現代化をめざし, 知る, 考える, できる, ことの指導をどのようにすすめたらよいか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中教審, 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について答申</li> <li>・公害教育のため小・中学校の学習指導要領一部改正</li> <li>・教特法成立</li> </ul>
47	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第13回定期総会 (遊亀会館 47. 6. 16)</li> <li>予算 271, 341円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・指導計画の作成と指導過程の研究</li> <li>・第12回研究発表大会 (労農福祉センター 48.1.25)</li> </ul>	進藤晴雄 立川隆章 山県利県	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育センター内への技術・家庭科研究室設置運動の推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術・家庭科新指導要領により完全実施</li> <li>・技術・家庭科 週3時間</li> <li>・第11回関プロ栃木大会</li> <li>・技術・家庭科の評価はどのようにしたらよいか</li> <li>・第11回全国技術・家庭科宮崎大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校学習指導要領の完全実施</li> <li>・学制100年記念式典挙行</li> </ul>

48	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第14回定期総会 (紫玉苑 48. 6. 5) 予算 282, 713円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・教科のねらいをたしかめ適切な指導内容を組織だてた効率の高い授業をどう実践するか</li> <li>・第13回研究発表大会 (労農福祉センター49. 1. 24)</li> </ul>	<p>進藤晴雄 立川隆章 山県利県</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関プロ山梨大会にむけて基礎づくりと活動計画案成る (関プロ企画委員会)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術・家庭科新指導要領により完全実施2年目</li> <li>・第12回関プロ群馬大会</li> <li>・適切な実習教材により効率を高める学習指導はどのようにすればよいか</li> <li>・第12回全国技術・家庭科山口大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部大臣 教課審に小・中・高等学校の教育課程の改善について諮問</li> <li>・教課審, 知育偏重是正と学校教育5日制の検討</li> </ul>
49	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第15回定期総会 (教育センター 49.4.31) 予算 528, 103円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>・第14回研究発表大会 (富士五湖文化センター 50. 1. 21)</li> </ul>	<p>坂本公彦 山県利県 河島栄子</p> <p>関プロ事務局 宮川逸堆 中山安正 小高玲子</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>関プロ山梨大会の基本方針の確立 (関プロ準備委員会)</li> <li>・教育センターに技術・家庭科研究室設置される</li> <li>・教育センターにて実技研修はじまる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業教育90周年記念式典</li> <li>・第13回関プロ千葉大会</li> <li>・全人教育をめざし, 知ることできることの統一をはかる学習過程の研究</li> <li>・第13回全国技術・家庭科愛知大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科審, 小中・高の教育課程改善について審議開始</li> </ul>
50	<ul style="list-style-type: none"> <li>第16回定期総会 (教育センター 50.4.15) 予算 539, 428円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>・第14回関プロ山梨大会を成功させる</li> <li>・第15回研究発表大会兼関プロ山梨大会 (富士五湖文化センター 50. 10. 23~25)</li> </ul>	<p>藤原 完 山県利県 古屋二朗</p> <p>関プロ事務局 宮川逸雄 中山安正 小高玲子</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・女子代表の副会長実現</li> <li>・研修会, 講習会, 諸公開への参加と協力さかん</li> <li>・毎週火曜日の午後を研究日にあてる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第14回関プロ山梨大会</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう 全体会会場 富士五湖文化センター</li> <li>・第14回全国技術・家庭科秋田大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省 学識経験者, 小中校長会, そして全国5ブロックの現場より意見聴取</li> </ul>
51	<ul style="list-style-type: none"> <li>第17回定期総会 (教育センター 51.6.10) 予算 594, 589円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>・第16回研究発表大会 (教育センター52. 1. 20)</li> </ul>	<p>藤原 完 山県利県 滝島 実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術・家庭科研究会 20周年記念誌編集委員会発足 (51. 10. 9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第15回全国・関プロ技術・家庭科研究大会 埼玉大会</li> <li>・課題解決にせまる基本的学習過程の研究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科審, 文部大臣に対し最終答申 教育課程審議会が小・中・高校の「教育課程の基準の改善」を答申一ゆつりのある学校教育を提唱</li> </ul>
52	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第18回定期総会 (教育センター 52. 6. 9)</li> <li>予算 644, 081円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>・第17回研究発表大会 (教育センター53. 1. 19)</li> </ul>	<p>中楯嘉幸 石井幸雄 滝島 実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程基準の改訂にともない研修会さかん</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校学習指導要領改訂完全実施後</li> <li>1年年間 70時間</li> <li>2年年間 70時間</li> <li>3年年間 105時間</li> <li>・第16回関プロ新潟大会</li> <li>・工夫創造の能力を育てるため指導過程はどうあればよいか</li> <li>・第16回全国技術・家庭科兵庫大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省 小・中学校学習指導要領告示</li> </ul>

<p>53</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第19回定期総会 (教育センター 53.6.13) 予算 621,571円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>・第18回研究発表大会 (教育センター 54.1.18)</li> </ul>	<p>中楯嘉幸 石井幸雄 滝島 実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領移行措置にともなう研修会おこなわれる</li> <li>・20周年記念誌発刊(54.2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第17回関プロ長野大会</li> <li>・生徒が自ら学ぶ技術・家庭科の学習</li> <li>・第17回全国技術・家庭科鹿児島大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領移行措置</li> </ul>
<p>54</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第20回定期総会 (教育センター54.6.12) 予算608,556円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>第19回研究発表大会 (教育センター55.1.17)</li> </ul>	<p>中楯嘉幸 石井幸雄 滝島 実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男女共学専門部会 男女相互乗り入れ部会の共学で指導することについて</li> <li>・指導内容・指導計画の検討</li> <li>・総会にて文部省教科調査官 村田昭治先生の講演</li> <li>・研究大会にて国立研究所中村重康先生講演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第18回関プロ茨城大会</li> <li>・第18回全国技術・家庭科鳥取大会</li> </ul>	
<p>55</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第21回定期総会 (教育センター55.5.29)</li> <li>予算634,330円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>第20回研究発表大会 (教育センター56.1.20)</li> </ul>	<p>保坂元治 石井幸雄</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート編集会議が 研究推進委員会で討議された。</li> <li>・指導計画A, B, C表の完成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第19回関プロ神奈川大会</li> <li>・第19回全国技術・家庭科富山大会</li> </ul>	
<p>56</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第22回定期総会 (教育センター56.6.11) 予算918,887円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう</li> <li>第21回研究発表大会 (教育センター57.1.18)</li> </ul>	<p>保坂元治 滝 愛子 石井幸雄</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート編集会議</li> <li>・指導計画C表の完成</li> <li>・夏季研修会で指導計画検討, 相互乗り入れ, 選択の時間の扱いについて。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第20回関プロ東京大会</li> <li>・第20回全国技術・家庭科東京大会</li> </ul>	<p>新教育課程完全実施</p>
<p>57</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第23回定期総会 (教育センター 57.6.) 予算662,470円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み, 実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>第22回研究発表大会 (教育センター58.1.18)</li> </ul>	<p>大沢保彦 滝 愛子 石井幸雄</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・60年関プロに向けての研究方法の検討</li> <li>・総会にて国立教育会館片柳 實先生の講演</li> <li>・発表大会にて愛知教育大附属岡崎中教官 小久保 良先生の講演</li> <li>・県版学習ノートの検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第21回関プロ栃木大会</li> <li>・第21回全国技術・家庭科山形大会</li> </ul>	

58	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第24回定期総会 (教育センター58.6.14) 予算793,393円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>第23回研究発表大会 (教育センター59.2.21)</li> </ul>	葭沢一富 滝 愛子 斎藤 章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノートの編集委員会が4回実施される。</li> <li>・60年関プロ準備委員会の定期的な活動推進。</li> <li>・夏季研修会にて研究の手引きの作成。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第22回関プロ新潟大会</li> <li>・第22回全国技術・家庭科北海道大会</li> </ul>	中央教育審議会教育内容小委員会が「審議経過報告」
59	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第25回定期総会 (教育センター59.5.29) 予算921,535円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>第24回研究発表大会 (県民文化ホール60.2.26)</li> </ul>	葭沢一富 滝 愛子 斎藤 章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総会にて上越教育大学舟木美保子先生の講演</li> <li>・関プロ山梨大会企画委員会</li> <li>・関プロ山梨大会分科会会場長会議</li> <li>・ミニ関プロ研究会</li> <li>・関プロ大会準備会</li> <li>石和中59.11.15</li> <li>・研究発表大会にて文部省教科調査官 津止登喜江先生の講演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第23回関プロ千葉大会</li> <li>・第23回全国技術・家庭科和歌山大会</li> </ul>	臨時教育審議会発足 (1)個性重視の原則 (2)生涯学習体系への移行 (3)国際化、情報化などの変化への対応
60	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第26回定期総会並びに研究発表大会 (教育センター60.6.4) 予算1,448,377円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>第25回研究発表大会 (紫玉苑61.2.18)</li> </ul>	望月教三 滝 愛子 斎藤 章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各支部合同研究会や、各領域事前授業研究会にて内容最終確認。</li> <li>・6月の総会にて文部省教科調査官 村田昭治先生の講演</li> <li>・提案者会、授業者会、会場長会など運営最終確認。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第24回関プロ山梨大会(60.11.14, 15) 全体会県民文化ホール分科会会場県下各会場</li> <li>・第24回全国技術・家庭科沖縄大会</li> </ul>	臨時教育審議会第一次答申—国際化・情報化・高齢化社会への対応と画一教育の脱皮など
61	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第27回定期総会 (教育センター61.5.17) 予算985,130円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>第26回研究発表大会 (紫玉苑62.2.24)</li> </ul>	深沢六郎 滝 愛子 斎藤 章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季研究推進委員会にて埼玉関プロ提案の検討</li> <li>・県版学習ノート編集委員会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第25回関プロ埼玉大会</li> <li>・第25回全国技術・家庭科島根大会</li> </ul>	臨教審第二次答申—初等中等教育の改革で高校の多様化を提言
62	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第28回定期総会 (教育センター62.6.9) 予算998,164円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第1回生徒作品展 (県民会館63.1.5 6 7) 参加作品数約300点</li> <li>・第27回研究発表大会 (教育センター 63.2.23)</li> </ul>	宮川逸雄 滝 愛子 斎藤 章	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒作品展の開催の企画と検討開始</li> <li>・山梨県技術・家庭科30年史の編集を企画する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第26回関プロ新潟大会</li> <li>・第26回全国技術・家庭科新潟大会</li> </ul>	臨教審第三次答申—開かれた学校教育の活性化 ・臨教審最終答申—生涯学習への移行と条件整備 ・教育課程審議会が「教育課程の基準の改善」を答申、生活科、情報基礎、選択教科拡充など



<p>53</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第29回定期総会 (教育センター63.6.28) 予算986,452円 研究テーマ ・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第2回生徒作品展 (青少年科学センター 1.3.4 5) 参加作品数約300点</li> <li>・第28回研究発表大会 (教育センター 1.2.23)</li> </ul>	<p>宮川逸雄 滝 愛子 斎藤 章</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野県プロ提案にかかわる授業研究会 富竹中</li> <li>・マイコン基礎研究会</li> <li>・立川女子大 林隆子先生による型紙講習会</li> <li>・研究発表大会にて宇都宮大学 村田正男先生の講演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第27回関プロ長野大会</li> <li>・第27回全国技術・家庭科長野大会</li> </ul>	<p>修士課程修了程度の専修免許状の創設や、新任教員に対する1年間の初任者研修制度の導入 単位制高校の制度化 初任者研修の制度化</p>
<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第30回定期総会 (石和スコレーセンター 1.6.27) 予算981,548円 研究テーマ ・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第3回生徒作品展 (県民会館2.1.27,28) 参加作品数約600点</li> <li>第29回研究発表大会 (教育センター2.2.20)</li> </ul>	<p>宮川逸雄 滝 愛子 石原成人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究推進委員会にて、茨城大会への提案原稿の検討</li> <li>・研究発表大会にて文部省視学官 津止登喜江先生の講演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第28回関プロ茨城大会</li> <li>・第28回全国技術・家庭科福島大会</li> </ul>	<p>第14期中央教育審議会 幼稚園教育要領、小・中・高校の学習指導要領 告示 教育課程の改訂</p>
<p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第31回定期総会 (石和スコレーセンター 2.6.26) 予算963,663円 研究テーマ ・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第4回生徒作品展 (県民会館3.2.3,4) 参加作品数約500点</li> <li>第30回研究発表大会 (甲府市研修所3.2.26)</li> </ul>	<p>立川隆章 清水禮子 石原成人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータ研修会が2回にわたって開催された。(附属中, 甲府工業高校)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第29回関プロ神奈川大会</li> <li>・第29回全国技術・家庭科岐阜大会</li> </ul>	<p>「生涯学習の基盤整備について」 生涯学習審議会発足 教育課程順次実施 生涯学習振興法 公布</p>
<p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第32回定期総会 (石和スコレーセンター 3.6.27) 予算977,931 研究テーマ ・生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第5回生徒作品展 (県民会館4.2.1,2) 参加作品数約500点</li> <li>第31回研究発表大会 (甲府市研修所4.2.25)</li> </ul>	<p>立川隆章 清水禮子 石原成人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報基礎特別委員会が5回にわたって開催された。</li> <li>・県版ノートの改訂作業始まる。</li> <li>・関プロ山梨大会について研究推進委員会で検討開始。領域の検討など。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第30回関プロ東京大会</li> <li>・第30回全国技術・家庭科東京大会</li> </ul>	<p>「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」 高等教育全般にわたる改革方策について、計5件の答申</p>

4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第33回定期総会 (石和スコレーセンター 4.6.30) 予算888,516円 研究テーマ</li> <li>・生徒自ら課題に取り組み、 実践する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第6回生徒作品展 (甲府総合市民会館 5.1.30,31) 参加作品数約450点</li> <li>第32回研究発表大会 (甲府市民会館5.2.25)</li> </ul>	斎藤 章 清水禮子 長久保学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート編集委員会 が4回にわたって開催された。</li> <li>・家庭生活学習会</li> <li>・関プロ山梨大会に向けての組織、研究方針の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第31回関プロ栃木大会</li> <li>・第31回全国技術・家庭科京都大会</li> </ul>	「生涯学習の振興方策について」 1)社会人対象リカレント教育の推進、 2)ボランティア活動の支援・推進、 3)青少年の学校外活動の充実、 4)現代的課題に関する学習機会の充実
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第34回定期総会 (石和スコレーセンター 5.6.29) 予算1,059,325円 研究テーマ</li> <li>・自ら学ぶ意欲を高め工夫し 創造する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第7回生徒作品展 (甲府市民会館6.2.5,6) 参加作品数約350点</li> <li>第33回研究発表大会 (教育センター6.2.24)</li> </ul>	篠原 茂 清水禮子 入蔵靖彦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総会にて関プロ山梨大会の組織、研究方針および計画の提案</li> <li>・第1回ロボコン山梨への参加人材開発センター 5.11.28</li> <li>・課題解決学習、解決思考の学習会</li> <li>・会場校あいさつ巡り</li> <li>・支部長会</li> <li>・A、B表の検討</li> <li>研究大会で柴田昌志先生の講演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第32回関プロ群馬大会</li> <li>・第32回全国技術・家庭科愛媛大会</li> </ul>	新教育課程完全実施
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第35回定期総会 (石和スコレーセンター 6.6.7) 予算1,106,172円 研究テーマ</li> <li>・自ら学ぶ意欲を高め工夫し 創造する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第8回生徒作品展 (甲府総合市民会館 7.1.28,29) 参加作品数約360点</li> <li>第34回研究発表大会 (教育センター7.2.23)</li> </ul>	一木貞夫 斎藤 章 清水禮子 入蔵靖彦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村田昭治先生の講演</li> <li>・全日中関プロ山梨大会準備委員会発足 紫玉苑6.7.28</li> <li>・公開授業用指導案の検討</li> <li>・ミニ関プロ大会 長坂中6.11.22</li> <li>・各支部研究さかん</li> <li>・第2回ロボコン山梨への参加 地場産業センター 6.11.27</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第33回関プロ千葉大会</li> <li>・第33回全国技術・家庭科旭川大会</li> </ul>	
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第36回定期総会 (教育センター7.6.8) 予算1,611,880円 研究テーマ</li> <li>・自ら学ぶ意欲を高め工夫し 創造する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第34回全日中関プロ山梨大会を成功させる。</li> <li>・第9回生徒作品展 (甲府市総合市民会館8.2.17,18) 参加作品数約400点</li> <li>第35回研究発表大会 (ホテル湯伝8.2.22)</li> </ul>	一木貞夫 斎藤 章 清水禮子 入蔵靖彦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロボコン山梨への参加 アイメッセ7.7.30</li> <li>・運営部会、編集部会の精力的な準備活動</li> <li>・要録執筆作業</li> <li>・研究推進委員会と授業者、提案者の検討会</li> <li>・領域別の日夜の準備会、検討会がつづく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第34回全日中・関プロ山梨大会 自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方 全体会場、県民文化ホール 分科会会場、県下12中学校にて12分科会を開催</li> </ul>	中央教育審議会 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」 諮問 月2回の学校週5日制が全面実施 中央教育審議会(第15期)が発足

8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第37回定期総会 (教育センター8.6.6)</li> <li>予算1,198,713円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・自ら学ぶ意欲を高め工夫し創造する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第10回生徒作品展 (甲府総合市民会館 9.2.15,16)</li> <li>参加作品数約400点</li> <li>第36回研究発表大会 (教育センター9.2.27)</li> </ul>	<p>岩間孝吉 斎藤 章 清水禮子 小澤建二</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート編集委員会 が5回にわたり開催</li> <li>・ロボコン山梨への参加 29チーム7校 7/14 8.12.1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第35回関プロ埼玉大会</li> <li>・第35回全国技術・家庭科岩手大会</li> </ul>	<p>第一次答申 教育内容を厳選し、家庭や地域社会における教育を て21世紀初頭を 目途に学校週5日制の完全実施</p>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第38回定期総会 (石和スコレーセンター 9.6.12)</li> <li>予算1,037,710円</li> <li>研究テーマ</li> <li>・自ら学ぶ意欲を高め工夫し創造する能力を養う授業のあり方</li> <li>・第11回生徒作品展 (甲府市民会館2.21,22)</li> <li>参加作品数約340点</li> <li>第37回研究発表大会 (教育センター10.2.26)</li> </ul>	<p>岩間孝吉 斎藤 章 山田順子 長田 靖</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロボコン山梨への参加 90チームで大会の中核となる。9.11.22.</li> <li>・40年史の編集企画と分担、依頼の開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第36回関プロ新潟大会</li> <li>・第36回全国技術・家庭科福井大会</li> </ul>	<p>「審議のまとめ」 「生きる力」を育成するための教育内容の在り方について 中高一貫教育の選択的導入 大学入学年齢の特例 高齢社会に対応した教育の充実</p>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第39回定期総会 (教育センター 10.6.30)</li> <li>予算</li> <li>研究テーマ</li> <li>生徒一人一人に生きる力を育む指導のあり方</li> <li>・第12回生徒作品展 (甲府市民会館)</li> <li>・第38回研究発表大会 (教育センター11.2.25)</li> </ul>	<p>岩間孝吉 斎藤 章 清水禮子 長田 靖</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山梨の技術・家庭科 40年の歩み、発刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第37回関プロ長野大会</li> <li>・第37回全国技術・家庭科福岡大会</li> </ul>	

## 4. 本会に寄せる言葉

### 技術・家庭科教育の原点に返ろう

全日本中学校技術・家庭科研究会会長 奈良 治 一

このたび、山梨県中学校技術・家庭科研究会では「技術・家庭科教育40年の歩み」を刊行される由、衷心よりお慶び申し上げます。貴県では、早くから関東甲信越地区の研究大会を引き受けてくださり、甲府や河口湖を中心にした大会、また、平成7年度の全国大会における研究の方向性と充実した内容は素晴らしいものでした。

さて、第三の教育改革として、教育の創造が叫ばれ、中央教育審議会や教育課程審議会の中間発表がありました。社会の急激な変化にともない、学校教育への批判や期待が高まり、多様な課題の解決が急務となっています。教育改革の流れを見ますと、個性重視の原則、生涯学習体系の構築、社会の変化への対応があげられます。

学校完全週五日制実施の中で「ゆとりのある教育活動」を実施し、「一人一人の生徒に生きる力」を育成するための教育内容のあり方が問われています。このような教育の転換期にあたり、21世紀を生きる子ども達に、今技術・家庭科ではどのような能力を身につけさせなければならないかが問われています。技術・家庭科は、生徒の主体的な実践活動を通して、生活に必要な基礎的な知識や技能を習得させ、工夫・創造の能力の育成を図ることを重視しています。

また、生徒一人一人が課題を見つけ、製作を通して解決するための、実践的・体験的な教科でもあります。その製作体験の中で、新しい課題を見つけ、自ら考え、判断し、製作することにあると考えられます。

ものをつくる学習は、ものを総合的に考えながら作り上げ完成させることを通して、創造的な能力を身につけさせることにあります。

即ち、ものをつくりながら考える学習を通して、創造的な思考方法を発達させるのに有効な教材を活用し、創造し生産する喜びを味わう活動であります。実践的・体験的学習の一層の充実を図り、主体的な学習経験の一般化から、技術的知識・技術的諸能力を高めていくことが最も大切です。生活に必要な技術は、常に新しく生まれ発展する現代技術に正しく対処できる技術的な適応能力を伸長するのに役立つ基礎的な技術でなければなりません。これらの適応能力の伸長こそ、技術的な問題の解決に必要な判断力や洞察力を確かなものとすることができます。創造性や実践力の育成及び心豊かな人間性の育成に大きく寄与することを自覚して、本教科の一層の充実と発展を図る必要があります。

私どもの教育活動のあり方の検討が強く求められている今日、会員一人一人が関心と意欲を持って研究活動を深めたいものです。今こそ会員の皆様の一致団結と今後の実践研究が大切なときです。

このようなときに山梨さんでは、温故知新「技術・家庭科教育40年の歩み」を刊行され、新しい教育課程の改訂に向けて研究を推進されるとのこと、たまたま、平成10年8月をめどに、教育課程審議会の答申が予定されています。実践を通して提言していきましょう、領域の再編成、教科内容の基礎・基本、選択領域とのかかわり、総合とのかかわり等から教科内容の構造化の再構築が要求されています。

このような課題に対して貴重な示唆を与えてくれるものと期待しています。終わりに、貴県の研究会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

## 山梨県技術・家庭科研究会の一層の発展を祈念して

文部省初等中等教育局視学官 河野 公 子

山梨県中学校技術・家庭科研究会が、発足40年を経過され、着実に研究実践を積み重ねておりますことに対し、心からお慶びと感謝を申し上げます。技術・家庭科は、先輩の諸先生方の情熱と先見性により、早い時期から各県の研究会の組織化が図られ、教科の目標実現を目指した指導方法の改善や題材開発、学習環境の整備や評価などについての具体的な実践研究を進めるなど、会員の資質向上とともに教科のあるべき方向の模索をしてこられました。

特に、平成7年には、第34回関東甲信越地区大会と同時に全国大会を開催され、「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」を研究主題として取り組まれました。学校数も会員数も少ないなか、一人がいくつもの役割を担当し、全県で一致団結して取り組まれた研究大会は、会員のみならずの教科指導へのゆるぎない自信へとつながると同時に、全国からの参加者に感銘を与えた素晴らしい大会でした。この大会の成果は、県下の中学校における魅力的な授業の実践となっていることを確信しています。

さて、平成8年8月に発足した教育課程審議会では、完全学校週5日制の下での一人一人の子どもに「生きる力」を育成するための教育内容の在り方が検討され、平成9年11月17日には中間まとめが公表されました。

教育課程の基準の改善のねらいとしては、

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること、
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること、

③ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。

④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開することの4点を掲げています。

中学校技術・家庭科の改善の基本的な方向としては次の三つの視点が示されています。

① ものづくりやコンピュータの活用の基礎的技術の習得とともに、家庭の機能についての理解を深め、生活の自立を図る観点から、現行の領域構成を見直すとともに内容の改善を図る。また、栄養を考えた食生活の在り方に関する指導を重視して内容の改善を図る。

② 情報化の進展に対応し、「情報基礎」をすべての生徒に履修させる領域とし、加えて生徒の興味・関心等に応じてさらに深めて学習することができる新たな情報の領域を設けることについて検討する。

③ 自ら課題を見出し、解決を図る問題解決的な学習や実践的・体験的な学習を一層重視し、基礎的・基本的な内容に厳選して領域の統合や、内容の改善を図る。

今後、具体的な検討がなされことになりませんが、技術・家庭科の授業時数が縮減するなかで、基礎・基本をどうとらえるかが重要なことだと考えます。

少子化が進行し小規模の学校が増えるなか、教科の改善を図るためには、教科研究会の意義は大きいと考えます。山梨県中学校技術・家庭科研究会の今後一層の充実発展を祈念しまして、お祝いの言葉とします。

## 40年のあゆみに寄せて

山梨県教育委員長 葎 沢 一 富

晩秋のよき日。突然上条中学校の岩間孝吉校長先生からの封書を受け、何か心弾む思いで開封しました。本当に懐かしい先生です。

わたしは1985年度退職ですから、すでに10余年たちます。当時、第24回関プロ山梨大会を目前にして、研究推進委員として重要な役割を果たしていただいた先生でした。いつも教育の専門家として大きな視点からの発言、また実践家として研究活動への提言など中心となって活動された先生でした。今度、40年史の編纂というお話しでした。

色々のことを思い出し、昔の大会要録や研究冊子など、埃を落とし繕きました。昭和39年第3回大会、昭和50年の第14回大会、昭和60年の第24回大会、平成7年度第34回大会等の思い出が甦ります。

ところで戦後の教育史を振り返って、この技術・家庭科ほど変遷した教科は他にないと思います。それだけに担当した教師は、常に

新しい内容に立ち向かわなければなりませんでした。研究大会がいつも意欲的に催されたのもそのような背景があったからではないかと思います。その意味でこの教科の先生方の歩みは、まさに開拓の歴史であったといえます。今日の技術・家庭科は十年前とは大きく変わっているし、私たちの在職した20年前、30年前と較べたら大変化だと思います。昔の教師ではとても教壇に立てません。しかし教科の内容は変わっても、この教科の神髄としてきた「人間として生きて働く実践力」を育てるという教科の基本目標は変わってはいないと思います。

21世紀に生きる子供たちに、心豊かな人間性を育み、新しい知的技術能力をつけ更に総合的実践力を伸ばすことは益々重要になります。会の充実発展と会員の研鑽を御期待申し上げ寄せる言葉とします。



昭和60年度 県技術・家庭科研究発表大会で、来賓としてあいさつする葎沢一富先生

## 21世紀の中学校技術・家庭科の新たな発展に向けて

— 時代とともに変化する教科として —

山梨大学教育学部教授 内藤道子

はじめに

山梨県中学校技術・家庭科研究会の、発足40周年を迎えるに至りましたことを、心より御祝い申し上げます。また、本記念誌に寄稿させて頂けますことに感謝申し上げます。私は1970年までは現場の家庭科教師として、その後は大学の教師の立場から技術・家庭科の教育課程や、授業研究に関わってきましたので思い出には尽きないものがあります。

### (1) 時代の変化とともに変革してきた技術・家庭科教育

#### ①科学・技術の発展期の中で

1960年代から1970年代にかけての技術・家庭科は、科学技術の進展、技術革新が国として重視されるころとなり、教科名称も職業・家庭科から技術・家庭科へと大躍進した時期でした。教育内容は男子向き、女子向きの二系列でしたが、女子向きでも1/3程度技術的内容が取り込まれ、この変化に対応する現職教育や施設・設備の拡充等、現場教師は大きな課題をかかえて、夏休み返上で研修を受けた思い出があります。一方、こうした中でも授業の成果は技術・家庭科研究大会(全国、地区、県単位等で)でエネルギーに発表されてきました。この実践研究活動が、理振法と合わせて産業教育振興法による補助金の交付を促進し、実習室等の施設・設備の充実が図られたことは大きな実績であったと言えます。

#### ②相互乗り入れから男女共学の技術・家庭科へ

その後、1975年の「国際婦人年」を契機に「あらゆる差別の撤廃」という国際的趨

勢の下、技術・家庭科及び高等学校家庭科は男女が共に学ぶ教科となったことは記憶に新しいところです。また、'70年代末～'80年代はじめの二度のオイルショック等を背景に、わが国の高度経済成長期も終焉を迎えました。これにより「ゆとりと充実」、「基礎・基本の充実」、「個性や能力に応じた教育」、「人間性豊かな児童生徒の育成」が教育指針として打ち出されましたが、本教科では実践上、多くの問題を抱える結果ともなりました。教科時数の大幅な削減は、専任教師不在の学校の増加や、選択教科としての履修の低下等の問題点の指摘注1)はその一例です。これまでも、問題解決に向けては、組織ぐるみで、研究会が一丸となった授業実践で示してきたことを、次世代にも繋いでいただきたいと願っています。

### (2) 21世紀のさらなる発展に向けて

わが国の21世紀は、国際化、情報化に加えて少子高齢社会と予測され、新時代の国づくりが始まっています。学校教育でも第16期中央教育審議会が「生きる力」の育成を打ち出し、それに対して、教育課程審議会がこのほど中間まとめを公表しました('97.11.17)。本教科のさらなる発展に向けては、完全学校週五日制下でのカリキュラム再編の中で、必修科目の新設、総合学習、選択幅の拡大、教科時数の削減という厳しい現実を踏まえた「教科の独自性と基礎・基本」を、教科内容の再構築と教材開発の実践的研究から明らかにすることが急務ではないでしょうか。その活動が貴研究会が母体となって、なされることを心より期待しています。

注1) 日本家庭科教育学会編著「新構想研究—資料編—」pp.63~77, (1996.6)

今日、第15期中央教育審議会は、「生きる力」と「ゆとり」をキーワードに、学校週5日制の完全実施等を答申した。そして、この実現に向け、教育課程審議会においても、21世紀を展望した新たな教育課程のあり方が審議されている。技術教育関係者は、ここに学校週5日制の完全実施を展望して、普通教育としての技術教育の基本構想を明らかにしなければならない必然性がある。普通教育としての技術教育は、現在、教科としては中学校の技術科しかないが、週5日制のもとでは、小・中・高の各教科の内容も再検討されようとしている。各教科は内容だけではなく、教科名も再検討されようとしているのは、我が国だけではない。社会状況及び子供を取り囲む環境の変化が、教育課程の変化を引き起こしているのは、世界的な傾向でもある。普通教育としての技術教育が、中学校の技術科だけであるのは、先進諸国の中では、日本だけであり、世界諸国は小・中・高に一貫した技術教育の確立に力を注いでいる。我が国の教育も、これから例外的ではあり得ず、今回の教育課程の再編成には、小・中・高に一貫した技術教育が成立する要素がないとはいえない。

すでに、小学校の生活科、理科と社会との関連から小学校に技術教育が実施されるようになるかもしれない。何も教科として成立しなくても、技術教育に関する内容が教育課程に含まれるようになれば、技術教育関係者は、積極的に、それに取り組んでいくことが重要ではないかと考えている。小学校においては、児童が自然の様々な素材にふれ、それらを創意・工夫しながら道具を使って有用物を作り出す加工学習や作物の栽培学習を、生活科、

理科、社会科、家庭科をはじめとする各教科および「総合的な学習の時間」等に位置づけることが重要である。技術科が成立すれば、もっと効果的であるが、何よりも教育課程上における技術教育の重要性が認識されることが一番重要である。小学校の先生方に、こういった意味の教育実践が展開されているのであれば一度見学させていただきたいと思っている。

中学校の技術教育は、現行の技術・家庭科の技術系列である6領域（木材加工、電気、金属加工、機械、栽培、情報基礎）の中の情報基礎が必修化され、さらに「情報応用（仮称）」が新たに設置され選択されるようになるという構想が出されている。これは、小・中・高を通した系統的、体系的な普通教育としての情報教育に関する教育課程の答申からでてきた考えであるが、小学校の「総合的な学習の時間（仮称）」の中で情報教育を実施したり、高校に新しい教科「情報（仮称）」を設置したりしようとする動向の一環として構想されてきている。中学校の現6領域を「製造」「エネルギー」「情報・通信」「作物生産」に再編・統合しようとする技術教育関係学会の案などと、これから小・中・高の情報教育との関連などは、戦後の普通教育としての技術教育が経験していない変化かもしれない、どこまでが新しい教育課程で実現、具体化するかわからないが、世界的な動向も合わせると、この傾向が大きな流れになっているように思える。山梨県の技術教育の発展のためにも、先生方の今までの教育実践の蓄積の上に、新しいアイデアの教育実践が展開されることを願うものである。



## 5. 歴代会長、副会長、先輩の先生方の言葉

### 技術・家庭科とともに40年

昭和55. 56年度会長 保坂元治

昭和57年3月まで40年間にわたり山梨市、甲府市、韮崎市、行政、双葉町において生徒の健全育成に情熱を傾けてきました。特に技術・家庭科については戦後新しい教科として生まれたため暗中模索で戸惑う場合多かったです。当初教科の本質的内容の研究よりも教室の確保、教材、工具の確保、保管等が先行しました。

昭和22年4月新制中学校発足。当時の職業科はその後、幾度かの変遷を経て技術・家庭科となったのであるが、その間はもちろんその後も、あるときは混迷し、あるときは飛躍したことを、身を持って体験した一人であります。明治以来の知育偏重の教育思潮は製作学習（体験学習）中心する本教科へは、冷やかであったことも事実であった。にもかかわらず我が同士は、この体験学習こそ教育の本質であることを信条とし、団結し着々研究を続けてきました。その結果、本研究会の業績は、その組織から研究内容に至るまで、他に類をみないと評価されるようになった。後輩の諸先生方も先輩の偉業を継承して頑張っている姿見につけ唯々喜びに耐えません。

現在の学校教育の実態は、いじめ、登校拒否等の問題を抱え憂慮すべきことがら山積しています。先般の学習指導要領の改定の際にも勤労体験学習が論議の対象となっていたことは皆様ご承知のところであります。小学校に生活科が生まれたのも、この理念に基づく結果ではないでしょうか。学校の内外を問わず作る、育てる、など実際の・体験のないし探究的な活動は働くことに関連の深い活動であります。これは生徒にとっても主体的に取り組む学習の場であり、仕事の楽しみや完成の喜びを体験する機会でもあります。以上

技術・家庭科と体験学習との関係について普段感じていること述べていたのであるが、続いて具体的な思い出を付け加えて昔をしのびたいと思います。

新制中学発足当時は進路指導も職業科の1分野であった。従って学年末には2泊3日くらいで東京、神奈川など近県の事業主を訪問し就職を依頼して歩いたこと。昭和29年7月には個人研究「縁故就職と離職との関係について」3年間の取り組みを発表して入選1席、知事賞を得たこと。昭和27年3月には、内地留学生試験に合格し、一年間千葉大学花卉研究室に在籍、草花の品種改良に取り組む。個人研究テーマは「舌状花と筒状花の次代に及ぼす影響について」。昭和25年から5年間職業科教育課程作成委員を命ぜられ、この教科に専念する。そして研究会の自主的な試みとして夏休みに宿泊研修会を開く基礎を築いた。昭和39年関東甲信越技術・家庭科研究大会が甲府市を中心として開催され、後援会事務局を担当し、補助金の獲得に奔走した。教員生活最後の2年間は山梨県技術・家庭科研究会会長に就任し優秀な仲間のご協力を得ながらの重任を果たし得た喜びは忘れられません。

最近学校教育の中で心の教育の重要性が叫ばれています。体験学習との関連の中で本教科が重要な地位を占めることは論をまちませぬ。各位ますます団結し、研究強化を計り、新しい教育の創造に、邁進されんことを望んでやみませぬ。

私と技術科の関係は、今は廃校になった能泉中の教頭になって技術科担当の教師がいなかったことから、私が臨免で教科をすることになった時からである。元来物を作ったり修理したりすることは好きであったし、やむを得ない立場だったこともあって授業をした。

授業をはじめ、木工技術の未熟さ、用具、工具の知識と手入れの技術、鑑別力の無さに気づいた。金工の場合は木工よりまだ良かったが、教具準備は担当者の責任ということは十分わかっていたが、これは時間が重荷だった。電気はましのほうだったと思う。たった1人の生徒を(3年の男子は1名)相手にできるだけやった。彼はその後技術者になった。

城南中でもこんなことから、技術のお手伝いをするようになったが、樋先生、宮川先生とのコンビという幸運で目を開くことができた。試行錯誤の中で指導者複数集団指導といったこともできた。一番楽しかった。

黒平中の校長になり、生徒2名職員4名という学校に着任した。今度はこの生徒に家庭科を教えることになった。本当に困った。指導主事の滝先生、城南中の佐野先生に助けていただいて指導計画を立て、調理、染色なども学ぶことができた。今でも感謝している。

城南中に再度着任することになり、その2年目、突然技術・家庭科の大御所、保坂元治先生からお呼びがあって、宮川先生のご案内で出頭したところ、当時3年後に技術・家庭科で関プロ大会をうつ、ところが、当座の準備期間の役員構成上会長に校長を置きたいが教科の教員に同職がない、不本意ながらおまえやれ。この言葉には些か驚いた。やらせたくないけれども仕方がないからやらせるのだ。正直といえば正直だが、その理由の中にその前年美術の関プロ大会に素人の私がある先生の代人として副会長役で手を貸して、大会経営の経験があるからだというのだ。いろいろ

あったが引き受けることになった。

会長になって他見の研究会、関プロ大会に出席したが各県自己の特色を表現することによって大変苦労している様子が窺われた。今思うに新しい産業構造を予感したところとその当時までの流れの普遍性を忠実に守ろうとしたところと、その間で模索して実験的なことを個別にやっている先生方と討論したことが良い思い出になっている。宿泊所、分科会場、催し物、展示場、との関連などは大変参考になった。校長会教頭会の研究会、関プロ、と異なる雰囲気では例えば業者の展示はそれだけで近1、2年のハード的な整備のやり方、方向を示唆しており、勉強にもなり、もし本県のこのような場合には業者に方向性など注文をしたら良いなと思ったものであった。

当時相互乗り入れといったことが課題の中心であり、技術科、家庭科の統合と言った立場が考えられたが、まだ、今のようにオフィス事務とはディスプレイの前に座ってマウス、キーボードというようなことは予想されてなく、コンピュータ、キヤド、プロッターで製図するとは予想してカリキュラムを考えていなかった。自分にもう少し先見の明があったならと反省している。しかし補間の任務は終了。今コンピュータの教育が小・中・高に取り入れられていることは大変結構なことであるが、一貫性が果たして計られているか、どうか少々気になる。

中学では技術科が中心であることはよしとして、高校では数学A、数学Bで取り扱っていて、実際は大学受験でどれだけ有利になるかという立場で学校も取り扱い、学ぶものも考えており、非常に軽く取り扱われ、時には反対にのめり込んで直ぐにも自分がビルゲイツになれるように思い込む者もあるようだ。いずれにしても技術・家庭科の関係者の先進的な考えが期待される。

山梨県技術・家庭科研究会が、創立40周年を迎えられたこと、記念事業として記念誌を発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会が山梨大会として開催されます準備段階に入った昭和58～59年度に本研究会の副会長兼研究部長として、微力ではありましたが、葭沢一富会長を補佐したり、会員と共に研究推進を図ったりしました。

そして、昭和60年度は、山梨及関東ブロックの会長として、研究大会への準備、11月14～15日の2日間にわたる研究発表大会を甲府市を中心に、東山梨、東八代、中巨摩の1市4町10会場において、全体研究会と領域別分科会を開いて、研究を深めました。

関東ブロック各都県から、1200余名の参加者がありましたが、指導・助言の先生方や参加者の皆さんから、「山梨大会」が高く評価されたことが、いつまでも記憶の中から消えません。

この第24回山梨大会を開催するに当たっては、山梨県技術・家庭科研究会が、会員わずか150名という小規模研究会ではありましたが、会員が結束して、昭和57年度を準備期間として、翌58年度から山梨大会準備委員会を発足させ、組織に事務局、総務、運営、編集、研究の各部を設け、総力を挙げて取り組んだ成果だと信じています。

会員は、山梨大会の成功を目指して、研究や準備を進めるのに、勤務に支障のないように、平日は午後5時30分から、土曜日には、午後1時30分から、時に夜間、休日に及ぶこともありましたが、斎藤章事務局長の勤務校でありました山梨大学附属中学校の技家準備室や技・家教室を使用させて頂き、大会に

備えました。私も夜間遅く、甲府から中富町の自宅へ帰ったことを思い出します。

研究部は、研究推進委員会、研究小委員会を設け、一木貞夫研究推進部長や小沢せつ子先生（家庭領域）を軸とし、「生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業のあり方」という、21世紀への未来展望を持った研究テーマを設定し、そのテーマの理論付け、授業実践や評価のあり方を含めた研究を、組織的、計画的に着実な取り組みをしたという実感を持っています。

諸準備を整え、山梨大会を迎えましたが、山梨の会員は、案内係の腕章をつけ、プラカードを持ち、早朝から甲府駅や道路の主要箇所立ち、参加者のあんないをし好評でした。全体研究会における山梨の研究提案の中の指導計画表A表（学習項目をあげ時間数を配当したもの）では、「学習項目の到達目標が右脳と左脳の働きとどう結びつくのか」という技術・家庭科と脳医学の中で今日問題にされ始めた「創造性」との関わりのある右脳の働きや、言語・数理を司る左脳の働きと、技術・家庭科とを結び付けた研究仮説は、新しい研究として注目されたことを覚えています。

領域分科会における授業研究、生徒の活動、領域の教育課程の研究提案が、本研究会大会参加者にとって今後の実践に役立つものが多かった。また、県下の技術・家庭科研究会員や分科会の会場校の職員、生徒、PTA役員などの案内や接遇の態度などが、大変参加者から好評であったことなどが、第24回山梨大会の評価を高くする結果になったことを、今でも思い出します。

創造性を高める右脳の働きと強く結びつく技術・家庭科教育と、それを支える山梨県技術・家庭科研究会の益々の発展を祈ります。

技術・家庭科の教科に改訂されて 40 年を迎えられたことにお祝いを申し上げます。社会の要求に答えて、教科名も変わったり、それにつれて内容も大きく変わった教科でした。父母や生徒からは、入試科目でないことから比較的軽くみられたりもしてきました。そういう条件の中で、担当する教師たちが、まじめにこつこつと指導内容や指導内容を工夫改善し、大変充実した教科になっていると思います。父母はともかく、生徒が興味や関心を持って喜んで学習に取り組んでいる姿を見て、先生方に敬意とお礼を申したいと思います。

私は、昭和 22 年 4 月新採用で、発足したばかりの、地元の大須成中学校に着任しました。僻地小規模校でしたから、体育・図工・国語・社会等の授業をしました。まだ免許教科制度はなく、上の先生が担当を決め、残った科目や学年を若い教師が担当するしきりでした。職業・家庭科の科目もありましたが、男子は、多くの学校が農業中心で、珠算や簿記なども学校によっては教えていました。女子は、裁縫と料理が主体でした。

昭和 30 年代、高度成長の時代に入りますが、何が成長したかと言うと、鉄鋼等の重工業が中心で、機械や船舶、セメント等の建築資材の生産が伸び、それに反比例して農業人口は急激に減り衰退していきます。農業中心の職業科は、工業中心の技術科へと大改編されました。昭和 33 年の夏休みに、技術科の仮免許状をもらうために、新設されたばかりの機山工業高校へ講習を受けに 4 日程通いました。米山先生の指導でブックエンドの製作実習をしたことを覚えています。

昭和 40 年代に入ると、自動車や家電製品が普及して生活が安定した時代になります。教育はこれでいいのかと言う反省や疑問が投げかけられ、今までそっと実践していた民間教

育運動が、どっと表面に出てきました。当時技術・家庭科では、女子の内容が家庭内の雑務処理に終始していないか、これは女性に対する差別だと言う考えの教師もいて、家庭科にも科学する目を育てる内容を用意すべきだという考え方を持つ方がふえてきました。その中の一つが男女共学の実践でした。木工(本立)電気(蛍光灯)被服(パジャマ)等を共学教材として位置づける実践がいくつも紹介されました。これに対して、学習指導要領の枠を超えるので好ましいことではないという教育委員会の指導や批判もありました。しかしこの流れは徐々に定着していったと思います。

昭和 50 年代に入って、文部省は、男女の特徴を理解し互いに平等の立場で敬愛する社会を作るために、共学も含めて内容の一部を共に学習することが望ましいとしました。高等学校にも男女に家庭科の学習をするようにしました。昨日 2 月 14 日、YBS プラス 1 に梨大の内藤道子先生が出演され、家庭科の学習内容の解説をされ、男女共学の実状なども紹介してくれました。甲府北東中学校の生徒が男子も楽しそうにミシンを使っているようですがテレビに出てきてとてもいい気分になりました。

技術・家庭科はとても地味な教科ですが、社会の要求に答えるだいな教科であります。最近では、OA 化に先頭に立って対応するなど、いつも教育の先発隊です。これから、子供の心の教育をになう先発隊になるだろうと思いますが、一層がんばってください。

昭和54年2月に「技術・家庭科20年の歩み」を発行してから、早くも19年の歳月が経過した。

この度、「山梨の技術・家庭科40年の歩み」が刊行されることと知り、歴代の会長の一員として一文を寄せられることは、この上ない喜びである。思い起こせば、編集委員長として20周年の編纂に取り組んだのは、若かりしころ城南中の時代であった。

昭和50年10月、河口湖南中で、第14回関プロ山梨大会の事務局長を務め、翌年4月甲府に異動し、新設開校3年目の組合立城南中学校に勤務することになり、20周年記念誌の仕事が回ってきたのだった。

時の会長は中楯嘉幸先生。編集委員会会長に古屋正賢先生を推載し、編集委員は各支部代表の男性5名女性5名の陣容であった。

研究会の事業として、企画してから3年、2回の合宿を含む延べ18回の編集委員会を開き、困難を克服し、挫折の危機を乗り越えての刊行であったが、当時としては、『良く出来た本』であったと自負している。

第34回全国・関プロ山梨大会は、平成7年10月、甲府市を中心に3市8町村を会場として、12分科会の規模で盛大にかつ有効に開催され、好評を博した。

関プロの組織の中では、最も弱小県である山梨が、他の都県に伍して遜色のない全国大会を、単歳で開催することは特筆すべき快挙である。特に関プロ大会は、第1回の群馬、第2回の千葉に続き、第3回の開催を山梨が引き受け、その後、10年ごとに第14回・第24回大会ををキチンとクリアーし、全国大会までも立派に成し遂げた。

全国大会を山梨に誘致した責任者として、その衝に当たられた方々のご労苦を偲び、ご精

進に対し、心から敬意を表するものであるが、全国・関プロ大会をこなした実績は、大きな自信となり、何物にも代え難い価値があろうと思われる。

私はこれまでに、昭和37年の第1回全国・関プロ大会から始まって、13回の関プロと16回の全国大会に参加することができ、最後は山梨全国大会の顧問を務めましたと胸を張って言うことができる。

教育課程審議会は、11月17日中間まとめとして、21世紀の学校教育の基本構想を公表した。

週授業時数を2時間削減することや、教科を横断して情報や環境を学ぶ、「総合的な学習の時間」（総合学習）の新設などを柱とし、「ゆとり」の中で、「自ら学び考える力」を育て、「基礎・基本」を定着させることや、各学校が、創意工夫を生かした教育ができるようにすることを主眼としている。

また、中学校から選択の幅を広げることや、中学で「外国語」「情報基礎」の必修、高校で教科「情報」の新設も打ち出した。

完全週5日制を実現し、中学校では、週28時間となり、学年があがるにつれて選択の教科や科目を増やし、2,3年では、1教科・科目につき最大で週2時間まで拡大できる。「総合学習」については、「国際理解・外国語教育、情報、環境、福祉などについて学校の創意工夫を生かして、横断的・総合的な学習する」と位置づけ、必修として週2時間以上が適当としている。

「生きる力」のものは、技術・家庭科の授業にある。子供たちのために、諸先生方の一層のご奮闘を期待してやまない。

人類が初めて宇宙を飛んだのが今から40年前の1957年だった。技術・家庭科研究会の発足と時期を同じくすることを思うと感慨深いものがある。スプートニク1号のガガーリン宇宙飛行士は、帰還後「地球は青かった」の名句で地球の美しさを絶賛した。

あれから40年後の今年、スペースシャトルコロンビヤに乗り込んだ、土井隆雄さんが日本人初の宇宙遊泳に成功した。彼がかつて甲府の中学校で3年を過ごしたと言うので県内のマスコミの報道が一段と熱を帯びたのも当然だった。

中学時代から、宇宙への夢を描いていたと言う彼の成長にとって、甲府での科学技術教育が少なからず糧となっているであろうことは間違いなくと思うと嬉しくなる。スプートニク1号に先を越されて先進各国は、アメリカを先頭に一齐に科学技術の振興を国策の最優先に掲げ、その後の宇宙開発競争に凌ぎを削ることになる。日本も例外ではなかった。

科学技術振興の波に乗って、学習指導要領の改訂で職業・家庭科が技術・家庭科と改められた。それに伴い職業、理科、図工の免許を持っている教員が集められ、講習会が開かれた。副免許で図工を持っていた私が、この講習会に出たのは昭和36年の夏休み中のことだった。講習が終わって与えられたのが、新しい「技術」の免許状である。

新免許を取得した先生方は、時代の先端をいく教育の推進者としての気概をもって研究に実践に情熱を燃やした。しかし、職員構成上、私にこの新しい教科の担当が与えられたのは、ずっと遅く昭和39年、第3回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会が甲府市で開催された時からである。

技術・家庭科の先生方の情熱的な取り組み

に触発されて、この教科の仲間入りをして30年、その間、10年をめぐりに改訂される学習指導要領は、教科の姿を大きく変えてきた。真空管での三球ラジオの取り組みが、トランジスタに換わり、情報化時代を迎えてパソコン教室が設置されるようになった。技術科と家庭科の相互乗り入れに続いて男女共習が行われるようになってきている。

時の流れに乗って姿を変えてきた技術・家庭科は、これから先どのような変遷を辿るのだろう。いくら姿は変わっても、より幸な人間生活を目指す教科であることには変わりがない。とすれば、今、最大の課題は、青く美しい地球を如何に保って子孫に伝えて行くかではないだろうか。

科学技術の進歩と産業の発展は、日進月歩の速さで私たちに快適な生活をもたらしたが同時に様々な問題をも残した。増え続けるゴミと汚染される大気や河川、海洋。温暖化現象。姿無く襲いくるダイオキシン。オゾン層にポツカリ穴を空けるフロンガス等々。夏休みが終わって登校した子供たちが日焼けを競い合ったのも今はむかし。学校の立派な焼却炉も封印されて使えなくなった。遂には生物の生殖異変まで現れており、種の保存さえ危ぶまれている。

20世紀が残した課題は極めて大きい。間もなく訪れる21世紀は、その解決に衆知を集めなければならないだろう。科学技術の進歩によって生じた問題であるならば、科学技術の力で解決して行くより他にない。技術・家庭科教育がその一翼を担って行くことになるのは必至だろうと考える。

## 40年記念誌発刊によせて

=平成5年という年=

平成5年度会長

篠原 茂

「山梨の技術・家庭科40年の歩み」記念誌の発刊おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。退職して4年目になりました。今、この記念誌に「歴代の会長の言葉」をとということで全く戸惑っているのが本当の心境です。

第34回全日本中学校技術・家庭科研究会・第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会の山梨大会を2年後に控え、平成5年度は、中学校の新教育課程が全面实施になりました。この十年来、臨教審を中心とする一連の教育改革案が打ち出され、そのプロセスにおいて一貫して注目されてきた基本的事項は「児童生徒一人一人の個性や能力を尊重し、柔軟にして多様な学習活動を展開する」ということでありました。

そのためには、とかく知識面にのみ傾斜しがちであった学力観を払拭して、意欲・興味・関心・態度といったいわば見えにくい学力についても意を汲んでいく必要があることが強調され、新しい学力観に立って、各校の教育計画を思い切って組み直す年でありました。

例えば選択教科の拡充を含めた新教育課程の実施、学校週五日制の段階的導入、高校改革に伴う新しい進路指導のあり方、とりわけ業者テストの偏差値によらない進路指導への取り組み等これまでに経験したことのない全く新しい課題ばかりで、今、改めて考えると、平成5年度を起点として大きな変革の第一歩を踏み出そうとした年ではなかったかと思えます。

学校は連日の校内研、職員会議に追われる毎日に、技術・家庭科の先生方は、新指導要領完全実施3年目という山梨大会に参加する全国の会員が、それぞれの実践を確認する意味での参加が予想されることを踏まえて、研

究主題「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」に沿って研究の仮説、視点の具体化、また研究領域の分担に基づき、研究授業の実施、さらには授業担当支部と提案支部との合同研究会等が夜を徹して積極的に行われました。

また、本部役員は、施設設備の充実、補助金の獲得への協力、研究体制確立への援助、あるいは全体会会場確保等のために、県教育長会・校長会の席上へ、また県下12市町村の公開授業実施予定校ならびに教育委員会へ東奔西走したことが先達の役割を果たしたのかは疑問に思うところですが、関係各位には改めて感謝申し上げたいと思います。

「本研究会が発足して40年、会員各位の情熱と温かい人間関係に支えられ、授業担当支部と提案担当支部による合同研究会等がそれほど負担にもならないで開かれたことは、本県の地域性にもよるところですが、これまでに研究体制確立にご尽力くださいました先輩各位のご苦勞も忘れてはならないと強く思いました。

21世紀はもうすぐ手の届くところにやってきました。これからの学校はどう変わることか誰しもが気になるところです。新しい臨教審に「中間まとめ」によると、2003年から完全学校週五日制とか、技術・家庭科は「情報基礎」を全員に学ばせるなど学校教育の基本構想が発表されました。先生方、記念誌発刊を機に私たちの技術・家庭科の果たす役割を確認し、その責任の重大さを再認識し、尚一層の研鑽に努めてください。

## 関プロ山梨大会 3回の授業公開に協力して

平成6～8年度副会長 長沼元江

退職をして10ヶ月ほど経った今日、山梨の技術・家庭科40年の歩みと題して原稿を依頼され、私は関プロ山梨大会の3回に協力・参加した想いを綴ってみることにした。

第1回は、昭和50年の第14回関プロ山梨大会の時である。中巨摩の家庭科は「家庭電気」の領域を与えられ、甲西中学校を授業会場にして男女共学の電気学習を提案することになった。本来、家庭電気は男女別学で教える内容であったが、男女共学の学習形態を推進していた本郡では、授業公開は当然男女共学の内容にすべきだということで生徒中心の授業づくりに会員一同励んだのだ。

当時は、男女共学での技術・家庭科は指導要領には記されていないことであり、県関係の方々には大変迷惑をおかけした一件であった。思い起こすに、そのときの郡の研究推進委員はこの私であった。県の推進会議に参加することについてはどんなに足の重いことであったか。本郡の研究内容は別格扱いをされていたのだ。しかし、私たち仲間は研究を続け山梨大会の名に恥じぬようみんなで精力的に協力した。

大会の全体会の会場では、文部省の調査官の記念講演の中で、山梨の家庭電気の男女共学の学習形態が取り上げられ指摘された。男女共学の授業はまた問題視されていた頃であった。しかし、50年関プロの公開授業が後の技術・家庭科の方向性を提示していたと思う。

第2回は60年関プロとも言う第24回山梨大会であった。本郡は食物領域の授業提案を与えられた。授業者は私であったわけだが、本郡のそのままの研究を提案させていただく条件で協力することにした。研究紀要の内容等については、何回も県の指導を頂き、

歩み寄った。指導内容・計画等要領に合わせた記述で授業案づくりに協力し、授業そのものは男女共学で「小麦粉の性質」を題材にしての実験授業で、生徒の活動をみて頂いた。

結果的には、参加者から大変好評であったし、教科としての男女共学の必要性が理解されてきたように思う。こうした実践の公開発表を契機に当時いくつかの県から、男女共学の資料の以来があったことを思い出す。

第3回は、第34回全日中及び関プロ大会が平成7年に実施されたことだ。県下一円に会場校を分散した山梨大会であった。中巨摩では栽培、情報基礎、家庭生活の3領域を分担し家庭科としては家庭生活を授業提案するようというところで県の計画に協力し、授業研究に集中した。家庭生活の領域は新設された領域のため実践が少ない。それだけに会員一同は一致団結して取り組み、試行錯誤の研究を重ねてよりよい授業づくりをした。

本郡の研究会は休日返上で行ったり、個人の家をお借りして宿泊研究を持ったことも何度かあった。家庭科の先生方の中に何なんかの子育て真最中という仲間もおり、他郡市の遠くから通勤している方もいて研究は大変であった。しかし、全員で協力し内容的にも好評を博した。授業でも成功裡に終えることができ最高に嬉しかった。加えて会場校であった竜王北中学校のご理解と儒教者の杉野保子先生の生徒との人間関係の良さが素晴らしかった。



技術・家庭科が、戦後いくたびかの改訂を経て、現在の教科として、中学校9教科の中のコア的存在とし、また人間教育の中核に位置付けられたのが昭和33年の教育課程の改訂である。移行措置を経て3年後の昭和36年に完全実施されたのである。この改訂で記憶に新しいのは道德の時間の特設で、日本が戦後の衣を脱いで、ひたすら復興の道を歩むことになる。こうした中で技術・家庭科は戦後の日本社会の先進的な立場にたち、日本の復興を大きく支える太い柱になったのではないかと思う。

私は縁あって昭和39年第3回関プロ大会山梨大会の準備期間中、2代会長永井先生の下で北東中学に在任し、「新しい感覚と英知を働かせる」をモットーに会の先頭に立たれている先生の姿に敬服の念を持っていた。永井先生は大会の準備をされて退職された。

山梨大会は昭和39年甲府を中心に県下にまたがってすばらしい成果を上げることができた。丁度その時私は市教委の指導主事をしていたので裏方として協力することになった。当時、市内6中学の技術・家庭科の施設設備は貧弱であった。不十分な施設と大会運営の費用の捻出を市当局に接渉し、金額は記憶していないが当時としては相当額の金額を頂いたと思う。費用の捻出と共に行政がこの教科に対して大きく関心を寄せていたことは、それからの技術・家庭科の運営に大きくプラスすることになった。

10年たった昭和50年第2回山梨大会はまったくこの教科には無免許の私が10代会長に就任することになった。この辺のことは「技術・家庭科20年の歩み」に詳述されている。この大会で記憶に残っているのは、大会の研究テーマである「一人一人の技術的能

力を伸ばす授業の工夫」の技術的能力とは何かを2年間追求したことである。労を惜みせず実践を大切にするこの教科は、更に確かな理論の裏付けを必要とする。その理論の追求をとことんまでしたのである。この辺のところは今もはっきり記憶に残っている。そうした研究と実践の中で次のようなことが確認された様に思う。

- ・実践を伴わない理論は空虚である。
- ・新しい感覚と英知を働かせる教科こそこの技術・家庭科である。
- ・敗戦後の日本の技術革新を大きく支えていくのがこの技術・家庭科である。
- ・日常生活に直結する生きた教育の場を持つことができる教科である。
- ・知識偏重の中学教育の中で、人間性の回復創造力の育成等、実践に裏付けられたこれらの能力の育成こそ、技術・家庭科の大きい使命である。
- ・生きる学力の育成が日本の将来を規定する。本教科はその責任を大きく背負っている。

あれから既に山梨大会も2回実施され、日本の社会情勢も大きく変わり、指導要領の改定も行われ、教科内容・方法も変わったことと思う。しかし変わらないものは技術・家庭科本来の本質と研究会々員のこの教科を愛する教育愛と追求心を根底においた先生方からほとぼしり出る情熱と実践力であると思う。こうした歩みがこの度の40周年記念誌に記録されることと思う。喜びと共に心から敬意を表する次第である。

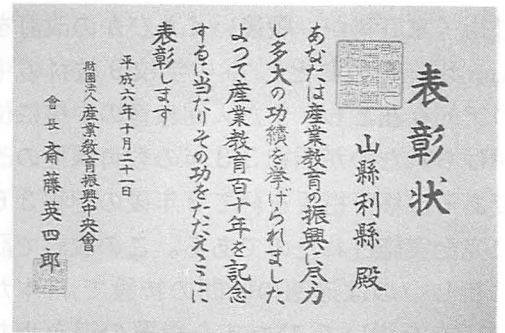
山梨県中学校技術・家庭科研究会のいよいよの充実と先生方のますますのご発展を祈念申し上げます。

退職して3年目、一木貞夫会長が、先生の技術・家庭科教育に関する功績を知りたいといってきた。あまり立派なこともしていないように思われたが、とにかく少し書いて渡した。会長として推薦状を書くため苦心したことと思う。平成6年10月21日、善光寺の地場産業センターにて県下職業高校主催の産業教育百周年の記念行事が行われていた。式典の中で、農業、産業、工業、家庭、そして義務制からは私が晴れがましい表彰を受けた。これは私一人のものでなく、技術・家庭科に携わった皆様のおかげと信じ、この紙面をお借りして深く感謝の意を表すものである。

思えば、昭和30年猿橋中に赴任、文部省の産業教育指定校であった。職業家庭科の時間は週4時間あり、その上に選択の時間が2時間あった。貧しい日本を豊かにするための国の方針である。農業はもちろん果樹栽培、鶏や山羊の飼育、縄ない、焼きもの、木材や金属の加工、電気機械ラジオの製作、珠算や簿記までも授業に組み込まれた。下宿生活であった私は、日曜、夏休みもそこそこによく働いた。その時の生徒に野球の村上正則君が居る。当時の進学率は低く、70%の者が就職した。職業安定所と密接な連絡を取り、少しでもよい条件の就職先を探すため、よく東京に出かけた。高校も普通科は少なく商業科や甲府工業に何人も入学した。

昭和38年甲府西中学校へ転任、西中も文部省の指定校だった。全校あげて産業教育に関心が深く、実践課題、研究課題が山積していた。亡くなった古屋先生など優秀な先生方がたくさんおられ勉強させられた。

この頃、職業科が技術科となり、先輩の先生達は講習を受け免許を取得しなければならなかった。県指導主事の鶴田先生か



ら米山先生の時代であった。私も3年間、講師としてお手伝いした。毎年6月ごろ文部省の教育会館、教育大学などにおいて6日間の講義や実習を受け、夏休みに各県で単位講習会を行うためである。私は、電気を受け持った。ラジオの製作である。甲府では真空管やコンデンサなどの部品が手に入らない。秋葉原まで何度となく出かけた。先生方は青年師範学校の卒業であり、農業には優れた技術や知識を持っているが、電気のこととは分からないと言う。搬送波や音声電流を見せろと言う。甲府工業からオシロスコープを借りて来て実践したが納得していただけない。どうしてよいか泣きたい思いをした。その後部品をベニヤに並べ、原理が音で分かる教具を作ったり漫画にしたりして好評を得た。

第3回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会、山梨大会が甲府6中学校を会場に開催された。私は電気の研究授業を行った。諸先生方のご指導、ご協力により、無事に終えることができた。

第14回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会、山梨大会は、会場を県下に広め、我が県のレベルアップを図った。藤原会長、宮川大会事務局局長のもとに働き、最高の成就感を味わうことができた。

社会の変遷と共に変わるこの教科こそ、やり甲斐のある教科であったと信じている。

### 第3回関プロ大会の思い出

樋 敏雄

南西中は県教委の指定を受けて、技術・家庭科実験学校として、昭和39年10月6日、第3回関プロ山梨大会を行った。教科担当の富田、石原、早川、佐野教諭らは連日連夜、指導案をはじめ、公開資料の作成等、全知全能をふりしぼって頑張った。県からは金丸、滝TCの指導助言も頂き、県内外の多数の参加者に深い感銘と評価を得たことは今も忘れない。

### 顧みて今を思う

昭和41～43年度会長 井上英信

退職してもう30年にもなります。古いことなので記憶も薄れてきておりますが、印象に残っていることを少し述べてみたいと思います。

私が技術・家庭科に関係するようになったのは、昭和40年、甲府市立南西中学校長に就任して間もない頃のことです。もう亡くなられた元伊勢小学校長山元宗治先生が、退職されてすぐの時、突然校長室に見えられ談笑数刻の後、帰り際に見送った玄関先で、靴を履きながら、「甲府では君を技術・家庭科の研究会長にという話だが、それでいいな。ではまた。」とあ然としている私を見向きもしないでさっさと帰っていかれました。私は元々社会科専門で来た人間で、技術・家庭科には知識も乏しく、能力も持ちあわせていなかったもので、驚きと困惑の気持ちでいっぱいでした。冗談みたいに言われたのでその後大して気にも止めていませんでした。私も学校始めではあったし、教育委員会からの転出で何かとせわしかったので、このことはしばらく放っておきました。ところが、その間事務局では話がどんどん進められていたらしく、事務局長の金丸寿幸君が来校された時には、もう

断りきれない状況になっていました。

引き受けたものの、能力のない人間が何をしてもよいやら迷っていましたが、先年甲府市で開かれた技術・家庭科関プロ大会の際につけた、技術・家庭科充実のための予算を、削らないで続けて盛ってもらうよう依頼することと、県教育委員会に技術・家庭科専門の指導主事を新たに任命してもらうことの2つの要望がありました。第一の問題は、大会が非常に好評であった上に、当時秋山清委員長・田中憲教育長が非常に好感と理解を示して下さってうまい具合にいきました。第2の課題は、根津修蔵学校教育課長始め、県教育委員会が、長年にわたる技術・家庭科の実績を高く評価され希望どおり実現の運びとなりました。初代指導主事に新藤晴雄君が選ばれたことはご承知の通りです。



昭和62年度 研究発表大会 講演  
(浅見 匡 教科調査官)

翌年になって、県の会長にということで、つい退職するまで勤めることになりました。大して役には立ちませんでしたが、会の皆さんのご支援と、研究実績のおかげで、大過な



昭和62年度 総会・役員紹介  
(左端 宮川逸雄 会長)

く使命を果たすことができました。

私が在職した昭和40年の始めといえば、科学技術の進展に伴い、産業界が急激に伸び経済界は異常なまでに高度成長をしてきた時代であります。大学生高校生のゲバ棒騒ぎがあって社会的政治的問題になったあの頃です。又、経済の発展と共に、教育界が入試一色に塗りつぶされ、教育の本質が見失われようとした時代でもありました。偏差値が重視され、人間の価値をこれではかろうとする風潮さえありました。試験科目が限定されて埒外に追いやられる風にありました。生徒の生活といえば、その大部分が受験勉強に費やされ、学校も家庭も試験に強い生徒を目標とするようになりました。人生において最も明るく希望に満ちた中学時代が、まるで灰色の生活の毎日でした。教育とは何かと、戦後教育の再検討・総点検をすべきだと叫ばれたのもこの頃でした。

人にはそれぞれ他の人にはないすばらしい素質や人間性を持っているものです。知的に優れた者、情操豊かな者、身体強健な者、人間味のある者、社会性に富んだ者等、それぞれ立派な花を咲かせる資質を持っているものです。つまり無限の可能性を持っているので

す。この可能性を信じ全人的立場に立って個人の良さを掘り出し、発見させていくことこそ教育の本務でなくてはなりません。偏差値を高め有名校に入ることを唯一の目的とするような教育観・人間観は将来を誤らせるものになりかねません。

当時、アメリカのハドソン研究所のハーマンカーン氏の日本観によれば、「今の日本はこのまま進んでいけば、21世紀は日本の世紀になるだろう。」と予言されました。21世紀を目前にして、今の日本は何と答えられるでしょう。バブルのはじけた経済界、マスコミに見られる毎日毎日の社会、その他政治等々の現実を見るにつけ日本の世紀どころではありません。もちろんこの責めは教育のみに帰すべきものではありませんが、戦後経済復興に目を奪われて、全人的な人間教育をおろそかにした付けが、今ここに来ている感じがしてなりません。過去を顧み21世紀を目前にして、悔やまれることしきりの昨今です。



平成5年度 総会・役員紹介  
(左端 篠原 茂 会長)

技術・家庭科発足40年の節にあたり、県技術・家庭科研究会が衰微することなく活動していることと、年月の早さに感無量である。昭和33年10月に、中学校に職業・家庭科にかわって技術・家庭科が新設された。その後、37年実施までの間に移行措置の問題がいろいろと生じていた。

文部省は、技術・家庭科の実施に備えて、この教科を担当するすべての教師を対象に実技に関する指導力の向上を図るため昭和34年度から3ヶ年計画で、各都道府県ごとに、「男子むき」12日間、「女子向き」4日間の実技講習を実施した。結果的には、これが技術科免許状の取得であって、熱い夏休みも返上で行われた。

今までは、農業の割合が大きかったが、これからの主力は工業に移り、設備の充実はもちろん、製図、木工機械や旋盤の操作、3球ラジオ受信機の製作等々覚えるのが大変な日々が続いた。その後、この種の実技研修は毎年継続された。指導主事の先生、工業高校の先生には大変なご指導いただいた。

技術学習では、特定の施設・設備を利用し効果的な授業を進めなければならないので、担当教師の指導力のいかに授業そのものの成否を制するものといってよい。

中学校の教育課程がドラスティックに改変されたこの時こそ、新しい技術学習の内容とそれを担当する教師の資質との間のギャップが大きな問題となった。

その頃、技術・家庭科研究会は、研修会と平行し多くの問題と取り組んでいた。

技術学習に対する教師意識、技術科の性格、位置付け、充実すべき領域、精選すべき領域、技術学習に対する生徒の意識、技術学習の人的条件、技術学習の物的条件等、昼夜をわか

たず研究に力を入れ、軌道にのせるべく努力をしてきた。

特に印象に残ったものをいくつかあげてみると、カリキュラムの編成や作業分析などを中心に発達段階に応じた指導ができるよう全領域にわたって、A表、B表、C表を完成し、それを活用したことである。これは各郡市で分担し、研究の成果をあげた。

ちなみに甲府市技術・家庭科研究会では、雑誌「技術教育」から投稿を依頼され、金属加工領域「ちりとり」のプレス加工（強度）について、県内外にその成果を発表した。

又、技術・家庭科研究大会は、関プロ大会、全国大会においても大いなる実践を重ねて他の教科にみられない特色を持った存在である。私も神奈川大会と山梨大会に発表をしましたが、いつも思うことに、みんなで考え、話し合い、そして、一つのを創造していく技術科の良さを強く感じてきた。と同時にこの会の研究の核になっていただく先生が他教科であること、例えば、理科、社会、美術などの教科であったことも、発想の転換に効果的で異色だったと思っている。

その後、昭和52年には、中学校学習指導要領が改訂になり、技術科の週時間数や選択教科の内容が大きく変わったが、研究会の活動は、現在に至るまで、教育の本質を追求し、貴重な実績を積み上げてきたと評価している。おわりにこの教科こそ全人教育をめざす未来の学校づくりの中核であるといえる。

この教科の本質を極めることは、なお続くことと思うが、大事にしたい気持ちは、長く続けていきたい願うものである。

昭和26年4月から、私の教職員生活がスタートした。終戦後間もない当時である。

半農、半商といった地域でした。新制中学校はじまって新しく、日本の教育も必ずしも安定しているとはいえない。生徒の服装は継ぎものあり、草履、下駄履、運動靴のさまざまな形で下駄箱に整然としていた。

職業・家庭科といっても施設設備25パーセント前後である。実習室の環境整備、機械、器具の施設設備の充実を図るための研究実践をはじめた。日本の将来を展望するなかで、地域の子どもの教育をどう押し進めるか、そこで校内研究を県内に広げる産業教育振興を図るを目的としての産業教育振興会が発足し、わたしたちの学校長を核に、県下中学校産業教育振興会の発足へと発展していった。

歲月流れること早く、技術革新の時代、中学校技術・家庭科と名称が変わり、免許状、施設設備の充実、教育内容の研究、検討など日進月歩であった。

「教科書を教える」「教科書で教える」の問いを見出し、生徒の発達段階、地域の実態をふまえながら、男女の平等性を大事にして押し進める教育研究へと発想の転換をした。教育施設設備は、年毎に充実するを見たが、教育内容を見直すなかで、いくつかの課題がつぎつぎと発見された。これらの問題解決として一つ一つ取り組まねばと教育研究の奥の深さに立ち向かっていった。課題の一つとして「男女共学」は、中巨摩支部や全国各地で研究実践をはじめた。山梨の男女共学のはじまりである。私たち南巨摩支部も「男女共学」をテーマに研究し、特に中巨摩との交流研究が多かった。

研究を進めるなかで、全国大会（東京大会）に出席した。当時研究推進者は全国でも数少なかった。男女共学というより「男女共生」

という呼び方であって受け入れられにくく感じた。研究討論が続けられた。この研究発表会の要所要所で、指導助言の文部省官僚である先生が「男女共学」をその都度申されたのである。それ以降の研究発表のレポートには「男女共生」とありながら、すべて男女共学に変えての発表となったのである。

私たちの研究から、「男女共学」は正しい表現であり、中味も確かであることの内容の正しさを再確認した。

以後私達は仲間と共に男女共学の研究に熱が入り、自信となって、学習内容の再検討、教材研究を積み重ね実践を続けた。

文化に国境はない。日本の教育に地域格差はないはず、と信念を持って辺地に赴任した。技術・家庭科室を早速見ることにした。そこは教育の場ではなく諸雑多の物置で蜘蛛の巣城であった。夜半を通して雑物を運動場に運び出した。校長に事の次第を話した。その年より予算増額、施設設備は2カ年で95パーセントになった。この支会に私一人の専門教師という（人事交流の問題点？）、以来研究を同支会、郡、中巨摩、甲府の研究仲間呼びかけて僻地校へ招いて研究交流を深めた。

知ること、わかること、をどう教えどう学ばせるか、模型、実物を通して指導する研究で、教科書、平面的な教材は少なくした。例えば木材加工の年輪、柾目、逆目の原理法則を、模型をつくっての研究成果は全国大会（秋田大会）で発表し好評だった記憶がある。私の研究物、教材、教具開発物は任地に残してある。

（元本研究会副会長・南巨摩郡支会長）

平成9年も押しつまった12月はじめ、記念誌出版への原稿依頼の便りが届いた。教職を去って11年が経過しようとしていて日頃の関心が他に向いているときであり、過去を手繰り寄せることに、一瞬不安と戸惑いが先行したというのが正直な気持ちであった。それでも原稿用紙を前にすると本教科に携わった30年程の、様々なことがらや思いが蘇ってきた。その一端を書かせていただき、責めを果たしたい。

<技術・家庭科誕生>

昭和33年学習指導要領の改訂で技術・家庭科が中学校の必修科目として誕生した。この時代は科学技術の発達著しいときで、それに呼応して産業、経済の発展も目ざましく、本教科の誕生はまさに時代を象徴するものであった。

しかし、必修科目とはいえ、学習内容は、男子向き、女子向き、と男女異なった内容で男女別々に学ぶというものであった。この改訂により女子向きで著しく変わったのは、木材加工、機械、電気などの領域を家庭生活に関係深い題材を取り上げて学ぶようになったことであった。

新学習指導要領完全実施の37年度に向けて現職教育が実施され、夏休み返上で勉強した。やってみるとすべてが初めての体験で、とても楽しかったしそれまで使用していた木製品や機械類、電気機器を異なった視点で見たり使用、操作でき、自分自身の生活にも役立つのでこんなことも新しい教材を扱う意欲に弾みがついたように思っている。

<県版学習ノート>

研究会編による学習ノートが作成されたのは研究会草創期だったのではなかったでしょうか。それは学年別、領域別に分冊になって

いた。

この頃の私は他教科とのかけもちで、目先のことで精一杯のころ、このノートはとても頼りになるものであり、作成に当たった先輩方に深い感謝と尊敬の念を抱いたもので、それから20年近く後に同じ仕事に携わる立場になったとき、このときの思いが私の意欲を掻き立たせてくれたように思っている。

<関プロ大会>

現職のころ同僚から「技術・家庭科の先生方は研究熱心ねえ」との声をよくかけられた。とはいえ、それは凡そ10年毎に訪れる関プロの発表が契機になっていたように思う。関プロは本教科に限ったことではないのに、何であんなに熱が入ったのかなと思う。

一校に1名か2名、校内での切磋琢磨は困難、自らを磨くには他校の仲間に頼らなければならない、教科の歴史が若くその上科学技術の急速な進歩に伴う指導内容の変遷等、本教科の特殊性もさること、研究熱心な先輩諸氏達の培った歴史も加担していたのではなかったらうか。

研究の中身はどうだったでしょうかと差し入るわけですが、そのことを通して得た充実感を伴った仲間との交流は今も私の財産となっている。

かつて家庭科の男女共学を提唱し活動していた半田つた子氏を中心とするグループが、その役目を終えたとして解散したとの新聞報道を、数か月前目にしました。家庭科教育はまた新たな方向に向かって歩み出したのかなと感慨深く受け止めました。研究会の益々のご発展を衷心より祈念申し上げます。

## 6. 研究会活動の歩みを語る

### (1) 歴代事務局長

#### 事務局長時代の思い出

昭和時代最終の6年間を務めて

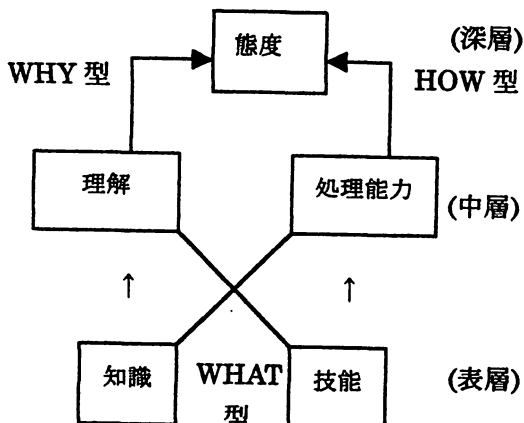
甲府市立富竹中学校校長 齋藤 章

昭和52年に山梨大学附属中学校に赴任すると同時に、県の事務局員に所属するよう先輩たちから指名され、庶務の位置付けで岡田千鶴子先生と共に石井事務局長の下で仕事をさせていただいた。会長は中楯嘉幸先生で一木校長が会計をしていた時代である。

昭和55年になると、会長は保坂元治校長が就任し、57年には大沢保彦校長になり副事務局長にさせていただいた。庶務には野本準仁先生が入り会計を兼務し、一木先生が研究部を担当するようになった。

昭和58年、会長は葎沢一富校長、私はこの年から事務局長を務めた。甲府の支部長は中山和己校長先生になっていただき、60年山梨関プロの準備にも拍車がかかり、授業者の移動は避けて下さるよう、県教委の教職員課にお願いにいたり、授業分担の郡市の教育長先生に直接お願いをしたことなど、大変忙しい思いをしたことが昨日のように思い起こされる。もちろん、このような時は運転手役をつとめ、帰校すると前回の山梨関プロの企画書を参考に、大会の校長)企画を練った。

この年の夏と冬には、横浜国大の鈴木寿雄教授と学芸大の池本洋一教授を講師に招き、目指す学力について研修会も実施した。



準備段階での衝撃的な出来事は、副事務局長の野本準仁先生の急死である。葎沢会長と私は、千葉県で関プロ事務の引継ぎをしていたが、知らせを聞いて、鴨川から二人でとんぼ返りをしたのである。

翌年の昭和59年度の研究発表大会には、教科調査官の村田先生・津止先生を講師に迎えて県民文化ホールで行った。関プロ山梨大会を目前に、学習会での研修を強化し、一段と力を入れたのである。

大会組織では、総務・運営・要録編集と各校長先生方の力を發揮してもらい、昭和60年から望月教三会長の下で、本県では三巡目の関プロ大会も1,200余名の参加を得て、理事会・開会式及全体会、9会場・10分科会と好評のなか、成功裡に終了できた。

昭和61年～62年は、(会長深澤六郎校長)成果を深化する年と位置付け埼玉大会へは104名・新潟へは86名の参加者があり熱のこもった研究活動が続いた。また、この年は岩間孝吉先生を委員長(現会長)に、県版学習ノートの改訂作業が進められ完成した。教育課程審議会から、基準改善の中間まとめも出されている。この年の研究発表大会の講師は、浅見匡教科調査官を招き、本教科の新しい方向についての講演を設けた。

昭和63年は、(会長宮川逸雄校長)教課審の最終答申が出される年に当たり、情報基礎が位置付けられることが打ち出され、この時から教育界でコンピュータが注目され出した。

平成になり、バトンを石原成人先生に渡し局長6年間の務めを終えてやっと一息つかせてもらったのである。事務局員の先生方には迷惑をかけた点を併記し、感謝を表したい。



## 事務局長の思い出

長坂町立長坂中学校教諭 小澤 建二

第34回関プロ山梨大会直後の平成8年、上条中学の岩間孝吉会長のもとで、県の事務局長という大任を担当させていただきました。事務局長などという器では到底ありませんが、何かお役にたてたらと思ってお引き受けしました。以前から事務局に所属し、仕事はかなり分かっているつもりでしたが、いざその任に当たって事の重大性を痛感しました。

まず、関プロ及び全日中の理事会に出席し技術・家庭科研究会の組織の大きさと、研究の取り組みの確実さを改めて感じました。埼玉大会の関プロ理事会には一木前会長とともに出席しました。全日中の会長や文部省の教科調査官の先生方など蒼々たるメンバーが顧問として出席し、関プロ大会の運営についての話し合いが行われました。一木前会長は、前年度開催県として山梨大会に多数の参加協力をいただいたことに対し感謝とお礼を述べられました。また、東京で開かれた全日中の理事会には岩間会長とともに出席しました。全国の都道府県から会長と事務局長が集まり会の運営やブロックごとの研究日程などが話し合われました。全産教の支援により全国技術・家庭科作品展が開催されていることも知り、全国的な組織的取り組みや関係諸団体の支援による実践など、技術・家庭科のスケールの大きさを感ずることができました。

次に、教科書の改訂に伴い県版の学習ノートの編集（全面改定）を行いました。事務局から三枝 修先生が編集委員長となり、研究推進委員と事務局員で領域を分担しそれぞれ協力員の先生方をお願いして、定期総会後から取り掛かりました。県下各地から明野村総合会館や甲府市東公民館などに集まり、夏休み中も何回も編集会議を行い、指導主事や研修主事の先生方にもご指導を頂きながら、二学期の中頃までかかって完成することができ

ました。このように県版ノートの作成に当たり、担当の先生方に大変な苦勞をおかけしたわけですが、このノートには先生方の日頃の実践と関プロの研究成果が凝縮されており、本県の大きな財産であると思います。

この他、本県からの関プロ埼玉大会の申し込みが90名以上あり、先生方の研究に対する意欲と共に、関プロ山梨大会の成果が周囲から認められ多くの先生方が快く研修に出させて頂けたと思われまふ。このように関プロという研究体制が整っていて、全県的・組織的に研究が行われている教科は他にはないと聞いています。教師の力量を高めていく貴重な研修の機会ですので、これからも本県のまとまりのよさを保っていくことが大事だと思ひます。

なお余談ですが、私は2年間社会教育主事として町に派遣されましたが、技術・家庭科と生涯学習は大変に関連があることが分かりました。この教科の特徴を生かし次のような講座を実施しました。科学工作教室、親子絵本教室、パソコン教室、アマチュア無線講習会、生ゴミ処理やゴミ処理施設見学などの環境講座、保育園での子育て講話など、学校の先生にも講師を依頼しました。学習指導要領が改訂されようとしていますが、学校五日制や総合学習との関わりから技術・家庭科と生涯学習の連携を図ることがさらに必要になると思ひます。常に新しい知識や技術を身につけていくことはこの教科の宿命のようです。最後に、1年という短い間でしたが、先生方のご協力を頂き何とか無事に努めさせていただけたことに感謝致します。

明野中に赴任してきて今年（平成9年度）で7年目になる。私が事務局に入ったのも明野中に赴任した年だと思いが定かではない。一木先生や小宮山先生や小沢先生と北巨摩から何人かの優秀な先輩が事務局にいたのが入局のきっかけだと思います。最初は一事務局員としてまわりの先生方の働きぶりを感じしながらながめているという状況でした。ただ、総会や推進委員会や理事会などがこんな綿密な計画のもとに開かれていたということは知らなかったので驚きでした。大きな会議の前には必ず最低一度は事務局会を開き検討していました。そんな裏での苦勞を知らされました。まだ私が事務局に携わっていなかった時は、斎藤先生が長い間事務局長だったように覚えています。入局した当時は石原先生が事務局長をなさっていました。その石原先生がその役を退くことになった時か、その後になった入蔵先生がセンター研修にお出でになった時かは定かではないのですが、事務局長の役が私に回ってきました。もちろん初めての経験です。私よりベテランの先生方がいる中で恐縮することしきりでした。全日中・関プロ大会が身近に迫っていた時期だと思います。

携わったのは2～3年くらいではなかったでしょうか。3年生を担当していて派遣文書などは日曜日に登校してもらい生徒に手伝わってもらったのを覚えています。文書の印刷、会長印の押印、文書の折り込み、封筒への宛名書き、封筒の糊付け、切手貼りと一連の作業を生徒何人かと午前中かけてしたのが思い出されます。郵送料より生徒への昼食代の方が高かったような気がしました。でも、普段教室の中では話せないようなことも作業しながら話すこともでき、教室では見られ

ない意外な面もみる事ができました。たいへんでしたが楽しいひとときでもありました。また、顧問などの先生方や小学校の管理職に異動なされた先生方などに派遣通知を出さなくて失敗したようなこともありました。それでも経験不足の至らない事務局長にまわりの先生方は暖かい目で見守ってくれました。

事務局長といえば、理事会が思い出されま。中でも印象的だったのは、関プロ栃木大会で会長の斎藤先生が出席できないので、副会長の清水禮子先生と一緒に栃木県宇都宮市へ向かった時のことです。理事会当日に山梨を発ったのですが、宇都宮には早く着いたものののんびりし過ぎて、駅から理事会会場までバスが時間がかかり、やっこさ着き、ぎりぎりセーフ。すでに他の都県は揃っており、見渡すと会長らしき年配の方となりにいる各都県の事務局長は管理職かそれに準ずる人達で私のような若造は一人もいず穴があったら入りたい気分でした。翌日の全体会で初めて客席ではないステージに腰掛けましたが、あまり落ち着いた気分にはなりません。それと斎藤会長と一緒に訪れた全日中京都大会。初めて乗るJR中央西線。木曾の山あい抜けると広い濃尾平野。中央道とは違う風景が続き飽きることはありませんでした。その夜の理事会で印象的だったのが、舞妓はんの踊りでした。こんなに目の当たりで見るのは初めてで変に緊張したのを覚えています。きれいでしたね。翌日の全体会ではさすがに会長のみの登壇でしたが、楽しめました。

まわりに迷惑をかけながらも、さまざまな貴重な体験をさせてもらったのが事務局長時代でした。ただ一つ思ったのは事務局は中心地でないと不便だということです。

## 事務局長 1 年生

竜王町立竜王中学校教諭 長田 靖

平成9年度より、事務局長をさせていただいております。いわば事務局長“1年生”と云ったところですよ。

それは1本の電話から始まりました。

平成9年の3月中旬(平成8年度末)、楽しみにしていた学年の打ち上げ旅行を翌日に控え、夜更けにいそいそと支度をしていた私に、事務局長(当時)の小澤建二先生から電話がありました。

『いずれ会長先生からも話があるだろうが、事務局長を引き受けてほしい。』という内容でした。えっ!?!と、思わず耳を疑わずにはいられませんでした。この私が事務局長?、伝統あるこの研究会に、大きな危機が訪れますよ、それでもいいんですか、私はとてもそんな器ではありません。他に適任者がいるはずですよ。事務局長として仕事をこなす自信も仕事の見通しも持てそうにない私は、後日の会長先生からの電話でも、貧弱な語彙を駆使してお断りを試みたのですが、たくさんの励ましのお言葉に、最後には深く?引き受けさせていただく決心をしました。

私が事務局にやっかいになるようになったのは、平成6年からです。調査資料部長2年目の私は、翌年の関プロ(全日中)大会で教育課程分科会の提案発表をすることが内定していました。各領域の研究とは異なり、支部単位の研究ができないため、事務局に所属していた方がいろんな面で都合がいいだろうとの方針で、事務局の末席に座らせていただいたのです。

翌(平成7)年、大会での提案発表も何とか無事に終わらせることができました。さらに平成8年には、調査資料部長も後進に譲り、アドバイザー的な立場で調査資料部のお手伝

いをさせていただいておりました。誠に分相応な立場を与えられていたわけですよ。

そんな私に、降ってわいたような事務局長話、これが驚かずにいられますかって!

(甚だ失礼と存じつつ、敬称を略させていただいて) 斎藤章→石原成人→長久保学→入蔵靖彦→小澤建二、これがここ十数年の歴代事務局長の先生方です。この後にもうひとつをつけて長田靖と名前が入ると、そこでガクッと落ちる感じがしませんか?

とりわけ斎藤章先生は、教育実習時代からお世話になりっぱなしの、私が“師”と仰ぐ大先輩です。その大先輩がかつてされていた仕事を、この私が引き継ぐなど、おそれ多いことです。

私自身が事務局長を引き受けることに不安を感じた以上に、私を知る多くの会員の方々もまた「本当に長田で大丈夫か?」と思われたのではないのでしょうか。

不安いっぱいスタートでした。

派遣申請の文書発送、研究会で使用する会場の確保、関プロや全日中理事会への出席、作品展の後援依頼…、ひとつ終わればまたひとつ、とにかく目の前の仕事を片づけるだけで精いっぱいです。それでも何とか1年間やってこられたのは、会長先生や歴代の事務局長先生、そして事務局の先生方のお力添えがあったからです。改めて、この研究会の伝統の力とまとまりのよさが実感できました。ふたつくらい先を見ながら、余裕を持って仕事をしなければと思っています。

もう少し、自分なりにがんばってみます。

## (2) 歴代の研究推進委員長・副委員長

### 技術・家庭科を顧みて

中道南小学校 清水 禮子

山梨県技術・家庭科研究会が開設されてから今年で40周年を迎えたことに、喜びを感じるとともに、県技術・家庭科の先生方の力の大きさを、あらためて心強く感じた。

私が県技・家研に直接的な関わりを持ったのは、第24回山梨県プロ大会の3年前、昭和58年の4月に事務局に入ったからである。その当時事務局は、60年度山梨県プロ大会に向けて研究テーマや研究内容を他の県で取り組んでいない新しい山梨方式として考えようとしていた。そのために土曜日の午後や、勤務が終わった放課後などよく付属中学校で頻繁に研究会を持ったのを覚えている。会長には現在の教育委員長の渡沢一富先生、研究推進委員長は、一木貞夫先生・副推進委員長には小沢せつ子先生、事務局長に斉藤章先生など、今と違って事務局員の人数も少なく、みんなそれぞれの役の中で頑張っていた。事務局には小沢先生と私しか女性がいないのもう少し女性を入れたらどうか、お願いした覚えがある。その願いがかなって、現在のようになり女性が多く事務局に入るようになった経過がある。60年度山梨県プロ大会に向けて59年にはミニ関プロをすることになり、技術系列と家庭系列が一つずつ授業をすることになった。私は誰が授業をするのかと人ごとのように思っていたところ、事務局の誰かがしたほうがいいということになり、結局私がすることになってしまった。技術系列は石和中学校の宮沢先生が「栽培・菊づくり」、家庭系列では「保育・幼児の遊び」を同じ学校で同時に授業公開をしてミニ関プロに備えた。

翌60年度山梨県プロ大会では私が「保育領域」の授業をした。「保育領域」担当支部は南巨摩と東八支部で、共同研究会を何回も持ち、教材・教具や35時間の授業案の作成

資料づくり等に、夏休みも返上しながら先生方と研究してきた懐かしい思い出がある。

盛会の内に60年度関プロ大会も終わり事務局も入れ変わり、私は事務局に残ることになった。それ以後研究会が一時停滞ぎみになった。開隆堂の山梨担当の榎本さんがよく学校を訪れ、山梨はこれでいいのかと心配して他県の資料を届けてくれた。また、先輩の先生方が苦心して作ってくれた県版の技術・家庭科ノートや型紙など、修正が加えられながら活用することができ、先輩から学ぶものが多かった。新教育課程完全実施に伴い技術・家庭科ノートも、会長や研究推進正副委員長を中心に研究推進委員の先生方の力で見直しされ、現在活用されている。このように、技術・家庭科の先生方の努力と結集は素晴らしいと思う。平成4年度から、平成7年度全国・関プロ大会山梨大会に向けて県技術・家庭科が意欲的に活動を開始した。7年度の大会は新教育課程が実施されて2年目であった。新教育課程の内容で、新しい学力観を重視した授業を公開するため、一木会長や推進正副委員長を中心に各支部の先生方が大会に向けて一生懸命取り組み、研究の成果を発表し、成功裡に無事大会を終了することができた。私は前日の理事会の進行と総会の司会を担当し、極度の緊張と同時に素晴らしい体験をさせていただき感謝している。

大会を通して「組織は力なり」全県の技術家庭科の先生方が一つの研究主題に向けて考えを集中し、創意を傾けて練り上げていく営みこそ大きな意義があることだと思った。

40年周年を迎え、振り返って見ると立派な先輩に恵まれ育てていただいたことに感謝申し上げ、益々この会が発展されることを願って止まない。

阪神大震災から3年。今もまだ大きな傷跡を残す様子がテレビに写しだされる。あの震災の後、どの教科が一番役に立ったかとの問いに対して、技術・家庭科が第1番目にあげられたことを知り、「あのような非常時に役立つ力こそ真の学力だ。」と胸をはったものだった。しかし現状をみた時、学力偏重の傾向はますます高まり、学習塾は大繁盛である。急激に変化している社会の中で、不易と流行の大切さが叫ばれているが、技術・家庭科ほど時代の流れやその時々々の教育施策の影響をうけやすい教科はないと感じる昨今でもある。

戦前の家庭科では、女性は「家」を支える良妻賢母となるために家事、裁縫、女子教育が重視されていた。

私が家庭科を教え始めた昭和40年代は、被服、食物、住居、家庭機械、保育、家庭電気を女子だけで履修した。履修時数は、3・3・3であった。また、実習を伴う家庭科の教師でさえも、1週間に27時間から28時間の授業を持っていた。

1975年に第14回の関プロ大会が山梨県で開催され、私も授業者の一人としてフローチャートなるものに初めて巡りあい、悪戦苦闘したことを昨日のこのように思い出す。

1977年の教育課程の改定では「ゆとりと充実」ということがそのねらいとされた。内容の精選が行われ、技術・家庭科の履修時間数も2・2・3と削減された。男女の相互乗り入れが導入され、男女別学ではあったが、共学の第1歩が踏み出された。

1985年にも第24回関プロ大会が「生徒自ら課題に取り組み実践する授業のあり方」をテーマとし山梨県で開催された。

1989年の改定では、男女同一の取り扱い

いをする事になり、「家庭生活」領域と、「情報基礎」領域が新設された。各学年の履修時間は2・2・2～3となった。2・3年生は選択でも履修できるようになったため、学校により実習時間にバラつきが生じるようになった。当時の各領域に関する興味・関心についてのアンケートをみると、保護者は、「情報基礎」を第1位にあげていた。まさに時代を反映している結果であるといえよう。また、「家庭生活」の新設によって、今まで中学校家庭科で不足していた家族関係の学習が押さえられるようになった。

1995年にも、全日中と関プロとを兼ねた大会が、「生きて働く能力を高める技術・家庭科教育のあり方」をテーマに本県で開催された。県下の技術・家庭科教師の力の結集が、高く評価された大会であった。

関プロ大会をはじめ技術・家庭科の様々な研究会に組織的に参加している私たちに対して他教科の先生方は「技術・家庭科の先生たちはまとまっているね。」とか「熱心だね。」という評価をしてくれる。家庭科教師として20余年、私はこの脈々と続く技術・家庭科研究会に育てられてきたといっても過言ではない。

時代の流れや、教育施策を受けやすいということは、裏を返せば、時代の要請を受けているということになる。震災後一番役立つ教科であるという評価を受けたこともこのことに通じているのだと思う。今後、ますます多様化していく社会の中で、技術・家庭科の役割は重要になってくるであろう。時代に流されず、時代にしっかりと答える技術・家庭科のあり方を探っていきたい。

## 技術・家庭科を担当して思うこと

小淵沢中学校 小宮山 幸枝

技術・家庭科研究会の事務局で、研究に携わってから約10年が経ちます。その間、技術家庭科も時代の流れに伴って指導内容の変更を余儀なくされてきました。男子向き、女子向きの技術・家庭科から、男女相互乗り入れを経て、「新しい学力観」が提言され、男女共修へと変わってきました。そしてまた、学校週五日制と新たな時代の波を受け、「ゆとり」と「生きる力」のキャッチフレーズのもとに教育内容の厳選が迫られています。さて、新学習指導要領が平成元年3月に告示され、本教科においては「家庭生活」「情報基礎」の二領域の新設及び各領域の統合、必修領域や選択領域の指定、選択教科としての技術・家庭科の設定、授業時数の取り扱いの変更などが行なわれ、平成5年には完全実施となりました。これまでの学校教育では、基礎的・基本的な一定の知識や技能を習得することに重きを置いたのに対し、「新しい学力観」では基礎的・基本的内容を生徒側に立って捉え、その後の学習に生きて働く力、自己実現に役立つ力が大切であるとし、生徒一人一人の資質や能力を高めることに重点がおかれています。そのため、学習指導の改善が求められ、意欲や態度、思考力や判断力、表現力などを育成するために、関心意欲を引き出す指導、一人一人が生かされる指導、基礎的・基本的な内容を大切にされた指導、問題解決能力を育てる指導、生活を創意工夫する能力を開発する指導などが要求されています。また、評価の面でも発想の転換が求められ、学習の過程を重視した新しい学力観に立った評価、生徒一人一人の長所や可能性を育てていく評価、生徒の学習状況を把握すると同時に、教師自身の指導の改善に役立てる学習指導と評価の一体化が必要とされています。

しかし、研究を進めていくにあたって、時数の削減による指導時間の不足、領域統合による内容の浅薄さ、新領域の扱い方の難しさ、新学力観の評価の困難さなど、いくつかの問題点も出てきました。

このような状況下で、平成7年度の第34回全日本及び関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究山梨大会が開催されました。「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業の在り方」をテーマに、課題解決的学習を取り入れ、生徒の思考過程を大切にする授業の研究に取り組みました。各支部ごとに、学習形態や学習方法の工夫、教材・教具の工夫と開発の工夫、コンピュータ活用の工夫、適切な発問の工夫、実践的・体験的活動を取り入れた授業の工夫のどれかに視点をあて、実践授業を試みました。少人数の県にもかかわらず全県が一丸となって研究し、各支部の特色ある授業実践を発表することができ、成果をあげることができました。文部省の佐藤勉教科調査官及び河野公子教科調査官にも、「時代に則した技術・家庭科の授業のあり方である。」とお褒めの言葉をいただき、大会を成功裡に終えることができました。

これから21世紀に向けて、情報化、国際化、高齢化、少子化、地球環境問題など社会や家庭が抱えている問題はたくさんあります。そして、これらはまさに技術・家庭科が担う課題でもあり、この教科の重要性を感じざるを得ません。技術・家庭科40周年を迎えた今、次代を担う自立した生活者を育て、技術家庭科が一貫して追及してきた「生きる力」を育むために、私たちは改めて新しい時代に向かって歩み始める必要があると思います。

## 平成7年の関ブロをめざして

～技術・家庭科の大きな転回の中で～

長坂町立長坂中学校

教諭 小澤 建二

60年関ブロをやり遂げた充実感にひたっていたのもつかの間、平成元年(1989)には、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成、個性を生かす教育の充実をめざして、教育課程の改訂が行われた。新たに「情報基礎」「家庭生活」の2領域が設けられ、全体として11領域になり、このうち木材加工・電気・家庭生活・食物の4領域は、全生徒に共通に学習させるよう配慮された。また、これまでの男子と女子で履修範囲が異なっていた 방식을改め、男女同一のカリキュラムが採られることになった。これは、男女平等を実現し、女性の社会進出を促すことを目的にした国連の要請に答えようとした措置であった。この改訂は技術・家庭科誕生以来最も大きな転回といってもよい改訂であった。

私が県技術・家庭科研究会の研究推進委員長という大任をいただいたのは平成2年から平成5年度までであったが、このように領域の編成や履修方法が大きく変化したために、研究へのとりくみは容易ではなかった。

そこで、研究の方向性を探るために、県下の技術・家庭科担当教師及び県内各地区の生徒・保護者へのアンケートなどを行い、生徒の実態を捉えようとした。この結果から、生徒は自分に興味関心のあることは熱心に行うこと、センスのよさやスマートさがあり、異なる文化を受け入れる頭の柔らかさを持っているなどの良い点がある反面、物質的な豊かさ、便利さの中で、自らの体を動かし体験を通して人間らしさを身につける機会を失いつつあることや物づくり経験の不足や情報化社会の到来による間接体験の肥大など多くのマイナス面が指摘された。これらは、今日では多発する中学生の事件の原因として大きく取り上げられるようになったが、当時の本県技

術・家庭科教師の視点は現代の中学生像をいち早く捉えていたといえる。

このように教育課程の大きな変化と60年関ブロの頃とは大きく変容した社会や生徒の実態の中で、関ブロへの取り組みはスタートした。まず、県版の技術・家庭科学習ノートの全面改定にとりかかった。研究推進委員の先生方で領域を分担し、支部ごとに協力者を依頼してグループで検討を重ね完成することができた。この時のノートづくりの研究は後の関ブロの研究推進の原動力になったが、研究領域の決定は時間数の削減により実践していない領域が出るなどして、大変に難しかったことを思い出す。

学習ノートづくりと平行して、研修を深めるために元文部省教科調査官の鈴木寿雄先生や現調査官の佐藤 勉先生など多くの先生方を本県にお招きし、定期大会や研究大会で講演をして頂いた。時を同じくして新しい学力観が提唱された。生きて働く力となる興味・関心・意欲の重要性が指摘され、それに伴い評価の仕方もこれまで以上に重要となった。事務局会や研究推進委員会では、支部の検討結果を持ち寄っては理解を深めるという話し合いを何回も行った。そして、平成4年度には研究テーマを「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」に決定した。研究の重点を「課題解決学習における思考過程を重視した学習の展開」に置き、その後は各支部で実践を深めていった。

終わりに、県下各地から遠距離にもかかわらず何度も何度も集まり、熱心に研究内容を深めていくてくれた推進委員の先生方、諸先輩方のご協力に厚くお礼申し上げます。

第34回関プロおよび全日中山梨大会を2年後に控えた4月。数年前に事務局長をやらせて頂き、この1年は事務局員として関プロに向けて小沢健二研究推進委員長の下で分からないなりに頑張っていました。しかし小沢先生が急遽行政に異動してしまい、委員長の後任でもめていました。事務局長はすでに入蔵先生が続投することが決定していました。結局、私にそのポストが回ってきました。まさに青天の霹靂でした。とにかく何をどうしていけば良いのか皆目見当もつきませんでした。小沢先生や会長やその他の事務局の先生方に援助してもらいながらの不安な船出でした。

主題は決まっていたものの、設定理由がまだ定まっていなかったり、どういう観点でこの主題を研究の柱にしていくかなど課題は山積しており何から手をつけて良いのか途方にくれていましたが、指導主事やセンター主事や諸先輩の先生方にご助言をいただきながら遅々としてではありますが進めていきました。

中でも苦勞し今でも悩まされているのが情意面の評価についてでした。暗中模索の中、観点別にとらえた評価表を作成し、自ら記録してみました。なにせ最初のことですから戸惑いながらも時間をかけて行いました。そのおかげで一人ひとりの生徒を改めて見直す良い機会にもなりましたし、授業で目立たない生徒にも目が行き届く指導ができたりして苦勞したことが自分にも大きな収穫だったと思います。今はそれぞれの支部でそれをベースに独自に考えた評価をして時間がかからないで簡単にできる方法で工夫しているようです。その年の推進委員会は、なかなか研究部としての指標が出せず迷惑をかけました。そんな中でのミニ関プロは、長坂中で行うことにな

りました。当時の一木貞夫会長や私が北巨摩支部でもあったため授業者である高左右先生や当時の支部の技術・家庭科の先生方には無理なお願いをいたしました。指導案の検討や授業の準備のために集まったのは何回あったでしょうか？今思えば分科会本番の前夜より、このミニ関プロ前夜の方がハードでした。話し合いが終わったのが当日の午前1時頃で、「12時間後にまた会おう」と別れて家路についたのを覚えています。そして迎えた当日。さんざんな結果に終わりましたが本番にはそれが生かされ良い勉強にもなりました。

さて、いろいろなハードルをやっとこさまわりの人に支え、助けられながら越えることができ、本番は近づいてきました。全体会では研究発表が待っていました。発表は小宮山幸枝先生と私の二人ですることになっていましたので、発表原稿作りからタイムを計っての発表の練習を繰り返し行いました。その甲斐があつてか、本番の発表では意外に落ち着いて発表することができました。ただ無我夢中のうちに終わってしまったというのもあるかも知れません。無事全体会を終え、その足で分科会会場の長坂中に飛びました。すでに南・北巨摩・西八代の先生方が、授業会場の木工室から分科会会場の体育館まできれいに準備していました。研究発表の最後の舞台となるものでしたが、自分の発表が終わり緊張の糸が切れ脱力状態でした。もちろんここに至るまではミニ関プロ以上に足繁く通い準備してきました。分科会もミニ関プロの教訓を生かし、成功裡に終わることができました。

次回関プロ山梨大会に向けて、新たな考えで新たな主題のもとにまた取り組んでいければと思います。いろいろありがとうございました。



### (3) 各支部活動の歩みと現在の状況

#### 東山梨支部 研究会のあしあと

東山梨支部事務局長 笛川中学校 武井俊文

技術・家庭科研究会誕生40年を迎え、その記念誌を発刊するにあたり、支部の研究過程を振り返ってその一端を記することにする。

昭和56年度の指導要領改訂をうけ、本支部では、授業時数の大幅な削減の中、理論と実践を統一的に教えるとともに、技術的能力として何をどう教えていくべきかの研究を深めていくことにした。

技術科は昭和56年度から5年間、木材加工領域について研究を進め、生徒の技術的能力を伸ばす個人評価に視点をあて、T、Sカルテを考案し活用した。作業内容の把握、到達目標などを生徒たちが十分に理解ができ、より客観的に評価が得られるような言葉を選択するなどの工夫をすることで、生徒一人ひとりの授業への取り組み姿勢を変えることができた。

家庭科は新指導要領に基づいた調理実習、特に実験調理の具体的方法、実験調理観察記録カードの編成を中心に進めた。また、生徒一人ひとりにもっと本質を理解して調理に臨む能力、態度を養おうと研究を進めた。

昭和60年の第24回関プロ山梨大会で家庭科は、工夫・創造を取り入れた課題解決学習を食物領域で考えた。多くの調理済みの食品、めざましい外食産業の進出がみられる中で、食品添加物、加工食品のあり方をもう一度見直させた。特に果樹地帯である地域性を生かし、桃やブドウの加工食品に目を向けさせた。その取り組みと成果を小笠原さつき先生が提案された。

技術科は勝沼中学校を会場にして木材加工領域を三枝修先生が、同厚、同幅に切断した板材を、アングル構造・枠組み構造を基本にして組み立てる椅子の製作を授業公開した。

木材加工の授業研究を重ねていくうちに、釘の打ちかたに問題がある生徒の多いことに気付き、題材研究をする一方で、くぎを打つ時の手・腕・肩・腰・全体の動きがどうなのかを分析し、いかにくぎ打ちの技能を高めるかの授業の工夫にも取り組んだ。その背景には、学力偏重の社会体制の中、乏しくなった生活経験を克服し、課題に気付き、それを解決していく能力を高める体験を通した自己教育力の伸長という本質的な思いがあった。その中で、試行や実験のような模擬体験的なものを多く取り入れ、自らの体験の中から課題の発見や解決させていく学習が大切であることを再確認した。

家庭科は平成2年度の関プロ神奈川大会で、住居領域を永田恵子先生が提案された。「水の有効利用」「家庭排水と環境汚染」の題材の中で、水の有効利用や適切な排水処理の仕方について身近な住居生活に課題を見いださせ、主体的にそれを改善しようとする姿勢を身につけ、生きて働く力を養おうとするものであった。

平成5年度に第4回目の指導要領の改訂があったが、そのたびに指導内容や形態・方法が大きく変わるので、それに対応して研究していくことは容易なことではないと痛感している。

平成7年の第34回関プロ山梨大会においては、本支部では、少ない人数の中で、授業、提案、運営を部員が一丸となって取り組み、参加された先生方からたくさんのお褒めの言葉を頂き感激した。技術科は勝沼中学校を会場に電気領域を飯島武志先生が、マルチセンサー回路の設計の授業を、家庭科は山梨北中学校を会場に食物領域を上野さとみ先生が日常食の調理「ひき肉を使って、オリジナルハ

ンバーグをつくろう」という題材で授業をそれぞれ公開した。また、技術科は「マルチセンサー回路の設計と製作を通して」思考過程を重視した授業のあり方について碓井篤先生が提案された。特に思考を助ける教具としてのトランジスタ実験ボードやマルチセンサー回路に使うプリント基板を本支部独自で研究開発した。

家庭科は南都留との共同研究で、手作りの良さを見直すとともに、多くの情報を正しく判断し選択できる消費者としての能力を身につけさせることや、ハンバーグという身近な食品にひと工夫加えることによって健康で安全な食生活の見直しをさせることにより、生活に生きる力を培うことにつながっていくのではないかと考え研究を深めた。

技術科は平成8年度から今日まで、栽培領域の研究に取り組んできているが、1年目は部員の半数以上が栽培の経験がなく、実際の栽培も手探りの状態からはじめ、失敗の連続であった。また、環境教育にも目を向け、給食で出た残飯を再利用する生ゴミ発酵肥料についても研究を進め、その成果を平成9年度の関プロ新潟大会で、私と那須丈彦先生で提案した。

本支部では、年に1度退職者とともに今日にいたるまでの技術・家庭科の歴史や現役時代の良き思い出、苦労話などを膝を交えて語り合う機会を設けている。これが明日からの授業実践におおいに役立っている。

今後も常に課題を持ち、研究をつみ重ねていきたい。

### 東山梨支部 技術・家庭科研究会のあしあと

年号	技術科		家庭科	
	領域	研究テーマ	領域	研究テーマ
昭和52年	金工	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —T、Sカルテの開発—	食物	食物領域における科学性をふまえた調理能力を伸ばすための授業の工夫 —実験観察学習を通して—
53年	金工	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —木工1、金工1の融合題材—	食物	食物領域における科学性をふまえた調理能力を伸ばすための授業の工夫 —実験観察学習を通して—
54年	金工	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —授業課程の研究—	被服	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —作業着製作指導の計画と実践—
55年	教育課程	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —授業課程の研究—	食物	新指導要領をふまえた食物領域の研究 —調理実習を中心として—
56年	木工1	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —T、Sカルテの開発—	食物	新指導要領をふまえた食物領域の研究 —実習調理観察カードの再編成—
57年	木工2	ひとりひとりの技術的能力をのばす授業のくふう —木工2における題材の研究—	食物	新指導要領をふまえた食物領域の研究 —実習調理観察カードの再編成—
58年	木工2	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —木工2における「実践する能力」の分析—	食物	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —食物領域における取り組み—
59年	木工2	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —木工2における「実践する能力」の分析—	食物	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業の工夫 —工夫・創造し課題解決の能力を養う授業のあり方—
60年	木工2	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —授業研究—	食物	工夫・創造し課題解決の能力を養う授業のあり方 —加工食品をとりあげて—
61年	電気1	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —電気1領域における回路学習の研究—	被服	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業の工夫 —休養着の製作をとりあげて—
62年	電気2	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —多目的プザーを用いた電子回路の学習—	食物	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —実験調理「きゅうりの放水」—
63年	電気2	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —多目的プザーを用いた電子回路の学習—	被服	生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —被服領域における実技研修—
平成元年	機械	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —機構要素のブロック玩具の導入の検討—	住居	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —住居領域の指導法の工夫—
2年	情報基礎	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —ポケットコンピュータ利用の検討—	住居	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —住居領域の指導法の工夫—
3年	木工	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —木材加工における指導内容の検討—	食物	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —小麦粉の調理実験を通して—
4年	教育課程	自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方 —新教育課程における履修領域例の作成と授業例—	食物	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —食物領域の指導を通して—
5年	電気	自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方 —電気領域における課題解決の学習—	食物	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —食物領域の指導を通して—
6年	電気	自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方 —実践的・体験的活動を通して—	食物	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —食物領域の指導を通して—
7年	電気	自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方 —マルチセンサー回路の設計と製作を通して—	食物	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —食物領域の指導を通して—
8年	栽培	自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方 —栽培領域への取り組みと考察—	家庭生活	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —消費者教育の題材研究を通して—
9年	栽培	学ぶ意欲を高める栽培学習 —生ゴミ発酵肥料を用いて—	住居	生活を見つめ生活に生きる力を育む授業 —住居領域の指導を通して—

## 東八支部の20年を振り返って

東八支部支部長（技術科）

中道北小学校

関本幸雄

我々東八の技術・家庭科研究会のメンバーは東八代郡教育協議会の傘下に入り、長年研究と実践を積み上げてきた。メンバーの人数は決して多いとは言えないが、横のつながりは強く、常に何事も相談をしながら取り組んで来た。メンバーには校長や教頭など管理職の先生方にも入って頂き、技術・家庭科の研究はもとより、校内研全般にわたり幅広い研究を積み上げることができた。関プロ大会等の参加にも積極的に参加しようという気運にみなぎっているのである。

教材の選択、教材の解釈は授業展開を決定する上で重要な要素となり、その教材が子どもの知識や技能のどこを変えるためのものか、子どもの興味、関心を引き出すものなのかといった検討が真剣に行われた。過去に2度の山梨関プロ大会で栽培領域の授業と提案を行い、一応の成果を上げたあと、今後の研究の方向性を定めるまで暗中模索が続いた。

最初の取り組みは、電気領域と機械領域の融合題材の工夫であった。目標として模型に2モータを載せ、4ビットマイコンで制御し、自走式の動く模型を開発しようというものがある。初期の頃は、平面を立体に変え、原動力としてモータを載せたものであったが、平面手動式のものに比べ、生徒の製作に対する意欲は高く、個性豊かな作品が数多く出され創意工夫が生かされるようになった。課題としては、立体的な動きを考え出すための思考の助けとなる教具の工夫であった。結果として、この問題はリンク機構の学習に用いた穴あきボードのリンクに円盤形のリンクを用いることによって解決された。

次のテーマとなったことは、先の模型に方向制御用のモータを追加し、4ビットマイコンでプログラミングすることにより、計画どおりのコースを自走する動く模型の開発であ

った。当時情報基礎領域を先取りする形で教材として販売されていた4ビットマイコンのボード部分を模型に載せ小型のギヤボックスを用いて方向の制御をする試みがなされた。しかし南都留支部共同研究案としては完成に至らなかった。

共同研究として取り組んだものは「ロボットコンテストを取り入れた機械領域の学習」である。まず、機械領域の指導計画そのものを根本から見直し、生徒自ら学ぶ姿勢をつかさねるためにどうしたらよいかを問い直すことから始められた。それまでは理論学習と製作学習の2つに大きく分けられ、この2つの間には、関連性や必然性が薄いものであった。また、理論学習はやや高度な内容になることがあり、「生きて働く能力を身につける」ための教科として馴染まない面もあった。

そこで、領域全体をロボットコンテストに勝つためにどうしたらよいかというテーマに集約させ、生徒の興味、関心、意欲を引き出した学習を展開させようというものがある。これにより内容が関連性を持たなかった理論学習と製作学習は一致し、すべてがロボットコンテストのための学習として展開される計画である。設計、製作をしながらしよみの学習や機械要素の学習を行うため、内容はかなり精選した。

これは教科書の内容に合わせて教えることから教育課程の自主編成に大きく方向を変えることであり、課題解決的学習を進める意義ある研究の方向性であると自負している。また、このことは機械領域にとどまらず、他領域にもこの考え方を取り入れた研究を行う必要性も生まれてきたということである。新しい授業の創造を目指して、今後も取り組んで行きたいと考える。

## 家庭科研究会

東八代支部事務局長  
中道南小学校 清水禮子

本支部の技術・家庭科研究会は、東八代郡教育協議会の技術・家庭科サークル研究活動を基盤として、県技術・家庭科研究や県教育研究集会などの対外的な技術・家庭科研究会に関わってきた。

東八代は学校数が少ないためサークル員がいつも6人で、研究を進めていくのには、一人ひとりにかかる負担は大きい。しかし、過去先輩の先生方が残された東八代教育を引き継ぎ、今日まで努力をしてきた。

さて、私たちの研究は、郡教育協会の基本テーマである「科学的教育研究による人間性豊かで意欲的な子どもの育成」—すべての子どもが意欲的にとりくむ授業づくり—を基底に、授業構造仮説をもとにした豊かな授業実践や、教材教具の工夫、自主教材の開発等を中心に、県の技術・家庭科の研究テーマと関わりながら常に研究を進めてきた。

研究を振り返って見ると、なぜか本郡は、「保育領域」に縁があり、十数年来その研究を進めてきた。

昭和60年、第24回関東甲信越地区中学校技術・家庭科山梨大会では、「生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方」をテーマに、本支部では「保育領域」、「おもちゃの演習」の授業を石和中学校でした。保育学習は興味・関心が高い幼児の遊びを題材に選んだ。「おもちゃの製作を通して、課題解決能力を養う、授業の工夫」として、コミュニケーションを大切にした小集団学習の効果的位置づけと、幼児観察—その幼児のためにおもちゃ作り—製作したおもちゃで遊ばせ方の演習—幼児とおもちゃで遊ぶ、その評価等、実際に幼児と関わり体験学習をさせたという一連の流れの中で、授業公開をした。今思え

ば、南巨摩が提案し、領域が一諸だったので共同研究をし、夏休みも返上して、授業案の検討、教材教具の作成、別冊資料づくり等、何回か研究会を持った懐かしい思い出がある。その後、茨城関プロ大会では、石和中の先生が「保育領域」の「幼児の食物」を提案した。

「個をいかす授業の工夫」をサブテーマに、教材教具の工夫やサイコグラム、自作献立カードを活用し授業に迫った。平成2年には食物領域に目を向け研究を進めた。久しぶりに小学校の先生が加わり小学校部会では、卵料理を中心とした研究に取り組んだ。中学校では「望ましい食生活ができるような能力を養う」というテーマのもとにおやつについての授業実践をした。また平成5年からの新教育課程完全実施に向けて学習を深めた年でもあった。平成3年には、「被服領域」で「ショートパンツの製作」を男女共学で始めて授業実践をして、その成果と課題を持ちより研究を深めた。平成4年から7年にかけて7年度全国・関プロ山梨大会に向けて「保育領域」の研究を北都留支部と一諸に進めてきた。笛南中学校で関プロ大会の「保育領域」の授業が行われた。題材「幼児とわたし」、授業は「生命の誕生と喜び」導入の部分なので指導時間が少ないために、どのような授業にしたらよいか暗礁に乗り上げ、研究に息詰まりを感じたことが何回かあった。そのたびに、助言者山梨学院短期大学の教授、三神敬子先生のご指導をいただき、大会に臨むことができた。各県の先生方から大変よい講評をいただき、大会後、先生方と共に喜び合った。先生方の力強い結集であった。

7年度全国・関プロ大会より2年経過した現在、平成9年度は「家庭生活」の領域を、その時培った叡智をもって「生きる力」の授業実践に取り組んでいる

## 中巨摩支部の歩みと現在

中巨摩郡支部事務局長 玉穂中学校 遠藤 敏

### 1. はじめに

時代の変遷が加速度的に変化する中で、郡の教科サークルと組織を重ねながら、意欲的に充実した研究が進められた20年間であった。男女共学を唱えた本教科の先駆者の偉業を大切にしながら、関プロ山梨大会を節目として積み重ねてきた支部活動を振り返ってみたい。

### 2. 支部活動を振り返って

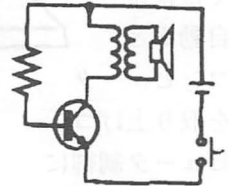
昭和50年代は、高度成長がピークを迎え飛躍的に生活水準が高まり、物質万能であった。反面、教育現場では教育の荒廃もピークを迎えると共に、物の豊かさから心の豊かさへの思潮が強調された。中巨摩でも中学校では、日々生徒指導に奔走した時期でもあった。心の教育が叫ばれるなか60年関プロ山梨大会に取り組み「電気」「食物」の領域提案を行った。中巨摩においては昭和40年代頃から、男子女子共に必要な生活の基礎的学習として、教科を自主編成し男女共学を実施してきた。相互乗り入れ及び現在の男女共学が当然の教育方法となった現在では、中巨摩の諸先輩〔猪俣正夫、吉沢光之、竹内元彦、植松公雄、新海孝三、篠原 茂（県会長）長沼元江の歴代支部長の先生方〕のご苦勞には深甚なる敬意を表したい。

平成元年指導要領改訂に伴い60年代前半及び平成の初期には、新領域、領域の再編成履修学年等の課題や、新しい学力観に基づく授業の構築に専念した。時代による教育上の課題に悩みながらも平成7年度の関プロ山梨大会では「情報基礎」「栽培」「家庭生活」の3領域の提案を行ってきた。

### 3. 20年間の研究の変遷

昭和53年（1978年）から現在まで、20年間の中巨摩郡の技術・家庭科の研究を振り返ってみると、初期の昭和50年代は新学習指導要領の実施に向け、指導要領の検討や教材・教具の研究に費やすことが多かった。また、現在ではごく普通に行われている共学の授業が男女相互乗り入れという形で実施され始めた頃であり、この面での研究も進められた。

関東甲信越地区技術・家庭科研究会（通称関プロ）も本県開催が近くなってきた昭和50年代後半は、「生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業の在り方」というテーマのもとに技術科では「電気領域」を教材・教具の開発を中心に、家庭科では「食物」領域の研究を学習ノートづくりを中心に行った。昭和60年の第24回の関プロでは技術科で「電気」領域の授業（押原中学校 西山先生）と提案を行い、家庭科では「食物」領域の授業（若草中学校 長沼先生）と提案を行った。それぞれの領域でこれまでの研究の成果を十分に生かし、内容のある研究発表が『暖かいほうとう』で



『暖かいほうとう』

その後は技術科、家庭科共に研究領域をそれぞれ「機械」領域、「被服」領域に変更し、指導計画や指導内容の検討を中心に研究を進めた。

時代も平成に変わり、新指導要領の完全実施まで間近になると新しく導入される「情報基礎」「家庭生活」の各領域の研究が中心となってきた。技術科ではコンピュータが導入され、各中学校では機種を選定やコンピュータ室の設置などに向け検討が始まった。更に教員の研修会も多く開催され、コンピュータリテラシーという言葉で代表される情報活用能力の研修や、著作権の問題に至るまでそれぞれの先生方が意欲的に研修に取り組んだ。家庭科でも2年の食物学習との関連と環境汚染の問題を考え、台所用洗剤の環境へ及ぼす影響を取り上げ研究した。

平成5年からは第34回関ブロ及び第34回全日本中学校技術家庭科研究会の開催に向け、技術科では「情報基礎」「栽培」の2領域の研究、家庭科では「家庭生活」領域の研究が中心

となった。「情報基礎」領域では模型自動車とコンピュータを取り上げコンピュータ制御に



ついての研究を、「栽培」領域では菊の栽培を通して教材教具の開発と組織培養を授業の中でどう取り入れるかの実践を中心に研究を行った。



「家庭生活」領域ではこれまでの研究成果を生かし、台所用洗剤の環境への影響を考えさせ、その使用方法について研究を深めた。

平成7年の第34回関ブロ及び第34回全日中の大会では技術科で「情報基礎」領域と「栽培」領域の授業（「情報基礎」白根巨摩中学校 川崎先生 「栽培」玉穂中学校 遠藤先生）と提案を、家庭科では「家庭生活」領域の授業（竜王北中学校 杉野先生）と提案

を行った。ここでもそれぞれの領域でこれまでの研究の成果を十分に生かし、内容のある研究発表ができた。

この大会以後技術科では新しく「金属加工」領域の研究を指導計画の検討や教材開発を中心に、家庭科では「家庭生活」領域の研究を更に深めていくように継続した研究がなされ今日に至っている。

#### 4. 今後の研究と課題

現在の生徒の実態を考えると、以前に比べ社会状況の変化などにより、生活経験が非常に少なくなっている現状がある。木材加工で言えばノコギリで木を切ったことのある生徒の数は年々少なくなり、かんなを使ったことのある生徒に至っては皆無に近い状況がある。このような状況の中で、一人ひとりの生徒に有効な体験をさせ、生活に必要な技術を習得させることは非常に大切なことではあるが、難しい課題でもある。

さらに先の教育課程審議会の「中間まとめ」をみると、3年生の授業時数が現行の2～3時間から1時間に削減され、「情報基礎」領域を全員に学ばせることなど技術・家庭科教育全般においても大きな課題が提示されたといえる。教育課程全般を見直し、それぞれの学校の実態にあった指導計画を作ることなどが必要となってくる。

ひとり一人の先生方の研究はもちろんのこと教科全体で組織的な研究体制を更にしかりしたものにしていく中で研究に取り組むことが必要となってくる。

# 西八代支部の活動の歩みと現在

西八代支部支部長 市川中学校 塩澤 雄市

## 1 はじめに

昭和33年の学習指導要領の改訂で、職業・家庭科が技術・家庭科となり、本年で40周年を迎えました。この間、科学技術振興の社会的要請にこたえて、目標・内容を一新してきました。技術・家庭科として大きな変化は学校5日制の隔週実施やゆとりの教育が叫ばれる中、各学年とも週3時間で行ってきた授業が2時間前後に減らされ、なかなか金属加工や栽培を実施できない状況になってきました。とりわけ、情報基礎でコンピュータが入ってきたこと、男女共学等が現在の技術・家庭科に与えている影響が大きいと思います。教材・内容の精選化、基礎・基本の充実に力点をおいた授業が今、求められているのだと思います。

西八代の技術・家庭科は20年位前までは郡の各学校に技術・家庭科の教員がいる場合が多く、免許外で授業を担当している先生の参加もあり、各校平均2～3名の会員の参加で研究会を組織して活発に活動していました。しかし、過疎化に伴う生徒数の減少や学校の統廃合による学校減などにより、技術・家庭科の免許を持つ教員だけが会員という状況がしばらく続き、(管理職は研究会には実質的に入らない)、ここ数年は数名の会員を数えるだけとなり、家庭科の部員が1名となったこと機会に技術部会、家庭部会と別に行ってきた研究会が平成9年度より技術・家庭科として研究を進めることとなりました。

少人数の部員となりましたが、21世紀に生きる生徒たちが生涯を通じて学び続け、たくましく生きていくための基盤となる力を与えるべく研究を進めていきたいと考えております。

## 2 西八代技術科40年の研究のあゆみ

### (1) 木材加工と金属加工の融合教材としての折り畳み腰掛けの製作

\*木材加工と金属加工をあわせて工夫創造の能力を育てると共に時間的にはゆとりをもたせた計画をたてた。

### (2) ガソリン機関学習における公害学習の指導

\*エンジン公害の指導計画をたてて

- ・排気ガス公害
- ・騒音による公害
- ・燃料からくる公害
- ・機械の発達や産業からくる公害等について研究し、指導した。

### (3) 栽培学習をどう計画し指導するか

\*菊の三本仕立て栽培

- ・ひとり一鉢の菊栽培の実施。
- ・園芸高校の上田先生を講師に栽培法全体に係わる学習。
- ・Bナイン利用の福助づくり  
(菊の化学調節)  
品種の条件、苗仕立て、鉢上げ、肥料、化学調節の時期(Bナインの処理法)管理など、補助教材の作成を通しての実施。

\*各地域、学校に応じた栽培学習の実施

- ・高冷地におけるだいこん栽培。
- ・年間を通じた栽培学習として、冬季におけるさくら草の栽培。

### (4) トランジスタを及びトランジスタ回路をどう指導するか。

\*トランジスタをしくみを理解させるにはどのように指導したらよいか補助教材の作成を通して研究した。

### (5) 情報基礎にどう取り組むか

\*コンピュータの知識操作の教師の学習

\* コンピュータリテラシーの学習

\* 指導計画の作成

\* 研究授業の実施

(6) 木材加工領域における指導法（主題材と副題材）

\* 基礎的な知識と技術の習得を主な目的とした副題材とその発展段階として工夫・創造する能力を養うための自由設計による主題材の二つを取り入れた指導法の研究をした。

(7) 選択技術・家庭科における指導法

\* 選択技術・家庭科において、どのような題材を用意し、どのような学習過程を仕組んだら良いかの研究を進めている。

3 西八代家庭科40年の研究のあゆみ

おもな研究

(1) 住居の分野

\* 過疎の問題

\* 家庭の民主化の問題

\* 社会環境の問題

(2) 被服の分野

\* 作業着の必要性とその特徴

\* エプロン製作の実践

\* 個を伸ばす教材の精選と授業の工夫

(3) 食物の分野

\* 郷土食（ほうとうづくり）

\* 行事食

\* 食品公害をどう教えるか

\* 地域にあった指導計画

\* 実験観察をとり入れた指導法の工夫

（揚げもの、米飯とさつま汁）

以上を平成6年度まで小学校家庭科担当教諭と共同研究を行ってきた。平成7年度より技家共同の研究に移る。

（技術科研究のあゆみ（7）に同じ）

4 支部活動の現在

西八代支部現在3名の研究部員で活動しています。その内訳は技術科2名、家庭科1名です。本年度の研究は「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」－選択技術・家庭科における指導法－をテーマにこの研究の1年目を迎えています。技術領域ではロゴライター2の活用について、家庭領域では食物分野における調理実験を活かした調理実習、栽培品の調理、地域との連携を目指した教材研究等を題材に授業を計画し実践しています。

5 おわりに

本郡には小規模校が多いせいもあり、部員数3名しかおらず個人研究に近いものになってしまい、思うように研究が進まない状況にあります。そのため、選択教科に技術・家庭科を開設している学校も1校しかないため、研究を深めることが難しくなっています。しかし、データ等蓄積し、少しでも成果が上がるよう研究を進めていきたいと思えます。

近年、小規模校に無免許教科解消のための非常勤講師が技術家庭科、美術等の実技教科を中心に何名か配置されている実態がありますが、その先生達と情報交換や共同研究をしていく必要があると思えます。実現には様々な困難が予想されますが、現在の会員はもとより関係者みんなでスクラムを組んで頑張っていかなければと思えます。

平成9年度西八代郡技術家庭科関係者

- ・塩澤 雄市（支部長・市川中学校）
- ・薬袋 恒（情報教育センター）
- ・太田 一夫（市川中学校）
- ・切金 力（事務局・市川中学校）
- ・上田 真司（市川南中学校）
- ・上田 雅子（市川中学校）



### 1. 研究会の組織の概要

1978（昭和53）年から1997（平成9）年までの20年間の南巨摩技術・家庭科を、通して経験している現職はいない。

「技術・家庭科20年の歩み」に記載されているとおり、かつて南巨摩には多くの優れた先生方がおられ、研究のうえでも、実践の中でも大変な功績を納められている。この20年の前半には、それらの先生方が次々と勇退されていった。残された教師との年齢差が20以上なのである。そのため、継続されてきたレベルの高い研究が一時途切れた格好になってしまった。また、生徒数の減少も影響した。20年前には13校あった中学校が9校になった。学級数も減少の一途をたどり、それに伴って中学校の教員数も約220名から130名以下に減っている。ごく最近に限っていえば、何校かでは技術・家庭科の講師を複数校でお願いするということが行われており、正規の教員数が今後増えることは期待できない。後半10年の間には、最小で技術科2名、家庭科2名ということもあった。現在、技術科5名、家庭科3名の部員である。そんな中で、他支部出身者が何名か来ては、また戻っていった。みなさん熱心に活動していただき、南巨摩の研究を進める上で非常に力になっていただいたが、年数が短く残念であった。

常に少数の構成で、研究を進める上で大きな障害となっていた。そのような中、6つの支会ごとの研究が続けられていたが、部員のない支会が半数を占める状態があたりまえのようになった。そこで、10年前から郡下一本の研究体制に移行した。より実のある研究にしようと、1年ごとではなく何年か継続した研究を進めることにした。

技術科ではまず行ったのが木材加工であった。そのころ南巨摩では、社会科を中心として他の教科でも地域教材の掘り起こしという取り組みがなされていた。幸いに南巨摩の南部地方は、杉と檜の産地なので、それらを材料に使うことから製作題材の研究を行った。その際、まず授業の導入時に使う自主制作ビデオの製作を行った。地域教材のビデオ化については、電気領域でも着手したが、途中で関プロの提案が飛び込んだこともあり、完成しなかったのが残念であった。そして、これも南巨摩ならではのと思うが若い技術科の教師や、無免許で授業を受け持たねばならない教師を対象に、木材加工の機械等の扱いについての講習会を行った。またその様子はビデオに収めて編集し、参加できなかった教師や生徒のための指導用ビデオとして各校に配布するなどした。

製作題材では、木工1・2が1つの領域に統合された後も、角材の使用とぬきによる接合にこだわった。その後、1995（平成7）年の山梨関プロにむけて、主題材の前段階で副題材を扱う指導法の研究を行った。1996（平成8）年に県より出された、領域を各地区研究部に分けて研究を進める方針が決定されたことに伴い、一応の成果を収めた木材加工に替わり、情報基礎領の研究を行っている。関プロでも発表したとおり、機械領域との乗り入れを行い、コンピュータのプログラミングによる制御の学習を情報基礎の中心に据えるという研究である。情報基礎の学習は未だに確立されたものがなく、技術の進歩も早いだけに、今後しばらくは研究を続ける必要がある。

家庭科でも技術科同様に、食物領域でまず郷土食の教材化の研究を進めた。ある程度めどがついたが、技術科以上に教員の入れ替わ

りが激しく、組織的な研究が困難であった。

## 2. 研究の変遷

20年の長い間には、多くの研究がなされ、成果をあげてきている。いくつかが教育研究集会の全国教研でも発表され、また、関東甲信越ブロックでも提案してきたが、それらについては、別掲載の資料にあるので、ここでは重複をさける。

先にも書いたが、支会研究が中心だった頃は、自ずから個人研究に頼るところがあった。個人の実践を郡で発表し、意見を交わしてお互いの財産にしていこうというものである。20年の歩みにも掲載されているとおり、それでも多くの優れた研究がなされてきた。その財産の上に立って、その後の20年の研究がなされていることも確かである。

南巨摩で20年前以前より研究されており、その後一時技術・家庭科の研究の中心におかれた研究が、男女共学の問題である。15年ほど前から常に研究の念頭に置かれ、1993（平成5）年に完全実施となった指導要領に向けて、その研究は高まっていった。一部男女共通履修へ、一部男女共学へ、完全共通履修へと研究とともに実践は進んでいった。そして、多くの学校で男女共学になっている。しかし、学級数の減少という南巨摩の現では、体育の授業との絡みで実施できない学校もある。

同指導要領に伴って内容が変わり少なくなるとともに学年必修領域が定められ、しかも男女共学に伴って履修できる領域も少なくなった。それにより、研究される領域も限られる傾向になった。そのような中、前述のとおり個人中心の研究から、郡一本の組織的な研究に移行していった。

## 3. 関プロに対するスタンス

先に述べたとおり、有能な先輩諸氏が教壇か

ら去り、部員の若年化と少数化が進んだこと、さらに研究が個人研究に頼っていたことなどから関プロへの提案は遠慮せざるを得なかった時期が長く続いた。

特に、1985（昭和60）年の山梨関プロは、当時の県の研究会会長が当郡の望月教三先生（現中富町長）であったのに、南巨摩は他郡の手伝いをするしかできなかったのは情けなく、先輩の方々にも申し訳なかったが、当時の状況ではいたしかたなかった。

その後、技術科・家庭科ともに少数ではあるが、在住者の教員も増え、研究の組織や形態を変えたこともあり、関プロの提案等にもたえうる研究を進めることができている。しかし、家庭科はまた減少しており、個人の負担が大きくなっている現状である。

提案があるなしは別にして、関プロへの一般参加ということでは、南巨摩は毎年ほぼ全員が参加している。少数になり、研究が一時滞りかけた時期を経験してみると、部員個人の熱意は大切だが、もっと大切なのは部相互のコミュニケーションであることに気づく。他県の進んだ研究発表やそれに臨む多くの仲間の熱気に包まれた雰囲気全員で感じ、語り合う中で得た共通理解は、最近の研究の推進に大きな力となっている。

## 4. おわりに

教科として成立以来、技術・家庭科ほど教育改革の波にもまれてきた教科はない。先達諸氏の熱意と実践がこの教科を支えてきた。それは、南巨摩でも例外ではない。失礼ながら、ここでは名もあげていないが、それら先輩の方々のご努力に心より感謝申し上げますとともに、我ら現職の部員は、その意志を継ぎ、南巨摩の生徒達のために、さらなる熱意を持って日々の実践や研究に向かうことを改めて決意し、この20年の南巨摩研究部の歩みの敵を終わる。

20年間の本支部の研究をテーマでまとめてみました。諸先輩方の研究に対する意欲と情熱を改めて感じるとともに、その先見性に驚かされました。今後もこの伝統を引き継ぎ研究に取り組んでいきたいと思えます。

・昭和52年度「3年電気学習の効率化を考えての教具の工夫」

トランジスタを使用した増幅器の製作

・昭和53年度「トランジスタ1石を使った低周波増幅器の設計」

指導内容の検討と実験器具の工夫

・昭和54年度「木材加工・金属加工の融合教材の研究」

融合教材の開発と年間指導計画

・昭和55年度「木材加工領域の指導計画」

融合教材について

・昭和56年度「電気2領域の適切な教材にはどんなものがあるか」IC回路を使って

・昭和57年度「わかりやすい電気1の学習指導」教材・教具を生かして

・昭和58年度「生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方」

～61年度 電気2の領域を中心に

・昭和59年度 電気2の領域を中心に

・昭和60年度 学習意欲を高める教材・教具の工夫と開発（電気領域）

・昭和61年度 鋸引き・鉋削りを中心に

・昭和62年度「生きて働く能力を高める技術・家庭科のあり方」～4年度

木口削りの授業をとおして

・昭和63年度 鉋削り・鋸引きの授業をとおして

・平成元年度 ふた付き箱の製作をとおして

・平成2年度 栽培と食物の融合教材に取り組んで

・平成3年度 年間指導計画と実践例（木材加工）

・平成4年度 木材加工領域を中心とした研究

・平成5年度 「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」

～8年度 木材加工領域を中心とした研究

・平成6年度 木材加工領域において副題材を取り入れた授業実践をとおして

・平成7年度 木材加工領域において副題材を取り入れた授業実践をとおして

・平成8年度 魅力ある選択教科の授業をめざして

## 「60年関プロの思い出」

長坂中学校 小澤建二

60年関プロでは、北巨摩支部は電気領域を中巨摩支部と共同で担当した。授業は中巨摩が電気1領域で、提案は北巨摩が電気2領域で行うことになった。私達の研究は、「生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業のあり方」のテーマのもと、サブテーマを「学習意欲を高める教材・教具の工夫と開発」に定めた。

しかし、研究は一筋縄ではいかなかった。本支部では50年関プロに関わった諸先輩がほとんどいなくなり、大部分が関プロを経験していない若い教師であったため、県の研究推進委員会から提案されてくる課題解決学習、下位行動目標分析などの意味がなかなか理解できなかった。お互いに疑問点を出し合い納得するまで何度も話し合っって指導案をつくった。そして実際に研究授業を行う中で、研究テーマのめざすものが何であるかを少しずつ捉えることができるようになっていった。幸いなことに県の推進委員長が一木先生だったため、ずいぶんと私達は助けられた。そうこうしているうちに、関プロが迫り、み

んなで分担して下位行動目標分析を行い、系統図を作成し、授業案の作成に入った。一人一人に宿題が出され、サークルの度に持ち寄り検討を加えていった。やりきれなかった部分は次への宿題として、何回もやり直した。また、それと並行して授業に必要な教材・教具の製作を行った。とにかく根気がいる大変な作業であったが、愚痴をこぼす者は誰もいなかった。電気2領域の全ての分析と授業案を完成させ、教材・教具ができあがったときは、本当にやり遂げたんだという喜びでいっぱいであった。

研究成果の検証のための授業を行い、データを取り分析して研究紀要にまとめ関プロが無事に終了したとき、研究の成果はもちろんのこと、会員の友情の深まりという宝物を北巨摩の技術家庭科研究会に残してくれた。

### 『平成7年、山梨関プロ大会の思い出』

葦崎西中学校 高左右 浩

平成7年の関プロ大会を述べる前に、平成6年のミニ関プロのことを述べさせてもらいたいと思います。県事務局から1ヶ月前「北巨摩でミニ関プロを開催してほしい」と急に言われ、私を始め、研究部員もびっくりしてしまいました。心の準備もないなかで、一木校長先生の御指導を仰ぎながら、研究部員を中心に、「課題解決的学習をどの場面で仕組んでいくか」指導案の検討や会場準備等をミニ関プロ開催当日の朝まで行いました。当日は、県全体から技術家庭科の先生達が100名ほど長坂中に来校し研究会も盛大に行うことができました。この1ヶ月が一番忙しかつたと思います。

平成7年の本番では、ミニ関プロの研究会で「指導内容が時間的に無理ではないか」と指摘され、再度指導案を検討しながら手際よく準備を進めていきました。公開当日は、全国、関東より多数の先生達が研究会に参加し

ていただきました。研究授業も緊張することなくゆっくりと進むことがで、分科会でも活発な討議が行われ成功に終わりました。

今回の大会は、2、3年前から県事務局をはじめ、研究部員を中心に準備を行い、ミニ関プロから本大会まで忙しい思いをしましたが、自分にとっては貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

### 『力の結集、関プロ山梨大会』

葦崎東中学校 栗冠 真理奈

「山梨関プロの授業者に・・・」と漠然と受け止めていた話がいよいよ現実となった時、不安と緊張感でいっぱいだったことを今でも思い出す。特設会場である体育館の中の多くの人々の視線。生徒共々、始まりのチャイムを聞くまでは心臓が張り裂けそうだった。

発表は県や支部の合同研究によるもので、度重なる指導案の検討や教材・教具の工夫と開発、模擬授業の実践、展示物の計画や環境整備等、数多くの人の力があつたからこそ実現できたことであつた。このような大会は、私にとって初めての経験で、準備の大変さを改めて実感させられた。また、研究討議では各県から様々な意見をいただき、研究とは日々の実践の積み重ねであることを教えられた。

多くの先生方に御指導ご協力をいただき、十年に一度の山梨関プロに参加できたことを心から感謝したいと思う。ありがとうございました。

## 1. はじめに

技術家庭科教育が発足して40年とのこと  
自分が教師になって34年、技術家庭科の歴史とともに歩んできたともいえ、感無量なものがある。以下、昭和53年(1978年)から20年間の支部の動きを心許無い記憶を辿りながら綴ってみたい。

## 2. 52年の指導要領の改定から

昭和52年7月の中学校学習指導要領の改定は技術科教師を苦しめた。

改善の基本は、

- 1、実践的、体験的な学習を行う教科としての性格が一層明確になるように留意して内容の精選を行い、その改善をすること。
- 2、「男子向き」「女子向き」の履修方法の関連を一層密接にすること。
- 3、地域や学校の実態及び生徒の必要に応じて内容を弾力的に取り扱うようにすること。

の3点であった。

具体的には次のように変わって行った。

- A 木材加工[1,2]    B 金属加工[1,2]  
C 機械[1,2]        D 電気[1,2]  
E 栽培  
F 被服[1,2,3]    G 食物[1,2,3]  
H 住居              I 保育

の17領域になり、AからEまでを「技術系列」、FからIまでを「家庭系列」とし、男女共学の方向へ向いていった。

時間数についても、これまでの各学年週3時間、年間105時間の授業が、1・2年生が週2時間、年間70時間、3年生が週3時間、年間105時間と削減され、制作に関わった「ものの見方」「ものの表し方」を学ぶ「設計・製図」の領域がなくなった。

そして、研究会では冗談まじりではあったが「俺たち技術科の教師はいらなくなるか。」が語られたものであった。

この頃の研究会は、栽培や木材加工を得意とする小林昭三先生、新海博先生、小林規秀先生、岡部暎先生、伊東敏先生、柳沢精先生、中山安正先生、等のベテランの先生方から教科の本質論から具体的な技術にわたって多くを学ぶ機会になっていた。

吉田中での第14回関ブロ山梨大会の公開授業で秋山義人先生が、木材加工の授業(構造)を実施するに当たって技術室の改修に大きな力を発揮してくださった先輩の先生方の姿が懐かしく思い出される。

産業界の変化も著しく、コンピュータの導入による技術革新が進行していった。

熟練とか、ベテランとかの言葉が死語になり、生産に関わる技術から、より豊かな生活を目指す消費者の立場にたつ技術科を進めていくことが要求されるようになり、がっかりした。

また、教材も開発され短時間の実習で小綺麗なものがつくれるようなキッドが横行し始めた。

「自然に働き掛け、知恵と技を駆使して人間にとって有用な物を創りだす行為としての技術」が出来なくなっていくことに寂しさを感じたものである。

また、社会生活の変化に対応するということから、男女共学が進み、男女の特性に違いがあるという考えから共学に反対する声も多々出された時代でもあった。そんななか、岩間孝吉先生が道志中で実践した「炭焼き窯づくり」は技術・家庭科の新たな楽しさを見出だす示唆を与えてくれた。

### 3、第24回関プロ大会にむけて

昭和60年に第24回関プロ山梨大会が甲府市で開催された。南都留支部は「機械」領域を分担し、甲府南中学校の入蔵靖彦先生の「クランク機構」の授業で使う、シミュレーションづくりにみんなで取り組んだ。

研究会のメンバーは電子・情報技術を学んできた若者たちにかわった。

岡部昭雄先生や私などは機械や金属加工が得意分野で、芦沢辰文先生、里吉信二先生、広瀬安男先生、武藤郁夫先生、遠藤敏先生、坂本幸男先生、志村昭先生、小林隆英先生、石丸洋一先生、後藤英先生、加々本哲也先生等の若い先生方の話しているコンピュータについての内容に、なかなかついて行けなかったことが印象に残っている。

そして、画面に写し出された「クランク機構」の動きには感動すら覚えたものである。

その後、坂本公彦先生、高左右浩先生、平賀文仁先生が加わり、平成元年の関プロ大会では「金属加工」の発表をした。

### 4、平成元年の指導要領の改定

昭和59年に設立された臨時教育審議会の答申の線に沿って平成元年、学習指導要領が改定された。

21世紀に向かっての国際的感覚と日本人としての自覚をもつ国民形成のためには、基礎学力の充実、教育の個性化、自主的自発的態度の育成が必要であるとする前提のものとの改定だといわれる。

技術・家庭科においては、実践的・体験的な学習を一層充実し、具体的な学習活動を通して、家庭生活や社会生活について理解を深め、工夫し創造する能力や主体的、実践的な態度等を育てる観点から領域構成及び履修方法は次のようになった。

17領域が整理され、「木材加工」「金属加工」「電気」「機械」「栽培」「情報基礎」「家庭生活」「食物」「被服」「住居」「保

育」の11領域に整理された。そして、7領域以上を履修させ、その際、「木材加工」

「電気」「家庭生活」「食物」の4領域は必修で「木材加工」と「家庭生活」は1年で履修させることを標準としている。また、男女同一の履修範囲とされ完全に共学になった。

目まぐるしい技術革新の波のなかで、教科の本質をどこにおくのか悩みは大きかった。そして、資源問題、環境問題等、技術科の授業で考えていくべきだと思う課題も増えていった。

### 5、平成7年の関プロにむけて

第34回関プロ山梨大会は県下各支部に分散しての分科会が持たれた。

南都留支部は東八代支部と「機械」領域を受け持ち、山中湖中で「ロボットの制作」の授業を梶原将司先生が行った。

芦沢辰文先生、里吉信二先生、坂本幸男先生を中心に望月一夫先生、酒井幸政先生を加えたスタッフが、何回もプレ授業を行いながら授業づくりをしていった。

高村景男教育長を先頭に山中湖村の全村あげての協力体制を頂きながら、秋山勝彦校長先生の経営方針が見事に花開いた優れた生徒たちの質の高い授業が参観者に好評であった

### 6、むすびに

技術科中心になってしまったが、家庭科は細井令子先生、小高玲子先生、土屋春海先生等の大御所の精神を受け継いだ三浦明海先生、赤松東先生、石丸純枝先生、猪股真弓先生、石原幸子先生、矢崎理恵子先生によって着実に研究を続けてきている。現在は古屋豊美先生、小佐野富士江先生を中心に幅広く活動している。

「大雪」「ナイフ」「大蔵省」「メダル」そんな言葉が飛び交うなかでつくづく思う。「民主的で文化的な社会の形成者としての人格」を育てうる「技術・家庭科」でありたいと。

## 北都留支部 研究のあしあと

北都留支部事務局長 大月東中学校 沢 登 守

本支部には、大月7、上野原6、小菅・丹波各1の15校がありますが、技家担当教師も東部地区交流のために数年すると異動してしまったり、免許外担当教師も多く、研究の積み重ねや継続という点では難しい面があります。しかしながら、現在、北都留地区定住の技家担当教諭は6名ですが、交流で来られた先生方とともに、精力的に支部の研究を推進しているところであります。今後の定住者増を期待するとともに、交流等で県下各地から集まる先生方のお力添えにより、ますます北都留支部の研究が実りあるものになるよう願っております。

さて、支部研究会が発足して40年あまりを経ましたが、昭和50年当初までの支部研究会の様子については20年史当時の事務局長であった長坂三男先生が細かく述べてくださいました。農業や職業等を中心にした学習指導のこと、科学技術の急激な進歩に伴い多くの講習会や研究会へ参加されたことなど、諸先輩方の並々ならぬご苦勞をうかがうことができました。その後、学習指導要領の改定や関プロ山梨大会などを機に支部の研究も変遷を見てきたわけですが、以下にこれまで20年間の研究概要を簡単にまとめ、北都留支部研究会の報告とさせていただきます。

昭和53年度(木工1、食物1)

木工では、学習指導要領の改定を目前に製図領域の削除による木工1への製図指導の位置付けなど指導内容の精選に視点を当てる。また、食物では、数年来より男女共学について研究を進め、男女相互の理解と協力を図るための指導内容の自主編成に取り組む。

昭和54年度(住居)

移行期の男女相互乗り入れにかかわり、年間指導計画、履修形態、履修領域、実施学年などについて研究。技術科教諭の指導が可能

ということで研究領域を特に住居に絞る。

昭和55年度(教育課程)

移行を目前に、製図領域の削減と他領域への分散、男女乗り入れ領域等の問題点について検討。また、指導内容の精選や系統化を図り、科学的根拠を大切にされた指導について研究する。

昭和56年度(教育課程)

新学習指導要領の完全実施に伴い、前年度までの研究検証のため、授業実践を積み重ねる。また、男女相互乗り入れ領域の選択、小中の学習内容の系統性、評価、施設設備などについて研究を進める。

昭和57年度(教育課程)

免許外指導者のための支部共同指導案作成や実技講習会を実施する。新学習指導要領の完全実施2年目となり、特に木工1、食物1について各校独自の指導計画を作成。

昭和58年度(木工1、被服3)

60年度関プロ山梨大会に向け、実践する能力の分析や課題解決的学習の在り方等、県の計画を基に研究がスタート。他郡市と共同で生徒の実態調査、題材の選定、指導計画A・B表の作成、行動目標の分析などを行う。

昭和59年度(木工1、被服3)

前年度の研究を継続するとともに、指導過程や指導項目を検討。また、課題把握と解決のために有効な題材や、学習課題の明確化と学習内容の系統化、1単位時間の指導案づくりなど、連日遅くまで研究を重ねる。

昭和60年度(木工1、被服3)

木工では各学習過程毎のチェックや分析・確認・見直しをする。被服でも課題解決的学習の在り方について研究を深める。また、関プロ山梨大会が開催され、木工は東山支部、被服は甲府支部と共に研究の成果を発表。

昭和61年度(木工1、被服3)

前年度研究を継続し、興味関心を引き出すための題材について扱う。木工では部材の厚さと加工法との関連について、被服では既製服に着目し、素材知識や場に応じた着用の在り方について、アンケートを基に研究する。

昭和62年度（金工1、被服3）

金工では、実態調査を基に板金を用いた伝言板を題材に選定、いろいろな形状のものを試作しながら研究を進める。被服では前年度の研究を継続。消費者教育の重要性を再認識し、試行錯誤をしながら授業実践を試みる。

昭和63年度（金工1、被服2）

金工では前年度の研究を継続し、卓上小物台を題材にした授業実践や設計段階における課題解決的学習について、被服では基礎基本の定着と、スカートの拡大標本、製作学習ノート、チェック表などの製作に取り組む。

平成元年度（電気、被服2）

学習指導要領の大幅な改定を前に、男女共学の「電気」について研究をスタート。実態調査の実施、指導内容や指導方法、題材などを研究。被服では授業実践を通し、製作過程や製作ノートの検討、授業の個別化への取り組み、チェックテストの作成などを行う。

平成2年度（電気、家庭生活）

電気では指導計画の見直しや指導内容について検討し、特に男女共学における題材の選定や指導方法について研究。家庭生活では領域の目標や指導項目について分析し、生徒主体の授業展開の在り方について研究する。

平成3年度（電気、家庭生活）

電気では前年度の研究を継続。また、日常生活の環境問題に視点をあてた授業実践に取り組む。家庭生活では実際の家庭生活の実態を調査しながら、学習指導上での考慮すべき事項の検討を行う。

平成4年度（栽培、被服）

栽培では、支部各中学校を対象に履修状況についてアンケート調査を実施し、題材の検討を行う。また、地域の自然への関心を高め

るために、草木染めを題材にした授業を選択領域の被服で実践する。

平成5年度（栽培、保育）

平成7年度関プロ山梨大会を目指して、栽培、保育の研究をスタートさせる。栽培では生徒の意識調査の実施、年間指導計画や扱う題材について、保育においても教材・教具の工夫や指導案づくりに取り組む。

平成6年度（栽培、保育）

関プロへ向けて、授業実践を中心に取り組む。栽培では支部の実態把握をするとともに野菜や菊作りを題材とした指導計画作りを、保育では興味・関心を高めるために学習題材を工夫し、視聴覚教材の有効利用を図る。

平成7年度（栽培、保育）

栽培では身近な野菜や秋菊を題材に、教具や学習ソフトの開発、自主的な授業の在り方について、保育では幼児の心身発達や環境に視点を当て、教材・教具の工夫や実践・体験を重視した授業について研究。また、関プロ山梨大会が開催され、栽培は中巨支部、保育は東八支部と共に研究の成果を発表する。

平成8年度（電気、食物）

電気では、新にメロディーICを利用したセンサー付き回路の教材化についての研究をスタートさせる。食物においても、バター、ソーセージ、豆腐など加工食品の実習教材化について研究する。

平成9年度（電気、住居）

電気では前年度に引き続き、メロディーICセンサー回路の指導計画や指導内容について研究する。また、住居では、環境教育をどのように組み入れていくか、ゴミ処理場等の臨地研修を重ねながら研究する。



## 甲府支部40年の歩み

富竹中学校 齋藤 章

### 1 はじめに

既に刊行された20年誌をひもといてみると昭和39年度に開プロ山梨大会・昭和50年度に第14回開プロ山梨大会が甲府市を中心に開催されるまでの歴史が綴られている。

その脈々たる営みを引き継ぎ、平成9年度までをさらに上乘せして甲府支部研究会の歴史を振り返ってみたい。

### 2 支部研究の歩みを中心に

#### 昭和54年度

「技術的能力を伸ばすための指導過程の研究  
指導要領移行期に当たって、指導計画の検討に重点をおく。

- ・製図を木材加工学習へどう位置づけるか
- ・被服2スカートの製作の研究

#### 昭和55年度 大沢保彦支部長

「技術的能力を伸ばすための指導過程の研究」

- ・相互乗り入れによる履修方法の研究
- ・被服領域における指導内容の精選と系統化

#### 昭和56年度 大沢保彦支部長

本年度より週時間数は2・2・3で実施

「技術的能力を伸ばすための指導過程の研究」

- ・相互乗り入れで『木材加工I』『食物I』をどのように扱うか。部員数32名

#### 昭和57年度 大沢保彦支部長

「生徒が自ら課題を解決する能力を養う技術  
家庭科の授業」

- ・金属加工2を中心に・住居領域の実態調査

#### 昭和58年度 中山和巳支部長

「生徒が自ら課題に取り組み、実践する能力  
を伸ばす技術・家庭科の授業」

このテーマは昭和63年まで継続する

- ・技術系列～金属加工・機械領域を中心に
- ・家庭系列～住居・被服を中心に

本教科の教育課程の在り方も検討した。

#### 昭和59年度 深沢六郎支部長

『金属加工・機械・被服・住居の各領域』及

び『教育課程の課題としての相互乗り入れの領域での授業のあり方についての実践的研究を進める。

#### 昭和60年度 深沢六郎支部長

第24回開プロ山梨大会が開催された。授業公開を分担する5領域の準備のための実践研究を展開した。

#### 昭和61年度 宮川逸雄支部長

- ・電気1における、教材・教具の工夫と学習形態の工夫
- ・被服～評価を踏まえた授業の工夫
- ・住居～意欲や興味を喚起させる教材・教具の工夫と活用

#### 昭和62年度 立川隆章支部長

- ・意欲を引き出す教材教具と授業形態の工夫
- ・スモックの製作（被服1）における教材・教具の必要性

#### 昭和63年度 宮川逸雄支部長

- ・新教育課程に基づく『情報基礎』の研究
- ・個の生活経験を生かした食物学習

#### 平成1年度 宮川逸雄支部長

「実践力を育てる指導法の研究」

- ・木材加工1領域を男女共学で実践化
- ・新教育課程（情報処理）に向けて

#### 平成2年度 山縣利縣支部長

「研究テーマ」は前年と同じ。

- ・指導要領移行の問題点→移行を来年度に控え、実践から生まれた疑問点を討議する。

#### 平成3年度 山縣利縣支部長

「研究テーマ」は前年と同じ。

- ・新学習指導要領に基づいた教材教具及び指導法の研究

情報基礎・電気領域のカリキュラム研究

家庭生活・被服領域のカリキュラム研究

#### 平成4年度 山縣利縣支部長

「研究テーマ」は前年と同じ。

- ・新指導要領における金属加工領域と住居領

域における教材教具及び指導法の研究

- ・金属加工領域を他の領域と組み、何時間確保するか。
- ・住居領域の授業のあり方の見直し。

平成5年度 斎藤章支部長

「研究テーマ」は前年と同じ。

- ・環境教育を意図した金属加工領域の実践
  - ・住居領域の指導における教材の研究
- 平成6年度 岩間孝吉支部長
- 「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」
- ・来年度の関プロ山梨大会における甲府支部の担当する『教育課程分科会を含んだ金属加工領域と住居領域』の授業研究

平成7年度 斎藤章支部長

「研究テーマ」は前年と同じ。

- ・金属加工領域における思考過程を重視した授業の工夫
- ・住居領域における実践的・体験的活動を取り入れた授業の展開

平成8年度 岩間孝吉支部長

- ・「研究テーマ」は前年と同じ。
- ・技術系列は昨年と同一テーマ
- ・食物領域における実践的・体験的活動を取り入れた授業の展開

平成9年度 斎藤章支部長

- ・「研究テーマ」は前年と同じ。
- ・木材加工領域における製作題材の工夫
- ・被服領域：教育課程の検討を中心に～環境に着目した衣生活の授業

このように研究主題を中心に上げてみたが、この20年間の流れの中で、特徴的な事柄を改めて述べたい。

### 3 特徴的なことから

昭和54年度は、前年度に引き続いて移行期にあたって指導計画の検討に重点を置いた研究活動であった。『男女の相互乗入れ』に対処することが最大の検討課題であった。

56年度は、指導要領の完全実施に伴い、相互乗入れで、木材加工1・食物1をどの様に

扱うのかが論じられた。これをもとに、59年度まで各領域にわたって検討されたのである。60年度は、関プロ山梨大会を引き受け、34名の会員が5つの領域分科会に所属し、平日の夜や土曜の午後を使うなど3年間の努力を重ねた。その結果、西・南・北・南西・北西の5中学校での分科会参加者総数は552名と盛況であり、苦勞へのごほうびとなった。

さらに継続研究がなされ、63年度に入り、情報基礎に対する積極的な対応を開始した。パソコン講習は平成1年度まで行われた。指導要領の完全実施を平成5年度に控えた4年度からは、3年後に行われる関プロ山梨大会の分担領域である金属加工と住居の授業研究への取組が開始された。

5年度は、空き缶のリサイクルを取り上げた授業が行われ、6年度から本支部独自の開発教材である『ミニ伝言板』による授業が行われたことも特筆できよう。

### 4 むすび

昭和60年に第24回関プロ山梨大会、平成7年に第34回全日本・第34回関プロ山梨大会という大きな大会が節目となり、その間指導要領の改訂もあり、甲府支部はこれらの大会や県事務局の仕事も中心となって取り組んできた。領域研究になると、所属研究部員の数が5～6人という少人数の厳しい条件の中での活動であったが、まさに継続は力なりである。昭和58～63年度の間、県事務局長を石井幸雄先生から受け石原成人先生に引き継ぐまで部員と兼任で研究活動に携わった関係で、本支部の後半の20年間の概略記述を担当させて頂いた。今日また、教育改革の波のうねりの中で、技術・家庭科の教育内容がかつてないほどの変容が発表されている。

しかし、ここで述べた実践を基盤にして、また新たな教科内容の構築に向けて研究部員一同が英知を傾け取り組んでいかねばならない。今後の10年間の楽しみである。

## (4) 各専門部活動

### 調査資料部の活動

調査資料部 長 田 靖

私が調査資料部に関わったのは、昭和62年と平成4～8年の合計6年間である。そのうち、平成5～8年の4年間は部長をさせていただいた。

本研究会の調査資料部では、教育課程及び教育条件整備に関する調査を、年1回全県下の技術・家庭科担当教師の協力を得て実施している。

県下の国公立中学校を対象とした調査であるが、平成8年度は私立3校（山梨英和、駿台甲府、山梨学院大附）の協力を得ることができた。

調査の目的は、次の3点である。

- ① 本県の技術・家庭科の教育課程に関する実態を把握し、研究推進のための資料とする。
- ② 本県の技術・家庭科の教育条件に関する実態を把握し、その整備を図る運動を進めるための資料とする。
- ③ 学校、生徒、教師の現在の状況、意識などについて実態を把握し、よりよい教育課程実現のための資料とする。

以下に、調査の内容（概略）を記す。

- (1) 教育課程及び教育条件整備に関する調査
  - ① 学級数と生徒数
  - ② 授業時の生徒数
  - ③ 技術・家庭科担当者の実態（年齢、免許の有無等）
  - ④ 学年別履修領域と時間数
  - ⑤ 3年間で履修する領域数
  - ⑥ 授業形態（共学・別学、前後期制等）
  - ⑦ 選択「技術・家庭科」の実施状況
- (2) 「情報基礎」に関する調査
  - ① 学校のパソコンに関する調査
  - ② 個人のパソコンに関する調査

### ③ 「情報基礎」領域に関する調査

#### (3) 技術・家庭科における問題点改善の調査

現行学習指導要領は、平成3年から学年を追って施行され、平成5年度から完全実施となった。領域の整理・統合、新設領域、標準履修学年、授業時数の～表示など、枠組みに大きな変動があった。

中でも「情報基礎」、「家庭生活」の新設領域に対して、現場の戸惑いや不安は小さいものではなかった。

調査資料部が、この新設領域に関する調査に取り組んだのは昭和62年（調査資料部長は小澤建二先生）であった。領域名も正式には提示されていなかったため、それぞれ「情報処理」と「家庭の生活と住居」に関する調査という形で行われた。

「情報処理」については、校務処理用のワープロやパソコンの導入状況、コンピュータに対する生徒の興味関心などに関する調査が行われている。

今日では当たり前になっているパソコンの学校への導入も、当時としてはまだ珍しいことで、資料によるとワープロ専用機（校務処理用）の導入率は75%、パソコン（同）にいたっては33%とある。

「家庭の生活と住居」については、予想される領域の内容に対して肯定的な意見が多く見られる。

これ以外には、次の各点についての調査が行われていることが特徴的である。

- ・必修領域と選択領域
- ・授業形態（共学か別学か）
- ・予想される3年生の授業時数

詳細な調査とていねいな考察がなされ、その結果は全国大会で発表されている。

平成に入ると、学校へのコンピュータ（生

徒学習用)の導入が行われるようになった。それに従い調査内容も、導入機種や台数、パソコン室やネットワークの有無といった施設設備(ハードウェア)的な面だけでなく、利用ソフトや指導重点、他の領域へのパソコンの活用例等の内容も付加されていった。

また選択履修幅の拡大に伴い、2・3年生の選択「技術・家庭科」実施状況の調査も行われるようになった。

平成7年は、本県で関プロ大会(全国大会を兼ねる)が行われた年である。

この「教育課程」分科会の提案発表を、鈴木昇先生(附属中)をヘッドとする甲府支部の先生方と協力して調査資料部が行った。

現行指導要領の完全実施から3年目であり、もやは「新」という接頭辞も不要となった時期であった。大会テーマ「自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方」を受け、主に次のポイントについて調査結果を考察し、年間指導計画の見直しを図るためのでだてを探る提案を行った。

- (1) 教科運営のための人的配置
- (2) 各学年の履修状況
- (3) 領域に対する意識
- (4) 製作で扱う材料から見た領域選択の問題

研究の成果として、次のようにまとめた。

- ① 履修時間や領域、製作題材等、本教科の実施状況を明らかにし、教育課程の問題点を探ることができた。
- ② 領域の整理統合と時間数の削減に伴い改めて題材の研究開発の必要性を認識できた。

調査資料部として十数年来継続してきた調査と集計、考察の積み重ねがあったからこそ、豊富な提示資料に基づいた提案をすることができたと自負している。この流れを今後も継

続し、よりよい教育課程実現のための資料を提供していかなければならないと考える。

さて、ここ7～8年の資料に目を通してみると、いくつかの傾向があることに気づく。それは、次の点である。

- ・3年間で履修する領域数が、下限の7である学校が増加していること。
- ・3年生の授業時数を、下限70時間に設定する学校が増加している。
- ・生徒の興味や関心、地域や学校の実状に応じて履修する領域(いわゆる選択領域)では、情報基礎、保育が多く、逆に栽培、住居などは敬遠されている。

現在のように、領域を軸とした履修方法では、教科の目標を達成するには自ずと無理があるのではないだろうか。各領域の内容の再検討にとどまらず、領域そのものの再構築を考えていかなければならない時期にきている。調査資料部の調査・集計・考察が、微力ながらその取り組みの糸口になれたなら、と願っている。

## 「県版 技・家学習ノート」この20年

平成9年度版編集委員長 三 枝 修

実習ノート時代の成果を生かしながら、山梨県中学校技術・家庭科研究会の事業の一環として、県内各支部の研究推進委員が編集委員となって県版「技・家ノート」を作成し、改訂を重ねてきています。

この「県版技・家ノート」は、教育現場の声を生かしながら、技術・家庭科の授業を進めていく上で、生徒には使いやすく、教師には効率の高い授業が展開できるようにという願いが込められたものです。

この20年を振り返ると、2回の教育課程の改訂があり、その都度教科書も変わっています。これに伴い、技・家ノートも内容の見直しを行い、4回の改訂版を出してきましたが、この間一貫している編集方針は次のようなものでした。

- (1) 学習指導要領の内容を網羅する。
- (2) 山梨県独自の内容で、各学校の教育課程に合わせて使用できるようにする。
- (3) 使用する教科書の内容に合致させる。
- (4) 生徒にとって使いやすく、主体的な学習が展開できるように配慮する。

- ・基本的な知識のまとめ、実習の計画と記録、ノート欄で構成する。
- ・見開きで学習のまとめができるようにする。
- ・課題や実験・実習のまとめ、板書整理のためのノート欄を設ける。
- ・表紙裏に用語の解説や技術史を取り上げる。
- ・末尾に、「自己評価表」をつける。

- (5) 生徒用に青刷りで、記入例が示された教師用を作る。

### 1. 昭和52年の教育課程改訂と技家ノート (昭和55～56年度)

ゆとりのある学校生活の実現をめざして、昭和52年(1977)9月、各教科の指導内容の精選と授業時数の削減をめざした教育課程の改訂が行われました。技術・家庭科に

おいては、それまで男子向きと女子向きに区別されていた内容が一括され、12領域が9領域に整理されました。各学校では、男女いずれの生徒にも、地域や学校の実態によって7以上の領域を選択して学習させることになりました。また、男女の相互の理解を図るという観点から、1領域以上の相互乗り入れの学習を行うようになりました。

昭和53年度、学習ノート専門部(赤池功 部長)では、指導要領への取り組み状況における都市間格差を踏まえ、従来使用してきた実習ノートに検討を加え、使いやすく、県版としての特性をもったものへと充実させていく取り組みに着手しました。

昭和56年4月の新指導要領完全実施に向け、昭和55年度、各支部の推進委員による学習ノートの編集が進められました。その成果は、学年、男女別6冊のノートにまとめられました。これが57年度は上・下の4冊となり、相互乗り入れ領域については分冊となりました。

### 2. 60年山梨関プロと「技・家ノート」 (昭和58～59年度編集)

60年山梨関プロに向け、研究の一環として、授業にも活用できる山梨県独自の学習ノートを作ろうとうことで、昭和57年度、関プロ分担領域を原則として各支部2名ずつによる「県版技・家ノート」編集委員会が構成されました。(山村 正巳 委員長)

60年山梨関プロを挟む3年間にわたって使われた59年版技・家ノートは、

男子	上巻	木1, 木2, 金1, 金2, 食1, 住居
	下巻	機1, 機2, 電1, 電2, 栽培, 保育
女子	上巻	食1, 食2, 被1, 被2, 住居, 木1,
	下巻	食3, 被3, 保育, 機1, 電1

という領域編成で、相互乗り入れ領域も含んだものでした。また内容面では、学習のねらい、自己評価や反省を記入する表を付けたこ

と、また文章表現も「～しなさい」という問題形式ではなく、「～してみよう」という課題解決形式に変えたこと、製作の計画、実習記録、学習整理のためのノート部分をつけた所に特徴がありました。

### 3. 教科書改訂にともなう改訂

(昭和61～62年度編集)

関プロ山梨大会の研究成果をとりいれるとともに、改訂された教科書内容に合致する学習ノートにしていくための、改訂が行われました。(岩間 孝吉 編集委員長)

この版からは、定価や採択のしやすさから各領域ごとの分冊となりました。関プロ山梨大会の研究成果の一つである、自己評価表の充実、59年度版技・家ノートの内容を総点検し、語句や資料をより分かりやすく、使いやすいものに訂正するとともに、「調べたこと」「考えたこと」「確かめたこと」などが記入できるよう、白紙ページを増やす等の工夫がなされました。また表紙には山梨のシンボルである富士山の写真がのせられ、より親しみやすいものになりました。

### 4. 平成元年教育課程の改訂と技・家ノート

(平成4～5年度編集)

個性と創造性を伸長する教育が期待され、社会の情報化・国際化、女性の社会進出に伴う家庭生活の変容等に適切に対応するため、平成元年(1989)3月、自ら学ぶ意欲と社会に主体的に対応できる能力の育成、個性を生かす教育の充実をめざして、教育課程の改訂が行われました。この改訂で技術・家庭科には、新たに『情報基礎』と『家庭生活』の2領域が設けられ、全体として11領域になりました。11領域のうち、木材加工・電気・家庭生活・食物の4領域は、全生徒が共通に学習するようになりました。また、男女同一のカリキュラムが取られるようになりました。

領域の再編と新設により、技・家ノートは構成そのものを見直すことになりましたが、

『家庭生活』『情報基礎』は平成2年から研究会内に設けられていた特別委員会の委員が、他の領域は研究推進委員が編集にあたりました。(石川 正昭 編集委員長)

『家庭生活』『情報基礎』は特別委員会の研究の成果を生かしながら、基礎・基本を中心に学習のまとめ、実習内容がそのまま記録できるような内容構成になりました。また、木材加工等では、従来の「木工1+木工2」という発想ではなく、領域全般から基礎・基本を洗い出し、授業を通して「調べたこと」「確かめたこと」を整理していく形になりました。さらに、技術史に関する資料の充実、小単元ごとの学習のねらいや教科書参照ページの表示などの工夫もなされました。

### 5. 教科書改訂にともなう改訂

(平成8～9年度編集)

改訂された教科書内容に合致する学習ノートにしていくため、平成4年版技・家ノートの改訂が行われました。

共通履修4領域は35時間で、選択履修領域は30時間で指導することを前提に内容の総点検を行い、資料や図版の更新、言い回しの統一、語句の訂正が行われました。その中で、『情報基礎』は教科書内容が大幅に変わったため、全面的な改訂になりました。また、表紙は使いやすさから、領域ごとのマークと色で、違いが分かるものへと変わりました。

県版技・家ノートの内容は時代の流れとともに変わってきてはいますが、本質的な所は変わっていません。学習ノートを作り続ける意義は、授業の中で生徒の学習の効果を高めることとともに、教師の指導の質を高めていくことにあるように思います。学習ノートの編集には主に、各支部の研究推進委員が携わってきていますが、研究推進委員を通して、現場の先生方の実践や研究の成果、生の声が反映されています。

これからも、日々の授業と研究充実のための、また授業と研究を支えるための技・家ノートであり続けてほしいものだと思います。

## (5) 関プロ山梨大会

### 第24回関プロ山梨大会を振り返る

甲府市立富竹中学校 校長 齋藤 章

当時も、今に至るまで本研究会は、所属する学校数100校（国立1）研究会員数160余名という小規模な研究団体である。この組織の中で、関プロ大会を引き受けるに当たって考えたことは、研究会の指導的な立場の宮川山縣・石井・滝・という先生方が管理職に就き、事務局を始め世代交代の時期のなかで、大会運営面・研究面の両輪をいかに工夫し円滑に機能させるかであった。

大会事務局は、齋藤・野本・小林・小沢・森本・石原・日原・小野で構成し、研究部の一木・小沢の各先生方を含め、事務局会議を勤務時間外まで頻繁に開いたものである。

望月教三会長は、中富町から梨大附属中学まで遠距離を物ともせず出席され、指導助言をいただいたが、その年齢に近付いた今、体力的にも相当きついものがあつたのではないかと改めて思うと同時に感謝の念を抱くものである。

本研究会の歩みを振り返ると、昭和33年の学習指導要領改訂を機に、当時4つあつた研究サークルを一本化し、教育条件や指導技術の向上を目指し技術教育の規範確立に役立つものにしたいと各地区代表が集い昭和34年2月に会則を設定し、昭和36年2月11日に県民会館大講堂において設立総会を開き、本研究会は発足したのである。

昭和39年10月には第3回関プロ山梨大会（研究主題：技術・家庭科の本質をふまえた学習指導を効果的に行うには、どのようにしたらよいか）を引受け、甲府市を分科会場に開催した。続いて昭和50年に第14回関プロ大会（研究主題：ひとりひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふう）を全体会場は、富士五湖文化センターとし県内11中学校で開催した。

これらの歴史を踏まえて、いよいよ準備に

かかり、過去10年間の各県の提案分担表を関プロ理事会で提示し、都県代表が納得の上、山梨大会への布陣がしかれたのである。

日程 第1日 昭和60年11月14日（木）

・開会式（県民文化ホール小ホール）

・第24回山梨関プロへの研究提案

一木貞夫（双葉中）

小沢せつ子（浅川中）

・昼食・案内

・提案・協議・指導助言

・講評（村田昭治教科調査官）

（津止登喜江教科調査官）

・記念講演

「21世紀を生きる子どもの教育と創造性」

講師 渡辺 茂（都立工科短期大学学長  
東京大学名誉教授）

第2日 昭和60年11月15日（金）

・公開授業

・分科会研究協議

・昼食

・分科会研究協議

・閉会式

（領域）（授業校）（授業者）（提案者）

木材加工 勝 沼 三枝 修 岡部平和

金属加工 甲府西 山口 守 窪田博人

機 械 甲府南 入蔵靖彦 金勝武鑑

電 気 押 原 西山 豊 小澤建二

栽 培 石 和 宮沢哲男 太田一夫

被 服 甲府南西 林 京子 桜井玲子

食 物 若 草 長沼元江 小笠原さつき

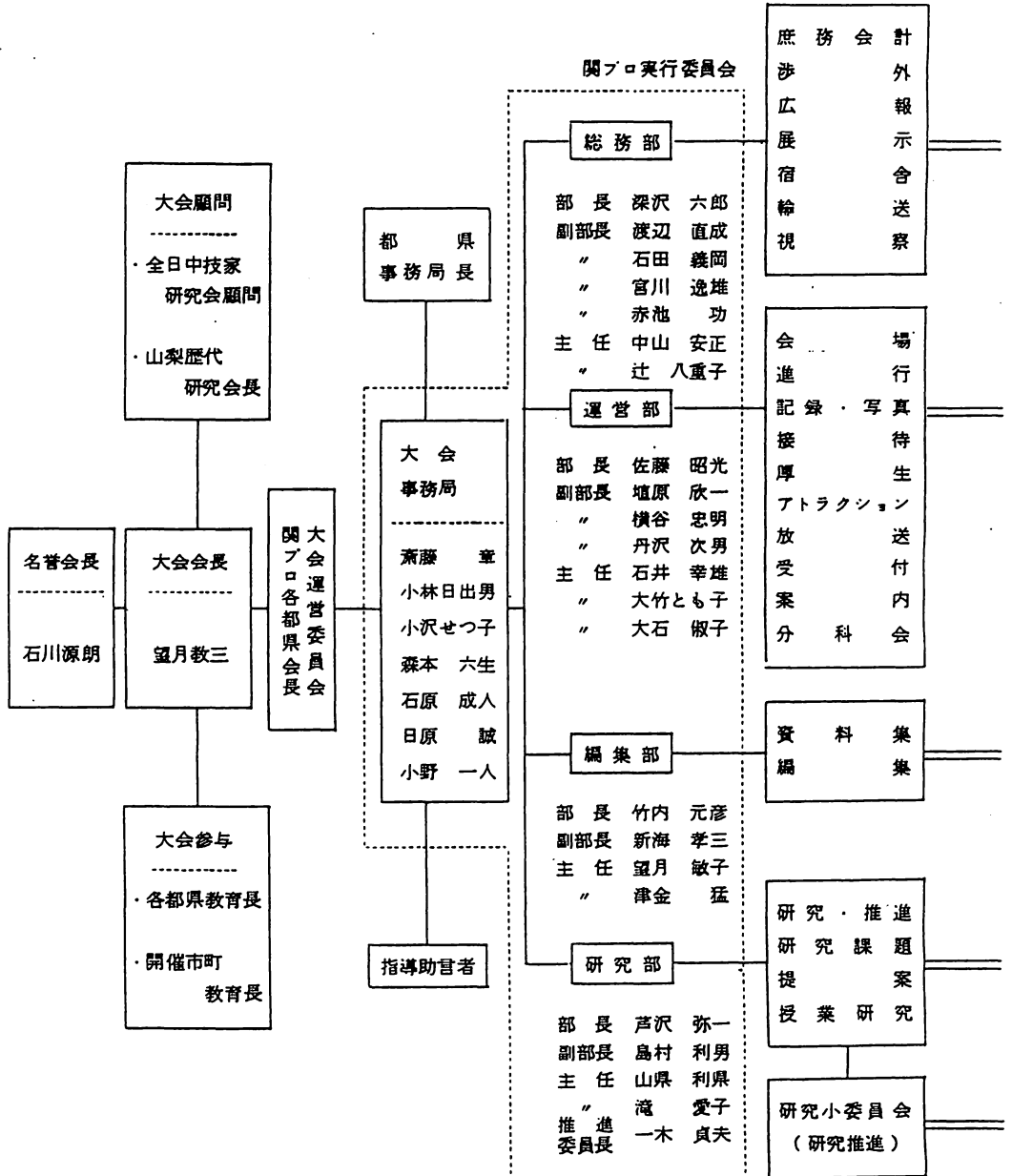
住 居 甲府北西 望月志津子 三浦明海

保 育 石 和 清水禮子 望月加代子

教育課程 甲府北 羽田英雄 安部忠雄

以下、大会を直前の会報より、当時の組織及び総務・運営・編集の各部長からの活動状況を抜粋し、今後の参考としたい。

第24回 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会  
山梨大会 運営組織一覧表





東山梨郡	東八代郡	西八代郡	中巨摩郡	北巨摩郡	南巨摩郡	北都留郡	南都留郡	甲府市
------	------	------	------	------	------	------	------	-----

佐々木与比古 山梨南	柳沢 豊 石 和 望月 恵子 一 宮	塩沢 雄市 市川南	川崎 将人 玉 幡 青木さとみ 玉 幡	石丸 洋一 韭崎東 桜井 玲子 須 玉	(赤池 功) 鯨 沢 小松 幸子 増 穂	深沢 二男 猿 橋 岡田 豊子 大月東	芦沢 辰文 河口湖南 相吉美智子 吉 田	(宮川 逸雄) 甲府北東 日野原美智枝 甲府南
---------------	-----------------------------	--------------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	----------------------------------

根津 夏雄 山梨北	関本 幸雄 浅 川	栗袋 恒 市 川 (依田 幸男) 上九一色	遠藤 敏 甲 西 小松 明子 御勅使	植松 阿澄 長 坂 進藤 純枝 韭崎東	朝比奈公夫 南 部 長田 靖 中 富	沢登 守 巖 大石 淑子 七保一	小林 孝 都留二 岡田登喜和 山中湖	石井 幸雄 甲府北西 井口 節子 甲府東
--------------	--------------	--------------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------------------

津金 猛 坂 下 渡辺 直美 勝 沼	市川 彌 御 坂 山田 順子 御 坂	鈴木 祥三 六 郷	石川 正昭 若 草 藤巻 志麻 櫛 形	中島 秀樹 明 野 遠山八重子 長 坂	望月 美彦 増 穂 諏訪 祥子 身 延	剣持 和宏 初 狩 石合きみ恵 上野原	里吉 信二 山中湖 志村 恵子 東 桂	小野 一人 甲府北東 神宮司真佐子 甲府北
-----------------------------	-----------------------------	--------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------

三枝 修 勝 沼 細川 珠枝 塩 山	市川 隆雄 一 宮 清水 礼子 石 和	太田 一夫 下 部	細田 正二 竜 王 名執 玲子 甲 西	小沢 建二 韭崎西 伊藤たま枝 白 州	数野 一郎 増 穂 望月加与子 鯨 沢	岡部 平和 上野原 沢登かほる 猿 橋	志村 昭 吉 田 古屋 豊美 都留二	岩間 孝吉 甲府南西 詫間いづみ 甲府城南
-----------------------------	------------------------------	--------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	-----------------------------	--------------------------------

一木貞夫・小沢せつ子・岩間孝吉・  
森本六生・秋山 義人・清水礼子・  
小林日出男

調査資料専門部  
◎安部忠雄(数島) ○津金 猛(坂下) 広瀬安男(下吉田)  
剣持和宏(初狩) 鈴木祥三(六郷) 朝比奈公夫(南部)  
石丸洋一(韭崎東) 進藤純枝(韭崎東) 望月一夫(甲府東)

山梨県中学校技術・家庭科研究会

No. 26

1985. 9. 17

# 会 報

## 全員の力を結集して 関プロ大会を成功させよう！

会長 望 月 教 三

関プロ中学校技術・家庭科研究大会が、本県で開催されるという重要な年に、前会長葭沢一富先生のご退任のあと、皆様のご推挙を得て、本年4月より会長という大任をお引き受けすることになりました。

前会長は、現場では実践家として、管理主事、教職員課長時代には、教育行政の立場から、技術・家庭科充実のためにご尽力いただき、更に、昭和58年度より、地元浅川中学校長になられてからは、本学会長として鋭意関プロ山梨大会の成功をめざして、ご努力ください、すばらしい成果を残され、本年3月ご勇退なされました。

私は、戦後の新制中学校の職業教育や進路指導のあるべき姿を求めて、県教委の実験学校、文部省の産業教育研究指定校を受けたり、県教委教育課程作成委員や技術科免許状取得講習会講師、更に、指導主事や教育事務所長などの教育行政の立場から、また、昭和58年度からは、本学会副会長、関プロ山梨大会準備委員会研究部長として、微力を尽してきましたが、この度の会長への皆様のご推挙も、このような過去におけるかかわりからだろうと思います。元より勉強不足で力足りないとい

ばかりですから、会員各位のご支援ご協力を心からお願いする次第であります。

さて、関プロ技家研究大会は、2年前から着々準備を整えてまいりましたが、いよいよ3か月後の11月14・15日に開催する段階になってきました。この研究大会は、第1日目の全体会は、県民文化ホールで、第2日目の文科会は、甲府市を中止に、9会場10分科会に分かれ、実演授業や提案がなされ、研究会がもたれます。参加者は、関プロ各都県から約1,250名が予定されています。

研究主題は「生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う」であります。21世紀を予測する中で、技術・家庭科教育として、今日考えたり、実践しなければならない方向性を求めて、研究や実践を積み重ねて、学習意欲を高めたり、学び方を学ばせる授業をどう仕組むか、評価を含めて研究してきたものを全体会や分科会で、それぞれの立場から発表をすることになっています。

今回の第24回山梨大会は、本県開催3巡目になります。会員の数は少なくなっていますが、先輩の残してくれた偉業に学び、協力合せて、成功させるよう頑張ろう。

## 第24回 技・家関プロ山梨大会実行委員会 総務部報告

総務部長(甲府東中校長) 深 沢 六 郎

残暑ことのほか酷しかった夏季休業期間が明け、大会まであと2カ月余りとなった。

総務部の所管する業務は、運営部・編集部・研究部の所管に属さないすべての事項を担当するわけであるが、主な係り分担として、渉外、庶務会計、広報、展示、宿舍、輸送、視察の係りをおき、各支部選出による下記の先生方のご尽力で活動が展開されている。

総務部の業務は事務局の業務と重複する部分が多いので、文字通り二人三脚の形で予定通り着実に業務を消化しており、その進捗状況は、ほぼ順調であると言える。

総務部関連の主な経過は次の通りである。

- ◇ 60. 5. 10 関プロ理事・事務局長合同研修会開催、於ニュー・芙蓉。千葉大会の報告と反省。山梨大会の運営と参加案内、表彰者、原稿締切り日、大会参加者1,300人を予定。埼玉大会への引継ぎと運営構想など。
- ◇ 60. 5. 14 準備委員会総務部・運営部合同部会開催、於附属中。広報係大会集録の編集刊行業務を新たに引受け承認。
- ◇ 60. 5. 20 山梨大会案内状(大会要項)印刷完了、各都県に発送配布。
- ◇ 60. 6. 18 大会の宿舍、ホテル湯伝・石和グランドホテル予備調査実施。客室、宴会会場、駐車場等の適格性を確認。
- ◇ 60. 7. 4 準備委員会全体会開催、於附属中。大会実行委員会の組織、各部門の準備進捗状況、分科会の運営計画案、大会諸役員の委嘱、大会要録・参加者名簿等の編集計画など審議。この折全体会駐車場の管理を総務部輸送係に移管することを決定。

総務部として業者展示を協議、出展業者の内状及び案内状発送を係りに一任する。

◇ 夏季休業中は各係ごとに業務を進め、展示や輸送の計画が煮詰る予定である。

今後予定されている大きな業務は、大会参加者数の把握をもとに、宿舍割当、輸送計画の見直し、視察計画細案決定、参加者名簿の編集協力等があり、広報係は大会集録の編集計画を立て、刊行準備にかからねばならない。

### 山梨大会実行委員会総務部役員組織

部 長	深沢 六郎	甲府東中	総括渉外
副部長	渡辺 直成	南都西桂中	同
同	石田 義岡	東八笛南中	同
同	宮川 逸雄	甲府北東中	同
同	赤池 功	南巨鯨沢中	同
主 任	中山 安正	北都上和田小	庶務会計
同	辻 八重子	山梨北中	同
広報係	石丸 洋一	北巨葦崎東中	
同	桜井 玲子	北巨須玉中	
同	小松 幸子	南巨増穂中	
展示係	塩沢 雄市	西八市川南中(主任)	
同	深沢 二男	北都猿橋中	
同	岡田 豊子	北都大月東中	
同	芦沢 辰文	南都河口湖南中	
同	相吉美智子	南都吉田中	
宿舍係	柳沢 豊	東八石和中	
同	若月 恵子	東八一宮中	
同	日野原美智子	甲府南中	
輸送係	川崎 将人	中巨玉幡中	
同	青木さとみ	中巨玉幡中	
視察係	佐々木与比古	東山山梨南中	
同	土屋満津子	東山山梨北中	

## 運営部の活動と会員各位へのご協力をお願い

運営部長(桐原中校長) 佐藤 昭光

### 1. 現在までの活動状況

昭和58年に発足した運営部は、関プロ企画委員として部長・副部長・主任の7名と、各支部より選出された男女各8名計16名の委員によって、山梨関プロ大会をめざして活動を開始した。運営部の活動内容からして、早くからの積み上げの研究や活動の必要性もないことから、前回成功した山梨関プロの実施要項を基本にすえ、昭和59年の千葉大会を運営部全員で見学して、そこで学びとった必要事項を加味し、今回の山梨大会に備えようということに決定した。その結果、本格的な運営部の活動は今年4月以降となった。この間、委員の半数が入れ変わったが運営部の活動にはほとんど支障はなかった。

山梨関プロ大会の運営は大きく分けて、全体会と10の領域別(教育課程も含み)分科会となるわけであるが、全体会は当然運営するわけだが、10の分科会は運営部で運営することは不可能である。10の分科会運営については、分科会会場設営・運営準備要項を本部と運営部で立案し、それに若干の資料を添えて、各分科会会場校の校長・教頭・教務主任・技家主任の各先生方と技家研分科会支部責任者の先生方に、誠に申しわけないわけですが分科会運営の全部をお願いすることになります。すでに第1回目のお願いは昨年度会長よりされているわけですが、2学期早々再度のお願いをする運びとなっています。該当されます先生方には、ぜひともよろしくお願い致します。

### 2. 全体会運営の係り分担 (○印責任者)

- ・会場係 ○石井、長田、応援者南部6名、中巨6名、甲府6～8名、開会式 研究発表、講演会、閉会式等の会場設営
- ・進行係 ○根津、近藤、式次第 時間設定、壇上案内
- ・記録・写真係 ○沢登、大石、応援者津金(坂下中-写真)、石合(上中-記録)、望月(増穂中-録音)、提案・質疑応答、講評の速報、集録用記録
- ・接待係 ○大竹、小松、応援者中巨3名、60名程の湯茶接待
- ・厚生係 ○岡田、小林、応援者小佐野(湖南中) 救護、昼食配布
- ・アトラクション係 ○遠藤、石井、南西中のマーチングバンド(交渉中) 山梨紹介映画(検討中)
- ・放送係 ○井口、葉袋(依田)、横内元アナウンス 進行及び諸連絡放送
- ・受付係 ○土屋、関本、応援者北都6名、東山6名、大会要録、昼食券の配布
- ・案内係 ○植松、遠藤、来賓リボン、控室、会場案内

### 3. 今後の予定

- ・9月10日 全体会場文化会館小ホール 実施見分、全体会場準備最終会議
- ・9月中旬 分科会運営依頼及び説明会
- ・10月下旬 運営部・応援者合同会議
- ・11月上旬 要録・食券配布の準備作業と運営部最終会議

※ 職名、校名、氏名は本年総会資料参照

# 第24回 関ブロ山梨大会の研究要録編集作業について

編集部長（竜王南小校長） 竹内 元彦

## 1. はじめに

本県で第3回目の関ブロ大会が開催されることにつきまして、この道一筋に仕事をしてきた者にとっては、感慨無量の感があります。

第1回目には、技術の理論を現象を通して理解させるための、指導細案と、教具についての研究発表が主になされました。第2日目は、一人ひとりの技術的能力を伸ばす授業のくふうでした。第3日目の今回は、生徒自らを課題にとりくませる授業のあり方が設定され、私たちは事前の仕事として、要録の編集を担当することになりました。

## 2. 関ブロ企画委員会編集部の活動

2年前の58年に山梨関ブロ企画委員会が組織され、編集部は私たち20名が担当しました。

それから幾度かの会合をもって、編集方針や、計画などについて検討して、次のように決定し作業にかかりました。

### (ア) 編集方針

- 本大会の全容がわかりやすくするために、組織的に編集する。
- 今後の授業に十分生かされる資料になるようにする。
- 研究者の意図が確実に表現できるようにする。
- 字体や活字の大きさなどは、見やすいようにする。
- 原稿についての構成は、誤字雑字の訂正を原則とする。

## (イ) 研究要録等の編集計画

分科内容	編集担当者	備考
もくじ	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
索引	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
大会要項	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
分科会	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第1分科会（水産加工）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第2分科会（食品加工）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第3分科会（繊維）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第4分科会（電気）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第5分科会（栽培）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第6分科会（動物）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第7分科会（養蚕）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第8分科会（建築）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第9分科会（看護）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第10分科会（看護）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
第11分科会（教育）	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
大会要項名簿	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
分科会名簿	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者
編集要項	・ 編集 渡辺	分科会編纂者 全体会編纂者

計画の達成状況につきましては、8月中旬の時点で、各分科会の原稿が大部分集まり、構成が終了しました。参加者名簿や広告が遅れるので、別冊として集録する予定になっております。その他の分野でも仕事が精力的に行われておりますので、計画通りに9月初旬に編集が完了し、10月10日には要録が完成する見通しがついております。尚、大会の集約としての研究集録につきましては、なるべく早い時点で発刊することになっております。

## 3. おわりに

調和のとれた人間形成をめざす、学校教育の中で、自らの頭脳と労作の相関作用を育てる、総合的教科でもある技術・家庭科の教育研究が増々深められるように、本大会の成果を期待いたします。

## 第34回全日本・関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会 山梨大会を終えて（研究集録より）

山梨大会総務担当  
齋藤章

山梨県が関ブロ大会を開催するのは、今回で4回目である。いずれの大会へも参加した私にとって、初回の新採用時での大規模な研究会であるという印象から出発し、2回目は製図の提案、3回目は大会事務局長そして今回は大会総務（副運営委員長）という重責を担うやりがいのある仕事と共に歩んできたと言っても過言ではない。

しかし、年を追うに従って研究会員総数が減少し、本年度は173名（101中学校）という最小規模の本県に於ける研究大会は、研究の効率化は勿論その運営においても非常に大きな負担を負いながらの取組みが要求された。

このような厳しい状況のなかで12分科会を設営し、3年前に各郡市ごとの領域分担を決めて取組みを開始したが、研究内容の深まる途中で小澤研究委員長が異動により変更する事態が発生し、その上研究会員の年齢が大幅に若返るなど不安を抱えての出発であった。

反面、会員数が少ないからこそまとまりもよく、全員が研究・運営の両面を分担することが当然のこととして受け止められ、研究活動も盛り上がっていったことも事実である。

今回の研究大会は1,500名に手が届くほど県内外からの参加者を得て、無事幕を閉じることができた。この3年間の長きにわたって支えて下さった文部省をはじめ山梨県教委、各市町村教委、山梨大学、山梨学院短期大学、農林高校さらに全日本・関ブロ地区中学校技術・家庭科研究会及び分科会を引き受けて下さった各中学校等多くの方々の御援助があったお陰である。

他県からの出席者の研究意欲が感じられたのは、次のような数字からも判断できる。

大会初日の全体会は、約300名が参加するなかで幕が上がり、11時の段階では650名

が受付を済ませるなど出足が非常によかったのが今大会の特徴といえる。

各分科会での討議においても、100名程の参加者で始まり、最終の時間まで残って熱心に討議に参加した人数は、全ての分科会において50名を数えるなど従前の大会では見ることのできない質の高さを感じた。

『自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方』を研究主題に掲げた本県の大会は、課題解決的学習を取入れ、思考過程を重視する学習過程を仕組むことにより主題に迫ろうとした内容であった。

全体会終了後のアンケートから抜粋すると、以下のような意見が多数寄せられ、大会の雰囲気伝わってくる。

「会場が広々としていて気持ちよく大会に参加することができた。運営なされている先生方の対応も大変よく、清々しい気持ちで一日を過ごした。並々ならぬ御苦勞があったことと思う。ありがとうございました岩手県 河南中」  
「講演はこれからの教育の方向を探るのに大変意義あるものでした。東京」

大会要録の編集後記は『世界の大きな転換期に、私たちの日本社会も大きな変化をきざもうとしている。今、こういう時期に、中学校教育の役割やそこでの教師の仕事は、どういうものであったらいいのか?』と問い掛けている。

第34回全日本・関ブロ山梨大会の成果が今後の大会に生かされ、この問いに答えられるよう研鑽を積む決意を新たに、今後についていきたいと願うものである。

次回も成功するよう願いを込め、組織や予算などの資料を以下の頁に載せたいと思う。

平成5年11月1日

各都道府県教育委員会教育長殿  
各市町村教育委員会教育長殿  
各国・公・私立中学校長殿  
各中学校技術・家庭科担当者殿

第34回全日本中学校技術・家庭科研究大会  
第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会  
山梨大会準備委員長  
山梨県中学校技術・家庭科研究会会長  
篠原 茂

第34回全日本中学校技術・家庭科研究大会  
第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会  
**山梨大会第1次案内**

- 1 期 日 平成7年10月25日(水) 理事会 午後 3:00 ~  
10月26日(木) 全体研究会及び講演 午前10:00~午後3:30  
10月27日(金) 公開授業研究及び分科会研究 午前 9:30~午後3:20  
10月28日(土) 教育視察(山梨県内の文化財視察)
- 2 主 催 全日本中学校技術・家庭科研究会  
関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究会  
山梨県中学校技術・家庭科研究会
- 3 共 催 山 梨 県 教 育 委 員 会  
(申請予定) 山梨県市町村教育委員会連合会  
関係市町村教育委員会
- 4 後 援 文 部 省  
(申請予定) 全 日 本 中 学 校 長 会  
関 東 甲 信 越 地 区 中 学 校 長 会  
山 梨 県 公 立 小 中 学 校 校 長 会  
社団法人全国中学校産業教育教材振興協会
- 5 研究主題 『自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方』
- 6 指導助言者(予定)  
文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官 佐藤 勉 先生  
文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官 河野 公子 先生  
関係各都道府県教育委員会指導主事  
関係各都道府県関係大学学部教官  
山梨県教育委員会関係指導主事・研修主事 その他関係者

7 全体会会場 山梨県立県民文化ホール 山梨県甲府市寿町21-1  
(0552-28-9131)

8 分科会会場

分科会：領域名	会場学校名	会場校所在地	電話番号
第1：木材加工	長坂中学校	北巨摩郡長坂町長坂上条1608	0551-32-2242
第2：電 気	勝沼中学校	東山梨郡勝沼町勝沼761	0553-44-0152
第3：情報基礎	白根巨摩中学校	中巨摩郡白根町飯野2860	0552-82-2051
第4：機 械	山中湖中学校	南都留郡山中湖村山中341	0555-62-0103
第5：金属加工	甲府北中学校	甲府市大和町4-35	0552-52-4804
第6：栽 培	八田中学校	中巨摩郡八田村榎原620	0552-85-5252
第7：家庭生活	竜王北中学校	中巨摩郡竜王町竜王420	0552-79-7200
第8：食 物	山梨北中学校	山梨市小原東359	0553-22-0200
第9：保 育	笛南中学校	東八代郡中道町下曾根270	0552-66-3861
第10：被 服	韭崎東中学校	韭崎市藤井町南下条371	0551-22-2635
第11：住 居	甲府南中学校	甲府市湯田2-21-24	0552-33-1368
第12：教育課程	甲府北東中学校	甲府市大手2-4-18	0552-53-1388

9 事務局

研究会会長 篠原 茂 (竜王北中学校校長)

〒400-01 山梨県中巨摩郡竜王町竜王420 (0552-79-7200)

FAX (0552-79-8862)

事務局長 入蔵 靖彦 (甲府西中学校教諭)

〒400 山梨県甲府市飯田5-13-1 (0552-22-1378)

FAX (0552 22-1374)

第34回全日本・関プロ総務担当 斎藤 章 (甲府北西中学校教頭)

〒400 山梨県甲府市山宮町538 (0552-51-7011)

FAX (0552-51-4212)



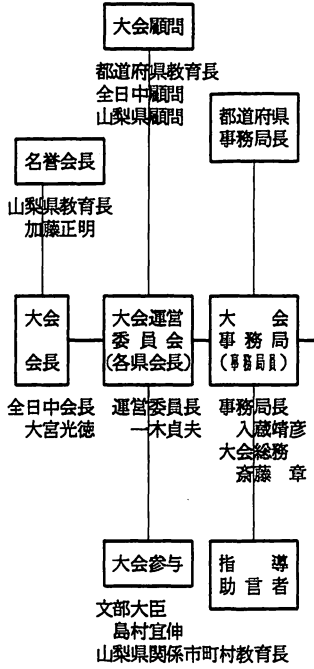
平成7年10月27日(金)分科会運営時間設定表(案)

内容：流れ	金属加工(北中)	住居(南中)	教育課程(北東中)
受付 9:00～ 9:45	坂本公彦(南) + P T A	戸田・横小路・中込・佐野	藤巻賢司(東) + P T A
提案司会者打ち合わせ 9:15	第1会議室	被服室	視聴覚室
リエンテーション 9:45	小林 孝(西)	神宮司眞佐子(富竹)	鈴木 昇(附属)
9:55	プレイルーム	屋 休	屋 休
公開授業 10:00	金工室	木工室	屋 休
10:50	三科和久	土橋道子	杉本博之
移 動 (10分間)			
開会式 11:00			
司会進行	石田 宏(南)	神宮司眞佐子(富竹)	鈴木 昇(附属)
開会の言葉	小林 孝(西)	望月志津子(西)	太田一夫教頭
運営委員長挨拶	中村公明教頭	窪田博人教頭	石原成人教頭
会場校長挨拶	小沢豊彦校長	土屋圭司校長	五味弘行校長
来賓祝辞	甲府市教育委員会学校教育課長小林忠夫	甲府市教育委員会学校教育課指導主事 永田 徹	甲府市教育委員会教育委員長 遠藤 壽
来 賓	甲府市教育委員会学校教育課長小林忠夫 甲府市教育研究協議会会長 田中重富 長野県教育委員会指導主事 小原貞幸 山梨大学教育学部助教授 佐藤 博	甲府市教育委員会学校教育課指導主事 永田 徹 甲府市公立小中学校校長会会長 松野 めい 東京都立教育研究所 総務指導主事高橋ヨシ子 山梨大学教育学部教授 浅見雅子	甲府市教育委員会教育委員長 遠藤 壽 甲府市公立小中学校校長会副会長 数野武明 埼玉県立北教育センター指導主事 中山 静 山梨県教育委員会学校教育課指導主事 赤松 東
来賓紹介	中村公明教頭	神宮司眞佐子(富竹)	安部忠雄上九一色小校長
閉会の言葉	小林 宏(西)	佐野礼子(附属)	太田一夫教頭
本県提案 11:20			
司会・提案・記録紹介	小林 孝(西)	日野原美智枝(東)	鈴木 昇(附属)
司会者代表挨拶	小野一人(山梨)	日野原美智枝(山梨)	羽田英雄(山梨)
授業の反省 10分	三科和久	土橋道子	杉本博之
本県提案 20分	酒井秀樹	鈴木美奈子 研究概要～向山	長田 靖
協 議 20分	司会：坂井俊美(新潟)	司会：平賀信夫(群馬)	司会：大沼千博(千葉)
昼食休憩 12:10			
弁当受けとり	小林(西)・三科(北)	戸田まゆみ・横小路京子	石田剛士(計)藤巻賢司(東)
弁当引換	小林(西) + P T A	戸田まゆみ・横小路京子	石田・杉本 + P T A
来賓弁当校長室へ	三科(北)	中込あゆみ(東)	杉本博之
司会・提案者弁当	三科(北) 第1会議室へ	中込あゆみ 被服室へ	杉本博之
他県提案1 13:00	新潟県：後藤 直	東 郷 佐久間洋子・結屋啓子	埼玉：中村 正
他県提案2 13:20	長野県：小林 巧	群馬県 森 峯子	千葉：大野和樹
研究討議 13:40	司会：小野一人(山梨)	司会：日野原美智枝(山梨)	司会：羽田英雄(山梨)
14:10			
指導講評1 10分	山梨：佐藤 博助教授	山梨：浅見雅子教授	山梨：赤松 東 指導主事
2 10分	長野：小原貞幸指導主事	東京：高橋ヨシ子指導主事	埼玉：中山 静 指導主事
司会者代表挨拶	新潟：坂井俊美	群馬：平賀信夫	千葉：大沼千博
閉会式 14:30			
司会進行	石田 宏(南)	神宮司眞佐子	鈴木 昇
開会の言葉	小林 孝	望月志津子	太田一夫教頭
運営委員長挨拶	中村公明教頭	窪田博人教頭	石原成人教頭
閉会の言葉	小林 孝	佐野礼子	太田一夫教頭
会場片付 14:40	金工部員	家庭科部員	教育課程部員
15:30	会場校教師+生徒	会場校教師+生徒	会場校教師+生徒
その他	記録：中島(北西)	佐野礼子・戸田まゆみ	記録：松本 写真：石田
本場で用意する弁当は10個(校長1・副校長2・提案者3・司会者2・運営委員長1・提案者1)			

\* 指導助言者は来賓扱いで校長室へ。[開会式では来賓席] ←来賓紹介に含む

平成7年度 第34回全日本並びに第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会 山梨大会運営組織一覧表

☆ 全日中・関プロ実行委員会



<b>総務部 (企画部)</b> (斎藤章 顧問)	
部長	金勝武雄 顧問
副部長	長沼元江 顧問 清水禮子 中道南小教頭
主任	芦沢長文 顧問 山田順子 顧問
<b>運営部</b>	
部長	小林日出男 榎小教頭
副部長	岡部昭雄 榎中教頭 細田正二 玉穂中教頭 岡本郁男 新羅小教頭 石原成人 甲府南中教頭
主任	沢登守 大月 望月志津子 甲府
<b>編集部</b>	
部長	岩間孝吉 駒中教頭
副部長	塩澤雄市 大沼中教頭 三科一彦 群小教頭 望月力夫 駒中教頭
主任	上田真司 駒 日野原美智枝 甲府
<b>研究部</b> (一木貞夫 双葉中教頭)	
部長	中村公明 甲府北中教頭
副部長	市川隆雄 大沢小教頭 薬袋恒 駒中教頭
主任	長久保学 駒 小宮山幸枝 榎
<b>調査資料部</b>	
部長	関本幸雄 大月西小教頭
副部長	安部忠雄 北一色小教頭 太田一夫 大沼中教頭 (清水禮子 中道南小教頭)
主任	長田靖 榎 横内京子 駒

<b>係名</b>	<b>担当 者 氏 名</b>
庶務	入蔵靖彦(甲府)・鈴木昇(駒)・遠山八重子(榎)・土屋満津子(駒)
会計	小野一人(甲府)・[志村昭(駒)]
展示	小宮山節子(榎)・吉岡利彦(榎)・清水弘美(白根)・田中政巳(駒)・小泉奈穂子(大沢)
宿舍	志村昭(駒)・三浦明美(甲府)
送付	望月美彦(駒)・鍋田栄子(駒)・神宮司真佐子(駒)
昼食	小宮山節子(榎) [生徒作品の返却を確認：小宮山と望月]
<b>会場</b>	沢登守(大沢)
<b>進行・放送</b>	望月志津子(甲府)・里吉信二(駒)・加々木哲也(駒)
<b>記録・写真</b>	斎藤隆広(-名)・長田進(駒)
<b>接待</b>	古屋豊美(駒)・河野美由紀(榎)
<b>受付</b>	中込純子(駒)・中村燕代(駒)・石田宏(甲府)
<b>案内</b>	坂本妙子(駒)・鈴木利美(駒)・池田賢二(駒)
<b>資料集</b>	全体会 [岩間孝吉(駒)・三科一彦(群小)・窪田博人(甲府)]
<b>編集</b>	木材加工 [上田真司(駒)・那須文彦(駒)] 家庭生活 [小林寿美子(駒)・河野仁美(甲府)] 電気 [熊田浩(山梨)] 金属加工 [山口守(駒)・坂本公彦(甲府)] 食物 [氷田正子・後藤智美(山梨)] 機械 [岩間光(駒)・三井久(駒)] 小池佳子(駒二) 栽培 [剣持和宏(大沢)] 被服 [八巻みふ志(駒)] 情報基礎 [神宮寺透友(駒)] 住居 [日野原美智枝(甲府)] 教育課程 [羽田英雄(駒)・小野田耕二(駒)] 神宮司真佐子(駒) 保育 [沢登かほる(駒)]
<b>研究推進</b>	研究推進委員
<b>研究課題</b>	小林孝(甲府) 向山幸恵(甲府)
<b>提案</b>	河西修(駒) 石原幸子(駒)
<b>授業研究</b>	武井俊文(駒) 小笠原さつき(駒)
<b>分科会</b>	柳沢豊(駒) 渡辺直美(-名)
	切金力(駒) 上田雅子(駒)
	佐野和彦(駒) 佐野富美(駒)
	高左右浩(駒) 横内京子(駒)
	梶原将司(山梨) 小佐野富士江(山梨)
	清水英樹(七穂-) 井上敬子(駒)

第34回全日中・関プロ実行委員会委員名一覧

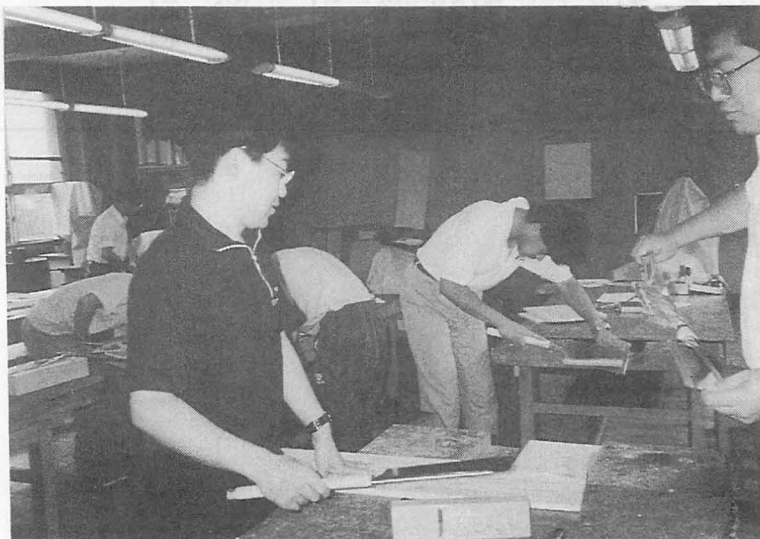
支 部 名	担当領域	総務部	運営部	編集部	研究部	授業者	提案者	
甲府市	技術	金属加工 教育課程		石田 宏 甲副	坂本 公彦 甲副	小林 孝 甲副	三科 和久 甲副 杉本 博之 甲副	酒井 秀樹 乙副 長田 靖 乙副
	家庭	住 居	神宮司真佐子 副	望月志津子 甲副	日野原美智枝 甲副	向山 幸恵 甲副	土橋 道子 甲副	鈴木美奈子 副
中巨摩	技術	情報 栽培		加々本哲也 副	神宮寺透友 副	河西 修 副	川崎 将人 乙副 遠藤 敏 乙副	依田 幸男 乙副
	家庭	家庭生活	小宮山節子 乙副 清水 弘美 乙副	中込 純子 副	小林寿美子 副	石原 幸子 副	杉野 保子 乙副	金子 志麻 副
東山梨	技術	電 気	吉岡 利彦 副	角田 学政 乙副	熊田 浩 乙副	武井 俊文 副	飯嶋 武志 副	碓井 篤 乙副
	家庭	食 物	土屋満津子 乙副	中村 恭代 副	後藤 智美 乙副 永田 恵子 乙副	小笠原さつき 副	上野さとみ 乙副	
東八代	技術	機 械	志村 昭 副	齊藤 隆広 乙副 齋田 俊哉 乙副	岩間 光 副	柳沢 豊 副		近藤 一行 乙副
	家庭	保 育	雨宮 淑美 副	河野美由紀 副		渡辺 直美 乙副	志村 晶子 副	
西八代	技術	木材加工			上田 真司 乙副	切金 力 副		
	家庭	被 服				上田 雅子 副		
南巨摩	技術	木材加工	望月 美彦 副	池田 賢二 副	那須 丈彦 副	佐野 和彦 副		佐野 和彦 副
	家庭	被 服	鍋田 栄子 副			佐野 富美 副		佐野 富美 副
北巨摩	技術	木材加工	中田 浩史 副	長田 進 副	小野田耕二 副	高左右 浩 副	高左右 浩 副	
	家庭	被 服	遠山八重子 副	鈴木 利美 乙副 坂本 妙子 乙副	八巻みふ志 副	横内 京子 副	栗冠真理奈 副	
南都留	技術	機 械	芦沢 辰文 乙副 山岸 正人 乙副	里吉 信二 副	三井 久 乙副	梶原 将司 乙副	梶原 将司 乙副	
	家庭	食 物	三浦 明海 乙副	古屋 豊美 副	小池 佳子 乙副	小佐野富士江 乙副		小佐野富士江 乙副
北都留	技術	栽 培	田中 政巳 副	沢登 守 乙副	剣持 和宏 乙副	清水 英樹 乙副		清水 英樹 乙副
	家庭	保 育	小泉奈穂子 乙副		沢登かほる 副	井上 敬子 副		井上 敬子 副
事 務 局		斎藤 章 副 清水 禮子 乙副 山田 順子 乙副 入蔵 靖彦 乙副 鈴木 昇 乙副 小野 一人 乙副	加々本哲也 副 広瀬 安男 乙副	神宮司真佐子 副 河野 仁美 乙副	一木 貞夫 乙副 長久保 学 乙副 小宮山幸枝 乙副 三枝 修 乙副 長田 靖 乙副 横内 京子 乙副			

平成7年度

第34回全日本中学校技術・家庭科教育研究大会  
 第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科教育研究大会  
**山梨大会予算案**

収入の部

項	目	金 額 (円)	備 考
会 費		4,200,000	3,500円×1,200人
負担金		1,200,000	
	全日中技家研究会	640,000	
	関プロ地区技家研究会	500,000	50,000円×10都県
	表彰者都県負担金	60,000	5,000円×12人
補助金		950,000	
	県教育委員会	500,000	
	甲府市教育委員会	200,000	
	全国産業教育教材振興会	200,000	
	教育公務員弘済会	50,000	
その他		1,605,000	
	県内中学校分担金	505,000	4,000円×101校
	紀要広告	100,000	
	研究会充当金	1,000,000	
合 計		7,955,000	



教師たちも実技研修する〈甲府支部〉  
 (平成9年7月22日(火)於・北西中)

支出の部

項 目	金 額 (円)	備 考
大会運営費	1,965,000	
全体会場費 会場準備費 分科会運営費 講師来賓費 運搬費 食料費 会場巡回費 指導助言者旅費 会議費	250,000 200,000 600,000 350,000 50,000 125,000 40,000 150,000 200,000	50,000円×12分科会 宿泊費・謝金  500円×250名  理事会・実行委員会
印刷編集費	3,530,000	
大会要録 大会報告書(集録) 大会案内状 理事会資料	3,000,000 300,000 150,000 80,000	2,000円×1,500冊
研究費	1,300,000	
大会本部研究費 分科会研究費	100,000 1,200,000	100,000円×12分科会
通信費	300,000	(含)生徒作品展
研究調査費	220,000	
調査資料専門部 分科会助言者謝金	100,000 120,000	
事務局費	200,000	
会議・運搬費 大会事務費	100,000 100,000	
予備費	440,000	
合 計	7,955,000	

## (5) 関プロ山梨大会

### ●第24回関東甲信越地区中学校技術・ 家庭科研究大会・山梨大会の研究経過

昭和50年度開催の第14回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会・山梨大会の実績を踏まえて研究に取り組むことにした。特に研究・運営の三原則は、各支部に根付いていた。三原則は、①技術・家庭科教育の普遍化、②研究の本質化、③組織と研究・実践の調和化、である。

第24回関プロ山梨大会も前回同様に各地区分散方式をとったが、スムーズに進めることができた。

#### 〈昭和55・56年度〉

昭和60年度本県で関プロ大会を開催することがわかりました。私は、当時研究担当でなく、研究会の会計係でした。通帳には3万円の残金で引継ぎを受けました。大会を開催するにあたってどのようにして資金を作ったらよいか迷いました。乏しい収入の中でできるだけ支出を切り詰めて2年間で100万円を貯えることができました。このときから関プロの準備が始まったと思っています。

#### 〈昭和57年度〉

研究主題の設定から始まりました。5月の初めに研究推進委員会を開催し、(1)子供たちが生きる21世紀はどのようなものであろうか。(2)子供たちの実態はどうか。(3)21世紀に生きる子供たちに培うべき基本的なものは何か、等を明らかにしながら研究主題を設定した。

2月の研究大会で「生徒自ら課題に取り組む、実践する能力を養う授業の在り方」を決定した。

#### 〈昭和58年度〉

研究主題を受けて、(1)研究の基本的考え方

韮崎東中学校長 一木 貞夫  
(当時、研究推進委員長)

①課題とは何か、②実践する能力とは。(2)研究のねらい、(3)領域観について、(4)課題解決的学習の導入について、等の研究を深めていった。

支部研究を中心にしながら研究を進めていった。

研究主題に基づいての学習会を2回開催した。

6月 上越教育大学 舟木美保子先生  
2月 国立教育研究所 研修主事  
片柳 實先生

2名の先生方からご指導を受けました。

県内の指導主事・研修主事の先生方や先輩の先生方には研究推進委員会に出席いただきご指導を受けました。

#### 〈昭和59年度〉

課題解決的学習の導入を図ったわけですがご理解いただくまでには時間がかかり、当時の県教育センター 研修主事の中村 公明先生には何回もご指導をいただきました。

- ・下位行動目標分析について
- ・領域観の見直し
- ・A表 B表 C表の作成について
- ・各領域毎に研究の中心になる事柄
- ・評価について 等の研究を進めた。

研究の進め方について、文部省初等中等教育局職業教育課 教科調査官の先生方にご指導をいただきました。

6月 村田 昭治先生 研究主題に基づいてのご指導  
2月 津止 登喜江先生 評価について

#### 〈昭和60年度〉

評価の研究を各支部で深める。  
授業案・提案原稿の作成と検討。

6月 横浜国立大学 前文部省教科調査官  
鈴木 寿雄先生にご指導をいただく

# 生徒自ら課題に取り組み、実践する能力を養う授業の在り方

山梨県双葉町立双葉中学校

教諭 一木 貞夫

山梨県八代町・境川村組合立浅川中学校

教諭 小沢 せつ子

## I はじめに

21世紀に生きる生徒たちには、「物事を分析的総合的に考えて、工夫・創造し実践でき、作る喜びやよりよい生活に改善できる」等の能力が要求されてくる。生涯学習の学習過程における学校教育の役割は、学習の仕方を学ばせることであり、いままでの画一的な学習以外にさまざまなア・ラ・カルト的な学習を用意し、生徒に能動的な学習を促進させることが大切だと考える。

生徒たちをとりまく環境の中から生徒の実態を考えてみると、生徒の中で頭や手を使っての作業を直接経験することは少い。その為生活の中で技術を生かす工夫や物をだいに使うことがなかなかできない。また、勤労体験が少ないため、協調性や自主性に乏しい。更に興味ある分野には関心を示すが、困難なことに立ち向う強い意志力や実践力を持たない者も見られる。これらは、とりもなおさず人間疎外、人間性喪失の現象である。

しかし、生徒たちは、興味ある分野には高い関心を示すことから、すべての分野に興味・関心を持たせ、いかにこれらを持続させるかを考えることも実践する能力を養うことになると考える。

技術・家庭科の学習では、以上述べてきたことから考えて、生活と技術のかかわりを正しく理解させることである。その為には、生活の見方や考え方、更に行動の仕方を、技術の習得を通して身につけるようにしなければならない。このような力を身につけさせるためには、受動的な知識や技術の習得で終るのではなく、能動的な知識や技術の習得をはからねばならない。そうすることによって生きて働く力が身につけられてくると考える。この生きて働く力を身につけさせるためには、生徒たちに課題を持たせ、その課題を解決させながら知識や技術を習得させることが大切である。このようなことを繰り返し行うことによって、実践する能力は養われてくると考える。

いままで述べてきたことから、本県では、計画製作・整備などの実践活動を通して、学ぶ喜びを

味わせながら技術的課題を解決し、実践する能力を養うことが大切だと考え主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1. 課題とは

課題のとらえ方はいろいろあるが、本県では、本教科の一時間の授業の中で解決する課題とする。つまり学習課題である。学習課題とは、学習の展開にあたって生徒が直接学習の対象となる「技術的課題」をさしている。

課題を設定するにあたっては、すべての生徒に受け入れられるものや基本的な学習内容を含んだものでなければならない。また、下記のようなことに重点をかけて課題を考えた。

- (1) 生徒の感情が高められるもの(興味・関心)  
生徒が「よしやってみよう」「私にもできる」
- (2) 生徒が意欲をもって取りくめるもの  
生徒の持っている疑問「～をどうしても解決したい」

### 2. 実践する能力とは

技術・家庭科の学習では、計画・製作・整備などの実践活動が中核となって学習が展開される。この中で仕事の準備や手順を考え、よりよい方法を創出したり、仕事を合理的、能率的に進めたり積極的に取り組んで最後まで根気よくやり遂げたりする能力が養われる。

一方、本県の技術・家庭科担当の先生方に、次のようなことをたずねてみた。

- (A) 技術・家庭科の指導を通して、どんな生徒を育成したいのか。
- (B) 技術・家庭科の授業の在り方はどうか。

この質問の解答は — a: 工夫・創造できる生徒、b: 細部についても理解する生徒、c: 基礎基本的なことのできる生徒、d: 最後まで根気よく粘り強くやりとげる生徒、e: 適切な判断のできる生徒、f: 問題解決のできる生徒等があげられた。

これらの解答と技術・家庭科学習で養う能力とを考え合せ、実践する能力を五つに絞った。

ア. ものごとの本質を見抜くことができる(原理法則・知識の獲得)

イ. いろいろな問題場面に直面したとき、よりよい方法を選ぶことができる。

ウ. 実践活動の中で工夫・創造できる。

エ. 実践活動で最後まで粘り強くやり遂げることができる。

オ. 仲間と協力して作業できる。

実践する能力は、上記にあげた事項の他にも、いろいろ考えられるが、本県では5つのことが達成されたとき、実践する能力が養われたと考えた。

この五つの事項を『研究主題に関する事柄』として、以下あらわすことにする。

### Ⅲ 研究のねらい

研究主題に迫るため、次のような研究仮説を

設定した。

課題解決学習に依拠した授業過程において、課題の究明や解決思考の段階を重視した学習を展開すれば、生徒たちの学習意欲も高まり、実践する能力は養われるだろう。

このねらいを達成するために、次のようなことを具体的におこなった。

(1) 共通して各領域で取り組むこと。

① 学習内容を明確化した授業の構成

② 学習内容を組織化した授業の構成

(2) 各領域では、次の四つの事項のいずれか一つに重点をかけて取り組むこと。

① ひとり一人に目が向けられるような授業の展開

② 思考場面、作業場面で小集団の話し合いを組織化した授業の展開

③ 授業の中で疑問を持たせる授業の展開

④ 意欲や興味を喚起させる教材・教具の工夫と開発

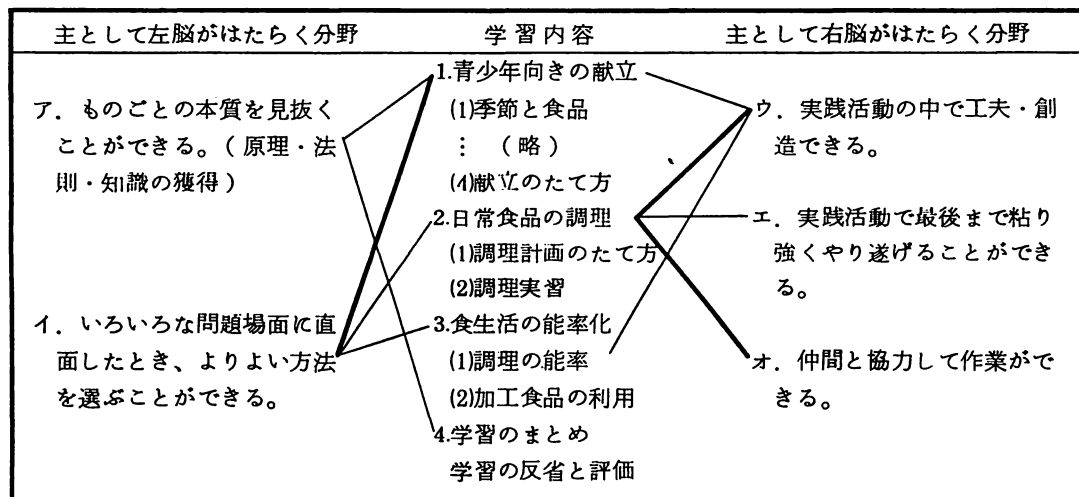
### Ⅳ 研究内容

#### 1. 領域観について

本県では、指導計画をA表、B表、C表で表すことになっている。A表とは、学習項目をあげ時間数を配当したものである。B表とは、A表であげた学習項目に基づいて、学習内容を書き、C表とは、一時間、一時間の授業細案をさしている。

ここでは、「研究主題に関する五つの事柄」と指導計画の関連を考え領域観をあらわした。指導計画A表では線で結び、B表では◎、○印をつけた。また、A、B表でそれぞれ理由づけをした。領域の特性に応じて、線結びや◎印のつけ方は異なり、領域の特徴をとらえようとした。

(1) 研究主題に関する事柄と指導計画A表(例、食物2)





線結びは、どの項目にもできるわけだが、領域でどこに重点をかけていくのか決め、理由づけをした。太線、細線はその軽重を表している。次に太線で結んだ理由づけの一例を示す。

オー２……調理実習の作業は班学習となる場合が多い。友だちと協力して能率的に学習がすすめられること。また、自己の責任をどのように果していくかが重要となる。

(2) 研究主題に関する事柄と指導計画B表

B表との関連表では、それぞれの学習内容が「研究主題に関する事柄」のどれに重点をおくのかを表したものである。勿論A表で線結びしたことを考慮している。その一例を次に示す。

学習内容と研究主題に関する事柄 学習項目	学 習 内 容			研究主題に関する事柄					
	時 数	行 動 目 標	知 考 で え る る	ア	イ	ウ	エ	オ	◎をつけた理由
1. 設計	16	(省 略)							
(3) 抵抗器のしくみとはたらき	(1)	・抵抗器の種類がいえ、しくみとはたらきが説明できる。	○	◎	○				・R、C、D、Trなどのしくみとはたらきを学習することによって、それぞれの基礎的な事項を追求することになる。このことは、それぞれの部品の本質を調べることであり、将来いろいろな事を調べていく一助となる。
(4) コンデンサのしくみとはたらき	(1)	・コンデンサの種類がいえ、しくみとはたらきが説明できる。	○	◎	○				
(5) ダイオード・トランジスタのしくみとはたらき	(3)	・ダイオードのしくみとはたらきが説明できる。	○	◎					
		・トランジスタの種類がいえ、しくみとはたらきが説明できる。	○	◎					
(以下省略)									

2. 学習内容を明確化した授業の構成

まず領域の最終行動目標を考えた。この最終行動目標をもとにして、一時間、一時間の最終行動目標を考えた。更に一時間の最終行動目標から下位行動目標へと分析していった。

目標分析することによって、何を教えたいのかははっきりさせ、どんな授業を構成したいのかを明確にしようとした。

また、課題の設定や評価をどうするのか、生徒がどのような活動をすればよいかも併せて考えていくようにした。

領域によっては、この方法でなく、学習内容から指導過程を分析し明確化を図ったところもある。

3. 学習内容を組織化した授業の構成

一時間、一時間の授業では、課題解決学習に依拠して授業の設計をおこなっている。これをユニ

ットのレベルで、学習内容を組織化しようとしたものである。

ユニットのレベルとは、領域全体(20~35時間)又は、2~10時間のひとまとまりをさしている。

過 程	教師の活動	生徒の活動(行動目標的に)	教材の組織化
1.探 索	(見本などを見せる)		
2.課題の発見	(どうすればあのようなものがつくれるか)		
3.焦 点 化	(問題点のあらい出し)		
4.明 確 化	(どうやって問題点を解決していくのか)		
5.解決思考	(実験、実習などで確かめ考える)		
6.確 認	(検討・確認)		
7.完 成	(新しいことへの挑戦)		

(縦線が省略してある)

ここに示した7つの段階に照らしあわせながらユニットのレベルで見なおしをし、教材の組織化をはかった。生徒たちがより強い意欲をもって課題に取りくむことを願ったものである。

4. ねらいに基づいた授業の展開

(1) 授業設計について

Ⅲの項で述べたように、課題解決学習に依拠した授業を進めた。

授業設計するにあたって、まず大きな3つの段階を考え、次に細かいステップを考えた。

大きな段階とは、①課題の把握 → ②課題の究明 → ③課題の解決思考である。

細かいステップとは、次のようである。

- ①学習フィールドの確認
  - ②学習目標の確認
  - ③学習経験の想起・評価・補充 (課題の把握)
  - ④学習方法の確認
  - ⑤新教材の対面
  - ⑥学習課題の発見
- 
- ①学習課題の焦点化 (課題の究明)
  - ②学習課題の明確化 (課題の究明)
  - ③解決思考 (課題の解決思考)
  - ④課題解決の確認 (整理)
  - ⑤課題の発展

(2) 実践例

Ⅲの項で述べたように、課題の究明や解決思考の段階を重視し、この段階へⅢの(2)項の四つの手段のうちの一つに絞って授業を考えた。

また、どのような手段をとったのかを明確にするために、「研究のねらいと本時のかわり」という項目を設けた。

授業略案の一部を示す。

- ① 題材 (略)
- ② 目標 (略)
- ③ 学習課題 (略)
- ④ 研究のねらいと本時のかわり

本時は、ものごとの本質(原理・法則・知識)を見抜くことができるような授業をしくんだ。Trの $I_B$ と $I_C$ の関係について、生徒が課題意識を持ち、教具を使って意欲的に解決していくことをねらった。特に課題の究明や解決・思考の段階では、生徒たちが主体的に活動できるような教具を開発した。それは、二電源によるエミッタ接地回路をパネルに組んでベース側とコレクタ側にワンタッチの接続端子をつけた。そこへ発光ダイオード(LED)や回路計を接続できるようにした教具である。

課題の究明の段階では、LEDを接続して教具を自由に操作させ、Trの増幅の原理を獲得させようとした。解決思考の段階では、回路計を接続して、 $I_B$ と $I_C$ の関係を実験によって測定させ、増幅作用を生徒自らに確かめさせる。

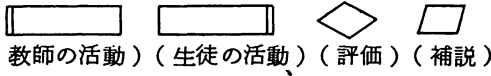
⑤ 展開

学習過程	学習の流れ	期待する生徒の活動	教師の活動	備考	
課題の把握		<ul style="list-style-type: none"> <li>・トランジスタのはたらきとは何だろうか。</li> <li>・<math>I_B</math>、<math>I_C</math> はどんな電流だろうか。</li> <li>・E-C間は導通がありません。</li> <li>・B-E間では、回路計の赤をEに黒をBにあてたとき導通がありました。</li> <li>・B-C間では、回路計の赤をCに黒をBにあてたとき導通がありました。</li> <li>・パネルを使って、発光ダイオードや回路計を使ってTrのはたらきを調べるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トランジスタのはたらきについて勉強します。</li> <li>・<math>I_B</math>と<math>I_C</math> はどんな関係があるだろうか。</li> <li>・E-C間、・B-E間、・B-C間の導通はどうだったでしょうか。</li> <li>・TPへTrの電極を図示しておき説明する。</li> <li>・今日は、パネルを使って、発光ダイオードをベース側とコレクタ側に接続する実験をします。</li> <li>・ほかに、発光ダイオードのかわりに回路計を使って実験します。</li> </ul>	NPN型のトランジスタで	
	学習フィールドの確認				
	学習目標の確認				
	経験の想起				
	評価・補充				
学習方法の確認					

展開で示したように生徒の活動欄を教師の活動欄よりも先に書いた理由は、次のようである。

これは、期待する生徒の活動を先に考え、その活動に基づいて教師はどのように、生徒に対していくかを考えるのである。生徒が能動的に活動できるように配慮したいからである。

学習の流れに使用したフローチャートの記号は次のようである。



## 5. 評価について

(1) 自ら課題に取り組んだのか、実践する能力は養われたのかの評価

学習をはじめるときにあたって

(そのときの気持を書かせる)

全然興味がない  
少し興味がある  
どちらともいえない  
かなり興味がある  
大変興味がある

この学習でわかったこと

学習中の疑問点

この学習を終えての感想

全然興味が持てなかった  
少し興味が持てた  
どちらともいえない  
かなり興味が持てた  
大変興味が持てた

		授業日								
項目	着席	時間前	チャイムと同時							
		遅刻								
視線	準備	すぐ向く								
		しばらくたって								
		おちつかない								
		全部ある								
		1つ忘れ								
		2つ以上忘れ								

	積極的						
	ふつう						

授業を進める段階	話し合い	おそい							
	作業	積極的							
		ふつう							
	むだり	おそい							
		自分で行う							
		時々友にきく							
	次時	いつも友にきく							
		ほとんどない							
		時々する							
		いつもする							
	わかった								
	きけなかった								

この評価表は、生徒が自己評価するものである。この結果を集計することによって、生徒自ら課題に取り組んでいたのか、興味・関心や意欲、耐性持続性がわかる。

学習過程	評価する項目
学習フィールドの確認	着席の状態 時間前    チャイムと同時    遅刻
	視線 すぐ向く    しばらくたって    おちつかない
学習経験の想起	とりくみ 積極的    ふつう    おそい
学習方法の確認	視線 すぐ向く    しばらくたって    おちつかない
新教材の対面	とりくみ
学習課題の発見	積極的    ふつう    おそい
学習課題の焦点化	作業 自分で行う    時々友にきく    いつも友にきく
学習課題の明確化	とりくみ 積極的    ふつう    おそい
解決思考	話し合い 積極的    ふつう    おそい
	とりくみ 積極的    ふつう    おそい
まとめ	視線 すぐ向く    しばらくたって    おちつかない
次時予告	視線 すぐ向く    しばらくたって    おちつかない

この評価表は、一時間の授業の流れの中で、教師の観察によっておこなう。評価の項目は、学習内容によってかわってくる。観察者は数名必要。

一時間をずっと観察するので、課題にどう取り組んでいたのか、学習への意欲や困難性の克服や耐性はどうかであったのか、また、持続的に取り組んでいたのか評価できる。

更に課題の究明～解決思考の段階を重視し、Ⅲの(2)項を取り入れるので、その手段がどうかであったのかも評価できる。

(北教大附属釧路中資料)

アンケート 氏名	
授業をうけて自分の気持ちに似ているものを五つえらびなさい。	
1 あまりよくわからなかった。	■ 2, 4, 6, 8, 14 $K$ つけた○の数 $\times 20 = A$ 3, 9, 11, 13, 15 $K$ つけた○の数 $\times (-20) = B$ $A + B =$
② よく考えることができた。	
■ 3 まずまず勉強がいやになった。	
④ いいことがわかってうれしかった。	
5 やさしすぎて、ほり合いがなかった。	
⑥ もっとこの授業がつづけばよかった。	
7 これという感じはのこっていない。	
⑧ とてもたのしかった。	
■ 9 で勉強した方がよくわかった。	
10 つらかったが、ためになったような気がする。	
■ 11 とても時間が長く感じられた。	
12 思うように考えたり したりすることができなかった。	
■ 13 おさえつけられるような気持ちだった。	
⑬ 勉強のしがいがあるように思われた。	
■ 15 だらけた気持ちですごした。	

この評価表は、学習効率や課題への取りくみを評価する。興味をもって学習に取り組んだのか、最後まで意欲的に取り組んだのか調べた。

(2) 研究主題に関する事柄(実践する能力)の評価 (№1)

	心身の発達	幼児の観察	おもちゃの設計と製作	保育と環境
探索	○アイ	○アウエオ		
課題の発見	○アイ			
焦点化	○		○アイ	

(以下省略)

(№2)

	ア	イ	ウ	エ	オ
把持テスト	○	○			
事前・事後テスト	○	○			
意識調査			○	○	○
興味・関心調査				○	
作品		○	○	○	○
考案設計図		○		○	○
感想文	○	○	○	○	○
教師による観察	○	○	○	○	○

№1、№2の表中の、ア、イ、ウ、エ、オは、研

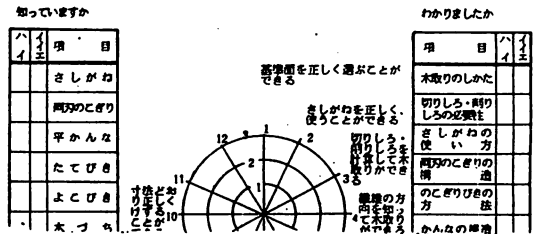
究主題に関する事柄(Ⅱ項)である。

№1の表は、ユニットのレベルの学習段階で、どの能力を調べたいのか明確にした。

№2の表は、ア～エの項目を調べるために、どのような評価方法があるか知るためである。そして、研究主題に迫られたかどうか評価する。

T・Sカルテ

木材加工 1年 氏名



この図は、T・Sカルテと呼び、生徒がそれぞれの項目を自己評価する。主に知識や技能を評価する。

以上評価方法について述べてきたが、知識・技能・情意面・態度を調べて研究主題に迫られたかを明らかにしようとした。

V まとめと今後の課題

昭和57年度からこの研究に取り組んできたが、小規模県のため、研究部員(約150名)ほどと少く非常に苦勞した。まだ十分とはいえないが、一応の成果をあげることができた。

21世紀にむけて、我々技術・家庭科教師に課せられた今日的課題の研究を進めてきた。

その中で

- ① 研究の方法・手段を県下の技術・家庭科教師が、共通理解し、お互いに励まし合い、協力しあつて研究がすすめられた。これは、大きな前進であった。
- ② 教師中心の画一的授業でなく、学習内容を分析し、細かい部分まで検討した結果、生徒は、課題を的確にとらえ、意欲的に授業へ臨むようになった。
- ③ 指導法や評価方法を更に研究を深めたい。本県研究を推進するにあたって、多くの先生方からご指導・ご助言を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

# 自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方

山梨県明野村立明野中学校教諭 長久保 学  
山梨県須玉町立須玉中学校教諭 小宮山 幸枝

## 1 はじめに

21世紀に生きる生徒達には、生涯を通じて学び続け、たくましく生き抜いていくための基盤となる力として、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力が要求されてくる。

そのため、中学校教育においては、生涯学習の基礎を培い、自ら学ぶ目標を定め、何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身につけさせることが大切である。また、個性を重視した教育活動を展開することによって、主体的に判断し、行動できる個性豊かな人間を育成していくことが必要である。

このような視点から、技術・家庭科の学習では、知識や技術の習得も大切であるが、習得した知識や技術を積極的に活用し、生活を工夫したり創造したりする能力と実践しようとする意欲的な態度を育てることをねらいとしている。

本教科の目標を達成するためには、実践的・体験的な学習の中で、基礎的・基本的な知識や技術を習得させ、学ぶ喜びの実感や成就感・充実感を体得させることが必要である。そうすることによって、興味・関心が引き出され、自ら学ぶ意欲が育ってくると考える。

さらに、生徒が自分なりの課題意識を明確に持ち、問題点の解決のために意欲的に自分の力を発揮していくような学習の場の設定と学習支援をすることにより、工夫し創造する能力が養われると考える。

そこで、本県においては、課題解決的学習を取り入れ、思考過程を重視する学習過程をしくむことによって、自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養うことができると考え主題を設定した。

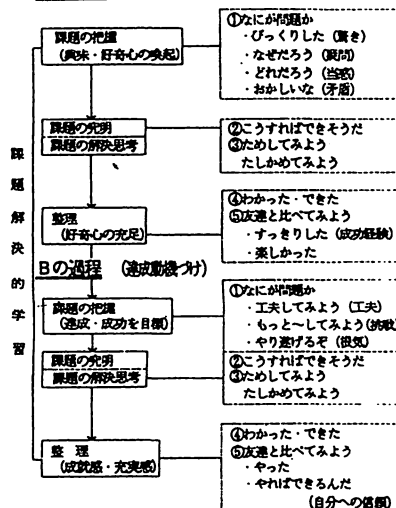
## 2 研究の基本的な考え方

### (1) 自ら学ぶ意欲を高めるとは

興味・好奇心が喚起され、やればできるという自分に対する自信や、やり遂げようとする気持ちが強くなることにより、課題に積極的に挑戦していこうとするやる気が高まってくるととらえる。

そこで意欲を高めるために、2つの過程を考えた。Aの過程は、興味・好奇心を引き出すための課題解決の場を設定し、成功感を味わわせ、やる気を育てる。Bの過程は、Aの過程で培ったやる気をもとに、新たな学習課題に挑戦させる。また、根気強く取り組ませることで困難を克服できたという体験をさせ、成就感や充実感を味わわせる。両過程を各授業や各領域などにおいて相互に関連を持たせながら発展的に進めていくことにより、生徒は自信を得るとともに、主体的に学習しようとする意欲が高まると考える。

Aの過程（認知的動機づけ）



(2) 学習場面において、工夫し創造する能力を身につけた生徒を次のようにとらえる。

- ① アイディアを多く出し、柔軟性に富んでいる生徒。
  - ・一つのことがらについて、アイディアや情報・資料を積極的に取り入れ、吸収することができる生徒。
- ② 新しい発想で独創的な考えを出す生徒。
  - ・独自の方法を考え出し、積極的に課題解決にあたらうとする生徒。
- ③ 疑問や問題に関心を持ち、探求心旺盛で深く追及しようとする生徒。
  - ・知的好奇心をもって、いろいろな情報を積極的に収集し、活用することができる生徒。
  - ・試行錯誤の繰り返しの中で、自分の考えを生かして解決することができる生徒。
  - ・問題解決への道筋や方法を自ら考え、工夫することができる生徒。
- ④ 自分でものをつくり出すことに興味をもち、作業の手順を考えて設計したり、製作したりすることができる生徒。
  - ・アイディアを実現させるための具体的な計画が立てられる生徒。
  - ・困難にぶつかったとき、自ら工夫して粘り強くやり抜こうとする生徒。
  - ・使用目的にあった作品の材料を選択し、機能を考えることができる生徒。
- ⑤ 学習した内容を生活の中で生かそうとする生徒。
  - ・学習した内容を自分なりに生活の中で具体的に生かそうとする生徒。
  - ・生活の中での課題を自ら見つけ、解決しようとする生徒。

### 3 研究のねらい

本県では、以下のように研究仮説を設定した。「課題解決的学習において、思考過程を重視した学習をすれば、生徒の自ら学ぶ意欲が高まり、工夫し創造する能力が養われるだろ

う」

このねらいを達成するために、次のようなことを具体的に行った。

- (1) 共通して各領域で取り組むこと。
  - ・思考過程を重視した授業の展開
- (2) 各領域では、次の事項を課題の究明や解決思考の過程に投入して具体的に取り組むこと。
  - \*学習の場の設定
    - ・思考場面での学習形態や学習方法の工夫
    - ・思考場面で実践的・体験的活動を取り入れた授業の展開
  - \*学習活動の支援
    - ・思考を助ける教材・教具の工夫と開発（思考を助けるコンピュータ活用の工夫）
    - ・思考をうながすような適切な発問の工夫

### 4 研究の内容

- (1) 課題解決的学習とは  
知識・技術を習得する過程を大切にする学習であり、知識・技術を生徒自身の体験を通して、再生産させる学習の過程であるため、研究主題に適した学習であると考える。  
学習課題は、教師が前もって用意してはあ  
るものの、生徒があたかも自ら発見したか  
のように提示することが効果的である。そう  
することによって、自分たちの課題として意識  
し、学習意欲が喚起される。  
本県では、課題解決的学習の基本過程を次  
の4つの大きな段階と、細かいステップに分  
けた。

#### 1 課題の把握

- ① 学習フィールドの確認
- ② 学習目標の確認導入
- ③ 学習経験の想起・評価補充
- ④ 学習方法の確認
- ⑤ 新教材との対面
- ⑥ 学習課題の発見

2 課題の究明 <仮説>

- ① 学習課題の焦点化
- ② 学習課題の明確化

3 課題の解決思考 <実証>

- ① 解決思考

4 整理

- ① 課題解決の確認・評価
- ② 課題の発展

(2) 思考過程を重視した学習とは

課題解決的学習の4つの基本過程の中で、本県では、課題の究明と課題の解決における生徒一人一人の思考過程を重視し、授業展開を試みた。

本県における生徒の実態を把握する中で、知識・理解は得意とするが、製作を苦手とする生徒や、理論的なものを不得意とするが、製作は得意とする生徒も見受けられる。このような生徒達の知識と技術を「思考」させることによって効果的に結びつけたいと考える。

「課題の究明」は、課題を解決をするためには、どのような学習をしたらよいかを理解させる過程である。ここでは、課題解決のための知識を理解し、解決方法を考えることを重視する。教師の役割としては、手立てや考え方をいく通りか用意し、必要に応じて与えていく。

「課題の解決思考」は、理解した知識・解決方法を適用して課題を解決する過程である。その際、筋道を立てて、論理的に考えることを重視し、生徒自身の手や頭で解決できたという成就感や充実感を味わわせるようにする。

このような「思考過程」を重視した授業を展開することにより、生徒自ら課題を解決するという学び方を習得することができ、自ら学ぶ意欲を高めることができると思われる。また、生徒一人一人の思考を大切にすることで、個性や工夫し創造する能力を育てることができると考える。

下に学習段階の思考を具体的に表現した例を示す。この思考過程にどのような視点を投入していくかが研究の大切なポイントとなる。

1 課題の把握 <課題意識>

- ① 何が問題かをとらえる
- ② 自分の体験と照らし合わせて考える
- ③ 触れる、調べる
- ④ 自分の課題としてとらえる
- ⑤ 解決の見通しを持つ

2 課題の究明 <仮説>

- ① こうすればできそうだという「仮説をたてる」こと
- ② 比べる、つながりを考える。
- ③ わかる場所とわからない場所をはっきりさせる。
- ④ 解決の方法を考える。

3 課題の解決思考 <実証>

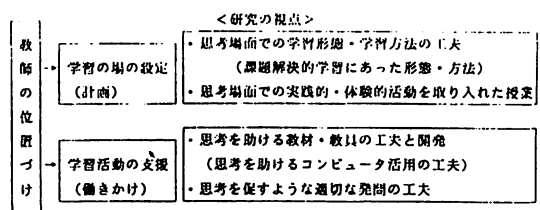
- ① たしかめてみようという「実践し検証する」こと
- ② 筋道を追って考える、確かめる。
- ③ 努力して挑戦する。

4 整理

- ① 取り組みの過程をふりかえる
- ② 結果をまとめる
- ③ 評価をする

<思考過程を重視した学習を進めるための視点>

思考過程を重視した学習を展開させるための研究の視点を次のようにまとめた。



各領域ごとに、これらの視点のどこに中心をおいて研究を深めるかを決め、授業の中で課題の究明や課題の解決思考の過程に投入し、具体的に研究を進めてきた。

(3)指導計画について

本県では、指導計画をA表、B表、C表で表わしている。A表とは、学習項目をあげ、時間数を配当したものである。B表とは、A表であげた学習項目に基づいて、一時間ごとの行動目標を明記し、さらに新しい学力観に準じて評価の観点と評価の重点を示している。C表とは、一時間ごとの授業細案をさしている。

指導計画B表例

「木材加工」 領域別 指導計画(年度)B表

学習内容と評価の観点 学習項目	時数	学 習 内 容				評 価 の 観 点				
		学習目標	関心・意欲・態度	知識・技能	思考・判断・問題解決	関心・意欲・態度	知識・技能	思考・判断・問題解決	生活の技能	
1. 木材と暮らしの生活	1	・木材・木製品と生活との関係がわかる。 ・木製品の特性が説明できる。	◎	◎	○	・木製品に関心を持ち意欲的に学習しようとしている。 ・木製品の特性を意欲的に学習しようとしている。	○	○	・木製品と他の製品とを比較しながら考えようとしている。	・木材、木製品と生活との関係が説明できる。 ・木製品の特性が説明できる。
4. 製作(基礎材) (1) けがき	8 (1)	・さしがねの各部の名称が言える。 ・さしがねを正しく使うことができる。 ・材料にけがきができる。	○	◎	◎	・さしがねの各部の名称を知ろうとしている。 ・正しい使い方を知ろうとしている。 ・「けがき」を意欲的にしようとしている。	◎	◎	・正確にけがきができるように工夫しながら行っている。	・「さしがね」を正しく使うことができる。 ・「さしがね」の正しい使い方の説明ができる。 ・さしがねを適切に使って、けがきをすることができる。
(2) けし	(2)	・のこぎりの各部の名称が言える。	○	◎	◎	・のこぎりの各部の名称を知ろうとしている。	◎	◎		・のこぎりの各部の名称が言える。

(4)授業実践例 (C表)

ねらいで述べたように、課題の究明や解決思考の過程を重視し、この過程へ研究の視点を取り入れ授業を考えた。また、研究の視点のどこに中心をおいたかを明確にするために、「研究主題に迫るための工夫」という項目を設けた。

- ① 題材
- ② 目標
- ③ 研究主題に迫るための工夫

本時は、かんな削り3時間目の1時限目であり、かんなという道具のおもしろさを知ってもらうために、ビデオや見本材と比較することから、平けずりができるようにする。特に、課題の究明や解決思考の過程では、思考場面で実践的・体験的活動を取り入れた授業を試みた。

④ 展開

学習過程	時	学習の流れ	生徒の活動	教師の活動	備考
課題の究明	10	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">[ 平削り① ]</div> <div style="text-align: center;">発表</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">[ 平削り② ]</div> <div style="text-align: center;">示範</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習材を用いて、平削りを試す。</li> <li>・うまくいかなかった点を発表する。</li> <li>・もう一度平削りを試す。</li> <li>・示範を見て、平削りのポイントをつかむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習材を用意し、平削りをさせる。</li> <li>・うまくいかなかった点を発表させる。</li> <li>・左手の押さえについて補説・示範し、気づかせる。</li> <li>・練習材を平削りをさせる。</li> <li>・姿勢や引き方などに留意し、もう一度示範する。</li> </ul>	練習材 平かん
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">[ 平削り③ ]</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・材料を平削りする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・材料を平削りさせる。机間巡視し、うまくできない生徒には個別に指導する。</li> </ul>	
		課題の解決思考			



(5) 評価について

評価とは「個を正しく理解し、その良さや可能性を引き出すための手立て」ととらえ、学習指導と評価の一体化を心がけてきた。

そのために、次のような留意点が上げられる。

- ・領域や題材の目標を分析し、観点別評価基準を設定して、評価計画の作成を行う。  
(B表)
- ・指導過程の評価を重視し、学習指導の改善や補充指導のために役立てる。
- ・生徒が主体的な学習態度を身につけるために、自己評価や相互評価を取り入れる。
- ・生徒の良さや可能性を伸ばすために、減点法でなく加点法で行う。
- ・評価の機会や場面に応じた評価方法を工夫し、多面的・継続的に生徒の変容を見る。

本県では、研究主題に基づいて、特に「関心・意欲・態度」「創意工夫」の評価を中心に、その効果的な評価方法について研究を進めてきた。

① 関心・意欲・態度の評価

「自ら学ぶ意欲」が高まったかを見るために、次の項目を参考にして、各領域や各題材にあった具体的な評価方法を工夫し、検証に努めた。

- (ア) 実習計画立案への積極性
- (イ) 毎時間の取り組み状況
- (ウ) 実習の速度
- (エ) 作品の提出状況
- (オ) リポートや作文

授業観察カード

1年 A組 (6月13日 火曜日)

目標 [ 材料のねじけり ] ができる。 ]

<p><b>J</b></p> <p>かがみだじ てうに削 れはのりこ</p>	<p><b>E</b></p> <p>かたりきり いて削り いた。</p>	<p><b>I</b></p> <p>かがみだじ かたりきり いて削り いた。</p>	<p><b>C</b></p> <p>かがみだじ かたりきり いて削り いた。</p>	<p><b>D</b></p> <p>同上</p>
<p><b>F</b></p> <p>15分間を か けていた。</p>				

(カ) 家庭実践の記録など

[具体例]

- ・教師による観察記録 (授業観察カード)  
<資料1>

観察記録は簡便で、重要な点を見落とすことのないように、観察する観点を決め、メモをとる。外に現れた行動を観察記録し、その内面的変容をとらえる。

- ・生徒の自己評価・相互評価 <資料2>  
感想・反省・質問・意見などを記述する箇所を設け、生徒の内面的変容を見る。
- ・教師による支援 <資料3>

次時に生徒の意欲がつかがるような支援や生徒の良さや可能性を引き出すような支援に心がける。

② 創意工夫の評価

「工夫し創造する能力」が身についたかを見るために、生徒一人一人の学習状況の変容や実践状況の把握に心がけた。

[具体例]

- ・教師による観察記録 (授業観察カード)  
<資料1>

- ・リポートや作品などの作成物

作品の構想、実習の進め方などにおいて既習事項の活用状況や創意工夫の様子、また、学校生活、家庭生活での実践状況などで把握する。

情意面の評価を中心に研究を進めてきたが、関心・意欲・態度が身につくためには、その基礎となる知識・技能も軽視できない。したがって、技能及び知識・理解の評価についても同様に行ってきた。

授業観察カードにおける現れの観点例

- ・自分なりに考えを持って、授業に臨んだり、友達や先生の話を聞いている。
- ・アイデアを多く出し、柔軟性に富んでいる。
- ・新しい発想で独創的な考えを出す。
- ・試行錯誤の繰り返しの中で、自分の考えを生かして問題解決に取り組んでいる。
- ・困難にぶつかった時、自ら工夫し粘り強くやり抜こうとしている。
- ・日表にある関心・意欲・態度の観点を参考にして、メモ的に記述した。

<資料1>

〈資料2〉

自己評価カード			
「食品添加物②」の授業を振り返って反省や評価をしよう。			
授業日：平成 年 月 日（ 曜日）			
2年 番 氏 名			
評 価 項 目	評 価 基 準		
	A	B	C
1. チャイム席は守れたか。			
1. 授業の準備は整っていたか。			
2. 食品添加物の安全性と問題点について説明できるようになったか。			
3. どのハムを選んだらよいか自分なりに考えることができたか。			
4. これからの自分なりの消費生活を営む方法を考えることができたか。			
5. 班での話し合いに進んで参加できたか。			
6. 自分なりの考えを全体や班で発表できたか。			
7. 班での実験に進んで参加できたか。			
8. 後片づけをしっかりとできたか。			
9. 今日の授業や学習は楽しかったか。			
どんなところが（ ）			
<質問・感想・意見>			

相互評価カード			
「食品添加物②」の授業を振り返って反省や評価をしよう。			
授業日：平成 年 月 日（ 曜日）			
2年 番 氏 名			
評 価 項 目	評 価 基 準		
	A	B	C
1. 班で協力して実験の準備や後片づけができたか。			
2. 班の人は自分なりの考えを出し合っていたか。			
3. 班の人は話し合いに積極的に参加できたか。			
4. 班の人は実験に一生懸命取り組んでいたか。			
<気づいたこと>			

〈資料3〉

3. アドバイス (詳しいことは先生に聞いて下さい。)

着実に作業を進めています。その調子で頑張らしましょう。
あなたが授業に取り組む姿勢にはく褒めさ、粘り強さ、熱心さ>があって素晴らしいです。他のみんなも学んでほしいところです。必ず良い作品ができます。
誰よりも楽しそうに取り組んでいるのがうれしいな。技術の魅力をもっと知ってほしい。その調子で頑張れ!
わからないことや、できないことは恥じない。困っていることなど一緒に考えるから、気軽にもっと積極的に質問して欲しいな。
実は技術の授業はカンニングOK! 友達がどのように作業を進めているのか、工具をどのように使用しているのが見てみよう。遅れを取り戻してみんなを驚かせよう。
今こそ、粘り強さが必要。あきらめずに頑張ろう。
このままでは、みんなから大きく遅れてしまいます。もっと心を引く編めて授業に取り組もう。

4. ワンポイントアドバイス (参考にしてみよう)

本目の方向を考えながら、もう一度寸法の見直しをしてみよう。設計の見直し。
工具の正しい使い方を教科書を見たり、先生に聞きながらもう一度確かめよう。
特に( ) についてです。けがに注意!
作業時間も限られています。もっと効率よく作業を進めよう。
仕上がりのことを考えて、作業を丁寧にしてみよう。

5. 先生からのアドバイス

--

4 研究のまとめと今後の課題

本県は、小規模県のため、研究部員が約100名程と少なく、各領域の研究を推進していくのに非常に苦勞した。まだ十分とはいえないが、一応の成果を上げることができた。

- ① 思考過程を重視した学習を展開するため、研究の視点を授業の展開の中のどこで、どのように生かしていくかなどを県下の技術家庭科教師が共通理解し、お互いに励まし合い、協力し合って研究が進められた。これは大きな前進であった。
- ② 生徒一人一人の思考過程を大切にしたい授業を仕組むことにより、生徒が自ら課題を持ち、主体的に解決しようとする意欲や態度が育ってきたことは成果である。
- ③ 情意面の評価の方法については、多面的継続的に評価を試みたものの、時間的制約もあり十分とはいえない。
- ④ 学習指導に評価を生かし、一人一人の意欲や可能性を引き出すという指導と評価の一体化については、さらに研究を深めていきたい。

本県研究を推進するにあたって、多くの先生方からご指導・ご助言を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

## (6) 歴代の指導主事、研修主事の立場から

技術・家庭科研究会に支えられて

立川 隆章

昭和56年4月から5年間、一旦、現場に戻った後、再度2年間と通算7年の山梨県教育委員会学校教育課勤務を振り返って思い起こされることは、山梨県中学校技術・家庭研究会に対して、どれほどのことができたのかという悔悟の念のみです。むしろ、作業を着て技術室で生徒と授業に取り組んでいた頃の方がはるかに研究会の活動にも参加できたように思えるのです。

県教委に入った当時は、「荒れる中学校」などと言われ、全国的に校内暴力の嵐が吹き捲っていました。県内でもいくつかの中学校で問題がおきました。そのつど、当該校や地教委との対応に追われ教科指導より、生徒指導に頭を痛める日々でした。しかし、そんな中にあっても、ある学校の訪問の際、壊された扉を技術室に持ち込み、黙々と修理する男子生徒を見かけました。また、体育館の破れた幕を繕う女子生徒もいました。生徒といっしょに作業をしていた技術科教師の「すさんだ生徒の心を癒すには、破壊による気晴らしより創造によるやすらぎを体得させる方が有効だ」と言い切ったことばがいつまでも胸の底に響いていました。

こうした生徒の姿や破壊から創造への道を指導された先生に接し、頭が下がる思いと同時に、荒れた学校を立て直すことの出来るのは技術・家庭科において他にはないとの確信を得たものでした。手と頭を働かして役に立つものを造り出す活動の経験は、技能の習得とともに豊かな心が培い、その心が人間に優しい技術と生活を生み出していくのだとこの学校訪問で教えられました。在任期間中には学校訪問や地区の研究会の招きで、県下ほとんどの市町村にお邪魔することができ、各地

で様々な経験とお教をいただき、たいへん勉強になりました。

指導主事にとって教育課程に関わる仕事は最も重要な業務です。このため文部省では、毎年、教育課程研究会や教育課程運営改善講座、指導主事研修会を開きました。そのような場合には学校現場から授業実践の記録等をいただいて発表や提案をしたり、直接先生方に出ていただいたりして、他県の先生方と討論や意見の交換をいたしました。本県の報告や発表は、技術・家庭科研究会をバックにして築き上げられたものだけに、ひときわ際立ったものでした。これも先生方が研究会を土俵として真剣に研究と実践に取り組んでこられた成果です。また、再度の学校教育課勤務の時は教育課程の改訂期で、新しい学習指導要領の伝達やら研究指定校の依頼やらで駆け回っておりましたが、その際にも研究会の協力を得て順調に仕事を進められました。

教科のほかに、道徳や特別活動などの分担もあり、技術科には特別活動が割り振られましたが、特に進路指導や勤労に関わる教育は専任とされました。たまたま文部省から勤労生産学習の研究指定校設置の指示があった時希望校を募ったところ、早々に規定校数を上回る応募がありました。その希望校のいずれもが、かつて産業教育や技術教育に関わったことのある教育長さんや校長先生のおられる学校でした。こうした教育の大切さを十分認識された方々が大勢いることに意を強くし責任を痛感したものでした。

学校教育課での勤務は、技術・家庭科研究会の先生方をはじめ、多くの方々の温かい支えとご協力があったればこそそのことで、心から感謝しております。(昭和56～60年度学校教育課指導主事)

私が学校教育課に勤務を命ぜられたのは、昭和61年度で山梨国体の当年度であった。それから丸2年間指導主事として県教育委員会の中で仕事をしたわけだが、自他ともに認めている技術・家庭科と関連した仕事は事務上のことが主で、教科内容を忘れてしまいうような日々だったように思う。それまであまり縁のなかった僻地教育や、道徳教育、それに教科書配布関連作業、さらには高等学校入試問題作成に関わっての事務局の一員としての仕事と、毎日は忙しく、新しい問題に気を張り詰めてはいた。しかし、技術・家庭科に関する仕事は年に数回しかなかった。

だから、このような原稿依頼は、喜ばしいことなのだろうが、思い出が少なく書きにくい。まして、その職を去ってから10年、昨今の感覚では3昔もたっているのに、そのころの資料も既に処分してしまい、当てにならない記憶を頼りに、頑張っ書こうと思ひ筆を取った次第である。

私が学教にいたこの頃は確か、子供たちの心の問題が大きく取り上げられ、道徳教育の重要性を誰もが感じだした頃であり、そのことと絡んで、中央教育審議会では次期学習指導要領編成について、各教科内容の検討がなされていた。技術・家庭科にあつては領域編成がどのようになるか、我々の気を揉ませていた時期でもあった。

こんな時、立場上、私が気を揉んでいたのは、男女相互乗り入れに関することと、標準履修学年逸脱の問題だったように思う。特に乗り入れ領域が標準履修学年で履修されないものは男子にあつては、約1/3に達していた。このことは小規模校の多い山梨では仕方がないことであつたかもしれないが、同じような規模の富山・石川でも1/5、1/4で

あり、全国指導主事会議などではやや肩身の狭い思いをしたことを覚えている。

また、男子の家庭系列の履修状況では、食物1や住居が多いのは当然として、食物1を履修せず、食物2を履修した学校もあつたように覚えている。

次に、あまり学校現場とは接触がなくなつて、年に1~2回支部研究会に招かれ、現場の状況を聞かされた中から考えてみると、いくつもの事項が思い出される。これは全国指導主事会議等でも共通項が見いだされた。

それは、例えば構想図や製作図が、構想意図を十分反映できるように表示できる力をつけさせたい。とか、道具や工具の使用については基礎的事項に重点をおきたい。などがあげられていた。

また、全国指導主事会議の中では、かんなの使用に当たつて、いろいろな意見が出された。木材加工1より木材加工2の方が楽である。要するに面積の広い板材よりも、角材の方が楽に切削できる。木表・木裏の切削法は教えても、使用する木材がラワン材のようなものではそれがわからず、木表・木裏のわかる木材でも、そんなに素性がよい材料ばかりを利用することは困難なので、そのような指導は削除するべきではないか。特にかんなの木口削りは、指導の範囲を超えているというような意見も出された。

更に、研究会としては、工夫・創造の能力を高めるための指導はどうすれば良いか、評価はどうあるべきかといった観点から、評価法や教具の研究が盛んであつたように思う。

終わりに、この研究会が現場の先生方の支えとしてますます発展し、この教科が子供達の未来の支えとなるよう祈念して筆をおく。(昭和61~62年度県教委指導主事)

現行の学習指導要領の告示は平成元年3月であった。告示の直後、平成元年4月から平成5年3月まで学校教育課に勤務した。指導主事として技術科担当の他、特別活動、進路指導、勤労生産学習、情報教育、教科書事務等の業務を担当し、今振り返ってみると初めてのことばかりであり、忙しい日々であったことが思い出される。

その時の改訂は、技術・家庭科にとっては発足以来の大きなものであった。内容及び履修方法が、家庭をとりまく環境や社会の変化等に対応し、男女が協力して家庭生活を築いていくことや、生活に必要な知識と技術を習得させることなどの観点から改善された。

新しい内容として、情報や家庭生活に関わる内容が加えられた。履修方法は、男子と女子とで履修領域の範囲が異なる改訂前の取り扱いを改め、男女同一の取り扱いとなった。

履修領域が11領域で構成され、このうち7領域以上を履修させることとなった。全ての生徒に履修させる4領域に加えて、生徒の興味関心により共通に履修させたい領域をどのように選び年間指導計画を立てるかが大きな課題となった。従来の男女相互の理解と協力を図る観点から男子、女子にそれぞれ家庭系列、技術系列の履修を原則とする男女相互乗り入れの形態を改め、今回の改訂による履修方法は男女別の差異が一切なくなった。学習形態についての条件は一切触れられていないので、男女同一の履修方法をとる以上、他教科と同様に男女共学の学習形態をとるのが自然であるが、従来の学習形態と男女の特性等による履修内容の相違が取り払われたことへの戸惑いは大きいものがあった。

従って、移行期の指導計画や完全実施の平成5年度からの指導計画の立案については、

施設・設備、学習形態、履修領域の条件以外に教師の専門性を考慮しなければならず複雑なものとなった。指導時間数についても初めて70から105時間という幅のある年間指導時間が示されたので、なお一層複雑になった。加えて2、3学年には選択の教科としても本教科が入っていったので、必修教科としての技術・家庭科の内容と選択教科の技術・家庭科の開設や内容について、校内体制の中で考えていく必要があった。

一方、新しく本教科に入ってきた情報基礎領域への対応も困難なものがあった。当時の学事企画課、学校教育課、教育センターの担当者が事務局となり、山梨県情報教育基本計画「ハイ・ユースプラン」が策定された。機器の整備や教職員の研修計画、特に技術科担当教員の情報教育研修もこの中で具体化された。また研修は、文部省においても計画的に情報処理教育担当教員等養成講座中学校技術を開催し、各都市から10日間研修に参加願い、ご苦労いただいたことが思い出される。

このように大きな改訂の移行から完全実施までの期間を学校教育課に身を置き、本教科の円滑な移行と実施に向け努めてきた。そのために、技術・家庭科研究会の総会や研究発表大会の際に時間をいただき、改訂の趣旨や具体的な指導計画の立案方法等説明の機会を設けていただいたり、教育課程講習会の開催や教育課程指導資料等の発刊などについても会員の先生方の多大な協力をいただいた。

今振り返って、学校現場で身につけたものの何倍も、多くのものを学ぶ機会に恵まれたと感謝している。特に技術・家庭科研究会の先生方にはご支援とご協力をいただき、大過なく職責を果たすことができ、厚くお礼申し上げます。上げたい思いである。(平成元~4年度学校教育課指導主事)

私は、平成元年度から3年間、県教育センター（現在の県総合教育センター）に、また平成5年度から4年間、学校教育課（現在の義務教育課）に勤務させていただきました。行政勤務について使命の重大さを感じた7年間であり、その毎日はいへん充実していました。

センターでの中心となった仕事は技術系列の研究でした。『技術的能力を高めるための指導方法の在り方』について、毎年、「しかけ」となる理論の構築と具体的仮説の設定などに頭を痛めました。しかし、常任講師・研究協力員の先生方や研究協力校の先生方のきめ細かいご指導やご援助により、一応の成果をあげることができました。今でも本当に感謝しております。

また、研修会で印象に残っていることの一つに、現在の「ポリテクセンター山梨」で実施した金属加工領域の実習があります。銅板を利用した塑性加工の研修でしたが、講師の先生がいへん熱心にご指導してくださいました。研修会后、参加したある先生から「授業で実践してみようと思います。」とのことを伺い、さっそく講師の先生にそのことをお伝えし、喜んでいただきました。私は、そのときの講師の先生に今年、生徒会の全校制作でたいへんなご無理をお願いしたところ、快くご承諾をいただきご協力をいただきました。研修会や研究会などの講師の先生から、本教科の指導や教材開発を含め、さまざまな教育活動に、今でもご援助いただけることをたいへんありがたく思っています。

平成5年度からは学校教育課へ勤務いたしました。同じ行政でありましたが、センター

とは大きく違う仕事にとまどうことばかりでした。学校訪問や県外への研究会・研修会、指導資料の作成など、学校教育課においても多くの先生方にご協力をいただきました。

心に残っていることの一つは、東京で行われた文部省主催の中学校教育課程研究発表大会に出席した時のことです。本県の発表が家庭系列に当たり、関プロ山梨大会のときの住居領域の実践発表を現場の先生にお願いしました。発表後の指導・講評の中で、文部省の調査官が本県の発表を高く評価してくださいました。住居領域の指導計画に問題解決的な学習を位置づけたこと、その実践のプロセスや、生徒のまとめた内容などがすばらしかったことなど、また、全国からの出席者に対して、ぜひ手本としてほしいことを熟っぽく述べられました。この住居領域ばかりでなく、一丸となって取り組んだ、県下の技術・家庭科担当の先生方のご苦勞に心から頭が下がる思いがいたしました。

私は学ばせていただいたことを大きな財産として、「技術・家庭科が大好きな生徒になれるよう、授業を工夫していくこと」に今後も努力していきたいと思っています。

終わりにになりましたが、力不足の私を温かく見守り、ご指導とご協力をくださいました、本研究会の先生方並びにお世話になりました皆様方に心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

（平成元～3年度教育センター研修主事）

（平成5～8年度学校教育課指導主事）

## 県教育センター勤務時代（9年間）の思い出

河口湖町立大石小学校  
校長 中村 公明

昭和55年度（当時35才）から昭和63年度までの9年間県教育センターに席をおき、研修主事として、技術科教育研究室担当・研究部員（センター事業部）等の仕事をしてきました。その他いろいろな仕事も手がけましたが、失敗・失敗の連続でした。しかし、9年間センターに勤務できたのも、多くの部長さん・研修主事さん・技術科教育関係者の心温まるご指導ご助言があったからであると大変感謝している次第です。センターを離れてから9年の年月を経ているのに加えて、健忘症の私ですから、思い出すまま・特に心に残ったことを記して、当時の皆様に対するお礼にかえたいと思います。

入所当時の合同研究会（基礎研究会）で一番苦勞したことは、「ここは日本」なのに、「日本語が通じない」いや「その用語の意味が、私自身分からない」という正に情けない状態を克服することだったのです。これは、直ぐにできるはずはなく約3年間ぐらいかかりました。ここに身を置かせてもらった機会を利用しながら、自分の納得いくまで教育研究の理論を勉強しようと決意したのもこの時でした。その甲斐あったのか？？？、いろいろな経験をさせてもらいました。関東教育所連盟発表大会や全国教育所連盟発表大会に参加し、日頃の研究成果を発表したこと。小・中新採用研修会や経験五年経過研修会で「学習指導をめぐる」という題で講義をしたこと。高等学校4校、中学校10校、小学校1校の校内研修（究）会へお邪魔してお話したこと。甲府市研究主任会での講演。総合協力校部会（県下小2校・中2校・高校2校）のチーフとして報告書をまとめたこと。全国教育所連盟への協力員として国立研究所へ毎月出張し全国調査を手がけたこと。並びに編

集委員として『確かな学力を育てるために（教育所連盟著）』の本の発刊に努力したこと。等々です。

技術科教室研究室の主事としては、「教材教具の開発」「学習指導法の工夫（特にプランニング）」を中軸に、長期研修の先生と共同で研究を進め、9年間教育科学研究（仮説検証型）の手法を用いてきました。この間、部屋の研究協力員の先生方に一方ならぬ援助をいただき、部屋の研究もそれなりの成果を得ることが出来ました。本当に感謝しています。また主事としての業務でもある研修会【技術科系列A（定員15名）・B研修会（定員15名）】では、電気領域・木材加工領域・機械領域についての講座を行いました。たった一つだけの実習室（兼研究室）と施設・設備がまだまだ整っていない環境なのに、延べ250人の先生方の受講をいただき、喜びと共に、先生方の研究熱心にいたく感服したものでした。

県技術・家庭科研究会とも常に連携をとらせていただきました。県技家研究会への提案原稿の検討会、関プロ研究大会への提案原稿の検討会には毎年参加し、「実践教育の大切さ」を勉強させていただいたことは、現在でも私の宝物となっています。また、関プロ山梨大会への提案原稿及び授業案（教授・学習過程・評価）の検討会へも参加し勉強させてもらうと共に、東山支部会場の指導助言者として、「今考えると赤面の至りである。」の講評をしたことも思い出の最たるものになっています。

現在小学校勤務ですので、少々県技家研究会にはご無沙汰しておりますが、一生懸命技術科教育の推進に努めたいと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。（昭和55～63年度教育センター研修主事）

平成4年から7年度の4年間、思いがけず山梨県総合教育センターの研修主事として勤務する機会が与えられました。平成4年度は情報教育センターが建設され、11月から総合教育センターとしてスタートした年でした。本教科においても、平成6年度より技術・家庭科に「情報基礎」領域が新設されるため、移行期を含めて、スムーズに移行できるよう、「情報基礎領域を指導できる体制」を整えることが最重要課題として課されました。

もとよりコンピュータの操作など得意ではなかったけれど、そんなことは言っておかず、担当教科の研修は自前ですよう諭され、約3カ月間必死でソフトの活用の仕方を勉強しました。そのお陰で、少しは人並み？に操作できるようになりました。

また、特徴ある研修として、年々環境教育の重要性がさげばれていますが、何か取り組めることはないかと考え栽培領域に関連づけた、有用菌を用いた「EMボカシ肥」への糸口を提起することができました。

一方、研究の取り組みについては、初年度は木材加工領域において、「作業先行型スパイラル学習」と名付けた学習方法を授業に取り入れてみました。要約すると次のとおりです。

- 1 「まず、やってみる」(作業先行)
- 2 「あれ、うまくできない」(課題発見)
- 3 「どうすればいいか？」(思考・示範)
- 4 「うまくできた」(成就感・次へ意欲)

この4つの段階を有機的に繰り返すことにより効果的な学習が成立するであろうと言う仮説を立て、授業実践をしました。なかなかの手応えがあり、この時の授業者の碓井先生はその後、この手法を取り入れた授業を展開しているようです。

2年目の研究は、ちょうど小野先生が研修員として研修に来られたので、翌年から正規に指導要領で「情報基礎」が位置づけられることを考慮し、「情報基礎領域における指導試案の作成」をテーマに取り組みました。指導時数を30時間とした場合の指導展開例を考案し、現場で活用してもらえぬ指導のサンプル(一事例)が提示できればよいと考え、研究を進めました。

3年目は、学校現場における本教科の実態を把握し、かつ適切な情報を提供することを主眼として、県下の国公立の全中学校を対象に教科に関するアンケート調査を実施しました。免許外指導の状況をはじめ、キットに依存傾向の製作題材の選定、情報基礎関連のハード・ソフトの設置状況等々、本教科が抱えている課題を明らかにすることができ、教育センターとして現場と密着した研究を推進することができました。

4年目は、前年度の研究結果を踏まえ、特にキットに依存した製作題材の問題点に着目し、「電気領域における製作題材の考案」をテーマに研究しました。研究の手順として、各種の製作題材についてチェックリストを作成し、望ましい題材を絞り込み、キットに頼らず、経費も格安で、手作りでき、完成の歓びを味わえる「電子オルゴール」、「電子オルゴール報知器」等を考案しました。

また、この年は関プロ山梨大会の年でもあり、立場上及ばずながら少しだけ、お手伝いさせていただきました。

以上のように、総合教育センターに勤務した4年間は、いろいろな面で節目の時期で、変化に富んでいましたが、現場を離れ、別な角度から教育を見るよい機会でした。

(平成4～7年度 教育センター研修主事)



## 研修主事に携わって

山梨県総合教育センター  
研修主事 石川正昭

私は、平成8年度から教育センターに勤務することになり、様々な業務に携わることになりました。そんな関係で以下のことについて述べてみたいと思います。

はじめに、技術科教育の研修についてです。本県では小規模校が1/3近くを占め職員構成上免許外申請でこの教科を担当される先生方も多い。そのため、現職教育の研修には特に力を注いできた経過があります。必修領域の木材加工・電気の研修会を2講座、機械・金工・栽培領域の実技研修会と情報基礎研修会の4講座を設け、できる限り指導法も含めた実技研修を主体に計画し実施してきました。

本センターは、施設設備が十分でないために、特に木工、金工、栽培等の研修は、できる限り施設設備の充実した近隣の学校や能力開発促進センター等の施設設備を借用して運営してきました。また、「臨地研修」として生産現場を知ることも大切と考えて生産工場等の見学も企画してみました。

研修会は、先生方が参加し易いように夏休みを利用して集中的に講座を組んでいます。厳しい暑さの中で、講義や汗まみれになりながら実技の指導に当たられている講師の先生方のご苦勞に感謝し、また、意欲的に研修に参加された多くの先生方の行動力が生徒たちに「生きる力」を培う大きな力となることを確信しています。中でも印象に残ったことは「木材加工」における「いすづくり」や電気等の教材教具づくりの実習は、時間の過ぎるのも忘れるくらい製作に熱中していました。また、悪戦苦闘をしながら作り上げたときの表情は豊かに輝いていました。これらの研修会を通じて得た指導力を教育実践の中で生かし、楽しくわかる授業の創造に大いに役立てられることを願っています。

次は、技術科研究室の研究についてです。昨年度は、「技術・家庭科における技術的思考力を培う研究」を主題に「木材加工領域における指導試案の作成」を副主題に研究しました。間伐材の丸太を用いた副題材の製作を通して、技術的思考力を培える指導計画の試案を作成したものでした。丸太からの発想を生かしながら加工し作品づくりを行う中で、生徒たちの嗜好が発揮され板材にはない思考力が培える指導試案を作成することができました。

本年度は、今日の環境問題の緊急性や学校教育における環境問題の推進を考えたときに、本教科は深く関わっており、それに対応した環境教育の情報提供が大切であると考え、「技術・家庭科における環境教育のあり方」を主題に「技術家庭科における環境教育に関する指導の実態調査を通して」を副主題に研究に取り組みました。調査では、県下の技術家庭科の先生方の協力を得て研究を推進することができました。目下、そのまともめに向けて努力をしているところです。

最後は、研究大会に参加したときに感じたことです。県技術家庭科研究会の総会に参加した時に、先生方の年齢が随分若返り、各支部毎の研究発表も関プロ大会の成果をもとに精力的に取り組み実践を重ねている様子が感じられました。サークル員が少ない支部が多い中、とてもまとまりのある継続研究が成果を上げているように思われました。これも先生方の日頃の実践の成果だと確信しております。

おわりに、この教科の進行のためにご支援・ご協力をいただいている県技術家庭科研究会の会長さんを始め会員の皆さんに心から感謝申し上げたいと思います。

山梨県技術・家庭科研究会が、このたび、「山梨の技術・家庭科40年の歩み」を刊行されますことに、心からお喜びを申し上げます。研究会活動の歩みを教育行政に携わった者として書くようお話があり、当時のことを思い起こし、筆をとりました。

私は昭和56年4月から62年3月までの6年間を学校教育課に勤務しました。その年の昭和56年度から中学校の新教育課程が全面实施されました。

さかのぼって、昭和51年12月に教育課程の基準の改善について答申がだされ、続いて52年7月に中学校の新指導要領が、同年10月には移行措置が告示されました。教育課程の基準は、ゆとりのある充実した学校生活のなかで知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成を基本方針として、勤労にかかわる体験的な学習の必要性が強調され、技術・家庭科では実践的・体験的学習の明確化、男女の履修方法の密接化、地域・学校・生徒に応じた内容の弾力的な扱いの三本の柱が出されました。以来、先生方は県教育委員会作成の移行措置手引書や講習会を受けて、新教育課程の趣旨、内容等の研究を深め、移行期間に実践研究を積み重ねました。研究会では研究推進委員会が、年間指導計画案や各領域の指導過程案を作成し冊子にまとめて各学校に配布し、先生方はそれぞれ地域・学校・生徒に応じた内容を計画し56年度の全面实施に備えました。当時、研究推進委員会の委員長は(石井・島村・赤池・横谷)先生方が順次なられ、私は副委員長として51年度から55年度まで研究推進を共にしました。ちなみに、指導計画の冊子は活字をタイプで、印刷と製本は放課後集まり手作りで仕上げました。先生方は全面实施に向けて研鑽に努めていました。

さて、56年度から新教育課程が全面实施

されて、教育課程編成上の諸問題が明らかになりました。それは、領域の選択と履修方法、指導内容に伴う適時・適量を踏まえた題材とその扱い方や評価、相互乗り入れの学習形態や学習指導法、実践的・創造的な学習の重視と仕事の楽しさや成就感の与え方等々でした。しかし、先生方は熱心に研究実践し問題点を克服すべく、努力されその成果を研究大会等で発表されました。また、研究会の調査資料部の全学校対象の調査結果からもその成果がうかがえました。

文部省では、昭和58年11月に全国中学校教育課程研究発表大会を開催し、技術家庭科では「基礎的事項の定着を図り、工夫・創造の能力を高める指導と評価はどのようにすればよいか」を研究主題に代表県の研究発表と研究協議がなされ、学習指導改善の方向を示唆されました。県教育委員会においても文部省と同一主題で、59年度と61年度に教育課程研究委員の先生方の協力をいただき「教育課程指導資料」を作成し、活用されるべく各学校に配布しました。

昭和60年11月に開催された第24回関東山梨大会では、生徒の自己教育力や実践する能力を育てる指導法の研究に先生方が一致協力して研究推進し高い成果をあげ、又、若い先生方が先輩の先生方の指導のもと熱心に実践研究している姿を拝見し、山梨の技術・家庭科がますます充実発展するものと思いました。

今、大きく変貌する社会にあつて21世紀を生きる子どもたちが、たくましくすこやかに成長することを願わずにはられません。先生方のお力に期待しますとともに、研究会の一層のご発展をお祈りいたします。

(昭和56～61年度 学校教育課指導主事)

東八代郡浅川中学校

教諭 土屋 満津子

「山梨の技術・家庭科40年の歩み」を発行されるとのことで、研究会から当時の技術・家庭科について原稿執筆を依頼されました。当時からだいぶ年月が経ち、整理してしまった資料もあり、定かでないことがたくさんあります。それはお許しいただくことにして、次に記します。

昭和62年度から平成2年度までが私の学校教育課に勤務した期間です。時の中央審議会、臨時教育審議会などで審議されてきた教育改革論議に基づいて、教育課程審議会から、21世紀へ向かっての「教育課程」の国の基準（現行の学校指導要領）の告示に向けての案が出て、告示・実施に向け県でも取り組んだ時期でした。

今第15期中央教育審議会が「21世紀を展望したわが国の教育のあり方」について答申をし、その理念の「自ら学ぶ資質や能力を中心に据えた『生きる力』」を育む教育について論議されている時ですので、改めて技術・家庭科の基本的なところについて考える機会になればと思い、現行の学習指導要領ができた背景及び内容について記します。

当時の社会について、まず教育課程審議会は次のように述べています。科学技術の進歩と経済の発展に伴って、物質的な豊かさが生まれるとともに、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化などが進み、社会の各方面に大きな変化をもたらした。これらの変化は、今後ますます拡大し、加速化が予想されるとしています。

また、「平等」「発展」「平和」を目標にした婦人の地位向上の動きが、国際的にも、国内的にも高まった時期でした。昭和60年（1985年）に開催された「『国際婦人の十年』ナイロビ世界会議」において、「国際婦人の十年」に掲げた目標を達成するため、西暦2000年に向けて努力を継続することが確認され、わが国でも様々な諸法則を整備したからでした。（このことは小・中・高等

学校の家庭科の内容や履修にかかわった）

以上の中での今回の改訂は、昭和52年に続く戦後5回目にあたる。社会の変化とそれに伴う生徒の生活や意識の変容に配慮しつつ生涯教育の基礎を培う観点に立って、21世紀をめざし、社会の変化に対応できる心豊かな人間の育成を図ることをねらいとしたもので、自己教育力の育成、基礎・基本の徹底、個性と創造性の伸長、文化と伝統の尊重が重視された。

技術・家庭科の改訂の要点は、基本方針として、①家庭をとりまく環境や社会の変化に対応し、男女が協力して家庭生活を築いていくことや、生活に必要な知識と技術を習得させるなどから、実践的・体験的な学習の一層の充実を図る。②情報や家庭生活にかかわる内容を加え、共通に履修させる領域を設定する。具体的事項については、①情報化の進展や家庭の機能の変化などに対応するため、「情報基礎」及び「家庭生活」の領域を設ける。②基礎的・基本的な内容の徹底を図る観点から構成を見直し、17領域から11領域にする。③履修方法を11領域から7領域にし、生活環境や家庭の機能の変化に対応するため、全ての生徒が履修する領域と選択する領域とにする。履修学年を一部指定とする。④選択教科としての「技術・家庭科」は第2学年および3学年とする。

以上、中学校「技術・家庭科」について記しました。小学校では、第1学年及び2学年に生活科が新設され、また高校では男女が履修する教科になったなど、改訂ではこの教科にかかわる内容が多くなり、強化されたということでした。

21世紀は「生きる力の育成」が重視されると言われています。同様の方向性をもつ技術・家庭科のますますの発展を目指して、この教科に携わる一人として、先輩諸氏に学びつつ頑張っていきたいと思います。

（昭和62～平成2年度学校教育課指導主事）

## 学校教育課時代の思い出

甲府市立富竹中学校

教諭 神宮司 真佐子

平成3年度より3年間、学校教育課に籍をおく機会をいただきました。教科以外にも、さまざまな仕事を担当し、貴重な体験をいたしました。行政の仕組みを知り、学校教育がどのような仕組みの中で動いているのか大いに勉強になったように思います。

この3年間、とくに印象に残っているのは、移行期間中の扱いです。平成3年度の入学生から新学習指導要領による移行措置が実施されました。新しく設けられた「家庭生活」領域はまだ履修することができず、1年生では家庭生活の代替として「被服」「住居」「保育」のいずれかを履修。さらに、情報基礎を除く9領域の中から7領域以上を選択する事。その際、「木材加工」「電気」「食物」の3領域と「被服」「住居」「保育」のうち1領域についてはすべての生徒に履修させること。などいくつかの条件の中で、各学校は、年間指導計画作成にあたって、どの学年でどの領域を履修するのか、配当する授業時数はどうするのか、実習題材は何にするのかなど検討を要する時でした。また、第3学年の時数が70～105時間と波形が打ち出され、不安や質問も相次ぎ、多少の混乱をまねいた時期でもあったといえます。また、今でこそ男女共学が当たり前になっていますが、3年生の学習形態をどうするかについても話題として出されていたのが印象に残っています。

そんな中で、とても気になったのが免許外教員の多さでした。先生方は苦勞しながらもとても熱心に取り組んでいらっしゃいました。しかし、複数教科の担当には所詮無理があり、とくに、複雑な移行措置に対しては知らない先生も多く、実態調査や学校訪問により、初めてわかって、びっくりしたという例も少なくありません。小規模校では、教員数の関係

で免許外の教員が教えている場合が多く「家庭科は女の先生ならなんとかなるだろう」という考え方も感じられました。担当教師からは「どのように教えたらいいのでしょうか」「ミシンなんて使えないのに・・・」など不安の声も聞かれました。これからの社会を生き抜く力をつけるためにも家庭科は大きな役割を担っています。免許外教師の問題はこれからの課題ではないでしょうか。

この3年間、小学校の学校訪問が数多くありました。これは非常に貴重な体験で、私は小学校の先生方から多くのことを学ばせていただきました。小中高の一貫性を図る必要が問われても、机上の研究にとどまってしまうことが多く、他校種の先生方と直接ふれ合い、話し合う機会はないのが現状です。小学校では、子どもの気持ちをひきつけ、わかる授業の創造のために、板書・発問・資料作りなどに多くの工夫がなされていました。とくに板書や掲示は参考にすべきものが多く、勉強させられました。学習内容については、中学校との重複・小学校段階での未履修内容などもあり、校種相互の交流の必要性を強く感じました。

たくさんのことを学ばせていただいた3年間でしたが、今後ますます複雑化・多様化していくであろう社会の変化に対して、直接的に対応できる教科であり、生きてはたらく力になることを確信し、これまでの経験を生かしながら、今後も生徒たちと学び続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、力不足の私を3年間、温かい目で見守り、支えてくださった諸先輩方、研究会の皆様方に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(平成3～5年度学校教育課指導主事)

## 学校教育課時代の思い出

甲府市立城南中学校  
教諭 赤松 東

私が学校教育課に勤務したのは、現行学習指導要領が全面実施された翌年の平成6年度から8年度までの3年間でした。その間、教科以外にもいろいろな仕事を担当させていただきましたが、技術・家庭科に関わる仕事に向かうときが最も嬉しいときでした。この3年間で、教科に関わる最も印象に残った出来事は、本県で平成7年度に開催された第34回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会山梨大会です。

平成6・7年度は県下で家庭科の先生方が約80名と大変少ない人数のなかで、お一人お一人が何役もこなしながら、それぞれの支部の研究を進めていらっしゃいました。微力ながら、私もいくつかの支部の指導案の検討会や授業研究会に参加させていただき、先生方と共に学んだことを懐かしく思い出します。ベテランの先生も、中堅の先生もお若い先生も、それぞれの持ち味を出し合いながら素晴らしいチームワークで研究に取り組んでおられました。

平成5年度に完全実施された学習指導要領の趣旨を具現化し、成果と課題を提案することが山梨大会に課せられた使命と受けとめ、どの題材でどういった提案をしようか、どういった授業を創ろうかと、各領域毎に新しい学力観に立って検討を重ねてまいりました。出産前の大きなおなかを抱えながら、また幼子を背負いながら夜遅くまで頑張っておられた先生方もいらっしゃいました。そういった皆さんの努力が大きな実を結び、素晴らしい成果をあげることができたのだと思います。一人一人が課題を自らのものにして、自分たちの力で課題解決にあたり、またそこから新たな課題を見いだしていく、まさに新しい教育

課程の趣旨に立った実践を自ら積み重ねておられたのです。大変なことも多かった分、私たち本県において技術・家庭科を担当する者にとっては、本当に勉強になったと思います。

もちろん、技術・家庭科研究会の会長先生を始め事務局の先生方の綿密な計画性に基づいたリーダーシップがあったことを忘れてはならないと思います。

平成8年度には、全国的に0-157による食中毒が発生し、高等学校の家庭科の担当者と共に学校給食の関連資料を参考にしながら調理実習上の注意事項をまとめて通知したことなどが思い出されます。このときは生野菜の取り扱い方や調理用具や食器などの消毒について多くの問い合わせをいただきましたが、先生方のご協力のおかげで1件の事故もありませんでした。

また、教育課程指導資料作成のための研究委員会では技術と家庭それぞれ2名ずつで精力的に研究を進め、資料をまとめていただきました。現場の多忙な生活のなかで委員の先生方は本当に熱心に協力してくださいました。このほかにも教科用図書選定資料の調査員、夏休みに実施している教育課程研究集会の講師、文部省主催の教育課程運営改善講座等での提案の依頼等、思い起こしてみると勝手なお願ひばかりしてきたように思います。しかし、技術・家庭科の充実・発展のためにいつもご支援とご協力をくださったみなさまのおかげで、学校教育課での3年間で何とか無事に過ごすことができましたことを、この紙面をお借りして改めて感謝申し上げます。

(平成6～8年度学校教育課指導主事)

昭和60年4月、私は家庭科教育研究室の研修主事として県教育センターへ赴任した。そこで最初に学んだのは自分の立場であった。「高校家庭科の部員とは考えるな。家庭科も校種で区切らず小学校から高校までを通しての家庭科という捉え方をせよ」ということであった。

主事の仕事のうち主なものは研修と研究である。家庭科についての研修会を企画し学校現場の先生方に研修・研鑽の場を提供することと、家庭科についての教科研究を行い、結果を授業実践に役立ててもらうことである。

研修会を企画する際に心掛けた事は小学校から高校まで系統性をもったひと筋の流れを持たせたいという事であった。そのため、毎年テーマを決め、それに沿って校種ごとに相応した展開のしかたで研修会を構成した。当時は高校での家庭科男女共修の実現をめざしての準備段階というべき時期であり、当然小中学校とは別に高校の研修会には男女共修については盛り込まねばならないテーマであった。男女共修の先進県である長野県赤穂高校から、湯沢先生を講師にお招きし、男女共修実践の苦労話や実態を話していただいた。また、技術・家庭科研究会の現会長・岩間先生に電子回路の基板作りの講師をお願いしたりした。来るべき共修の時代に向けて高校家庭科の先生方もハンダごて片手に熱心に取り組んだものであった。

平成になり、家庭科に性教育が表立って求められてきていた。平成3年の研修会には「性」を統一テーマに設定し、「家庭科の男女共修をすすめる会」の和田典子先生を講師にお願いし、半日、校種の垣根を取り払い、「家庭科で何をどう教えるか」を性の面から講演していただいた。小学校から高校までの

家庭科を担当している先生方が一堂に会して研修の機会を持つことができたのは私の7年の在任中、この時が唯一の機会であった。

研究活動の面でも小・中・高を通して系統性をもたせたいとの願いは同様であった。しかし研究では検証のため授業実践をしなければならないが小・中学校へ出かけて何時間も授業を行うことは当該学校の関係者でない限り不可能である。そこで学校から先生方に研修員としてセンターに来ていただき、共に研究活動をするなかで研究に基づく授業実践を可能にしたいと考えた。幸い校種別に3人の研修員の先生方において頂くことができた。中学校では現指導主事の網倉玉枝先生に来ていただいた。

研究協力員の先生方を御願する時も常に小・中・高の先生方に、可能な限りバランスよく加わって頂けるよう考え協力を依頼した。どなたも快諾してくださった。協力員部会は校種の特徴を紹介しあい、相互理解のため大いに役立ったと考えている。特に中学校技・家研究会からは、清水禮子先生、山田順子先生をはじめ、たくさんの実力ある先生方から力強い支援をいただいた。感謝に堪えない。

高校家庭科部会は50余名、女性ばかりという状況である。その中で長年経てきた目には男性も加わった技・家研究会の雰囲気は、きびきびしていて活発で、やはり男女が共に居ることが普通なのだという思いを改めてさせられた。生活する個人としては男も女もないのだから生活するための技術習得の機会は同様に与えられるべきだと思う。当然それを伝授する側も男も女も居て何の不思議もない。他県の例に倣って、山梨にも男性の家庭科教師が一日も早く現れてくれるのを期待したのである。

## これからの家庭科教育を考え続けた日々

山梨県立甲府西高等学校  
教諭 秋山 宏子

私が研修主事として総合教育センターに勤務したのは、平成5年度から7年度までの3年間でした。この期間は、家庭科教育にとって中高共に男女共修実施の過渡期であり、教科指導法や教材開発について、現場の誰もが模索していた時期でした。

教育センターに勤務する前は、高校においてひたすら女子のみの家庭科を担当していた私にとって、研修主事としての役目は重く、責任を感じた日々でした。男女が共に学ぶ家庭科の課題、これからの家庭科教育の展望について多くを考えさせられ、また悩んだ3年間でした。

しかし一方、この3年間で何よりも財産になったのは、研修・研究活動を通じて小中高・大学の先生方や民間の方々と出会ったことでした。特に、中学校技術家庭科部会の先生方との交流は印象に残っています。平成7年度の関ブロ大会に向けて、熱心に研究活動に取り組んでいた先生方の姿は忘れられません。わずかなスタッフにもかかわらず全員が一丸となりその責任を果たし、各地区ごとに動いた協力体制は素晴らしいものでした。授業実践、教材開発など、生徒の立場で生徒の活動を中心にした授業の工夫に大変感銘を受けました。今思えば、適切な助言も十分にできず申し訳なく思いますが、先生方と共に私も刺激を受けながら研究活動に参加できたことを大変感謝しています。

当時の勤務はこうした研究団体への出席もありましたが、現場の先生方の研修会の企画運営と家庭科教育研究室での研究活動が中心でした。家庭科教育の変革の中で、現場に役立つ教材は何かと日々考えました。パソコンを活用した授業、消費者教育や環境教育の指導法や教材を先生方に伝えるために努力した

つもりです。特に研究室の研究テーマとして取り上げた「小中高における家庭科教育の一貫性」については、家庭科教育が小中高を通して何を教えなければならないかを確認することができました。しかし、系統性という点において多くの課題があり、これから先の学校五日制の完全実施と共に時数削減が予想される現在、再度指導領域や学習内容の精選が必要になっています。この研究により、各校種ごとの横の関係だけでなく、小中高を通じた縦の関係が必要であることも痛感しました。教育センターの研修においても、合同研修会を企画しましたが、日程の都合がつかず、結局実現できなかったことを今でも残念に思っています。将来的に、合同研修会、研究会の実施を切に願っています。

家庭科教育のもう一つの課題だと思われるものは、教科の指導環境だと感じます。中学校においては、中規模校以下の学校では専任教員ではなく、免許外の先生方が家庭科教育を担当しています。免許外研修会において、他教科の先生方から聞いた苦労話や、実態調査の結果からも、全ての生徒に平等に学習を保証しなければならない点で課題が多いと感じます。また、中高の実験実習の授業を1対40で実施しなければならないことも課題です。危険への対応はもちろんですが、生徒の個性を生かし、個々の課題を解決できるようにするためにも、他教科で実施している少人数教育やチームティーチングの導入の必要性を、現場に戻った今、最も感じています。

最後になりましたが、お世話になりました部会の先生方にお礼を申し上げますと共に、これまでの研究活動を受け継ぎ、部会が更に発展できますよう心より願っています。

(平成5年～7年度教育センター研修主事)

山梨県総合教育センター

研修主事 矢野 由美子

本県の技術・家庭科が発足40周年の記念の年を迎えますことを、心からお祝い申し上げます。

家庭科は、平成6年度から高校においても男女共修がスタートし、小・中・高校一貫して学べる教科となりました。このことは、時代的要請から当然のことと思えます。

家庭科は、家庭生活を基盤に生活を主体的に生きる力をつけることを究極の目標としています。ですから現実の生活と切り離されたところでは学習は成り立ちません。しかし、子ども達は受験体制の中で生活と切り離され受験に必要な知識を身につけることに追い込まれ、詰め込み教育やいじめ、登校拒否など深刻な問題をかかえています。家庭科に関わる部分で捉えてみますと、学校で学ぶ内容より多くの情報に接している反面、家事や労働体験がありませんし、家庭での生活を意識的に送っておりません。その上、人間の発達にとって大事な親子・兄弟・友人間の人間的な関わりがなくなっています。

先日、教課審が2003年から実施が予定されています学校の完全5日制にあわせた教育内容を「中間まとめ」として公表いたしました。第15期中教審がだした「生きる力」の育成の精神はそのまま受け継がれている内容となっております。生活主体を育てる家庭科は「生きる力」をつける教科だと自負してきましたが、今後ますます学校における家庭科教育の実践が問われるものと思えます。

学校における家庭科教育の果たす役割について考えてみます。まず第一に、自然や社会に関わる知識を生活と結びつけて学ぶことによって、子ども達が発達する上で重要な役割を果たす教科であるといえます。第二に、家庭科を学ぶことは、生活的自立能力を身につ

けることとなります。第三に、「差別撤廃条約」は「女性が仕事と家庭」の二重の負担を背負っているのが現実です。小学校から高校までのすべての男女が家庭科を学ぶことは、性別役割分業の撤廃への第一歩を踏み出したことであり、真の平等社会実現にむけて果たす役割は大きいものです。このような大きな役割を担う家庭科教育を担当する者として、今まで以上に教育指導実践に力を入れていくよう努力したいものです。

では日々の授業はどのように進めたらいいか考えてみますと、今更言うまでもありませんが、子ども達が学習の主体になるような授業を組み立てる必要があります。これから生きていく子ども達に必要な知識や技術は何か、子どもの生活とは何か、それと向き合う教材はどんなものか、どうすれば向き合うことができるのか授業そのものを検討する、教師が一方的に知識を与えるのではなく、子ども達に体験学習や討論の場を与えるような活動を設定する、など様々な工夫があるかと思えます。

私もセンターにおいて2年間「小・中・高一貫した学習指導に関する研究」というテーマのもとに研究してまいりました。秋山前研修主事の研究を継続する形で、延べ3年、本年度、研究の最終まとめをしたいと考えております。研究を通して現場の先生方の悩みや課題などが明らかに明らかになりました。

家庭科の独自性とは、家庭科教育の原理・内容・方法について、小中高の系統性、家庭科教育で求められるものなど、大変大きな問題ばかりであることもわかりました。

これらの課題に対して、これからも先生方とともに、よりよい結論を出せますよう教育研究に関わっていききたいと考えております。



(7) 本研究会年度別役員一覽表

	昭和54年度	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度
會長	中 樞 嘉 幸	保 坂 元 治	保 坂 元 治	大 沢 保 彦	澁 沢 一 富
副會長	岡 田 千 鶴 子	—	—	滝 愛 子	—
東山梨	志 村 孝 平	広 瀬 豊 久	広 瀬 豊 久	島 村 利 男	島 村 利 男
東八代	齊 藤 茂 夫	齊 藤 茂 夫	齊 藤 茂 夫	齊 藤 茂 夫	齊 藤 茂 夫
西八代	宮 沢 正 男	宮 沢 正 成	宮 沢 正 成	丹 沢 正 彦	丹 沢 正 彦
中巨摩	小 宮 山 芳 男	猪 俣 正 夫	吉 沢 光 之	吉 沢 光 之	吉 沢 光 之
北巨摩	清 水 武	興 水 清 次	興 水 清 次	埴 原 欣 一	埴 原 欣 一
南巨摩	芦 沢 弥 一	金 丸 寿 幸	金 丸 寿 幸	望 月 教 三	望 月 教 三
北都留	大 沢 振 七	—	—	宮 川 逸 雄	宮 川 逸 雄
南都留	小 島 直 秀	—	—	—	山 本 頼 次
甲 府	古 屋 正 賢	大 沢 保 彦	大 沢 保 彦	大 沢 保 彦	中 山 和 巳
務 局	石 井 幸 雄 日向 七郎 齋藤 章 中沢 咲子	石 井 幸 雄 三井 敬吾 齋藤 章 岡田千鶴子 一木 貞夫	石 井 幸 雄 三井 敬吾 齋藤 章 望月 敏子 一木 貞夫	石 井 幸 雄 齋藤 章 野本 準仁	齋 藤 章 小沢せつ子 野本 準仁 森本 六生 石原 成人
設 門 部	調査資料部長 滝島 実 広報部長 森本 六生 男女共学部長 杉山 征二	調査資料部長 滝島 実 広報部長 森本 六生 男女共学部長 杉山 征二	調査資料部長 滝島 実 広報部長 森本 六生 広報副部長 西山 豊 男女共学部長 杉山 征二	調査資料部長 森本 六生 広報部長 西山 豊 男女共学部長 杉山 征二	調査資料部長 森本 六生 広報部長 西山 豊 男女共学部長 杉山 征二 N-1編集委員長 山村 正巳
計 画 査	新海 博 鈴木 美良	反田 右内 羽田 英雄	—	市川 隆男 大竹とも子	西八代 中巨摩
進 委 員	赤池 功 横谷 忠明 佐野よ志み	赤池 功 横谷 忠明 佐野よ志み 山縣 利泉	横谷 忠明 小沢せつ子 山縣 利泉	一木 貞夫 小沢せつ子 小林日出男	一木 貞夫 小林 日出雄
東 山 梨	點 沢 達 治 野 尻 正 子 内 藤 敏 土 屋 満 津 子	内 藤 敏 辻 八 重 子 滝 島 実 土 屋 満 津 子	點 沢 達 治 早 川 喜 代 子 滝 島 実 土 屋 満 津 子	新 藤 一 磨 野 尻 正 子 三 科 一 彦 渡 辺 直 美	滝 島 実 辻 八 重 子 根 津 夏 雄 渡 辺 直 美
東 八 代	市 川 頌 西 田 礼 子 藤 田 良 夫 大 竹 と も 子	市 川 隆 雄 水 上 タ ケ ヨ 藤 田 良 夫 菊 島 敏 江	宮 沢 哲 男 水 上 タ ケ ヨ 藤 田 良 夫 小 沢 せ つ 子	藤 田 良 夫 水 上 タ ケ ヨ 野 本 準 仁 日 向 千 花 子	市 川 隆 雄 大 竹 と も 子 野 本 準 仁 日 向 千 花 子
西 八 代	丹 沢 次 男 小 林 保 枝 丹 沢 昭 彦	丹 沢 次 男 小 林 平 吉	丹 沢 次 男 丹 沢 ゆ き 子 柴 袋 恒	丹 沢 次 男 丹 沢 ゆ き 子 一 瀬 清	丹 沢 次 男 田 中 秀 子 柴 袋 恒
中 巨 摩	杉 山 征 二 村 敬 子 小 野 岩 三 横 山 晴 子	杉 山 征 二 名 執 玲 子 小 野 岩 三 有 賀 倫 子	杉 山 征 二 佐 久 間 孝 之 有 賀 倫 子	新 海 孝 三 有 賀 倫 子 佐 久 間 孝 之 横 山 晴 子	新 海 孝 三 有 賀 倫 子 佐 久 間 孝 之 横 山 晴 子
北 巨 摩	三 井 敬 吾 藤 巻 満 寿 子 洩 川 益 夫 桜 井 玲 子	三 井 敬 吾 興 石 政 江 洩 川 益 夫 藤 巻 満 寿 子	皆 川 幹 夫 興 石 政 江 日 向 七 郎 桜 井 冷 子	皆 川 幹 夫 桜 井 冷 子 日 向 七 郎 植 松 慶 子	日 向 七 郎 伊 藤 愛 子 一 木 貞 夫 藤 巻 満 寿 子
南 巨 摩	小 林 秋 男 佐 野 政 治 朝 比 奈 君 夫 望 月 弘 子	朝 比 奈 公 夫 望 月 弘 子 望 月 武 美 望 月 加 与 子	市 川 嘉 雄 渡 辺 かがみ 数 野 一 郎 望 月 加 与 子	赤 池 功 西 川 理 恵 子 数 野 一 郎 諏 訪 祥 子	小 林 秋 男 望 月 加 与 子 望 月 義 彦 諏 訪 祥 子
北 都 留	長 坂 三 男 佐 藤 多 美 子 奈 良 五 郎 山 口 守	三 枝 修 板 屋 良 子 山 口 守 佐 藤 多 美 子	今 泉 正 雄 佐 藤 多 美 子 三 枝 修 板 屋 良 子	渡 辺 真 史 大 石 徹 子 石 川 正 昭 石 合 き み 恵	今 泉 正 雄 大 石 徹 子 沢 登 守 石 合 き み 恵
南 都 留	岡 部 英 中 村 光 子 外 川 友 吉 大 森 せい 子	—	—	加 々 本 哲 也 相 吉 美 智 子 芦 沢 辰 文 内 藤 祥 子	加 々 本 哲 也 川 端 下 み どり 遠 藤 敏 中 村 光 子
甲 府	小 林 勝 典 仲 沢 咲 子 中 村 公 明 興 水 悦 子	横 谷 忠 明 中 沢 咲 子 立 川 隆 章 興 水 悦 子	岡 本 碩 男 興 水 悦 子 日 原 誠 伊 藤 玉 枝	横 谷 忠 明 井 口 節 子 羽 田 英 雄 望 月 志 津 子	横 谷 忠 明 岡 田 登 喜 和 石 原 武 幸 古 屋 香 織
問	新 藤 晴 雄	—	新 藤 晴 雄 藤 原 完 中 樞 嘉 幸 丸 田 宏 長 田 昭 平 小 林 豊 子 内 藤 道 子 立 川 隆 章 佐 野 よ 志 み 中 村 公 明 駒 井 千 代	新 藤 晴 雄 藤 原 完 中 樞 嘉 幸 保 坂 元 治 丸 田 宏 長 田 昭 平 小 林 豊 子 内 藤 道 子 立 川 隆 章 佐 野 よ 志 み 中 村 公 明 駒 井 千 代	新 藤 晴 雄 藤 原 完 中 樞 嘉 幸 保 坂 元 治 大 沢 保 彦 丸 田 宏 長 田 昭 平 小 林 豊 子 内 藤 道 子 立 川 隆 章 佐 野 よ 志 み 中 村 公 明 三 輪 純 子

	昭和59年度		昭和60年度		昭和61年度		昭和62年度		昭和63年度		
会長	滝沢 一富		望月 教三		深沢 六郎		宮川 逸雄		宮川 逸雄		
副会長	滝 愛子		滝 愛子		滝 愛子		滝 愛子		滝 愛子		
副会 長	東山梨	島村 利男		島村 利男		島村 利男		貼沢 達治		貼沢 達治	
	東八代	滝沢 一富		石田 義岡		石田 義岡		石井 幸雄		石井 幸雄	
	西八代	田中 光幸		丹沢 次雄		丹沢 次雄		丹沢 次雄		宮沢 均	
	中巨摩	竹内 元彦		竹内 元彦		竹内 元彦		植松 君雄		植松 君雄	
	北巨摩	埴原 欣一		埴原 欣一		埴原 欣一		田中 一郎		日向 七郎	
	南巨摩	芦沢 弥一		芦沢 弥一		赤池 功		植松 阿澄		植松 阿澄	
	北都留	佐藤 昭光		佐藤 昭光		佐藤 昭光		赤池 功		赤池 功	
	南都留	山本 頼次		渡辺 直成		伊藤 敏		伊藤 敏		清水 裕	
	甲府	深沢 六郎		深沢 六郎		宮川 逸雄		立川 隆章		宮川 逸雄	
事務局	斎藤 章 小沢せつ子 野本 準仁 森本 六生 石原 成人		斎藤 章 小沢せつ子 小林日出男 森本 六生 石原 成人 日原 誠 小野 一人		斎藤 章 小林日出男 清水 禮子 森本 六生 石原 成人 日原 誠 小野 一人		斎藤 章 小林日出男 清水 禮子 森本 六生 石原 成人 日原 誠 石川 正昭		斎藤 章 小林日出男 清水 禮子 森本 六生 石原 成人 日原 誠 石川 正昭 山田 順子 三科 一彦		
	調査資料部長 広報部長 三科 一彦 ノ編集部長 小林 日出雄 共学部長		調査資料部長 安部 忠雄 広報部長 三科 一彦 ノ編集部長 小林 日出雄 (共学部長)		広報部長 三科 一彦		広報部長 三科 一彦				
特設 専門部	調査資料部長 広報部長 三科 一彦 ノ編集部長 小林 日出雄 共学部長		調査資料部長 安部 忠雄 広報部長 三科 一彦 ノ編集部長 小林 日出雄 (共学部長)		広報部長 三科 一彦		広報部長 三科 一彦				
会計監査	北巨摩	南巨摩	南巨摩	北都留	南都留	甲府	三枝 修	東八代	塩沢 雄市	杉山 征	
推進委員	一木 貞夫 小林 日出雄		一木 貞夫		一木 貞夫 清水 禮子		一木 貞夫 清水 禮子		一木 貞夫 清水 禮子		
理 事	東山梨	佐々木与比古 津金 猛	土屋 満津子 早川 喜代子	佐々木与比古 根津 夏雄	土屋 満津子 早川 喜代子	佐々木与比古 根津 夏雄	土屋 満津子 秋山 香奈子	佐々木与比古 津金 猛	秋山 香奈子 兩宮 えりか	佐々木与比古 津金 猛	秋山 香奈子 兩宮 えりか
	東八代	市川 隆雄 藤田 良夫	大竹 ともし 水上 タケヨ	市川 纈 藤田 良夫	大竹 ともし 丸山 純子	石井 幸雄 市川 纈	大竹 ともし 清水 禮子	柳沢 豊 市川 纈	山田 順子 清水 禮子	岡本 幸雄 志村 昭	山田 順子 志村 昭
	西八代	丹沢 次男 業袋 恒	田中 秀子 ——	塩沢 雄市 業袋 恒	——	宮川 均 業袋 恒	望月 加与子 ——	塩沢 雄市 業袋 恒	望月 加与子 飯島 栄子	塩沢 雄市 業袋 恒	望月 加与子 ——
	中巨摩	横谷 忠明 佐久間 孝之	土橋 三枝 上野 富美	横谷 忠明 佐久間 孝之	深沢 庸子 上野 富美	新海 孝三 佐久間 孝之	長沼 元江 小松 明子	新海 孝三 佐久間 孝之	藤巻 志麻 名執 玲子	佐久間 孝之 細田 正二	八巻 みゆ 名執 玲子
	北巨摩	日向 七郎 一木 貞夫	桜井 玲子 遠山 八重子	長久保 学 日向 七郎	桜井 玲子 遠山 八重子	一木 貞夫 小澤 建二	遠山 八重子 八巻 真理奈	一木 貞夫 長久保 学	伊藤 玉枝 金子 文子	一木 貞夫 長久保 学	向山 幸雄 八巻 真理奈
	南巨摩			石川 茂男 長田 娟	小松 幸子 藤訪 祥子	数野 一郎 長田 娟	小松 里美 小松 幸子	池田 賢二 長田 娟	小松 里美 中山 妙子	数野 一郎 望月 美彦	小松 里美 飯島 栄子
	北都留	鈴木 美良 沢登 守	大石 観子 岡田 豊子	沢登 守 深沢 二男	大石 観子 石合 きみ恵	沢登 守 深沢 二男	井上 敬子 佐野 智子	沢登 守 岡部 平和	福王 栄子 石合 きみ恵	小野 一人 切金 力	井上 敬子 光岡 智子
	南都留	佐々木 哲也 芦沢 辰文	秋山 加奈子 矢崎 理恵子	吉里 信二 坂本 幸男	岡田 登喜和 土橋 道子	坂本 幸男	土橋 道子	広瀬 安男	志村 恵子	坂本 幸男 柳沢 豊	三浦 明彦 中村 恭行
	甲府	石原 武幸 岡本 郁男	仲沢 咲子 神宮司真佐子	岡本 郁男 石井 幸雄	神宮司真佐子 日野原美智枝	秋山 義人 入蔵 娟彦	赤松 東 林 京子	山口 守 秋山 義人	神宮司真佐子 川口 まゆみ	羽田 英雄 高左右 浩	志村 恵子 山崎 登
	顧問	新藤 晴雄	藤原 完	新藤 晴雄	藤原 完	新藤 晴雄	藤原 完	藤原 完	中嶋 嘉幸	藤原 完	中嶋 嘉幸
		中嶋 嘉幸	保坂 元治	中嶋 嘉幸	保坂 元治	中嶋 嘉幸	保坂 元治	保坂 元治	大沢 保彦	保坂 元治	大沢 保彦
		大沢 保彦	滝沢 一富	大沢 保彦	滝沢 一富	大沢 保彦	滝沢 一富	滝沢 一富	望月 教三	滝沢 一富	望月 教三
丸田 宏		小林 豊子	丸田 宏	内藤 道子	丸田 宏	内藤 道子	内藤 道子	丸田 宏	丸田 宏	内藤 道子	
内藤 道子		立川 隆章	立川 隆章	佐野よ志み	丸田 宏	内藤 道子	内藤 道子	内藤 道子	丸田 宏	内藤 道子	
立川 隆章	佐野よ志み	中村 公明	三輪 純子	新藤 一廣	佐野よ志み	新藤 一廣	佐野よ志み	新藤 一廣	土屋満津子	野沢 達也	
中村 公明	三輪 純子			中村 公明	信田 久江	中村 公明	信田 久江	中村 公明	信田 久江	中村 公明	

	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	
会長	宮川 逸雄	立川 隆章	立川 隆章	斎藤 章	篠原 茂	
副会長	滝 愛子	——	——	清水 禮子	清水 禮子	
東山梨	鮎 沢 達治	新藤 一磨	新藤 一磨	新藤 一磨	三科 一彦	
東八代	石井 幸雄	関本 幸雄	清水 禮子	市川 穰	関本 幸雄	
西八代	一瀬 清	一瀬 清	宮沢 均	宮沢 均	宮澤 均	
中巨摩	新海 孝三	新海 孝三	新海 孝三	新海 孝三	篠原 茂	
北巨摩	日向 七郎	中山 安正	中山 安正	中山 安正	一木 貞夫	
南巨摩	赤池 功	赤池 功	植松 阿澄	依田 正文	笠松 武司	
北都留	柘原 元男	外川 誠	外川 誠	小林 正治	小林 正治	
南都留	後藤 唯尊	篠原 英博	森島 則行	八代 直之	岡部 昭雄	
甲府	宮川 逸雄	山縣 利縣	山縣 利縣	岩間 孝吉	斎藤 章	
事務局	石原 成人	石原 成人	石原 成人	長久保 学	入蔵 靖彦	
	石川 正昭 津金 猛 山田 順子 小宮山幸枝 小澤 建二	石川 正昭 津金 猛 山田 順子 小宮山幸枝 小野 一人	清水 禮子 津金 猛 入蔵 靖彦 山田 順子 小宮山幸枝 鈴木 昇 長久保 学 小野 一人	山田 順子 鈴木 昇 赤松 東 広瀬 安男 依田 幸男 横内 京子 杉野 保子 小野 一人	山田 順子 横内 京子 赤松 東 鈴木 昇 杉野 保子 広瀬 安男 依田 幸男 小野 一人	
	一木 貞夫 清水 禮子	小澤 建二 清水 禮子	小澤 建二 清水 禮子	小澤 建二 小宮山 幸枝	小澤 建二 小宮山 幸枝	
	長久保 学 池田 賢二	沢登 守 芦沢 辰文	羽田 英雄 吉岡 利彦	太田 一夫 柳沢 豊	石川 正昭 平賀 文仁	
東山梨	佐々木与比古 津金 猛	小笠原さつき 兩宮 えりか	広瀬 安男 津金 猛 鈴木 美奈子	小笠原さつき 鈴木 美奈子 吉岡 利彦	土屋 満津子 山田 千聡	
東八代	関本 幸雄 武井 俊文	清水 禮子 山田 順子	武井 俊文 市川 穰 山田 順子	市川 穰 山田 順子 渡辺 直美	柳沢 豊 山田 順子 清水 禮子	
西八代	塩沢 雄市 太田 一夫	望月 加与子 ——	太田 一夫 切金 力	望月 加与子 ——	切金 力 ——	
中巨摩	森本 六生 細田 正二	河野 仁美 小宮山 節子	森本 六生 細田 正二	小宮山 節子 相沢 京子	森本 六生 細田 正二	
北巨摩	一木 貞夫 長久保 学	向山 幸恵 中山 妙子	小澤 建二 長久保 学	遠山 八重子 八巻 みふ志	藤森 俊彦 八巻 みふ志 小澤 建二	
南巨摩	数野 一郎 池田 賢二	小松 里美 鍋田 栄子	望月 美彦 池田 賢二	小松 里美 鍋田 栄子	数野 一郎 池田 賢二	
北都留	河西 修 酒井 秀樹	光岡 智子 渡辺 詞子	酒井 秀樹 岩間 光	石合 きみ恵 沢登 かほる	石田 宏 酒井 秀樹	
南都留	坂本 幸男 小林 孝	上野 さとみ 古屋 香織	後藤 英 坂本 幸男	古尾 香織	平賀 丈仁 上田 雅子	
甲府	中村 公明 秋山 義人	赤松 東 日野原美智枝	田中 征史 瀬田 肇	上条 えりか 赤松 東	田中 征史 瀬田 肇	
顧問	藤原 完 保坂 元治 滝沢 一富 深沢 六郎 柴袋 恒 日原 誠	中嶋 嘉幸 大沢 保彦 望月 教三 立川 隆章 土屋満津子 信田 久江	藤原 完 保坂 元治 滝沢 一富 深沢 六郎 宮川 逸雄 滝 愛子 立川 隆章 柴袋 恒 土屋満津子 日原 誠	中嶋 嘉幸 大沢 保彦 望月 教三 宮川 逸雄 立川 隆章 滝 愛子 神宮司真佐子 信田 久江	藤原 完 保坂 元治 滝沢 一富 望月 教三 宮川 逸雄 滝 愛子 立川 隆章 柴袋 恒 神宮司真佐子 津金 猛 信田 久江	中嶋 嘉幸 大沢 保彦 望月 教三 宮川 逸雄 立川 隆章 滝 愛子 立川 隆章 柴袋 恒 神宮司真佐子 秋山 宏子

	平成 6 年 度	平成 7 年 度	平成 8 年 度	平成 9 年 度	
会 長	一 木 貞 夫	一 木 貞 夫	岩 間 孝 吉	岩 間 孝 吉	
副会長	斎 藤 章	斎 藤 章	斎 藤 章	山 田 順 子	
副会長	清 水 禮 子	清 水 禮 子	清 水 禮 子	—	
会 長	東山梨	三 科 一 彦	三 科 一 彦	三 科 一 彦	
	東八代	市 川 隆 雄	市 川 隆 雄	清 水 禮 子	
	西八代	宮 澤 均	宮 澤 均	宮 澤 均	
	中巨摩	長 沼 元 江	長 沼 元 江	長 沼 元 江	
	北巨摩	一 木 貞 夫	一 木 貞 夫	一 木 貞 夫	
	南巨摩	望 月 一 二	望 月 力 夫	鈴 木 祥 三	
	北都留	岡 本 幸 雄	岡 本 幸 雄	岡 本 幸 雄	
	南都留	岩 間 孝 吉	岩 間 孝 吉	金 勝 武 鑑	
甲 府	斎 藤 章	斎 藤 章	岩 間 孝 吉	斎 藤 章	
事 務 局	入 蔵 靖 彦	入 蔵 靖 彦	小 澤 建 二	長 田 靖	
	山田 順子 鈴木 昇	山田 順子 鈴木 昇	小宮山 幸枝 三枝 修	小宮山 幸枝 三枝 修	
	三枝 修 神宮司真佐子	三枝 修 神宮司真佐子	神宮司真佐子 横内 京子	横内 京子 加々木 哲也	
	横内 京子 加々木 哲也	横内 京子 加々木 哲也	加々木 哲也 広瀬 安男	広瀬 安男 佐野 礼子	
	広瀬 安男 杉野 保子	広瀬 安男 河野 仁美	佐野 礼子 河野 仁美	河野 仁美 石川 徹	
河野 仁美 長田 靖	長田 靖 小野 一人	長田 靖 入蔵 靖彦	小澤 建二 杉本 博之		
小野 一人		小野 一人 杉本 博之	小野 一人		
推 進 委 員	長 久 保 学 小宮山 幸枝 小野 一人	長 久 保 学 小宮山 幸枝 小野 一人	長 久 保 学 鈴 木 昇	長 久 保 学 鈴 木 昇 神宮司真佐子	
会 計 鑑 査	望 月 美 彦 沢 登 守	芦 澤 辰 文 酒 井 秀 樹	武 井 俊 文 市 川 隆 雄	上 田 信 司 遠 藤 敏	
事 理	東山梨	碓井 篤 土屋 満津子 武井 俊文 永田 恵子	吉岡 利彦 土屋 満津子 飯島 武志 永田 恵子	広瀬 安男 上野 さとみ 碓井 篤 後藤 智美	広瀬 安男 中村 恭代 碓井 篤 向山 栄子
	東八代	斉藤 隆広 山田 順子 志村 昭 清水 禮子	近藤 一行 山田 順子 岩間 光 清水 禮子	斉藤 隆広 土屋 満津子 志村 昭 清水 禮子	市川 隆雄 山田 順子 志村 昭 土屋 満津子
	西八代	小林 大	太田 一夫	切金 力 上田 雅子	上田 信司 上田 雅子
	中巨摩	細田 正二 小宮山 節子 杉山 征二 志村 恵子	細田 正二 小宮山 節子 杉山 征二 志村 恵子	杉山 征二 杉野 保子 後藤 博 大久保美喜子	杉山 征二 小宮山 節子 後藤 博 岡 二郎
	北巨摩	長久保 学 小宮山 幸枝 平賀 文仁 遠山 八重子	中嶋 秀樹 小宮山 幸枝 長田 進 遠山 八重子	小澤 建二 小宮山 幸枝 長久保 学 遠山 八重子	小澤 建二 小宮山 幸枝 高左右 浩 横内 京子
	南巨摩	鈴木 祥三 佐野 富美 池田 賢二 鍋田 栄子	望月 美彦 佐野 富美 樋口 幸子 遠藤 明子	望月 美彦 佐野 富美 佐野 和彦 遠藤 明子	望月 美彦 佐野 富美 佐野 和彦 佐野 夏美
	北都留	田中 政巳 小泉 名穂子 瀬田 肇 向山 栄子	田中 政巳 小泉 名穂子 瀬田 肇 向山 栄子	田中 政巳 望月 志津子 清水 英樹 井上 敬子	田中 政巳 望月 志津子 池田 尚 沢登 かほる
	南都留	坂本 幸男 成嶋 久代 望月 一夫 赤岡 玲子	坂本 幸男 赤岡 玲子 望月 一夫 長田 和子	山岸 正人 小笠原さつき 岡田 強 小佐野富士江	小野田 耕二 矢崎 理恵子 斉藤 隆広 小佐野富士江
	甲 府	杉本 博之 戸田 まゆみ 石田 剛士 佐野 礼子	杉本 博之 戸田 まゆみ 石田 剛士 佐野 礼子	斉藤 章 戸田 まゆみ 羽田 英雄 田沢 久仁子	羽田 英雄 赤松 東 日原 誠 萩原 佳子
	顧 問	藤原 完 中嶋 嘉幸 保坂 元治 大沢 保彦	藤原 完 中嶋 嘉幸 保坂 元治 大沢 保彦	藤原 完 中嶋 嘉幸 保坂 元治 大沢 保彦	藤原 完 中嶋 嘉幸 保坂 元治 大沢 保彦
霞沢 一富 望月 教三 深沢 六郎 宮川 逸雄		霞沢 一富 望月 教三 深沢 六郎 宮川 逸雄	霞沢 一富 望月 教三 深沢 六郎 宮川 逸雄	霞沢 一富 望月 教三 深沢 六郎 宮川 逸雄	
滝 愛子 立川 隆章 篠原 茂		滝 愛子 立川 隆章 篠原 茂	滝 愛子 立川 隆章 篠原 茂	滝 愛子 立川 隆章 篠原 茂	
日原 誠 赤松 東 津金 猛 秋山 宏子		日原 誠 赤松 東 津金 猛 秋山 宏子	日原 誠 赤松 東 石川 正昭 矢野 由美子	入蔵 靖彦 網倉 玉枝 石川 正昭 矢野 由美子	

(8) 本研究会「会報」発行の記録(1977年・会報10号～1997年・45号)

塩山市立塩山中学校教諭 広瀬安男

〈会報編集担当〉

10号～19号	森本 六生
20号～23号	西山 豊
24号～33号	三科 一彦
34号～35号	小沢 建二
36号	入蔵 靖彦
37号～	長久保 学
38号～45号	広瀬 安男

関プロ 埼玉大会参加リポート 1977年

第1分科会 (製図領域)

塩山北中 姉川 和雄

曇り空の下、大宮市立大成中学校で研究会がもたれたが第15回全日本並びに関プロ大会とあって参加者計100余名、うち本県からは14名の参加、非常に盛会であった。「課題解決にせまる基本的学習課程の研究」という主題で昭和49年度より製図領域の研究に取り組み、50年度51年度と引き続き指導内容、指導計画の検討を続けながらその実証化のための研究授業を実施していく中で生徒の製図に対する学習意欲の低いことが問題であるときつとめ、テーマ「意欲の高まりを意図した製図領域の学習課程」と変更し、この面から県主題へ迫るべく研究を進めてきたとのこと、苦心の様子がわかる。具体的内容については、(1)指導計画の中で題材、立体の選定、提示の順序を明示したこと。(2)学習課題について、(3)授業診断について等々が発表されたが、今後もこの経験を生かした実践研究を続けていくとの事である。

関プロ 長野大会参加リポート 1979年

第7分科会 (食物領域)

城南中 佐野 よ志み

食物領域の会場は、長野市の中心地にある

長野市立柳町中学校であった。学区内には善光寺がある。翌朝、8時30分ごろ学校に着いたのであるが、全校生徒が頭に三角布をまき、上着を脱いで、黙々と床をみがき、落ち葉を掃いている姿に、明るさと素直さを感じることができた。学校創立以来引き継がれてきた教育目標「唯一心」を合い言葉に学習活動、クラブ活動に励んでいるとのことであった。参加申込者が194名の多数なので、調理室や隣室(理科室)にTVを用意して、授業が参観できるように配慮されていた。しかし、誰もが調理室での参観を希望したので、動きがとれないような状態であったが、熱意に満ちたものであった。山梨からの参加者は21名、特に、東八代支部が提案・滝愛子指導主事が助言者になっていたので、各支部から大勢の先生方が参加してくださった。

公開授業では、2人一組になり、焼き方の方法と観察する観点を話し合い、各自のねがいに従って、魚のムニエルを試し焼きをして個で反省・評価する。さらに問題点を班・全体で発表しあい、たんぱく質の凝固・うまみの損失・焼き上がりの色・火力等から、ねがいに到達するムニエルの作り方を究明する。試食して調理法を修正する。修正は課題にする。調理台が12台あり、1台に4人の生徒なので、非常に効率的であった。

山梨県の提案は、芦川中の水上タケヨ先生が、大竹・菊島・山田先生方の協力のもとに、加工食品の指導について蓄積した研究の内容を発表した。

神奈川県は秦野中学校の込山ゆきえ先生が、調理実習カードをとり入れた学習は、生徒の意欲を高め、食生活に関心を示すようになったことを発表された。

第8分科会 (住居領域)

「住居」領域に参加して

蕪崎東中 藤巻満寿子

「住居」分科会は、水戸市赤塚中学校で開かれた。公開授業のあと、提案発表がなされた。茨城県からの提案は、生徒に住まい方について考えさせ、住空間を適切に活用する能力を養うために特に「ダイニングキッチン」の計画に焦点をあて研究をし、県のテーマにそって基礎的、基本的事項をおさえ、学習課題を中心として指導計画を作成して更に指導内容の構造化を図り授業診断を試みながら学習指導の改善につとめることの報告がされた。

長野県からの提案は、学校研究「教科のわくを越えて子供を生かす指導」の一環として、技術的な実践力を高めるといふ技術家庭科の指導を住居について実践した一試案が提案された。山梨県からの提案は、住居領域の中の「生活と水の使用量」に焦点をあて、暮らしの中の水について自ら考え実践する態度を育てることと、水は大切な資源であることの認識を深めることの授業を通しての一試案の報告をした。

住居領域は人間生活に不可欠で重要なねらいを持つ学習である。しかし生徒の興味関心は低い、指導面でも理論的で抽象的になりがちな領域である。興味関心を持たせながら学習を進めるにはどうしたらよいか。などまだ研究を進めなければならないと思う。

第1分科会 (木材加工)

生徒が意欲的に取り組む題材として

浅川中 野本 準仁

第1分科会は教室に入りきれないほど多くの参観者の中で、カセットラックの製作の接合部けがき、下穴あけの授業がおこなわれた。教師がTPを使ってけがきのしかた、下穴の位置、深さなどの指導がこまかく説明され実習にうつった。この授業で、今の生徒には手工具の使い方に特に細かい指導が必要であることが強く感じられた。

研究会は、東京から男女共学における題材としてカセットラックを取りあげ、基本形を示し、側板などは個人の工夫にまかせる。進度表を持たせることにより意欲や、ここまでできたという満足感が増やせるという提案。山梨(一宮中、市川先生)から、生徒に意欲を持たせる題材の工夫として箱類を取りあげ実践発表がおこなわれた。茨城から男女相互乗り入れの題材として、取っ手つき整理箱の開発と実践報告があった。三提案とも題材として箱類をとりあげ、授業は基本形を提示し、生徒がそれを応用する形式がとられていること、又箱類を取りあげた理由として、基礎的、基本的内容を含んでいる。創意、工夫することができる。興味、関心が高く意欲的に取り組めるもの。生活に役立つものであることなどがあげられていた。三県の研究とも意欲的に取り組む題材として箱類を取りあげていることから私達も自信を持って箱類の実践をより進めるよう意を強くした。

第9分科会 (保育領域)

保育分科会に参加して

芦川中 大竹 とも子

宇都宮姿川中学校の公開授業では「おやつ  
の選び方」であった。学習課題として、おやつ  
はどんな食品を選べばよいか。その解決方  
法として、1. 自分達の調べたおやつと保育  
所のおよつと栄養を調べ検討する。2. 市販  
菓子利用の仕方を考える。3. よいおやつを  
選ぶ観点をまとめる授業であった。尚教室に  
は、幼児のおやつとしてふさわしいものが実  
際につくられ、カロリー計算までされたもの  
が10種類近くも展示されていた。研究及び  
準備に大変ご苦労された事がうかがわれた。

研究会では、幼児とのふれあいの場を大切  
にした保育学習として、人形劇の研究で人形  
のつくり方の工夫、これを使って幼児のふれ  
あいの効果が千葉県から発表された。埼玉か  
らは、保育領域の男女別学で、幼児理解を通  
して、男子の自己理解に重点をしばっての研  
究で、男子にも興味関心があり、保育学習の  
必要性をみとめる。相互乗り入れで埼玉とす  
れば保育領域をとっている学校は10%であり、  
共学か、別学かなど内容的にも課題が残され  
ている。

研究会場には沢山の幼児の被服の工夫され  
たもの、おもちゃ、幼児の観察記録など展示  
され、大変参考になった。山梨関プロに向け  
て、まだ研究の歩みをはじめたばかりの私達  
にとって、よい勉強になった。

第3分科会 (機械領域)

自己学習力の育成

生徒主導型の授業のあり方

吉田中 志村 昭

機械の分科会は、君津市立周西中学校で行  
われ、群馬、長野、千葉の各県から提案がな  
された。まず群馬県の提案は「地域に即した  
実習題材の開発」で、風車の設計・製作を選  
択技術さらには機械1領域の中に取り入れて  
ゆくための研究発表であった。長野県の提案  
は機械2「エンジンの学習」を通して生徒が  
生き生きと授業に取り組むための授業のあり  
方の研究であった。千葉県の提案は、生涯学  
習の基礎づくりに取り組むことをねらいとし  
た「自己学習力の育成」のための授業過程の  
研究であり教師指導型の授業から生徒中心の  
授業への変換をはかったものであった。授業  
は、機械1(2年共修)と機械2が並行して  
行われた。機械1では自転車の変速をリモコ  
ンレバーで行うための「リモコンレバーの製  
作」が主題であった。グループ学習形式で、  
針金、レバー金具等各班に与えられているも  
のでその機構を試行錯誤的に考えさせ、最後  
に発表させながら望ましい方向にまとめよう  
とした授業である。生徒の試行錯誤に重点が  
置かれた授業であった。機械2では、実験実  
習のテーマが、はずみ車の働き、馬力の測定、  
爆発実験、気化器のしくみ、トルクの測定、  
の5つに設定されており、グループごとに5  
週間にわたりローテーションしながら実験実  
習を行ってゆく方式である。

校舎内外とも非常によく整備されておりゴ  
タゴタしたものは一切なく教室等の掲示物も  
すっきりとした印象を与えられた。生徒のあ  
いさつ、服装、授業の受け方などは学校内で  
共通のもとに生活指導と一体化して行われて  
いるようであった。

技術・家庭科研究大会山梨大会を終えて  
1986年

第6分科会 被服  
白州中 伊藤玉枝

### 1. 関ブロ大会にむけて

甲府・北都留・北巨摩の三郡市で研究をすすめてきた。58年度はテーマのとらえ方について基本的な考えをまとめた。59年度に入り、課題解決学習の流れを重視した指導案の作成、評価として事前・事後テストを行い分析した。授業で用いる教材・教具の開発にも力を入れた。本年度は授業研究の実践を通して、製作の計画の段階での小集団を組織化した授業と実習の段階でのひとりひとりの動きに目を向けた授業が必要であると考え、甲府では小集団の組織化について、北巨摩ではひとりひとりに目を向けた授業の展開について研究を進めた。また授業の展開に必要な自作の教材・教具・学習ノートの補充を行った。

上記のように三郡市で研究を重ねてきたが、地理的な面、研究日の調整など問題点が多く、三郡市で統一的な見解をとるに至るまでが困難であり、今後の課題としてあげられた。

### 2. 研究大会のようす

甲府南西中学校の全職員、生徒の協力を得て、分科会会場である体育館、またその周囲の環境はすみずみまで清掃がなされ、整然と整えられ、快適であった。

展示については、展示のスペースに対して作品数が多く、雑然とした印象を与えた。取り組みの段階で展示数が制限されていたが、実際には予定通りにいかなかった。特にパジャマは極めて数が多く、作品が重ねて展示されるなど、参加者に迫るものが乏しくなってしまった。なかには、未完成、技術の不十分な作品もあり、考慮すべき問題である。計画の

際に展示スペースと作品数の確認を十分に行うべきだった。また、展示内容に誤りがあり、指摘された点もあったので、展示内容の見直しも的確に行わなければならなかったと反省した。

アトラクションとして、南西中ブラスバンド部がすばらしい演奏を披露し、好評を博した。その他、南西中PTAの方々が、案内、湯茶の接待、また、漬け物、ぶどうといったものまでも配慮してくださり、心のこもった接待ができた。

### 3. 大会を終えて

山梨大会にむけて取り組んできたが、終わってみると研究大会のために忙殺された感が強く残る。日頃の実践、あるいは問題点の投げかけなどを発表し、協議することは大切であると思うが、研究会や推進委員会等、数多くの会議のため、学校諸行事、学校内での仕事へのしわよせは非常に大きかった。しかし、各学校の先生方の協力態勢の中で取り組めた事に感謝する。

その他、研究会参加の先生方の態度も気にかかった。授業をしている生徒のすぐ近くで私語あるいは授業についての考えなどを話し合い、授業の妨げになるような態度が見受けられた。また、研究協議での発言数の少なさなど、教師の研究大会への参加の姿勢、また研究というもののあり方について、再度考える時期にあるように思う。



情報基礎分科会

「情報基礎」領域に参加して

附属中 鈴木 昇

国分寺第二中学校の体育館に特設された教室に各県から200名以上の参加者の見守る中、選択教科「情報基礎」の授業が始まった。教師があらかじめ作成した東京の娯楽施設データベースで重複条件検索をさせる授業であった。東京都では都立教育研究所で過去3年間でコンピュータに関する基礎研究が進んでおり、データベースソフトウェアの活用の定義がしっかりとあるようだった。キーボードの基本操作など、ソフトウェアを使用せずA～Zの単純入力のみを1分間競争として目的のはっきりとした指導内容とし、関心意欲の要点である題材のデータベースの内容設定に工夫があった。

この領域を指導する上での内容論争が、コンピュータの機構をいかに教えるかという問題からソフトウェアの操作のしかた学習へと進んで、さらにここで、適切な情報を収集し、個々がその情報を加工し新しい情報を製作させるといった傾向となっている。魅力的な題材としてデータがあり、それを生徒がコンピュータという道具で調べ、個々の目的に合うように加工し、新しい情報として作品を残す。それは、あたかも木材を鋸で切断し、目的の本立てを製作するかのようである。

しかし、そのために、授業が市販ソフトの使用説明に終始するのでは問題である。

機器という道具、ソフトという道具を教えたのちに、本来の情報活用能力の育成をいかにすべきかという問題が結局残ってくる。

家庭生活分科会

「家庭生活」領域に参加して

玉穂中 中込 純子

第32回関東甲信越地区中学校技術・家庭科群馬大会の「家庭生活」部会では「一人一人の学ぶ意欲を喚起し実践する力を育てる指導法の工夫」のテーマのもと研究成果が発表された。新設された「家庭生活」の学習は極めて意義深いとしている。家庭内の仕事や経済の充実だけでなく地域の環境や地域の人々の助け合いなど家庭の外にも目を向け、より広い視野に立って考えられることがねらいであった。本題材では、高齢者問題を手がかりに、特に高齢者の生活などを取り上げた。

安中市立第一中学校1年3組男子20名女子17名で、体育館で机と椅子を持ち込み各班ごとにディスカッション形式で授業を進めた。本時の学習では「高齢者にとって住みやすい地域を考える」ということで、市内と他市の高齢者人口の比較グラフを掲示し、その他地域を理解させることから導入し、視覚的な面からは病気の高齢者をかかえる家族のオリジナルビデオを観ることにより一層の興味や関心を持たせることに成功した。身近な高齢者の生活を調べさせ数名を指名し発表させたが、その態度は落ち着いていて内容もわかりやすくまとめてあり良かった。人々が安心して生き生きと暮らせる地域について考えるとともに中学生としての今の自分にできることとは何かという質問は実践への意欲を高める上でも効果的であった。評価については時間切れの場面もあり残念ではあったが、新しい発見も多くあり今後の授業に生かせると思う。

電気分科会

「電気」領域に参加して

山梨南中 若林 努

電気領域の授業は、千葉県成田市立成田中学校に於いて第2学年A組の生徒34名を対象に行われた。

「自ら課題を持ち、実践活動を通して解決する力を育む学習課程」をテーマに、一人一人の発想を大切に、積極的な問題解決の場への転換が図られていた。

授業はコンピュータ室で行われ、男女二人一組でコンピューター一台を使用する授業形態であった。

授業内容は、アイデアライトを製作題材に生徒がそれを思い通りの構想に基づいた回路設計をコンピュータを用いて行い、設計した回路をディスプレイ上にシミュレーションすることによって正しく作動するかを確認するなど、課題を解決する教具としてコンピュータを積極的に活用していた。また、実験盤を使用して実際に配線を行う場面があったが、この際使用した実験盤は電気部品ごとに独立したもので、プラスチック板などを有効に取り入れ、生徒が配線する際にも分かりやすいものになっていた。生徒一人一人がアイデアを出し、積極的に授業に取り組む姿勢に好感がもてた。

研究協議は体育館で行われ、会場には生徒作品が数多く展示されており、丁寧に作られた素晴らしい作品が多く見られた。

新しい学力観に基づき、個に応じた授業が望まれている昨今ではあるが、改めて個に応じた授業の展開の難しさを痛感した。

第6分科会

「栽培」領域に参加して

山梨南中 吉岡 利彦

第35回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会第6分科会（栽培領域）は、埼玉県深谷市立藤沢中学校に於いて開催された。

深谷市は、県北部に位置し、ねぎ類・切り花など全国有数の生産高を誇る農業の盛んな地域である。また、藤沢中学校は、生徒数408名、うち53人（13%）専業農家という栽培領域に取り組んでいくのに比較的に良い環境であるといえる。

公開授業は、藤沢中学校の丹羽大恭先生の指導のもと、「私の花で卒業式を飾ろう」をテーマに実施された。会場は、技術室を使用し、室内には、コンピュータ設備をはじめ説明ボードが設置され、野外には、畑や温室が用意されていた。

授業内容は、「みんな見て、これが私の栽培です（栽培フェア）」と題して、自分たちで作成した栽培計画の発表会形式で進められた。各班10分交替で行われた。生徒達は、図書館や花屋さん、パソコン通信等を通して情報収集に務め、各班とも工夫を凝らした発表ができた。発表例には、ゼラニウム・バラ・フリージアなどの他、冬のヒマワリ・アサガオなど、難しいものへの挑戦もあった。

また、30時間の指導計画のもと、先行題材（二十日大根）、基本題材（トマト）、発表題材（私の花で卒業を飾ろう）のステップを組み、系統立った指導が行われていた。さらに情報基礎領域・電気領域と関連づけた試みもなされていた。

## 7. 技術・家庭科教育の歩み

### (1) 技術教育の思潮

〈「技術・家庭科20年の歩み」より再掲載〉

甲府市立伊勢小学校 校長 古屋正賢

#### 1. 学制期 教育令期

明治5～12年の学制期および12～19年までの教育令期における教育は、いわゆる一般教科の教育のみで、実業科（技術教育）については、全く考えられてはいなかった。

#### 2. 小学校令期

明治19年小学校令が公布され、手工、農業、商業を実業科として加えることができるようになった。

明治23年10月小学校令が改正され、小学校に専修科、補修科が付設され、徒弟学校、補習学校とともに産業の発展に伴って、実業科教育進展の出発点となった。

明治43年12月24日の訓令で小学校施行規則が改正され、国民生活の実際に応ずるような内容を意図して、手工、農業、商業の一つを高等小学校の必須科目として課し、授業時数を増して指導効果をねらった。

大正15年4月22日小学校令施行規則が改正され、必須科目に図画、手工、および実業を加え、高等小学校を実務生活との関連に基いて完成教育として考え、学校教育の基本段階の終結として独特の体制のものとしようとした。更に、学級担任制を主とした教員組織を改めて、学科担任を加味させることとし、本科正教員のほかに専科正教員を置くことを認めるようになった。

#### 3. 国民学校令期

昭和16年3月1日国民学校令が公布され、同年4月1日から施行された。

初等科6年、高等科2年として義務教育年限は8か年に延長されたが、戦時非常措置法

によって実施延期されたまま終戦となった。

国民学校の本旨とする、皇国の道に則る国民の基礎的錬成は、教科を通しての教育によって行なわれるべきであるとの建前から、従来の小学校の教科は根本的に再編成され、国民科、理数科、体練科、芸能科および実業科の5教科が設置され、各教科はそれぞれいくつかの科目に分けられた。

戦後の職業科につながるものとして、実業科工業、農業、商業および水産に関する普通の知識技能の修得が大きく取り上げられている。

#### 4. 太平洋戦争終戦時の新教育としての職業科

昭和22年3月教育基本法、学校教育法、同施行規則が公布され、教育の基本原則と学校体系が決定され、新しい教育が進められることになった。同年4月国民学校は再び小学校という名称に戻って6か年の課程となり、3年課程の新制中学校が制定され、義務教育の年限は9か年に延長された。

職業科は新制中学校においてこれを課すこととなった。

以上のことは、明治の初めから終戦当時までの、技術教育に関連することがらについてその概況をあげてみたわけであり、このこと自体が、後における新制中学校の技術教育の進展の基盤として、極めて重要な意義を持つものである。

#### 5. 戦後における技術教育の出発

(1) 戦後我が国は荒廃した。

狭隘な国土に過剰な人口を擁しながらも、近代的民主主義国家の確立をめざして立ち上っ

た。

教育面においても教育基本法が制定され、真理と平和を希求する人間の育成が企画されたことは、永年にわたる教育の歴史に一大変革をもたらしたものであり、喜びにたえない。しかし、これらの基本的立場が、必ずしも正しく推進されていたと言い得るであろうか。

国家的課題のとらえ方、またこれに即した教育内容の編成や取り上げ方、また、教育方法などについて、当時のもようを拾ってみよう。

## (2) 昭和22年の新学制の実施にともなうて

新制中学校が発足し、社会科と職業科が新設された。当時発表された学習指導要領を見ると、戦後の特殊事情を背景とする中で技術教育発展の曲折を肯定できるような気がする。

昭和22年3月20日学習指導要領一般編(試案)が、文部省検査済みとして発表された。これに示された教科および時間数は次表のようである。

教科	7年	8年	9年
必修 職業 農工商 水産家	140 (4)	140 (4)	140 (4)
必修 科目	1050 (30)	1050 (30)	1050 (30)
選択 科目 外国語	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)
習字			35 (1)
職業	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)
自由研 究	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)
選択 科目計	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)	35~140 (1~4)
総計	1050~1190 (30~34)	1050~1190 (30~34)	1050~1190 (30~34)

(注) 一般科目は省略、職業科と選択科目のみ。( )内は週当日時間数を示す。

小学校で独立の教科であった家庭科は、中学校では職業科の中の一つの科目となって、生徒は農・工・商・水産・家庭のうち一科目または数科目をきめて学習することになった。そしてこれらの科目については、各々教科の学習指導要領および職業指導の学習指導要領を参照して、学校の設備と生徒の希望により、生徒の将来の生活について充分考えるようこれを決定したものであると示している。

上の表で特に注目したいことは、必修科目と選択科目とが設けられたことである。さらにこの選択科目では、校長の裁量により、生徒の負担が過重にならないと認める場合は、6時間まで増すことができるとされていることは、現在の学習指導要領の時間構成と大きな違いのあるところである。

占領下という特殊事情の中で、学校教育法を具体化し、一般教育的ねらいと、職業振興的ねらいと、職業指導的ねらいとを並列しており、完成されたものではなかった。

指導要領試案の序論の一節に、この書を読まれる人々は、これが全くの試みとして作られたことを念頭におかれ、今後完全なものを作るために続々と意見を寄せられて、その完成に……と記されている。

## (3) 技術教育出発当時の山梨県の状況

文部省は指導要領試案を急いで作ったので、校長裁量により、地域や生徒の実態と希望を考慮し、とりあえず困窮した社会状態を乗り切ってほしいというのが本音であったろうと思われる。

このような趣旨を受けた本県の現場は、施設といっても農地と少しばかりの農具がある程度で、何をやってよいのか困る状態で、工業的施設などがある程度整っていた学校は、甲府西中くらいのものであった。

もっとも西中は、戦前からの実業科工業を取り入れていた学校であり、九州大分県の某校と全国に2校しかない立派な施設々備を持った学校であったからで、本県として他県に誇

り得る学校であった。

西中では、農・工・商・家の四科目を取り上げ、必修教科として週4時間を展開し、さらに、選択科目として工業、商業、家庭の三教科を週4時間実施した。しかも学級別全生徒が、英語、工業、商業、家庭の四つに分れて、同時限の授業で年間を通して四科目のうち一科目を選択するシステムをとっていた。これは全国的にも珍しい実践であり、職業教育に力を入れた名実共に著名な学校であった。

全国的にみて、必修では、農村地帯で農業と家庭を重点に、町では農・工・商・家の内容を適宜取り上げたが、選択コースは、農村で農業、町で商業・家庭という状況で、英語の選択が必須選択という形で中学校教育の重点科目のような位置づけであって、職業選択は時間も少なく集る生徒も少なく、誠に振わない状態であった。

新制中学校発足により誕生した職業科に対して、同僚職員のさげすんだ視線と学校経営の重点施策に入れてもらえないことの悲しさは、口に言えないものであった。したがって職業科担当教師の意気は上らず、現在の技術科担当とは全く違った環境にあり、その心情は本当にやるせないものであった。しかし、踏まれても曲げられても圧迫されても、その中を力いっぱいがんばり抜いて今日への基盤を築き上げた諸先輩の労苦は、20年を語る座談会の席上でも伺ったように、実に涙ぐましいものであったことを強調し、この記念誌の紙上をもって感謝の意を表したいと思う。

想えば、新しい教科として生まれた職業科には、伝統的なものは何一つなく、整わない施設々備の中でただ黙々と励み、本教科の意義と重要性を理解し、将来への夢と希望を託して文字通り開拓者精神そのものによる努力の展開であった。

#### (4) 戦後における新教育の動き初め

戦後の新教育の理念は、あらゆる面から広く深く探求された。また当時ほど教育実践の

必要を痛感した時はなかったであろう。

そして、この教科が成就するか否かは、一つに新制中学校が適切妥当な教育計画を持つか否かによって決定されることであった。

国民生活の根本は国民の労働と生産にあり、その労働と生産は如何に行なわれているかということ、義務教育の終了までにすべての生徒に修得してもらおうとした。中学校の産業教育は、職業科を中核として考えられ、職業科は職業教育のための教科ではなく、一般普通教育としての教科でなければならなかった。ともすれば、上級学校進学のための準備教育に墮しがちであったり、アカデミックな教育内容に憧れたりして、あたかも旧制中学校を想わせる傾向の強いものもあった。

産業教育は、生産技術を学習する分野としての性格を持つもので、トライアウト的な学習は中学校教育の全教科を通じて為されなければならなかったが、実情は必ずしもそのようではなかった。

戦後の教育界を一時的に風靡した、いわゆる生活経験単元学習にしても、身の回りの生活をという視点に立って編成されたものであり、消費生活が主体となり、社会経済の基本機能である生産、流通、消費の相互関係などは等閑視され、しかも、学校系列は支離滅裂だと批判した学者もいた。

このような教育の行なわれた学校からは、日常生活に事欠かない広く浅い知識を持つたいわゆる「ちょうほう」な人間を育成することはできるであろうが、一つの問題と真剣に取り組んで、自主的に解決していくような人間をつくることは極めて困難なことであった。かかる意味において、当時の職業科であっても、生活経験単元の学習が全国的にはほんの少数の学校で取り上げられたが、これについては各方面から厳しく批判された。

生活経験単元学習に対する批判が高まりつつあるとき、朝鮮動乱が始まり、産業振興の必要に迫られ、産業教育の重要性が強く叫ば

れるようになった。しかし、ここでいう産業教育は、国家的課題解決のために必要な産業の振興を図ろうとするものではなく、教育を産業界の要求に直接的に従属させる、ゆがめられた姿の産業教育であったことは事実である。

## 6. 職業科が職業科および家庭科と改まる

最初の学習指導要領試案より約2年を経過した昭和24年5月28日、文部省は「中学校における、教科と時間数の改訂について」という通達を出し、職業科を職業科および家庭科と改めた。そして職業科および家庭科は、職業についての専門的な知識や技能の教育をするのではないとして、農業、工業などの生産技術の領域を、職業指導に必要な適性発見のための、機能的ないくつかの啓発的経験の分野に分解し、それらを試行するよう指示した。

このために、職業科および家庭科は、職業指導のための教科であるかの如き錯覚を持ち、トライアウトコース（啓発的経験の試行課程）という言葉が、教科の中心概念であるかのよう唱える者も多かった。

さらに、CIEのオスポーンとネルソンは、同年7月それぞれ文部省に報告書を出し、職業指導的性格を一段と強める勧告（指令）を行なった。

こうした動きによって、現場の各学校は、多種多様な仕事をできるだけ多く、あれこれと経験させ、各種の職業に関する情報を与え、将来の進路選択に役立たせようとする教育計画が編成されることとなった。

ちなみに、日本職業指導協会が大きく胎動し出したのもこのころであった。

すべての教育計画は、二つの類型の教育内容によって構成されているはずである。一つは一般教養のコースであり、一つは専門教育のコースである。この二つの流れを各々の程

度に強調し、どんな様式に調和させるかは、国家の社会的文化条件と、学習者の心理的条件によって、相対的に規定されるべきものである。しかしこの二つの類型の教育内容の間には、密接不離のつながりがあり決して単独には存在し得ない。相互媒介的な関係をもって、学習者の統一的な人格の形成を培うものでなければならない。

中学校の教育は、小学校における教育の基礎の上に、一般教養をさらに高め、社会の成員たるに必要な常識的な思考および行動の様式を発展させるのであるが、学校教育法36条の「社会に必要な職業について、基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度および個性に応じて、将来の進路を選択する能力を養う」に着目して、中学校に課せられた目標を明確に把握しなければならない。

自分自身を知ること、それに基いて将来自分が社会に占めるべき場所を選択する力を養うこと。いわゆる中学校教育における啓発的機能の重要性を確認しなければならない。この啓発的という目標は、すべての教科がねらうべきものであり、さらにこのためのガイダンスプログラムも用意されなければならない。その中において、職業科および家庭科は、最も直接的に職業生活や家庭生活の中から、基礎的な、実際に役立つ仕事を求め、これを学習させることによってこの目標を達成しようとする教科なのである。

今回の通達によって、職業科および家庭科と改められたことは良かったが、職業指導的傾向が顕著になってきたため、上記のような教育本来の考え方から、ガイダンスプログラムの展開による実践に努力する立場の者たちは、職業に関する基礎的な能力が育てにくいとして、職業指導との同居は困ると、真向から反対し激しく対立するにいたった。

## 7. 学習指導要領中間発表で職業・家庭科と改称される

このような状況を解決するための手だてとして、文部省は7か月後の12月9日「中学校における職業・家庭科について」という通達を出したが、これが昭和26年の学習指導要領改訂の骨子となった。

この頃から職業・家庭科の改訂、改訂また改訂のムードが始まり、現場は苦慮するばかりで手の施しようがなく、安定ムードを求める切なる心情にかられたことは、年輩者の記憶にはっきりと残されているよう。

ともあれ、12月の通達で職業科および家庭科は、職業・家庭科と改称され、職業指導と完全に手を切り、「実生活に役立つ仕事を中心とする教科」に生まれ変わった。そして、啓発的経験の意義と、地域社会によって特色を持つ教科という三つの柱をかかげ、教育計画の作成基準として、4分類12項目の仕事の内容と10項目の知識理解の内容を明らかにした。

職業・家庭科の性格を「実生活に役立つ仕事を中心とする」と規定したことで、義務教育における中学校の一般普通教育の教科として、必須教科としての意義づけができた。

指導時間数は、必須教科の職業・家庭科は全学年105～140時間で昭和22年の発足当時と同じであるが、選択教科の中の職業・家庭は全学年105～140時間となり、週当たり時数1～4が、3～4と変り重視された。

教科内容は、4分類12項目521の仕事例が示されたが、この内容の実践展開については次のような問題点があった。

一般普通教育としての必修の意義づけが広義の規定であり、教科の性格や目標があいまいで明確さを欠いていた。

地域偏重に陥り、鑄物地帯では鑄物一色の教育内容を展開し、工業地帯の或る学校では、学校工場的システムにより教科の展開を堂々

と全国公開した例さえもあった。

同一地域内の学校でも、特定の施設々備を持つ学校では、実生活に役立つ仕事を実習を通して展開し、施設々備を持たないある学校では、教科書のみで展開せざるを得ないという実情も見られた。

指導教師の実態も、農業と家庭科の指導はどうやら展開できたが、工的または商的内容が展開できた学校は初めのうちは本当にまれであった。

単元構成において「生活単元」的な形式がとられるようになった。例えば、「学校の清掃美化」とか「家庭生活への協力」といった単元でまとめられ、これらの単元の中に園芸、手技工作（木工・竹工・金工）、製図、文書事務、経営記帳、計算、調理など技術の系列の違う仕事、わずかの時間配当で雑多に取り入れられていた。この単元学習は、組織的、系列的な学習によって効果の上がる基礎的技術の教育にとって・致命的欠陥となった。

啓発的経験の意義を強調する性格づけから、この教科の学習のねらいが、生徒の適性発見にあるのではないかと、トライアウトとか、職業準備とかとする学校もあとを絶たず、また、勤労愛好の態度育成をと農業実習に力を入れ、篤農家のまねをしようと努力する姿さえも見られた。

## 8. 実生活に役立つ仕事のこぼれ話

(1) 昭和25年12月2日に、甲府市立西中学校で全国公開の研究大会を行なった際、文部事務官の鳥田喜知治先生が来甲された。

研究会の後の四方山話の中で次のような話題があった。

或る教師が、甲府←穴山橋間のマラソンのおり、いたずら者の生徒が荷馬車にぶら下がり、手をすべらせて轍に足の指をはさんでつぶした。昭和16年のこととてバスやタクシーの便はなかった。止むなく教師は中古自転車の後に生徒を乗せて走った。途中、葦崎の町

はずれで古釘を拾いパンクした。自転車店もなく困り果てた。ふとポケットのキャラメルに気付く、近くの農家からポンプを借りて来て、タイヤをはずし、チューブの穴の部分に軟かくしたキャラメルをあてがい、空気を入れたら走れるようになり、そのまま甲府の病院までたどり着いたと笑いながら話した。

聞いていた島田事務官が手を打っていわく、「君、それだよ。すばらしいよ。職業・家庭科の実生活に役立つ仕事の特筆すべき例だよ……」聞いていながら、何となくわかったような、わからないような、どうも納得いかない気分であった。ともあれ、こんな笑い話的な内容が、全国的に真面目に展開されていたのかも知れない。

(2) 文部事務官の長谷川淳先生が、皮肉たっぷりに、にやにや話してくれたこと。

関東地方のある学校の公開に行ったとき、その学校の校長がこんな説明をしてくれましたよ。…本校ではうさぎを5匹飼育しているが、庭先で菜葉を栽培し、当番の生徒が可愛がって面倒をみている。大きくなったら毛皮に売る。そうすれば、生活單元としての「うさぎの飼育」で、計算事務も、簿記も経営も、当然栽培飼育は指導できるし、巣箱を製作するので第2分類も十分こなせて、小規模校の職業・家庭科で、実生活に役立つ仕事がまわって学習できる……。中学校の先生方は本当にそう信じているのですかねえと、マドロスパイプをくわえながら頭をひねっておられた。

(3) 前の例と内容は同じであるが、事務官の立場は正反対である。

筆者はこの時から、思い切って学習指導要領によらない研究と展開を試みようかと決心した。そして、昭和27年2月20日に、第2回目の全国公開研究会を甲府西中で開催した。この時、長谷川事務官が来甲して親しく指導して下さった。

学習指導要領によらない指導の実際を見て、いままで高校の工業ばかり重点的に指導して申訳なかった。今度は中学校の内容を早急に検討したい。実践資料をまとめておいてほしい。特に、4分類12項目と実生活に役立つ仕事にはこだわらないで、と念をおされた。そう言い残して帰られたことは、中学校で一般的に展開できる「技術教育の内容」について、実践を始めてくれという意味であると受けとめた。

気まぐれ的にやった研究でもあり、仲間の先生たちに苦勞をかけてすまないと思う反面、このことに一層の責任を感じ、すべてを技術教育の実践と展開になげうとうと決心した。

昭和27年12月5日、甲府西中は職業指導の全国公開を行ない、職業・家庭科と分離した全校的機能を回転する職業指導のシステムでの展開をして、両者の分離両立の方式を世に問うた。甲府西中は、全国的に見ても早い時期に、分離に踏み切った学校であり、その実践は高く評価された。

筆者は昭和27年から9年間、文部省の産業教育審議会の委員、学習指導要領職業指導篇および指導書・手引書の編集委員等を兼務しながら、技術教育の重要性を考え、教科を技術科一本にしほりたいとまで夢み、東奔西走して努力したが、甲府西中の職業・家庭科担当教師と文部省の仕事との両立に無理が重なり、昭和36年1月不幸にして病に倒れ志を果たし得ず、自己の無力さに悲しい思い出のみが残されている。

## 9. 実生活に役立つ仕事への批判

実生活に役立つ仕事を中心に職業・家庭科の展開をしていた全国の実践家達や、この面を研究している学者の間から、前述のような問題点の提起や批判が猛烈に高まって来た。教育評論家の池田種生氏を中心とする、職業教育研究会(後の産業教育研究連盟)は、文部省に対して強力に内容の検討を迫るにいたっ



た。

6・3制が実施されて5年ほど経過し、すでに新教育の理念は、それからそれへと探究が進み、このころほど教育の実際の必要を感じたときはなかったであろう。

昭和24年7月、米国教育使節団の、学校における職業教育は大いに強化する必要があるという報告書が出され、これを受けて、昭和26年6月に産業教育振興法が成立した。いわゆる産業教育振興発展の運動は、これに刺戟されて起こり、講和条約発効後における教育再編成の一環として、職業教育の地位の飛躍は必至という状況にあった。

狭隘な国土、人口の過剰等悪条件を克服して、国家の発展および社会福祉と国民の幸福を増進させるためには、産業の振興による国力の増進にまたなければならず、ここに教育の根元的な課題の一つとして、産業教育、生産教育の叫ばれる所以があり、技術教育が取り上げられなければならない意義があった。

実生活に役立つ仕事への批判が高まるのと裏腹に、生産教育論の展開が猛威をふるった。生産教育論、いわゆる教育と生産の問題は、宮原誠一、城戸幡太郎、清原道寿、桐原葆見氏らによって提唱された。

産業教育振興法が成立したのは、生産教育論や、朝鮮戦争のための多額の外資流入による、設備の合理化・近代化の要望される情勢下であって、企業側や政界側の強い要望から生まれたものである。

労働組合側特に日教組が、この合理化政策に強く反対し、産振法による中学校職業・家庭科担当教師の研究や、実習助手に対する費用の裏付けを無くしたことは、吾々当時の担当者にとって非常に残念なことであった。

宮原誠一氏の唱える生産教育論は、日本教育の課題は「科学的生産人」の育成にあるとし、生産における基礎的技術の陶冶を強く主張した。そして、産業教育指定校の研究や、

日教組の教研集会、生産教育研究連盟の研究大会、産業教育中央審議会の答申案作成研究大会等に出席され、実生活に役立つ仕事の実践展開の問題点と対決して、活発に議論を展開した。当時、宮原誠一監修になる中学校職業・家庭科の教科書には、生産教育論的な匂いが多分にあったはずである。

また、当時の文部事務官長谷川淳氏も特異な論理を持たれた人である。筆者もそのころ両氏の講演旅行などに時おり同行し、基礎的技術とは何かについて、学校での具体的実践をもとに、見解を発表したり討論をしたりして、研究の楽しさをかみしめたことの思い出が、いまなお記憶に新しい。

当時の現場担当者は、学習指導要領に示された4分類12項目の盛り沢山の内容をかかえ、前述の「うさぎの飼育」のような内容で、お茶をにごすのに四苦八苦であったため、宮原氏や長谷川氏の論理は、よく吸収され消化されて、教育観を持ち拠り所を得させて、実践研究を進める上での明確な指標となった。

産業教育振興法にもとづく中央産業教育審議会は、宮原氏の積極的な活動と、文部省職業教育課長杉江清氏ならびに文部事務官長谷川淳氏の行政面からの精力的な行動とが、しっかりとかみ合い、昭和28年3月9日に生産教育論の立場にたつ、第一次建議案「中学校職業・家庭科教育の改善について」が答申された。

## 10. 第一次建議の示す目標と性格

中学校職業・家庭科は、「職業生活および家庭生活における、基礎的な技術と基本的な活動の経験とともに、それを通して、国民経済および国民生活に対する一般的な理解を養うもの」とし、さらにこうした学習は、「日本の国民経済および国民生活の改善向上に役立つものでなければならず、直接に特定の職業への準備をするのではなく、将来の進路にかかわらず、男女のすべての生徒に課せら

れるべきもの」と規定し、共働的な労働を重視して、技術的、実践的な態度を養うことを理想とし、その過程としての基礎的な技術や基本的な活動についての教育を重視するものであった。

これは、当時の職業・家庭科教育に一大旋風をまき起こしたものであり、これを機に職業・家庭科は新しい方向に進んだのである。

## 1 1. 第二次建議と32年度版改訂指導要領

第一次建議をうけて、文部省中央産業教育審議会の専門委員会が、その内容構成に当たった。(筆者も専門委員としてこれに参加)委員会では、広い視野に立って一般普通教育という立場の技術とは、どのようなものを言うのかについて特に論議が集中した。

そこで、産業分類・職業分類等をもとに技術の抽出を行なったが、実に大変な作業であった。その中から、義務教育における中学校の職業・家庭科で取り上げ得るものを整理統合して、製図、機械、化学、電気等にまとめた。そしてこの内容を、農、工、商、水産、家庭という従来の指導要領の分野に配列し、学習内容としようとしたのである。しかし、技術だけに限定することの是非論や、特に女子的内容との関連については、期まだ熟せず、男女の委員の意見集約をみることはできなかった。このことは、後の学習指導要領改訂(昭和33年10月)の際、「技術科」となるであろうという予測が、発表前の一夜にして「技術・家庭科」となったことと、深い関わりがあると言えるであろう。

ともかく、答申された学習内容は4群21基本分野54項目である。分野と項目の数は多いが、その当時の指導要領のように浅く広くということは厳にいましめ、技術学習を中心とする。ミニマムエッセンシャルズを学ぶことができるようにという趣旨で、項目を共通と傾斜とに分類して示した。男女とも共通

に学習すべき項目には○印、傾斜として男子必修・女子必修のものには△印を付して表示した。

学習内容の54項目中、共通は33項目までしぼったが、それ以上の精選は委員の中の「ナワバリ」的意識が強くてまとまらず、遂には文部省担当課の事務官の出席は求めず、専門委員のみの審議でとりまとめ、答申を行なったのが第二次建議の経過である。

昭和29年10月19日に発表された、「中学校職業・家庭科の教育内容について」の第二次建議は、第一次建議の趣旨よりはるかに後退したものではあったが、地域や性別にかかわらず、すべての生徒が共通に学ぶべき内容を○印で示したことで、時間数を明示したことについては、高く評価された。

等申の内容を知った現場では、早速その方向に従って実践研究を開始した。現場の意欲的な取り組みに合わせて、文部省職業教育課では指導要領改訂の作業を進めたが、結論を得るまでには、いろいろな勢力関係にわざわざいわれて大変であったようだ。とにかく、教材等調査研究小委員会をもって改訂作業を続け、最終的には6群22分野52項目。○印は12分野17項目となり、第2次建議以来1年7か月を経てようやく、昭和31年5月28日に、32年度改訂版として発表された。

## 1 2. 技術・家庭科の新設・発足

その当時現場では、文部省中央産業教育審議会専門委員会でも検討し発表された、「重要産業の基礎的技術」「要素作業分析」「プロジェクトの構成」「指導単位としての仕事の選定」などが積極的に検討され、全国的に研究の動きが活発になり、産業教育研究指定校の工的内容の研究などとともに、職業・家庭科の飛躍的推進の気運がみなぎってきた。

このように第一次建議の実践的研究の成果として、いわゆる職業指導理論や作業科的性

格を主体とする教科観に見切りをつけ、一般普通教育としての職業・家庭科を展開し、着実に位置づけようとしたことは、本教科の存続と発展のために大いに功ありと言わなければならない。

かくして、第一次建議をもとに鋭意検討をしてきた、中央産業教育審議会の内容を是とする。全国の熱心な研究者の力が結集され、昭和33年3月15日の教育課程審議会答申、同年7月31日の改訂案中間発表。続いて10月1日の文部省告示により学習指導要領が改訂され、「技術・家庭科」の新設誕生となった。

前述のように、技術科一本の形で告示されると思っていた全国の先生方は、技術・家庭科として「・」がつけられたことにひどく驚き、あっと言って声なき状態であったことは、現在の担当者の多くが記憶しておられることであろう。

技術・家庭科の総括目標は、「生活に必要な基礎的技術を習得させ、創造し生産する喜びを味わわせ、近代技術に関する理解を与え、生活に処する基本的な態度を養う」と言うものの、つまりは、近代的な技術性を高める教科として、最近の科学技術の進歩に応ずるため、近代技術に対する基礎的な能力と態度を養うことをねらいとした。

指導内容としては、若干の栽培分野のほか、設計製図、木材加工、金属加工、機械、電気、総合実習などの工的内容を中心とした、生産技術に重点がおかれた。女子向きでは、若干の工的技术のほか、主には調理、被服を内容とする。家庭生活技術を重点としている。

### 13. まとめ

以上は、明治以降学校教育の草創期より、技術・家庭科の発足に至るまで、技術教育の思潮の断面を、筆者なりの観点から論述したものである。

技術・家庭科以降については、紙面の都合

もあり、単純明解の効をねらってその動向を次ページ以降に別表として示すこととした。

技術・家庭科の教育内容のめまぐるしい変化に対処し、教育条件の整備や研究の推進等、この道30年をふり返り我々の歩んだ道を見つめるとき、いまさらながらその険しい道程に驚きながらも、これから先の本教科の展開に明るい光を見出すことができる。今後とも、諸賢の一層の努力により技術教育の発展されることを切望するものである。

(本研究会副会長・記念誌編集委員長)



### 4冊の文部省指導書

- 左上 昭和34年度版
- 左下 昭和45年度版
- 右上 昭和53年度版
- 右下 平成元年版

## (2) 技術・家庭科教育の足あと（その1）

山梨県中学校技術・家庭科研究会顧問 滝 愛子

### 1 はじめに

21世紀を3年後に控え今年（1998年）の元旦の新聞に次のような一文があった。

「二十世紀は激動の時代だ。日本は、日露戦争、第一次、第二次世界大戦と三つの戦争を経験しながら、『西欧社会に追いつけ』とひたすら豊かさを求めて走ってきた。後半の五十年で、経済活動は飛躍的に伸び、経済大国になったが、一方で資源の大量消費、過度の開発による環境破壊など負の遺産も背負った。—（中略）—

二十世紀の豊かさの指標が経済振興であったのなら、人口減少社会となる二十一世紀の豊かさは何に求めたらいいのか。価値観は、一変する兆しを見せ始めている。」

以上が、一月一日の新聞記事の内容であった。日本の国民が、我慢し努力しながら、ひたすら走り続けた結果が、「不透明で不確実性の時代」を生み出し、間もなく二十一世紀を迎えようとしている。なんとも新年早々から、気重な感がしていた。

ところが、年賀状の一枚に「頌春、昨年暮より 太陽光発電所のオーナーとなりました。赤字覚悟ですが、二酸化炭素削減に取り組んでいるつもりです。」技術・家庭科の先生からいただいたものである。その力強い文言を読んで、先刻までの気重な気分は、いっぺんに吹き飛ばされてしまった。

地球温暖化防止の世界的な会議が、今年の12月に京都で開催されたことをきっかけに温室効果ガスの排出減少の動きが活発になっている。温室効果ガスの最たるものが二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）で、世界中で二倍に増えると主要な穀物生産が半減するという危険性があり、その削減方法に世界中が頭を悩ましてい

る大問題である。

この大問題に早速取り組んだ技術・家庭科教師の決断力・行動力こそが「社会の変化に主体的に対応できる人間の育成」を目指しているこの教科の究極の目標なのである。「技術・家庭科教育の足あと」は立派に根づいているのではないか。ひたすら走り続けた教育の40年という節目に「故きを温ねて新きを知る。」過去の教育をよく研究して新しい教育の道を発見する。「温故知新」の立場から技術・家庭科（主として家庭系列の領域）についてその足あとをたどってみたいと思う。

### 2 家庭科（家庭系列）の歴史

現行の技術・家庭科は、昭和33年に新設されたものである。その前史的役割を学習指導要領（戦前は授業要目）の成り立ちや実施の状況を中心に概観することにする。

#### (1) 明治維新以前

家庭生活に必要な知識・技能・態度の育成については、家庭教育として、父母・年長者が子どもに指導していた。しかしやや複雑高級な事項を習得させる場合には「師」について学ぶことが行われた。

上流家庭の子女は、書道・茶道・華道・琴曲・和歌・礼法などをそれぞれの師について学んだ。

一般民衆の娘たちは、寺子屋で読書算の初歩を学ぶほか、近隣に裁縫をよくする人があれば「お針子」として通った程度である。

また格式ある武家とか大商人の家に「行儀見習」として娘を出す家もあった。そこではその家の夫人や、女中頭のような人から、読書算、裁縫、礼法その他一般常識等について教えられた。これらが明治維新以前における

家庭科教育とでも言うべきものであろう。学校はあったが、士人たる男子のためのものでその教科は、漢文・国語・武芸が主であり、家庭科的なものはなかった。

一家の経営は、家長の任務とされ、女子はその命令のままに、家事的労務に従事するものとされていた。

## (2) 明治時代

明治5年(1872)政府は「学制」を頒布し、「邑に不学の家なく、家に不学の人なからしめんことを期す」と宣言し、主としてフランスの制度を模倣して、全国に小学・中学・大学を設置する計画を立てた。これによると、小学には、尋常小学・女児小学・村落小学・貧人小学等があり、女児小学には、尋常小学の教科のほかに「手芸」が置かれていた。ここにいう「手芸」は、現在の手芸ではなく、被服製作を主としたものである。

しかし、この学制は規模の雄大から、当時の日本国力に相応せず実施困難であった。

明治12年(1879)、アメリカにならった「教育令」が發布された。小学校は、初等科3年、中等科3年、高等科2年とされ、中等科より「裁縫」が課され、高等科では、更に「家事経済」の大意が課された。

「家事経済」の内容は「衣服洗たく・住居什器・食物割烹・理髪・出納」であった。

明治19年(1886)に「教育令」にかえて「学校令」が發布され、ここにはじめて学校制度が整備された。小学校・中学校は、それぞれ尋常・高等の2段階に区別された。

尋常小学校は4年、高等小学校も4年で、尋常小学校は義務教育であった。尋常小学校では土地の状況により「裁縫」を課すことができ、高等小学校では女児に「裁縫」が課された。しかし、「家事経済」は消えた。

明治40年(1907)、小学校は尋常科6年、高等科2年または3年となり、義務教育が2年延長された。裁縫は、尋常科3年か

ら高等科3年まで課された。

明治44年(1911)高等小学校の女子に「理科の内家事」が課され、毎週3時間の理科の内1時間が家事に当てられた。

## (3) 大正時代

大正時代は明治時代の後期とだいたい同じであった。

大正8年(1919)から、「裁縫」は、尋常小学校の第4学年から課せられ、高等小学校の「理科内家事」は、理科から離れて、「家事」として独立した。

大正時代は、生活の改善、家庭生活の合理化、家事作業の科学化が唱導された。

## (4) 昭和時代(戦前及び戦時中)

昭和初期は、大正時代を踏襲して大きな変化はみられなかった。裁縫科は従来和裁を主としていたが、この頃から洋裁が多く加えられるようになった。

昭和7年(1932)高等小学校に国定の「家事教科書」が著作された。

## (5) 昭和時代(戦後)

昭和20年(1945)、第二次大戦の終戦後、アメリカ教育使節団の報告により、日本の学校制度は、大改革が行われた。

昭和22年(1947)、教育基本法、学校教育法、教育委員会法が制定され、小学校6年、中学校3年、高等学校3年、大学4年の、いわゆる六三三四制が定められ、男女の共学が認められ、義務教育が9か年に延長された。

小学校には、第5、6学年に男女必修の「家庭科」が置かれたが、これは教育史上画期的なできごとであった。

中学校の家庭科は、農業・工業・水産と並んで「職業科」の一分科とされ、生徒は、男女の別なくその中の一つを選択履修するたてまえであった。

昭和25年(1950)に「職業・家庭科」に改められた。この教科は、農・工・商・水産・家庭の枠をはずして、多数の「仕事」に分解し、これを4類12項目(I 栽培・養畜・漁・食品加工、II 手技工作・機械操作・製図、III 文書事務・経営記帳・計算、IV 調理・衛生保育)に分類し、1年では、4分類6項目以上、2年・3年では、2分類4項目以上にわたって学習させることを基準とした。

昭和31年(1956)職業・家庭科の内容は、6群22分野に改められたが、総花的学習内容、広範な内容に対応する施設・設備等の問題点が指摘された。

昭和33年(1958)「技術・家庭科」が新設され、男子向きと女子向きに分けられた。「物を作る技術」に主体が置かれ、女子向きは、調理・被服製作・設計製図・家庭機械・家庭工作・保育となり、家族と家庭経営が表面から消えた。そのほかに選択教科としての「家庭科」が、外国語・農業・工業等と併設された。しかし、大多数の生徒は、外国語を選択したので、その存在は微々たるものであった。

昭和44年(1969)学習指導要領の改訂により、調理・被服製作などという内容が、食物・被服・住居などと改められた。

昭和55年(1980年)の学習指導要領の改訂により、従前のように「男子向き」「女子向き」の内容が学年別に割りつけられていたが、男女の別を止め、学習内容を便宜上「技術系列」「家庭系列」と略称した。また男女の相互理解と協力を図るための措置として、男子には技術系列の領域のほか家庭系列の領域から1領域を含めて履修させ、女子には家庭系列の領域の中から5領域、技術系列の中から1領域を含めて、男女いずれも七つ以上の領域を選択して履修させた。

## (6) 平成時代

平成2年(1990)学習指導要領の改訂により、A木材加工 B電気 C金属加工 D機械 E栽培 F情報基礎 G家庭生活 H食物 I被服 J住居 K保育の11領域で構成された。履修方法については、上記のAからKまでの11領域のうちから7以上の領域を履修させる。その際、「A木材加工」「B電気」「G家庭生活」及び「H食物」の4領域についてはすべての生徒に履修させることとし、従前のように男子と女子で履修の範囲が異なる取扱いを改めて、男女同一の取扱いとした。

## 3 家庭科教育観の変遷

以上のように家庭科教育をみると、初期の頃は、女子にとって必要欠くことのできない技能として課せられ「家事」「裁縫」は良妻賢母の育成というねらいのもとに組織され運営されていたといっても過言ではないだろう。

戦時に入ると、国策遂行のため、家庭科教育もまた国家のためという取り扱いがなされた。

戦後は、中学校卒業後の職業準備や職業選択のねらいのもとに、実生活に役立つ仕事を中心にした内容構成をしたので、生活経験学習への傾斜という声があった。

現在の技術・家庭科の成立は、科学技術教育振興方策の1つとして中学に新設された。

家庭機械の普及、既製服や調理された食品の一般化、女性の雇用の増大など家庭を取りまく状況の変化に応じて、家事作業の簡素化や、家事技能習得の必要性は低下してきた。そのため家庭科に対する考え方も変化せざるを得なくなった。家庭科の中心は、家庭経営・家族に置かれ、賢い消費者であるための知識・技能に教育の力点が移動してきた。

最近では、余暇の増大とともに趣味としての調理、被服製作、手芸がさかんになってきているように思える。いずれにしても、家庭生

活を基礎としたこの教科の教育の必要性は、時代のニーズに適応して一層重要視されることと思われる。

#### 4 技術・家庭科の教育的価値（実践例）

技術・家庭科は、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を目指して、「生活に必要な基礎的な知識と技術の習得」を第一の目標としている。

この目標達成のため、技術・家庭科の先生は、生徒に「わかる授業」の調査・研究・計画・実践・評価・修正・発展の学習サイクルを重視して、全県的な研究組織である技術・家庭科研究会を中心に活動し成果をあげてきた。その研究過程で技術・家庭科の教育的価値として、次のような諸点があげられた。

(1) 人生における家庭生活の価値を認識させ家族員相互の愛情を増進し、さらにこれを拡充して社会協同の精神を養うことができる。

(2) 適正な消費のあり方を学習することによって、家庭生活における物資の節約・利用・生活環境の汚染・破壊等、地球的規模で生活を考える能力を培うことができる。

(3) 学校で学習したことが、ただちに家庭生活中で実践でき、地域での家庭生活の改善に役立てることができる。

(4) 自己の筋肉を使って学習する実践的・体験的な学習形態は、自然・人生・社会に対する考え方を現実的には握させ、理性的な行動力を育む。

(5) 技術・家庭科は、国語・社会・数学はもとより、理科・音楽・美術・保健体育・道徳・特別活動等の知識・能力を総合して適用する能力を養うことができる。

(6) 生徒の主体的な実践活動を通して、物の製作に必要な観察力・表現力・忍耐力を育てしごとを完成した喜び（成就感）を実感させることができる。

(7) 生徒が自己の筋肉に訴えて学習する精神であるから、教師からの知識・技能の伝達だ

けでなく、自ら学ぶことへの意欲とよりよくしようとする向上心が養われ、生活を工夫したり、創造したりする能力と実践しようとする態度が育てられる。

以上が、この教科のみがもつ教育的価値であると考えられる。

研究会で話題になった一例をあげてみると①「家庭生活」の領域は、他のどの教科でも体系的に扱っていない。②家族の構成員として祖父・祖母（老人）の姿が教科書で取り扱われているのはこの領域だけである。

このことは、さ細なことのように考えられるが、期待される家庭像（昭41年）では、1 家庭を愛の場とすること（家族員相互の尊敬を伴う愛情を育てる） 2 家庭をいこいの場とすること（人間性を回復する明るく清く楽しいいこいの場とする） 3 家庭を教育の場とすること（家庭の雰囲気がおのずから子どもに影響して正しいしつけを行う） 4 開かれた家庭とすること（自家の利害得失のうちに狭く閉ざされず広く国家社会に対して開かれる）と一貫した価値体系を報告している。核家族化した現実の社会生活の中で家族相互の人間関係の重要性を理解させることは、困難であるが、家庭生活こそ人類普遍の原理を含むものであり、この教科のみに課せられた大切な内容であることを確認した。

#### 5 まとめ

技術・家庭科は、時代の推移により、さまざまな変革を経て今日に至っている。戦前と戦後では、封建的な社会から民主的な社会へと思想上の変動もあったので、教科の受けた影響も大きかった。しかし、教育課程改訂のたびに、改善と充実が図られ、生徒の人間形成に大きな役割を果たしてきた。

21世紀が求めるものは、国際社会に生きる日本人であろう。社会の変化や新たな課題に主体的に対応できる生徒の育成を目指して研究会の更なる努力と飛躍を願っています。

## (2) 技術・家庭科教育の足あと (その2)

甲府市立上条中学校 岩間 孝吉

### 1 技術・家庭科のスタート

(昭和33年～昭和44年)

1958年から1969年の11年間。私が中学校教師として就職した時期でもある。新しい教科はスタートしたけれども、いわゆる移行期間が昭和37年まで続く。技術・家庭科の施設設備は、移行期間が終わる頃からようやく整い始まる。

男子向きでは機械学習のための小型エンジン、女子向きでは家庭機械・被服製作のための裁縫ミシン等の購入予算を獲得する仕事から始めねばならなかった。購入した後は、生徒たちが授業で安全にうまく使えるために、放課後遅くまでかかって、それらの機械や用具類の整備・準備の仕事をした。

1・2・3年とも週3時間の技術・家庭科を男女別授業の形態で実施。昭和37年にはようやく「学級編成の標準に関する法律」が公布され、1学級の生徒数が52名に改善される。しかし、技術・家庭科の実際の授業では(男女の人数に差があり2学級合併授業のため)50人以下があると、もう一方で60名もの授業に対応しなければならないという実情であった。

この頃、理科や技術・家庭科等、実験実習を伴う教科に、中学校でも「実習助手・実習講師」的な職員を配置したらどうか、という提案がなされたという。(すでに高等学校では以前から配置されている)残念ながらこの案は、教育現場に2種類の先生はよくないという立て前に、敗れたようである。もちろん職員間に差別を生じるのはよくないが、教育現場に様々な役割を担う職員が共存できるようにしたいものである。

### 2 技術・家庭科の「軌道修正」

(昭和44年～昭和52年)

1969年から1977年まで8年間。科学技術教育の振興に、技術・家庭科が貢献できるか真価を問われた時期である。各学年の授業時数は各3時間で同じだが、この時文部省から出された『中学校指導書 技術・家庭編』は292ページに倍増され、担当者たちの力の入れようが察せられる。

教科の性格等の説明にあった「近代技術に関する教養」「創造し生産する喜び」という記述は消えている。

### 3 「相互乗り入れ」の技術・家庭科

(昭和52年～平成元年)

1977年から1989年まで12年間。技術・家庭科にとっても大きな曲がり角の時期であった。教科が発足して30年目の危機ともいわれた。1・2年が週2時間に減じられた他、領域を再構成し、男女の別をやめて内容を定めた。

とはいっても、男子には主として技術系列の内容プラス家庭系列1領域、女子には主として家庭系列プラス技術系列1領域の履修となり、男女共学か別学かの学習形態は各学校の実情に委ねられた。

### 4 男女同一内容の技術・家庭科へ

(平成元年～平成10年)

1989年から現在までの9年間。新しく「情報基礎」「家庭生活」領域を加えて11に整理統合し、すべての生徒(男女同一の取扱い)に7以上の領域を履修させる。

第3学年は週2ないし3時間に後退したが選択教科としては活路を見いだしているといえるのであろうか。人間らしい生活を可能にする技術の習得と生活者の自覚こそ、技術・家庭科教育が一貫して追求してきたものであるが、今風にいえば「生きる力」を培う教育をずっと前からやってきたわけである。



### (3) 技術・家庭科教育の現在と未来

山梨県教育庁義務教育課指導主事 入 蔵 靖 彦

21世紀を間近に控えた今、創造性とチャレンジ精神を存分に発揮できる社会に向け、文部省は、一人一人の子供の個性を重視し、生命を尊重する心、思いやりや正義感、創造性、国際性を育む視点を重視しながら、行政改革・経済構造改革・金融システム改革・社会保障構造改革・財政構造改革の5つの改革と一体となって教育改革を進めています。具体的には「豊かな人間性の育成と教育制度の革新」として教育制度の改革・弾力化や学校の教育内容の再構築、環境教育の充実、大学・高校入試の改善、教育の資質向上など、「社会の要請の変化への機敏な対応」として少子高齢社会への対応や情報化の進展への対応など、「学校外の社会と積極的な連携」として学校・家庭・地域社会の連携強化や家庭教育の充実、学校外の体験活動の推進、社会人や地域人材の学校への活用など、詳細な教育プログラムが提示されています。

これからの教育改革は教育界だけでなく、社会全体が教育を見直し、将来を展望すると共に深刻化しているいじめや不登校・非行・社会性の欠如・学力の低下と格差の増大など蓄積された様々な教育課題をそれぞれの役割分担で解決するものでなければなりません。それに今までの教育のよい所までを否定してしまうような盲目的な改革、時代のファッションとしての改革であってはなりません。

中央教育審議会の答申によると今後の教育の在り方として、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」という『生きる力』の育成が述べられています。阪神淡路大震災後に避難生活をしている神戸市内の中学3年生を対象に実施した調査の報告には、全教科

の中でもっとも役立ったのが本教科であり、中でも「電気」「食物」領域が役に立った等の結果が出ています。大地震という特別な状況下ではありましたが、この調査結果はまさしく『生きる力』に直結する本教科の特質と重要性が示されていました。しかし、現在の世界主要国では、普通教育としての「技術教育」をほぼ小学校1年から高校まで実施し、小・中・高の全授業時数に占める割合は平均で6%であるのに対し、我が国はわずか2%以下と極端に少ない状況です。

教育課程審議会の『中間まとめ』の中での本教科は、現行の領域を見直し、「木材加工」と「金属加工」及び「家庭生活」と「保育」を統合するとともに、「情報基礎」を必修にし、1・2年での必修授業時数は現行と変わりありませんが、3年では1時間に削減されています。また時間数の増えた選択教科の一つとして、現場でどのように扱われるかは未知の部分です。そしてこの次の改訂時は教科の再編も視野に入れ、その時技術・家庭科がどうなるかはわからないと教科調査官は言っています。確かに今の教科・領域は、広い学問の世界を便宜的に分けたものに過ぎませんし、教科の枠を超えた横断的・総合的な学習が話題になっています。そのような中で技術・家庭科の基盤も時代の変化に揺らいでいくのでしょうか。

教育課程改訂のたびに大きな内容の変化を余儀なくされている本教科ですが、実践的・体験的学習を取り入れ体系化した技術教育は、小・中・高での普通教育として技術立国日本の教育に不可欠であるばかりか、人間形成にも重要な役割を果たすものと確信しています。

本研究会のますますの発展と研究会員のバイタリティあふれる活動を願っております。

## 技術・家庭科に求められるもの

山梨県教育庁義務教育課指導主事 網倉玉枝

国勢調査によると、1985年から94年の10年間で人口は450万人増えている。その内訳は40歳以上の人口が1200万人増、0歳から39歳の人口は750万人減である。まさに高齢化、少子化の様相を呈しているといえよう。

高齢化、少子化への対応として、「思いやりの心を持つ」のはもちろんだが、「衣、食、住、人間関係等、一人一人が生活の自立をすること」が、重要になってくるのではないだろうか。

また、男女共同参画社会の実現に向けて、「男女共同参画社会2000年プラン」が策定され、その中には、男女平等の意識を高める教育を推進すること、男女が職業生活を両立することができるような基盤を整備すること等が取組に掲げられている。

このような社会状況において、本教科の果たす役割は非常に大きなものになってくる。中央教育審議会の答申では、「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」を基本にすえ、自ら学び、自ら考える力の育成に重点を置いている。

これを受け、平成9年11月17日、教育課程審議会の中間まとめが公表された。

技術・家庭科の改善の基本的方向として、領域の見直しと内容の改善、情報化の進展への対応、基礎的・基本的な内容への厳選という3つの視点が示された。基礎的・基本的な内容に厳選することにより、自ら課題を見だし、解決を図る問題解決的な学習を一層充実することができることをねらいとしている。これまでも本教科では、生徒の内発的な学習意欲を喚起し、楽しさや成就感を体得できるように、実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習など、生徒の主体的な学習活動の

場をできるだけ多く設定することを取り入れてきた。

課題解決力や創造力を育てる本教科の本質は、「生きる力をはぐくみ」、「豊かな人間性」を培うことにつながるものであり、またこれは、これからも変わることのないものであると考える。

人間の基本的な生産活動として「ものづくり」の原理を時間をかけて実施し、完成して役立てることは重要なことである。自分の思いや考えを生かし、ものを作り上げる喜びは、豊かさの喜びに通じるものであろう。

これまでは、一つの作品を完成させることや、よい作品を作り上げることを目指すことが多かった。しかし、これからは、どのように考え、どんな手法を取り入れ、創意、工夫をどの程度したか、長い時間かけて辛抱強くなればよかったか、そして各生徒が学習はじめよりどれだけ伸びたか、その様子を評価していくことが求められる。

自分で主体的に取り組んだものに対する満足感は、生徒の中にもう一度やってみようという気持ちを育てる。この成就感の形成は、長い人生の自己教育力の原動力となるものと考えられる。

中学1年生を対象に10年間、同じ設問で調査したところ、「ものを作るのは好きか」と「技術・家庭科学習に関心があるか」については、9割程度の生徒が「好き」並びに「ある」と答えたという報告がある。10年間生徒の興味・関心が高い数値を示していることに、本教科の魅力を再確認し、本教科を担当していることに嬉しさを感じる。

40年という今日までの研究の積み重ねに御苦労をいただいた諸先輩に感謝するとともに、本研究会の益々の発展を願うものである。

## 8. 諸資料

### (1) 本研究会生徒作品展の歩み（昭和62年度～平成9年度）

山梨県中学校技術・家庭科生徒作品展第1回が、昭和63年に開催され、今年で第11回を数えることになりました。11年間の縁石をここに簡単に紹介したいと思います。

\* 第1回作品展 昭和63年1月5・6・7日（県民会館地下ホール）  
生徒作品展約300点を展示

\* 第2回作品展 平成元年3月4・5日（県立青少年科学センター）  
生徒作品約300点を展示

\* 第3回作品展 平成2年1月27・28日（県民会館地下ホール）  
生徒作品約600点を展示

\* 第4回作品展 平成3年2月3・4日（県民会館地下ホール）  
生徒作品約500点を展示

\* 第5回作品展 平成4年2月1・2日（県民会館地下ホール）  
生徒作品約500点の展示

\* 第6回作品展 平成5年30・31日（甲府総合市民会館）  
生徒作品約450点を展示

\* 第7回作品展 平成6年2月5・6日（甲府総合市民会館）  
生徒作品約350点の展示

\* 第8回作品展 平成7年1月28・29日（甲府総合市民会館）  
生徒作品約360点を展示

県教育長賞 平山博文貴（竜王中） 海野真奈美（玉幡中） 大久保由紀（浅川中）  
伊藤由香（甲府南中） 長田美美子（付属中） 井上美香（大月東中）  
甘利奈緒子（塩山中） 清水久美子（塩山中） 清水政仁（明野中）  
五味夕香里（明野中） 大柴拓真（高根中） 栗原 梢（甲府東中）

NHK甲府放送局賞  
花形恵美（玉幡中） 中込悟史（敷島中） 上野亜由（東桂中）  
舟久保有紀（明見中） 酒井 梓（一宮中） 志村純一（甲府北西中）  
秋山明音（南部中） 鈴木理恵（七保一中） 間瀬英鈴菜（山梨北中）  
中田美菜子（山梨北中）

山梨日日新聞社賞  
井上知佳（市川南中） 窪田紀子（都留一中） 望月さゆり（甲府北東中）

雨宮理乃（上条中） 長田晶子（大月東中） 小松健一（長坂中）  
諸岡 龍（韮崎東中） 小尾智美（韮崎東中） 今村昌男（双葉中）  
高尾慶介（山梨南中）

\*第9回作品展 平成8年2月17・18日（甲府総合市民会館）

生徒作品約400点を展示

県教育長賞 白輪地美保・渡辺真紀（大月東中） 飯島隼人・若杉礼司・奥山元樹  
橋本雅俊（春日居中） 大原弓佳（都留一中） 坂本美奈（山中湖中）  
鈴木奈緒子（甲府東中） 長田和之（富竹中） 内藤道代（押原中）  
功刀加奈子（玉幡中） 中込 康（白根巨摩中） 神谷文香（韮崎東中）

NHK甲府放送局賞

志村裕子（七保一中） 土屋英雄（笛南中） 赤松多恵（塩山中）  
平山智章（山梨北中） 若林あゆみ（吉田中） 溝口絵美（甲府南中）  
村松寛章（押原中） 星山幸絵（竜王中） 青木菜穂・横山まどか  
川口知恵（竜王北中） 土屋良貴（松里中）

山梨日日新聞社賞

横田烈・梶原和貴・河野恵（御坂中） 佐々木晴美・堀河優子・小林由佳  
岩間保江・大柴純・佐藤純一・須田和広・雨宮康二（一宮中）  
渡辺浩樹（笛南中） 小笠原康平（笛川中） 小池宏美（市川南中）  
苫米地幸恵（上条中） 塩沢明菜（甲西中） 三枝春美（双葉中）  
依田伊代（中富中） 向山美鈴（山梨北中）

\*第10回作品展 平成9年2月15・16日（甲府総合市民会館）

生徒作品約400点を展示

県教育長賞 斉藤 巧（韮崎東中） 望月 直（山梨大付属中） 笛川中3年1組3班  
飯室悠久（白根巨摩中） 曾根愛美（押原中） 富田恭子（韮崎西中）  
土屋由美（須玉中） 笠井晋太郎（中富中） 渡辺亜希子（山梨北中）  
岳田知子・沼中さやか・渡辺英晃・雨宮京利・馳川祐希（一宮中）

NHK甲府放送局賞

小川琢也（春日居中） 田中俊郎（山梨北中） 幡野智美（七保一中）  
辻 敬典（上条中） 中橋真紀（市川中） 白川真波（甲西中）  
井上直子（上条中） 志村 聡（甲府東中） 小池知子・仙洞田絵美（富竹中）

山梨日日新聞社賞

小林芽衣（甲府北中） 古屋貴浩（浅川中） 山部佳代（玉幡中）  
清水吉博（長坂中） 内藤友美（中富中） 深沢健・山本明博・倉科  
宏行（田富中） 杉山華緒（浅川中） 平井美帆（長坂中）  
小佐野美樹（河口湖南中） 和光美佳（吉田中）

# 第11回山梨県中学校技術・家庭科作品展受賞者名簿

日時 平成10年2月21日(土)～22日(日)

場所 甲府総合市民会館2階展示場

学年	作品名	氏名	学校名	賞名	支部名
3	キーホルダー	河西 秀浩	押原中	教育長賞	中巨摩
3	ミニ伝言板	山内 玲奈	甲府西中	教育長賞	甲府
3	ロボット	五味 正典	笛南中学校	教育長賞	東八代
3	オリジナルオルゴール	遠藤 潤一	附属中	教育長賞	甲府
3	ミニトマトの栽培(選)	小川 琢也	春日居中	教育長賞	東山梨
3	帽子・手袋・マフラー	深澤 朋香	押原中	教育長賞	中巨摩
3	キュロットスカート	秋山 麻沙子	韮崎西中	教育長賞	北巨摩
3	浴衣(選)	五味 弘喜	明野中	教育長賞	北巨摩
3	ショートパンツ	阪本 芳朋	甲府北東中	教育長賞	甲府
3	幼児のおもちゃ	古屋 千夏	山梨北中	教育長賞	東山梨
1	レターラック	鶴田 明奈	笛川中	NHK賞	東山梨
1	本立て	高山 和之	玉幡中	NHK賞	中巨摩
2	オリジナル蛍光灯	赤池 愛子	山梨南中	NHK賞	東山梨
2	ペットボトル蛍光灯	降矢 竜児	西原中	NHK賞	北都留
3	修学旅行(奈良・京都の旅)	倉 小夜子	甲西中	NHK賞	中巨摩
3	犬のポーチ(選)	志村 幹子	白根御勅使中	NHK賞	中巨摩
3	ショートパンツ	小林 真理	東桂中	NHK賞	南都留
2	手巻きのトートBAG(選択)	宮川 さとみ	甲府東中	NHK賞	甲府
3	パズル	田中 俊郎	山梨北中	NHK賞	東山梨
3	食事用エプロン	野呂瀬 藍子	若草中	NHK賞	中巨摩
1	巣箱	三森 雅士	市川南中	山日賞	西八代
1	スリッパ立て	坂本 祐一	長坂中	山日賞	北巨摩
1	マガジンラック	小松 亜紗美	長坂中	山日賞	北巨摩
1	棚つき飾り台	篠原 賢一	韮崎東中	山日賞	北巨摩
1	置き台	高野 あゆみ	中富中	山日賞	南巨摩
1	リサイクル作品	天野 由梨	大和中	山日賞	東山梨
1	ウォールポケット	中嶋 美穂	櫛形中	山日賞	中巨摩
1	ウォールポケット	山本 利奈	敷島中	山日賞	中巨摩
1	おたよりばさみ	平井 良子	富竹中	山日賞	甲府
3	ベスト	若尾 俊祐	白根巨摩中	山日賞	中巨摩

# 作品の内訳

出品合計 338 点

★被服・木材加工領域の作品が特に多く見られる。また、以前、割合多かった、電気・機械領域が減少する傾向が見られる。食物領域は、実習内容が他の領域と異なるため出品がなかった。次の教育課程の変更にもなって、領域をまたがった融合教材の開発や題材の研究が、必要であることを強く感じた。

木材加工	63 点
電 気	21 点
金属加工	25 点
機 械	15 点
栽 培	1 点
情報基礎	8 点
家庭生活	62 点
被 服	115 点
住 居	4 点
保 育	24 点

## 技術・家庭科授業で製作 中学生の330点 甲府で展二示会

県中学校技術・家庭科研究会(岩間孝吉会長)は二十一日、二十二の両日、甲府市総合市民会館二階展示室で第十一回県中学校技術・家庭科生徒作品展を開いている。

県内の中学生が技術・家庭科の授業を通して製作した作品約三百三十点が出品されている。作品は本立てや飾り棚などの木工品、バジャマや浴衣などの被服、オルゴール、電気スタンド、おもちゃなどさまざま。細かい部分にまで気を配って完成させた力作が並んでいる。会場を訪れた人は感心して見入っていた。

入賞者は次の通り。

◇県教育長賞 河西秀浩

中学生の力作が並ぶ技術・家庭科生徒作品展  
|| 甲府市総合市民会館2階展示室



- (押原) 山内玲奈(甲府西)
- 五味正典(笛南) 遠藤潤一(山梨大付) 小川琢也(春日居)
- 深沢朋香(押原) 秋山麻沙子(斐崎西) 五味弘喜(明野)
- 阪本芳朋(甲府北東) 古塵千夏(山梨北)
- ◇山日賞 三森雅士(市川南) 坂本祐一、小松亜紗美(長坂) 篠原賢一(斐崎東) 高野桂 宮川さとみ(甲府東) 田
- あゆみ(中富) 天野由梨(大和) 中島美穂(櫛形) 山本利奈(敷島) 平井良子(富竹) 若尾俊祐(白根巨摩)
- ◇NHK賞 鶴田明奈(笛川) 高山和之(玉嘴) 赤池愛子(山梨南) 降矢龍児(西原) 入倉小夜子(甲西) 志村幹子(白根御助使) 小林真理(東)
- 中俊郎(山梨北) 野呂瀬藍子(若草)

(2) 関ブ口、全日中大会提案者、授業者、司会者、助言者一覧

第18回 茨城大会(昭54.10.23~24)  
 第2分科会(金属加工)  
 提案者 小林 日出男 山梨南中  
 助言者 新海 孝三 山梨県教委  
 第8分科会(住居)  
 提案者 藤巻 満寿子 韮崎東中  
 司会者 興石 政江 韮崎西中

第19回 神奈川大会(昭55.11.6~7)  
 第5分科会(栽培)  
 提案者 丹沢 次雄 六郷中  
 同 太田 一夫 富士豊茂中  
 助言者 新海 孝三 山梨県教委  
 第6分科会(被服)  
 提案者 丹沢ゆき子 三珠中  
 司会者 佐野よ志み 城南中  
 第10分科会(教育課程)  
 提案者 横谷 忠明 城南中  
 司会者 赤池 功 増穂中

第20回 東京大会(昭56.11.12~13)併全国  
 第1分科会(木材加工)  
 提案者 市川 隆雄 一宮中  
 助言者 中村 公明 教育センター  
 第9分科会(保育)  
 提案者 望月 弘子 中富中

第21回 栃木大会(昭57.11.4~5)  
 全体会  
 提案者 一木 貞夫 双葉中  
 助言者 立川 隆章 山梨県教委  
 第2分科会(金工)  
 提案者 山口 守 西中  
 司会者 岩間 孝吉 南西中  
 第8分科会(住居)  
 提案者 林 京子 河口湖南中

司会者 伊藤 愛子 小淵沢中

第22回 群馬大会(昭58.11.10~11)

第1分科会(木工)  
 提案者 三枝 修 勝沼中  
 司会者 滝島 実 塩山中  
 第4分科会(電気)  
 提案者 細田 正二 竜王中  
 助言者 望月 教三 中富中  
 第6分科会(食物)  
 提案者 名執 玲子 甲西中  
 司会者 横山 晴子 櫛形中

第23回 千葉大会(昭59.10.25~26)

全体会  
 提案者 岩間 孝吉 南西中  
 助言者 立川 隆章 山梨県教委  
 第5分科会(栽培)  
 提案者 市川 隆雄 一宮中  
 司会者 丹沢 次男 六郷中  
 第6分科会(食物)  
 提案者 名執 玲子 甲西中  
 助言者 横山 晴子 櫛形中  
 第8分科会(住居)  
 提案者 古屋 豊美 都留第二中  
 司会者 佐野よ志み 山梨県教委

第24回 山梨大会(昭60.11.14~15)

全体会  
 提案者 一木 貞夫 双葉中  
 同 小沢せつ子 浅川中  
 司会者 滝 愛子 韮崎西中  
 助言者 立川 隆章 山梨県教委  
 第1分科会(木工)  
 提案者 岡部 平和 上野原中  
 授業者 三枝 修 勝沼中  
 司会者 新藤 一磨 山梨南中  
 助言者 中村 公明 教育センター

第2分科会(金工)

提案者 窪田 博人 城南中  
 授業者 山口 守 西中  
 司会者 山県 利県 万沢小  
 助言者 渡辺 武 山梨大学

第3分科会(機械)

提案者 武藤 郁夫 吉田中  
 授業者 入蔵 靖彦 南中  
 司会者 金勝 武鑑 下吉田中  
 助言者 諏訪間高明 山梨大学

第4分科会(電気)

提案者 小沢 建二 韭崎西中  
 授業者 西山 豊 押原中  
 司会者 横谷 忠明 小笠原小  
 助言者 長田 昭平 山梨大学

第5分科会(栽培)

提案者 太田 一夫 下部中  
 授業者 宮沢 哲男 石和中  
 司会者 丹沢 次男 大塚小  
 助言者 丸田 宏 山梨大学  
 同 若林喜久男 山梨園芸高校

第6分科会(被服)

提案者 桜井 玲子 須玉中  
 授業者 林 京子 南西中  
 司会者 大石 淑子 七保第一中  
 助言者 内藤 道子 山梨大学  
 同 小菅 啓子 県立女子短大

第7分科会(食物)

提案者 小笠原さつき 山梨南中  
 授業者 長沼 元江 若草中  
 司会者 早川喜代子 笛川中  
 助言者 佐野よ志み 山梨県教委  
 同 小林 豊子 山梨大学

第8分科会(住居)

提案者 三浦 明海 下吉田中  
 授業者 望月志津子 北西中  
 司会者 相吉美智子 吉田中  
 助言者 浅見 雅子 山梨大学  
 同 常秋 美作 山梨大学

第9分科会(保育)

提案者 望月加代子 鯨沢中  
 授業者 清水 禮子 石和中  
 司会者 小沢せつ子 浅川中  
 助言者 三輪 純子 教育センター  
 同 矢崎 浄子 山梨大学

第10分科会(教育課程)

提案者 安部 忠雄 敷島中  
 授業者 羽田 英雄 北中  
 司会者 宮川 逸雄 北東中  
 助言者 立川 隆章 山梨県教委  
 同 大沢 保彦 山梨県教委

第25回 埼玉大会(昭61.10.28~29)

第3分科会(機械)

提案者 里吉 信二 下吉田中  
 助言者 新藤 一磨 教育県教委

第6分科会(被服)

提案者 遠山八重子 長坂中  
 司会者 石合きみ恵 上野原中

第26回 新潟大会(昭62.10.15~16) 併全国

第2分科会(金工)

提案者 切金 力 大月東中  
 助言者 新藤 一磨 教育県教委

第10分科会(教育課程)

提案者 入蔵 靖彦 南中  
 司会者 津金 猛 坂下中

第27回 長野大会(昭63.10.20~22) 併全国

第5分科会(電気A)

提案者 田中 政巳 坂下中  
 同 碓井 篤 塩山北中  
 助言者 野沢 達也 教育県教委

第9分科会(食物B)

提案者 赤松 東 梨大附属中  
 司会者 清水 禮子 一宮中



第28回 茨城大会(平1.11.9~10)

第1分科会(木工)

提案者 長久保 学 韭崎西中  
同 中島 秀樹 明野中  
助言者 宮川 逸雄 上条中

第8分科会(保育)

提案者 渡辺 弘美 芦川中  
司会者 山田 順子 石和中

第29回 神奈川大会(平2.11.8~9)

第4分科会(電気)

提案者 長田 靖 玉幡中  
司会者 細田 正二 竜王中

第10分科会(住居)

提案者 永田 恵子 塩山中  
助言者 土屋満津子 山梨県教委

第30回 東京大会(平3.10.24~25)

全体会

提案者 小沢 建二 韭崎東中  
司会者 岩間 孝吉 勝山中

第1会場(金工)

提案者 坂本 公彦 下吉田中  
助言者 日原 誠 教育センター

第1会場(被服)

助言者 日原 誠 教育センター

第8会場(栽培)

提案者 切金 力 久那土中  
司会者 太田 一夫 市川中

第31回 栃木大会(平4.10.22~23)

第1分科会(木工)

提案者 望月 美彦 鰻沢中  
司会者 佐野 和彦 身延中

第9分科会(被服)

提案者 石合きみ恵 巖中  
助言者 神宮司真佐子 山梨県教委

第10分科会(機械)

提案者 柳沢 豊 浅川中

司会者 市川 穰 一宮中

第32回 群馬大会(平5.10.21~22)

第6分科会(情報基礎)

提案者 石丸 洋一 八田中  
助言者 日原 誠 山梨県教委

第7分科会(家庭生活)

提案者 石丸 純枝 竜王中  
司会者 遠藤 明子 白根中

第12分科会(教育課程・情報)

提案者 石田 宏 南中  
司会者 入蔵 靖彦 西中

第33回 千葉大会(平6.10.20~21)

全体会

提案者 長久保 学 明野中  
助言者 日原 誠 山梨県教委

第2分科会(電気)

提案者 吉岡 利彦 松里中  
司会者 三枝 修 春日居中

第11分科会(保育)

提案者 沢登かほる 富浜中  
助言者 赤松 東 山梨県教委

第34回 山梨大会(平7.10.26~27) 併全国

全体会

提案者 長久保 学 明野中  
同 小宮山幸枝 須玉中  
司会者 金勝 武艦 明見中  
助言者 日原 誠 山梨県教委

第1分科会(木工)

提案者 佐野 和彦 身延中  
授業者 高左右 浩 長坂中  
司会者 切金 力 市川中  
助言者 日原 誠 山梨県教委

第2分科会(電気)

提案者 碓井 篤 山梨北中  
授業者 飯嶋 武志 勝沼中  
司会者 三枝 修 春日居中  
助言者 津金 猛 教育センター

- 第3分科会(金工)  
 提案者 酒井 秀樹 上条中  
 授業者 三科 和久 北中  
 司会者 小野 一人 東中  
 助言者 佐藤 博 山梨大学
- 第4分科会(機械)  
 提案者 近藤 一行 石和中  
 授業者 梶原 将司 山中湖中  
 司会者 市川 穰 境川小  
 助言者 渡辺 武 山梨大学
- 第5分科会(栽培)  
 提案者 清水 英樹 七保第一中  
 授業者 遠藤 敏 玉穂中  
 司会者 岡部 平和 上野原中  
 助言者 深澤 眞悟 農林高校
- 第6分科会(情報基礎)  
 提案者 依田 幸男 八田中  
 授業者 川崎 将人 白根巨摩中  
 司会者 数野 一郎 甲西中  
 助言者 藤田 孝夫 山梨大学
- 第7分科会(家庭生活)  
 提案者 金子 志麻 若草中  
 授業者 杉野 保子 竜王北中  
 司会者 小宮山節子 玉幡中  
 助言者 内藤 道子 山梨大学
- 第8分科会(食物)  
 提案者 小佐野富士江 勝山中  
 授業者 上野さとみ 山梨北中  
 司会者 土屋満津子 塩山中  
 助言者 時友裕紀子 山梨大学
- 第9分科会(被服)  
 提案者 佐野 富美 増穂中  
 授業者 栗冠真理奈 韭崎東中  
 司会者 遠山八重子 韭崎西中  
 助言者 秋山 宏子 教育センター
- 第10分科会(住居)  
 提案者 鈴木美奈子 城南中  
 授業者 土橋 道子 南中  
 司会者 日野原美智枝 東中
- 助言者 浅見 雅子 山梨大学
- 第11分科会(保育)  
 提案者 井上 敬子 猿橋中  
 授業者 志村 晶子 笛南中  
 司会者 清水 禮子 中道南小  
 助言者 三神 敬子 山梨学院短大
- 第12分科会(教育課程)  
 提案者 長田 靖 竜王中  
 授業者 杉本 博之 北東中  
 司会者 羽田 英雄 湯田小  
 助言者 赤松 東 山梨県教委  
 助言者 日原 誠 山梨県教委
- 第35回 埼玉大会(平8.10.22~23)  
 第5分科会(機械)  
 提案者 里吉 信二 笛南中  
 司会者 市川 隆雄 御坂中
- 第10分科会(食物)  
 提案者 欠崎理恵子 吉田中  
 助言者 赤松 東 山梨県教委
- 第15分科会(教育課程B・選択技家)  
 提案者 中嶋 秀樹 韭崎東中  
 同 小宮山幸枝 須玉中  
 助言者 日原 誠 山梨県教委
- 第36回 新潟大会(平9.10.23~24)  
 第5分科会(栽培)  
 提案者 武井 俊文 笛川中  
 同 那須 丈彦 塩山北中  
 助言者 入蔵 靖彦 山梨県教委
- 第6分科会(情報基礎)  
 提案者 池田 賢二 身延中  
 司会者 望月 美彦 中富中
- 第9分科会(被服)  
 提案者 横小路京子 南西中  
 司会者 赤松 東 城南中

### (3) 教育研究全国集会参加者・報告主題一覧

第28次 昭和53年度 会場 茨城  
第8分科会 技術・職業教育  
一木 貞夫 ( 葦崎東中)  
電気領域における指導法の研究  
秋山 義人 ( 吉田中)  
つるなしげんのはちうえ栽培  
第9分科会 家庭科教育  
清水 澄江 ( 大石小)  
児童一人ひとりの意欲的学習  
をめざして  
小松 幸子 ( 竜王中)  
男女共学を推進しよう ( 新学  
習指導要領の実施にむけて)

第29次 昭和54年度 会場 高知  
第8分科会 技術・職業教育  
佐々木与比古 ( 松里中)  
金属加工2の適切な題材の研究  
三枝 修 ( 猿橋中)  
住居領域の指導計画 ( 相互乗  
り入れに住居を取りあげて)  
第9分科会 家庭科教育  
嶋津 英樹 ( 北西小)  
移行期間中における住居指導  
はいかにあるべきか  
小沢せつ子 ( 北東中)  
融合教材の研究

第30次 昭和55年度 会場 東京  
第8分科会 技術・職業教育  
三科 一彦 ( 塩山北中)  
木工 ( 1・2) 金工 ( 1・2)  
における製図学習はいかにあ  
るべきか  
森本 六生 ( 押原中)  
導通テストの制作 ( 実用性を  
重視した電気器具の開発)  
第9分科会 家庭科教育  
名執 玲子 ( 櫛形中)  
食物領域の学習ノートづくり  
( 男女相互乗り入れによる)

野尻 正子 ( 塩山中)  
新学習指導要領をふまえた食  
物領域の研究 ( 調理実習を中  
心として)

第31次 昭和56年度 会場 広島  
第8分科会 技術・職業教育  
羽田 英雄 ( 甲府北中)  
男女相互乗り入れにおける木  
材加工 ( 1) をどのようにあ  
つかうか  
石川 正昭 ( 上野原中)  
栽培学習をとおして学習の意  
欲を高める授業の研究  
第9分科会 家庭科教育  
斎藤 由美子 ( 相川小)  
実践的体験的な学習のあり方  
( 住居と家族の領域をととし  
て)  
藤巻 満寿子 ( 葦崎東中)  
小・中の関連をふまえた食物  
領域の研究 ( 調理実習を中心  
として)

第32次 昭和57年度 会場 盛岡  
第8分科会 技術・職業教育  
秋山 義人 ( 甲府北中)  
金属加工2 新題材「平行ク  
ランクの製作」を指導して  
数野 一郎 ( 増穂中)  
制作意欲を高めるための実習  
題材の工夫と教具の工夫  
第9分科会 家庭科教育  
松田 広子 ( 山城小)  
実践的体験的な学習のあり方  
( 住居と家族の領域を通して)  
諏訪 祥子 ( 身延中)  
学習意欲を高めるにはどうす  
ればよいか ( 保育領域の指導

第33次 昭和58年度 会場 神戸  
第8分科会 技術・職業教育  
西山 豊 ( 押原中)

- 生徒自ら課題に取り組み実践する能力を養う授業の在り方（電気回路）
- 市川 隆雄（一宮中）  
栽培領域における題材について（葉ボタンの生育を通して）  
第9分科会 家庭科教育
- 越石 節代（明見小）  
生活への実践化をめざした指導法の工夫（ミシン指導をどのようにするか）「エプロン製作」
- 広瀬 恵美（神金第二小一之瀬分校）  
家庭科における資料づくりとその活用（複式学級における家庭科授業の形態の工夫）  
「健康な住まい」
- 第34次 昭和59年度 会場 札幌  
第8分科会 技術・職業教育
- 岡部 平和（島田中）  
板材による腰掛の制作を通して技術的な実践力を養う  
第9分科会 家庭科教育
- 望月 加与子（鯉沢中）  
電気・保育領域を男女共学でどう進めたか
- 佐野 智子（三珠中）  
地域性を生かした手づくりのおやつ（生活への実践化をめざして）
- 第35次 昭和60年度 会場 大阪  
第8分科会 技術・職業教育
- 津金 猛（坂下中）  
生徒の実態をふまえ、くぎうちの技能を高めるための授業の工夫  
第9分科会 家庭科教育
- 渡辺 洋子（明見小）  
基本的な生活技能をどのように高めていくか（家庭科との関連）
- 第36次 昭和61年度 会場 東京  
第8分科会 技術・職業教育
- 小沢 建二（葦崎東中）  
「蓋付き箱」の制作をとおして（鋸びき、鉋削りを正確にさせる方法の研究）  
第9分科会 家庭科教育
- 佐藤 朝美（明見小）  
基本的な生活技能をどのように高めていくか（家庭科（被服領域）との関連）
- 第37次 昭和62年度 会場 東京札幌  
第8分科会 技術・職業教育
- 後藤 英（山中湖中）  
コンピュータの導入を試みた機械学習の工夫  
第9分科会 家庭科教育
- 藤巻 志麻（櫛形中）  
被服の指導計画作りと題材の検討（ショートパンツ製作）
- 八巻 真理奈（葦崎東中）  
個人差を重視した被服学習の指導（理解と技術を促す教材・教具の工夫）
- 第38次 昭和63年度 会場 盛岡  
第8分科会 技術・職業教育
- 池田 賢二（鯉沢中）  
地域教材のビデオ化（地域教材の良さ、利用法。ビデオ教材の良さ、利用法。）  
第9分科会 家庭科教育
- 山田 順子（石和中）  
被服整理を通して消費者教育を進める（教材、教具の工夫）
- 秋山 知子（若草中）  
給食の現状から見た給食指導
- 第39次 平成1年度 会場 岡山  
第8分科会 技術・職業教育
- 志村 昭（浅川中）  
回路構成を容易にするための工具の工夫（増幅回路構成を容易にする教具とその利用に

ついて)

- 第9分科会 家庭科教育  
赤池 美香 (精進小)  
地域の行事と旬の食べ物(授業実践)
- 沢登 かず子(増穂小)  
給食指導を通して、丈夫な体をつくるための指導
- 第40次 平成2年度 会場 東京  
第8分科会 技術・家庭科教育  
坂本 幸男 (富士見台中)  
論理回路をどの様に教えたか  
小宮山幸枝 (高根中)  
家庭生活の領域をふまえてかしこい消費者を育てる指導
- 第41次 平成3年度 会場 千葉  
第8分科会 技術・家庭科教育  
瀬田 肇 (城南中)  
実践力を育てる指導法の研究(改訂学習指導要領に基づいた学習指導計画の作成—情報基礎)  
小松 里美 (秋田小)  
小学校・中学校「家庭生活」領域の関連性
- 第42次 平成4年度 会場 秋田  
第8分科会 家庭科教育  
小俣 きみ江(東桂小)  
卵を用いた簡単な調理指導計画と実践  
第10分科会 技術・職業教育  
飯嶋 武志 (勝沼中)  
新教育課程における年間指導計画と授業例
- 第43次 平成5年度 会場 兵庫  
第8分科会 家庭科教育  
八巻 みふ志(双葉中)  
被服領域の研究  
第10分科会 技術・職業教育  
波木井義和 (小淵沢中)  
機械領域の研究
- 第44次 平成6年度 会場 長崎  
第8分科会 家庭科教育  
志村 恵子 (白根御勅使中)  
家庭生活領域の内容の検討と実践  
第10分科会 技術・職業教育  
望月 美彦 (中富中)  
木材加工領域における指導法(製作題材と副題材)
- 第45次 平成7年度 会場 大阪  
第8分科会 家庭科教育  
小尾 和子 (秋田小)  
小学校・中学校「被服」領域の関連性  
第10分科会 技術・職業教育  
角田 学政 (塩山北中)  
マルチセンサー回路の設計と制作を通して
- 第46次 平成8年度 会場 岩手  
第8分科会 家庭科教育  
野木 久美子(東桂小)  
心のつながりを深めよう(プレゼントを仲立ちとして)  
第10分科会 技術・職業教育  
上田 真司 (市川南小)  
木材加工領域における指導法
- 第47次 平成9年度 会場 鹿児島  
第8分科会 家庭科教育  
清水 明美 (高根西小)  
ごみの始末と不用品の活用(実践的・体験的な学習を通して)  
第10分科会 技術・職業教育  
坂本 幸男 (吉田中)  
インターネットを利用したロボット製作

#### (4) 技術・家庭科担当指導主事・研修主事一覧（S53～H9）

○指導主事（山梨県教育委員会学校教育課、平成9年度から義務教育課と名称変更）

年 度	技 術 科 指 導 主 事		家 庭 科 指 導 主 事	
S 5 3	新海孝三	〒伊勢四丁目35-4	滝 愛子	〒白州町白須6870
S 5 4	新海孝三	〃	滝 愛子	〃
S 5 5	新海孝三	〃	滝 愛子	〃
S 5 6	立川隆章	〒伊勢三丁目1-2	佐野よ志み	〒上石田二丁目24-5
S 5 7	立川隆章	〃	佐野よ志み	〃
S 5 8	立川隆章	〃	佐野よ志み	〃
S 5 9	立川隆章	〃	佐野よ志み	〃
S 6 0	立川隆章	〃	佐野よ志み	〃
S 6 1	新藤一磨	山梨 小原東348-1	佐野よ志み	〃
S 6 2	新藤一磨	〃	土屋満津子	〒勝沼町等々力195
S 6 3	野沢達也	〒甲西町鮎沢1289	土屋満津子	〃
H 1	葉袋 恒	〒市川大門町6164-2	土屋満津子	〃
H 2	葉袋 恒	〃	土屋満津子	〃
H 3	葉袋 恒	〃	神宮司真佐子	〒宮前町7-22
H 4	葉袋 恒	〃	神宮司真佐子	〃
H 5	日原 誠	〒酒折三丁目6-22	神宮司真佐子	〃
H 6	日原 誠	〃	赤松 東	〒大手二丁目2-32
H 7	日原 誠	〃	赤松 東	〃
H 8	日原 誠	〃	赤松 東	〃
H 9	入蔵靖彦	〒塚原町893	網倉玉枝	〒御坂町井之上104

○研修主事（山梨県教育センター、平成4年11月から総合教育センターと名称変更）

	技 術 科 研 修 主 事		家 庭 科 研 修 主 事	
S 5 3	山縣利縣	〒和田町2644	平井恭子	〒下飯田三丁目11-24
S 5 4	山縣利縣	〃	平井恭子	〃
S 5 5	中村公明	〒羽黒町1020-5	駒井千代	〒武田三丁目8-3
S 5 6	中村公明	〃	駒井千代	〃
S 5 7	中村公明	〃	駒井千代	〃
S 5 8	中村公明	〃	三輪純子	〒富士見二丁目6-7
S 5 9	中村公明	〃	三輪純子	〃
S 6 0	中村公明	〃	三輪純子	〃
S 6 1	中村公明	〃	信田久江	〒若草町加賀美2859
S 6 2	中村公明	〃	信田久江	〃
S 6 3	中村公明	〃	信田久江	〃
H 1	日原 誠	〒酒折三丁目6-22	信田久江	〃
H 2	日原 誠	〃	信田久江	〃
H 3	日原 誠	〃	信田久江	〃
H 4	津金 猛	〒春日居町鎮目890	信田久江	〃
H 5	津金 猛	〃	秋山宏子	〒羽黒町353-7
H 6	津金 猛	〃	秋山宏子	〃
H 7	津金 猛	〃	秋山宏子	〃
H 8	石川正昭	〒櫛形町上宮地3213	矢野由美子	〒昭和町飯喰918-3-103
H 9	石川正昭	〃	矢野由美子	〃

(5) 平成9年度本研究会の会則、組織、事業報告と計画、会計報告と決算

山梨県中学校技術・家庭科研究会会則

昭34,2制定 36,6改 37,6改 39,5改  
40,11改 45,6改 46,6改 48,6改

- 第1条 本会は山梨県中学校技術・家庭科研究会と称し、事務局は会長の指定する場所におく。
- 第2条 1 本会は中学校の技術・家庭科関係者をもって組織する。  
2 本会は各都市に支部をおく。  
3 本会に研究推進委員会をおき、必要に応じて専門部会及び特別委員会をおくことができる。
- 第3条 本会は中学校技術家庭科の充実と進展をはかることを目的とする。
- 第4条 前条の目的を達成するため下記の事業を行う。  
1 研究会・講演会・見学会などの開催。  
2 基本的事項の調査。  
3 刊行物の刊行。  
4 技術教育に関する意見の提出。  
5 その他技術・家庭科振興のための施策。
- 第5条 本会に下記の役員をおき、任期は1カ年とする。ただし、再任をさまたげない。  
会長 1名 副会長 各支部1名 理事 若干名 事務局 若干名  
研究推進委員 若干名 各専門部長  
上記の役員の外に、必要に応じて顧問をおくことができる。
- 第6条 役員任期は下記の通りとする。  
1 会長は理事会において選出し、会務を総理し、本会を代表する。  
2 副会長は理事会において選出し、会長を補佐する。  
3 理事は各選出の4名(男女各2名)がなり、理事会を構成する。  
4 専門部会の正副部長は理事会において選出し、部員は各支部ならびに理事会の推薦者とし、会長が委嘱する。  
5 支部長は理事会に出席するものとする。  
6 事務局員は会長が委嘱し、庶務・会計を掌る。  
7 研究推進委員は、各支部選出の若干名と、理事会の推薦者若干名とがなり、研究推進委員会を構成し、正副委員長は理事会に出席する。  
8 顧問は本会の運営上必要と思われるとき、会長の推薦と理事会の承認によりおくことができる。  
9 特別委員は、必要に応じて会長の委嘱により委員会を構成し、委員長は理事会に出席する。  
10 会計監査は理事会において選出し、会計を監査する。
- 第7条 本会は下記の通り会合を開く。  
1 総会は毎年1回催し予算・決算・役員承任その他重要事項を審議決定する。  
2 理事会は会長の要請により、必要に応じて開催し、各種事業の企画ならびに処動に当たる。  
3 支部長会・研究推進委員会・専門部会・特別委員会は必要に応じて随時開催し、本会の研究推進をはかる。
- 第8条 本会の経費は会費その他による。
- 第9条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

## 山梨県中学校技術・家庭科研究会表彰規定

昭44、4制定 46、6改

- 第1条 本研究会の発展に寄与したものを本規定により、総会において表彰する。
- 第2条 表彰の内容は感謝状ならびに記念品とする。
- 第3条 表彰は次の各号の一に該当するものとする。
- 1 本会研究会の会長でその職を辞するとき。
  - 2 本会研究会の副会長でその職2年以上のもので、その職を辞するとき。
  - 3 本会研究会の理事・監事・専門部会正副部長および研究推進委員でその職に3年以上の者で、その職を辞するとき。
  - 4 本会研究会の事務局員の職に2年以上の者で、その職を辞するとき。
  - 5 本会研究会の上記役員通算3年以上の者で、上記の表彰を受けない者。
- 第4条 表彰者は各号により表彰該当者があるときは、事務局は表彰候補者調査書を作成し理事会に提出するものとする。
- 第5条 第3号の各号により表彰該当者があるときは、事務局は表彰候補者調査書を作成し理事会に提出するものとする。

## 山梨県小中学校教育研究会 技術・家庭科教育部会細則

昭44、4制定 46、4改

- 第1条 本部会は山梨県小中学校教育研究会技術・家庭科教育部会と称し、中学校技術・家庭科の充実と進展をはかることを目的とする。
- 第2条 本部会の事務局を部会長の指定する場所におく。
- 第3条 本部会は本県中学校の技術・家庭科関係職員をもって組織する。
- 第4条 本部会に次の役員をおき、部会長の中から選出する。  
部会長 1名 副部長 2名 評議員 若干名 部庶務・会計 若干名
- 第5条 部総会は毎年1回開き、部会長がこれを招集する。ただし、部会長が必要と認める場合には臨時総会を招集することができる。
- 第6条 部総会が付議する事項は、次の通りとする。
- 1 予算の決定、決算・役員および事業計画の承認。
  - 2 部会細則の決定および変更。
  - 3 その他必要と認める事項。
- 第7条 部会の経費は本会の経費をもってこれにあてる。
- 第8条 この細則は昭和44年4月1日から適用する。



平成9年度組織・事業・会計・会則など

1. 役員一覧

役職	氏名	役名	備考
顧問	藤原 完	元会長	
"	中楯 嘉幸	"	
"	保坂 元治	"	
"	大沢 保彦	"	
"	葭沢 一富	"	
"	望月 教三	"	
"	深沢 六郎	"	
"	宮川 逸雄	"	
"	滝 愛子	元副会長	
"	立川 隆章	元会長	
"	篠原 茂	"	
"	入蔵 靖彦	指導主事	県教委義務教育課
"	網倉 玉枝	"	"
"	石川 正昭	研修主事	総合教育センター
"	矢野由美子	"	"

役職	氏名	勤務校	職名
会長	岩間 孝吉	上条中	校長
副会長	山田 順子	笛南中	教諭
" (東山梨)	三科 一彦	牧丘一小	校長
" (東八代)	関本 幸雄	中道北小	校長
" (西八代)	塩澤 雄市	市川中	校長
" (中巨摩)	森本 六生	竜王西小	校長
" (北巨摩)	一木 貞夫	双葉中	校長
" (南巨摩)	鈴木 祥三	鯉沢中	教諭
" (北都留)	細田 正二	平和中	校長
" (南都留)	金勝 武鑑	明見中	校長
" (甲府)	斎藤 章	富竹中	校長

県事務局

役	職	氏 名	勤務校	職 名
事務局長		長田 靖	竜王中	教諭
事務局次長		小宮山幸枝	小淵沢中	教諭
庶務		三枝 修	春日居中	教諭
庶務		横内 京子	泉中	教諭
庶務		加々本哲也	押原中	教諭
庶務		広瀬 安男	塩山中	教諭
庶務		佐野 礼子	附属中	教諭
庶務		河野 仁美	甲西中	教諭
庶務		石川 徹	芦安中	教諭
庶務		小澤 建二	長坂中	教諭
会計		杉本 博之	北東中	教諭
会計補佐		小野 一人	東中	教諭
研究推進委員長		長久保 学	明野中	教諭
研究推進副委員長		鈴木 昇	附属中	教諭
研究推進副委員長		神宮司真佐子	富竹中	教諭
会計監査		上田 真司	市川南中	教諭
会計監査		遠藤 敏	玉穂中	教諭

学習ノ一ト編集委員

役	職	氏 名	勤務校	職 名
委員長		三枝 修	春日居中	教諭
副委員長		中嶋 秀樹	韭崎東中	教諭
副委員長		数野 一郎	甲西中	教諭
副委員長		井上 敬子	富浜中	教諭
副委員長		河野 仁美	甲西中	教諭
委員		研究推進委員があたる		

支部選出役員

	東 山 梨	東 八 代	西 八 代
理 事	広瀬 安男(塩 山)	市川 穰(一宮北)	上田 真司(市川南)
"	碓井 篤(山梨北)	志村 昭(石 和)	上田 雅子(市 川)
"	中村 恭代(春日居)	山田 順子(笛 南)	.....
"	向山 栄子(塩 山)	土屋満津子(浅 川)	.....
研究推進委員	那須 丈彦(塩山北)	蘆田 俊哉(御 坂)	切金 力(市 川)
"	鈴木美奈子(勝 沼)	猪俣 真弓(石 和)	上田 雅子(市 川)
調査資料部員	岡田 強(勝 沼)	藤原 直樹(浅 川)	上田 雅子(市 川)
"	永田 恵子(松 里)	志村 晶子(石 和)	.....
支部事務局長	武井 俊文(笛 川)	清水 禮子(中道南)	上田 真司(市川南)
	中 巨 摩	北 巨 摩	南 巨 摩
理 事	杉山 征二(芦安小)	小澤 建二(長 坂)	望月 美彦(中 富)
"	後藤 博(芦 安)	高左右 浩(韭崎西)	佐野 和彦(南 部)
"	小宮山節子(玉 穂)	小宮山幸枝(小淵沢)	佐野 富美(増 穂)
"	岡 こずえ(押 原)	横内 京子( 泉 )	佐野 夏美(南 部)
研究推進委員	清水 英樹(中巨摩)	長田 進(増 富)	池田 賢二(身 延)
"	大久保美喜子(玉幡)	坂本 妙子(韭崎西)	佐野 富美(増 穂)
調査資料部員	石川 徹(芦 安)	中田 浩史(須 玉)	樋口 幸子(増 穂)
"	小沢 陽子(西条小)	有賀 多恵(高 根)	遠藤 明子(増 穂)
支部事務局長	遠藤 敏(玉 穂)	中嶋 秀樹(韭崎東)	望月 美彦(中 富)
	北 都 留	南 都 留	甲 府
理 事	田中 政巳(猿 橋)	小野田耕二(明 見)	羽田 英雄(里垣小)
"	池田 尚(七保一)	斉藤 隆広(湖 南)	日原 誠( 東 )
"	望月志津子(猿 橋)	矢崎理恵子(吉 田)	赤松 東(城 南)
"	沢登かおる(上野原)	小佐野富士江(勝山)	萩原 佳子(北 東)
研究推進委員	瀬田 肇(上野原)	石田 剛士(都留一)	岩間 光( 西 )
"	小泉奈穂子(大月東)	成嶋 久代(東 桂)	横小路京子(南 西)
調査資料部員	藤原 祐喜( 巖 )	梶原 将司(山中湖)	西川 卓(南 西)
"	沢登かおる(上野原)	河野美由紀(都留一)	波羅美智子( 北 )
支部事務局長	沢登 守(大月東)	芦澤 辰文(吉 田)	酒井 秀樹(上 条)

2. 平成9年度 被表彰者

支 部	氏 名	役 職	勤 務 校	該規定
西八代	宮澤 均	副会長	市川中学校 (退職)	第3条-2
中巨摩	長沼 元江	副会長	櫛形西小学校 (退職)	第3条-2
中巨摩	名執 玲子	理 事	若草中学校 (退職)	第3条-3
南巨摩	鍋田 栄子	理 事	富河中学校 (退職)	第3条-3

# 平成 8 年度研究活動報告

## 1. 研究主題

『自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方』

## 2. 成果と課題（第 35 回関プロ埼玉大会より）

### 〈木材加工領域〉

今日の生徒の体験不足を解消するためには、副題材・主題材を用いることは効果的である。当然つまずきも生じるが、これも大切な学習の一つである。また興味・関心を持続させていく工夫も大切である。社会の変化に対応できる生徒を育てるには、副題材から主題材、基本型から応用型といった体験をさせることが重要である。

評価においては、学習カードや自己評価カードを用いたり、生徒たちに対して授業やよりよい人間関係を作る中で、実際の評価を毎回つけることが大切である。自己評価は、副題材と主題材の各工程ごとに行えば、生徒たちが自分で自分を振り返り見つめ直すことによって、次の評価や題材に目を向けるようになる。

### 〈機械領域〉

仮説をもとに継続的に研究しており、心温まる先生と生徒の人間関係に基づいて研究が進められている。

車体部分の製作という共通学習において、生徒の意欲を喚起し、動力伝達の仕組み等の基本を重視した指導を行い、生徒の力を着実に伸ばしている。機構別に小集団活動を行い、中間発表会を通して共有化を図っていることも有効である。これらを応用していく選択学習の目標に、「ロボコンやまなし」があり、中・高・大学が組織的に取り組むという着想がよい。

### 〈食物領域〉

生徒自らが、体験を通して実感として確かめることができるような活動場面をつくることが大切である。一人一人が生活の課題によって主体的に取り組むような手だて、及び評価の研究と、環境教育の視点に立った実践は、他教科・他領域との連携に十分配慮する必要がある。

### 〈選択技術・家庭科〉

実態調査を通して、技術・家庭科の選択開設に向けて、より充実した運営の研究を進める必要がある。

## 3. 今後の課題

- ・実態調査の重要性を理解し、実施していく。
- ・生徒のやってみたいことと指導内容の調整を行う。
- ・生活と技術との関わり重視した授業を行う。
- ・必要感から課題を解決する能力を身につけさせる。
- ・授業時数削減をふまえ、環境・情報・国際教育との関連を考えていく。

# 平成8年度事業活動の経過報告（概略）

1. 関プロ理事会への参加  
浦和市 8.5/22  
・第35回関プロ埼玉大会の確認
2. 新旧理事会、研究推進委員会  
附属中 8.5/30  
・平成7年度の事業報告、会計報告  
・平成8年度の活動計画の承認  
・役員承認、関プロ大会について
3. 全日中理事会への参加  
東京 8.6/1  
・本年度の活動計画の確認
4. 定期総会  
総合教育センター 8.6/6  
・平成7年度の事業報告、決算報告  
・平成8年度の活動計画の承認  
・平成8年度役員決定と承認  
・感謝状贈呈
5. 研究推進委員会  
明野村総合会館 8.7/30 8/5  
・関プロ提案原稿の検討
6. 調査資料部会  
明野村総合会館 8.8/5  
・活動計画、調査内容の検討
7. 学習ノート編集委員会  
明野村総合会館 8.7/30  
甲府東公民館 8.8/17 8/29  
附属中 8.9/26 11/14  
・県版学習ノート編集作業
8. 理事会、研究推進委員会  
附属中 8.9/3  
・関プロ埼玉大会参加者とりまとめ
9. 全日中岩手大会への参加  
岩手県 8.10/17 18  
・参加5名、資料参加20名
10. 関プロ埼玉大会への参加  
埼玉県 8.10/22 23  
・関プロ理事会（21日）  
・全体会、分科会へ100名が参加
11. 調査資料部会  
附属中 8.11/14  
・具体的な調査と集計方法の検討
12. ロボコンやまなしへの参加  
アイメッセ 8.12/1  
・参加7校、29チーム、75名
13. 研究推進委員会  
附属中 8.12/3  
・生徒作品展、研究集録について  
・会報1発行
14. 調査資料部会  
附属中 9.1/23  
・調査結果の集計と考察
15. 第10回生徒作品展  
甲府総合市民会館 9.2/15 16  
・参加作品数約400
16. 研究推進委員会  
甲府総合市民会館 9.2/15  
・研究集録作業
17. 研究発表大会  
総合教育センター 9.2/27  
・研究発表  
・会報2発行

# 平成9年度 事業活動の方針

## 1. 研究主題

『自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養う授業のあり方』

## 2. 主題設定の理由

21世紀に生きる生徒には、生涯を通じて学び続け、たくましく生き抜いていくための基盤となる力として、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力が要求されている。

そのため、中学校教育においては、生涯学習の基礎を培い、自ら学ぶ目標を定め、何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身につけさせることが大切である。また、個性を重視した教育活動を展開することによって、主体的に判断し、行動できる個性豊かな人間を育成していくことが必要である。

このような視点から、技術・家庭科の学習では、知識や技術の習得も大切であるが、習得した知識や技術を積極的に活用し、生活を工夫したり創造したりする能力と実践しようとする意欲的な態度を育てることをねらいとしている。

本教科の目標を達成するためには、実践的・体験的な学習の中で、基礎的・基本的な知識や技術を習得させ、学ぶ喜びの実感や成就感・充実感を体得させることが必要である。そうすることによって、興味・関心が引き出され、自ら学ぶ意欲が育ってくると考える。

さらに生徒が自分なりの課題意識を明確に持ち、問題点の解決のために、意欲的に力を発揮していくような学習の場の設定と学習支援をすることにより、工夫し創造する能力が養われると考える。

そこで本県では、課題解決的学習を取り入れ、思考過程を重視する授業を仕組むことによって、自ら学ぶ意欲を高め、工夫し創造する能力を養うことができると考え、この主題を設定した。

## 3. 研究仮説

課題解決的学習において、思考過程を重視した学習を展開すれば、生徒自ら学ぶ意欲が高まり、工夫し創造する能力が養われるだろう。

## 4. 事業活動の方針

- (1) 研究主題に沿った担当領域を中心とした研究活動を進め、研究仮説などを検証していく。継続研究2年目になるので、実証のための活動を取り入れていく。
- (2) 思考を助ける教材・教具の工夫と開発に取り組む。
- (3) 新学力観に立つ評価を工夫し、活用していく。
- (4) 選択教科の充実した授業づくりのために実態調査、指導内容、指導計画の検討、研修などを実施し、研鑽に励む。
- (5) 全国・関東の研究会に呼応し、教育条件の整備を押し進め、研究活動の充実を図る。
- (6) 平成17年度の関プロ山梨大会に向けて、研究主題の見直し、検討をしていく。

5. 各支部領域別継続研究計画

[技術系列]

平成	西暦	関プロ	東山	東八	西八	南巨	中巨	北巨	北都	南都	甲府
7	1995	* 山梨	電気	機械	木工	木工	情報	木工	栽培	機械	金属
8	1996	埼玉	栽培	機械	木工	情報	金工	選択	電気	機械	木工
9	1997	新潟	栽培	電気	選択	情報	金工	選択	電気	機械	木工
10	1998	長野									
11	1999	茨城									
12	2000	神奈川									
13	2001	* 東京									
14	2002	* 栃木									
15	2003	群馬									
16	2004	千葉									
17	2005	山梨									

[家庭系列]

平成	西暦	関プロ	東山	東八	西八	南巨	中巨	北巨	北都	南都	甲府
7	1995	* 山梨	食物	保育	被服	被服	家生	被服	保育	食物	住居
8	1996	埼玉	住居	家生	選択	食物	食物	選択	住居	食物	被服
9	1997	新潟	住居	家生	選択	食物	食物	選択	住居	保育	被服
10	1998	長野									
11	1999	茨城									
12	2000	神奈川									
13	2001	* 東京									
14	2002	* 栃木									
15	2003	群馬									
16	2004	千葉									
17	2005	山梨									

反転文字は関プロ提案支部 \*印は全国大会を兼ねる

※3年間継続研究とする。

※関プロ提案となった場合、担当領域で検討する。

※関プロでの提案領域が変わらない限り、この領域で行う。

※平成12年度からの担当領域は、10年度に調整・決定する。

※平成17年の山梨大会に向けて、研究を積み重ねる。

## 平成8年度決算報告書

### ◎歳入の部 1, 198, 528円

項 目	予 算 額	決 算 額	比 較	摘 要
会 費	70,000	70,000	0	100名×700円
分 担 金	202,000	202,000	0	101校×2,000円
充 当 金	900,000	900,000	0	学習ノートより
繰 越 金	25,913	25,913	0	前年度繰越金
利 子	800	615	△ 185	預金利息
そ の 他	0	0	0	
合 計	1,198,713	1,198,528	△ 185	

### ◎歳出の部 1, 181, 418円

項 目	予 算 額	予算現額	決 算 額	残 額	摘 要
事務局費	99,000	99,000	98,438	562	
通信費	70,000	70,000	69,360	640	葉書・切手代等
消耗品費	5,000	5,000	4,793	207	事務用品代等
事務局会費	20,000	20,000	20,698	△ 698	会議費
雑費	4,000	4,000	3,587	413	謝礼、その他
総会費	80,000	60,000	58,961	1,039	
総会費	70,000	50,000	49,140	860	資料印刷、会場費
役員会費	10,000	10,000	9,821	179	役員会議費
事業研究費	410,000	400,000	395,905	4,095	
研究大会	40,000	30,000	30,900	△ 900	会場費、謝礼
研究調査	50,000	50,000	50,500	△ 500	推進委員会、部費
会報	40,000	40,000	34,505	5,945	印刷代
支部研究	280,000	280,000	280,000	0	支部研究費
役員旅費	80,000	70,000	66,136	3,864	関プロ旅費等
生徒作品展	120,000	130,000	127,141	2,859	賞状・看板代
研究集録	80,000	90,000	89,500	500	印刷製本代
表彰費	10,000	10,000	5,700	4,300	賞状・額縁代等
図書費	5,000	5,000	0	5,000	参考書等
分担金	100,000	120,000	126,000	△6,000	関プロ分担金等
関プロ準備費	202,000	202,000	202,000	0	諸準備費
雑費	5,000	5,000	5,040	△ 40	車代他
予備費	7,713	7,528	6,598	931	写真代等
合 計	1,198,713	1,198,528	1,181,418	17,110	

\* 差引残額 17,110円 (次年度へ繰り越し)

平成9年5月29日 会長 岩間孝吉 会計 小野一人

上記の通り報告いたします。

監査の結果、計数に誤りなく、証ひょう書類も完備され正確であることを認めます。

平成9年5月29日 監査委員 市川 穰 武井俊文



# 平成 8 年度小中教育研究会決算報告

◎歳入の部 91,490円

項 目	予 算 額	決 算 額	比 較	摘 要
会費	48,000	48,000	0	140名×400円
県費補助金	43,000	43,000	0	県助成金
繰越金	431	431	0	前年度繰越金
利子	30	59	29	預金利息
その他	0	0	0	
合 計	91,461	91,490	29	

◎歳出の部 91,153円

項 目	予 算 額	予算現額	決 算 額	残 額	摘 要
研修、研究調査					
調査・研究費	35,000	35,000	39,041	Δ4,041	調査、研究運営費
通信費	8,000	8,000	7,600	400	葉書・切手・送料
会議費	8,000	8,000	8,217	Δ 217	会議費・茶菓子代
雑費	6,461	6,490	4,520	1,920	事務用品他
小 計	57,461	57,490	59,378	Δ1,888	
研究運営・発表					
研究運営費	20,000	20,000	17,200	2,800	研究運営・印刷費
通信費	8,000	8,000	8,000	0	葉書・切手・送料
会議費	6,000	6,000	6,575	Δ 575	会議費・茶菓子代
小 計	34,000	34,000	31,775	2,255	
合 計	91,461	91,490		337	

\* 差引残額 337円 (次年度へ繰り越し)

平成9年5月29日 会長 岩間孝吉 会計 小野一人

上記の通り報告いたします。

監査の結果、計数に誤りなく、証ひょう書類も完備され正確であることを認めます。

平成9年5月29日 監査委員 市川 穰 武井俊文

## 平成9年度予算

### ◎歳入の部 1,037,710円

項 目	本年度予算額	前年度決算額	増 減	摘 要
会 費	70,000	70,000	0	100名×700円
分 担 金	0	202,000	Δ202,000	101校×2,000円
充 当 金	950,000	900,000	50,000	学習ノートより
繰 越 金	17,110	25,913	Δ 8,803	前年度繰越金
利 子	600	615	Δ 15	預金利息
そ の 他	0	0	0	
合 計	1,037,710	1,198,528	Δ160,818	

### ◎歳出の部 1,037,710円

項 目	本年度予算額	前年度決算額	増 減	摘 要
事務局費	99,000	99,000	0	
通信費	70,000	70,000	0	葉書・切手代等
消耗品費	5,000	5,000	0	事務用品代等
事務局会費	20,000	20,000	0	会議費
雑費	4,000	4,000	0	謝礼、その他
総会費	60,000	60,000	0	
総会費	50,000	50,000	0	資料印刷、会場費
役員会費	10,000	10,000	0	役員会議費
事業研究費	390,000	400,000	Δ 10,000	
研究大会	30,000	30,000	0	会場費、謝礼
研究調査	50,000	50,000	0	推進委員会、部費
会報	40,000	40,000	0	印刷代
支部研究	270,000	280,000	Δ 10,000	支部研究費
役員旅費	70,000	70,000	0	関プロ旅費等
生徒作品展	130,000	130,000	0	賞状・看板代
研究集録	90,000	90,000	0	印刷製本代
表彰費	5,000	10,000	Δ 5,000	賞状・額縁代等
図書費	5,000	5,000	0	参考書等
分担金	130,000	120,000	10,000	関プロ分担金等
関プロ準備費	50,000	202,000	Δ152,000	諸準備費
雑費	5,000	5,000	0	車代他
予備費	3,710	7,528	Δ 3,818	写真代等
合 計	1,037,710	1,198,528	Δ160,818	

# 平成9年度小中教育研究会予算

## ◎歳入の部 91,387円

項目	本年度予算額	前年度決算額	増	減	摘要
会費	48,000	48,000		0	120名×400円
県費補助金	43,000	43,000		0	県助成金
繰越金	337	431	△	94	前年度繰越金
利子	50	59	△	9	預金利息
その他	0	0		0	
合計	91,387	91,490	△	103	

## ◎歳出の部 91,387円

項目	本年度予算額	前年度決算額	増	減	摘要
研修、研究調査					
調査・研究費	35,000	35,000		0	調査、研究運営費
通信費	8,000	8,000		0	葉書・切手・送料
会議費	8,000	8,000		0	会議費・茶菓子代
雑費	6,387	6,940	△	103	事務用品他
小計	57,387	57,490	△	103	
研究運営・発表					
研究運営費	20,000	20,000		0	研究運営・印刷費
通信費	8,000	8,000		0	葉書・切手・送料
会議費	6,000	6,000		0	会議費・茶菓子代
小計	34,000	34,000		0	
合計	91,387	91,490	△	103	



平成9年度 第11回生徒作品展  
(於・甲府市総合市民会館)

## (6) 三十年史の資料

### これからの中学技術・家庭科

文部省初等教育局職業教育課  
教科調査官 浅見 匡

山梨県中学校技術・家庭科研究会「33周年記念誌」の発刊、おめでとうございます。

平成3年6月には、本研究会定期総会にお招きいただき「中学校技術・家庭科の動向」をテーマに講演させていただきました。当日は、摂氏37度の猛暑にもかかわらず大勢の先生方が参加し、盛会でした。その時、改めて本研究会の組織力、研究への取り組み等の底力を感じました。

ここでは平成7年度全国大会（山梨大会）へ向けた研究の際の参考と記念誌発行時の技術・家庭科のねらい等を述べ「本会に寄せることば」とさせていただきます。

文部省は、平成元年3月に「中学校学習指導要領」を改訂しました。この学習指導要領は、教育課程審議会の答申の趣旨を受けて作成されたもので、技術・家庭科のねらいの達成を次のように考えることができます。

① 豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること。

- ・ 技術・家庭科は、実践活動を通して、生活に必要な知識と技術を習得させ、日常生活や社会生活を尊重する立場から生活を工夫し創造することを目標としている。この本教科の目標自体が改善のねらいに迫るものである。
- ・ 実践的・体験的学習の一層の充実を図り、生徒が主体的に学習に取り組むことにより、仕事の楽しさや完成の喜びを体得させる。

② 自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること。

- ・ 技術・家庭科は、実践活動を中核として学習を展開するものであり、目標をめざして計画を立て、実践し、評価する。このような一連の過程を主体的に身につける学び方を学ぶ教科である。
- ・ 調査・研究、計画、製作、整備などに

かかわる具体的な活動を通して、生徒が各自の日常生活における課題を見つけだし、自主的・主体的に学習する。このような学習は、問題を解決する実践的な態度を育てることをねらいとする。

- ・ 「情報基礎」の領域を新設し、社会の情報化に主体的に対応できる基礎的な資質を養うことをねらいとする。
  - ・ 「家庭生活」の領域を新設し、家庭の機能の変化に主体的に対応する能力を育てることをねらいとする。
- ③ 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること。

- ・ 小学校の家庭科などの学習の上に、中学校段階で身に付けさせるべき生活に必要な知識と技術を習得させるよう、基礎的・基本的な内容に精選集約する。
  - ・ 「木材加工」「電気」「家庭生活」「食物」の4領域は、すべての生徒に履修させ、その他の領域は生徒の興味・関心などに応じて履修させる。
  - ・ 「木材加工」「家庭生活」は、本教科の基礎的・基本的な事項の定着を図るため、第1学年で履修させることを標準とする。
  - ・ 各領域の内容に示す事項の指導に当たっては、生徒の興味・関心や個性などを生かした取り扱いができるよう題材の弾力化を図る。
- ④ 国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること。
- ・ 各領域の学習を通して、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重するとともに生活と技術との関連を理解させ、わが国の文化と伝統を大切に育てる
  - ・ 地域の特性を十分に生かせるように題材選定の弾力化を図る。

## 本会に寄せることば

前文部省初等中等教育局視学官

群馬大学教育学部教授

津止 登喜江

山梨県中学校技術・家庭科研究会におかれましては、この度「33周年記念誌」を刊行されることになり、今日に至るまでの充実した研究活動及び円滑な運営に敬意を表する次第でございます。

また、33周年記念誌に一言を述べさせていただくことは、たいへん光栄に存じます。顧みますれば、第24回関プロ山梨大会や県研究発表会等に度々お招きくださる機会があり、ご関係の皆様方の熱意に深く感銘したことなどが思い出されてまいります。そして、研究テーマは、その時代の課題を的確にとらえ、技術・家庭科教育の真髄を見極めるような研究実践でありました。

いよいよ中学校学習指導要領の新しい教育課程の基準は、平成5年度より完全実施になります。新学習指導要領は、21世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成する観点から、子どもたちの教育はどうあるべきかを審議した教育課程審議会の答申を受けて作成され、平成元年3月15日、学校教育法施行規則の一部改正と中学校学習指導要領が公示されました。今回の改訂では、これからの教育は、覚え込ませる教育よりも、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を基調とする教育へと質的な変換を遂げることを目指しています。そして、学校教育は生涯学習の基盤を培うものとして、主体的な学習者を形成するとともに、自己教育力の育成が重視され、心身ともに、たくましく生きる人間を育てることが強調されたのです。自己教育力という言葉は、第13期中央教育審議会の教育内容等小委員会「審議経過報告」のなかで登場して久しく、そのとらえ方はさまざまですが、「審議経過報告」では①旺盛な学習意欲と意志の力 ②学習の仕方 ③生き方にかかわる問題の三つが内容であるとしています。技術・家庭科の主体的な実践活動や問題解決的学習は、自ら学ぶ心、力、

態度を身につけるなど学習の自立を図り、また、人間としての生き方に関する教育にかかわり深い教科として、究極の目標は、今回の改訂の趣旨である自己教育力の育成そのものといえましょう。

この度、発表された小学校及び中学校生徒指導要領の改善について（審議のまとめ）によれば、新学習指導要領が目指す学力観に立った教育の実践に役立つようにすることが改善の基本方針の第一にあげられております。各教科の評価の観点は、基本的には「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現（または技能）」及び「知識・理解」によって構成されました。技術・家庭科は、「生活や技術への関心・意欲・態度（生活や技術について関心をもち、生活を充実向上するために進んで実践しようとする）」「生活を創意工夫する能力（生活について見なおし、課題の解決を目指して工夫し創造する）」「生活の技能（生活に必要な基礎的な技術を身に付けている）」「生活や技術についての知識・理解（生活や技術に関する基礎的な事項や生活と技術とのかかわりについて理解し、知識を身に付けている）」が評価の観点と趣旨になり、目標や内容が踏まえられております。

新しくスタートした技術・家庭科は、家庭を取り巻く環境や社会への変化の対応、女子差別撤廃条約や臨時教育審議会の第2次答申（家庭の教育力の回復）などの時代的要請から改善が図られ、領域の構成、履修方法、履修学年、授業時数などが大きく改訂されました。技術・家庭科が果たしてきた今までの実績を再確認するとともに、改訂の背景、趣旨等を十分把握して、時代に生きる技術・家庭科の担当者として今後一層のご研鑽に期待する次第でございます。

最後になりましたが、山梨県中学校技術・家庭科研究会が今後ともますます充実し、発展されますことをご祈念申し上げます。

## 関ブロ大会に思う

関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究会長

東京都世田谷区立山崎中学校長 木崎 康男

山梨県中学校技術・家庭科研究会「33周年記念誌」の刊行おめでとうございます。貴会の長年のご努力に敬意を表します。

風林火山の旗印と武田節、これが昭和39年第3回 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会山梨大会に参加したときの印象でした。甲府の市街は、いかにも甲斐の武田を思わせる雰囲気を残しておりました。あれから27年の歳月が流れているかと思うと感慨無量です。

私は昭和35年3月東京都文京区第五中学校に、当時の田島寛一校長に呼ばれ「全国の中学校技術・家庭科研究会の連合組織を創ろうとしている。ぜひ五中にきて手伝ってこないか」と言われました。現在の全日本中学校技術・家庭科研究会発足の準備中のことでした。職業・家庭科が技術・家庭科に変わりはしたものの、あらゆる意味で中学校教育の中で「市民権」が確立せず、悶々としていた時でしたので、本当に一筋の光明をみる思いでした。

それから2年後の昭和37年に第1回の全国大会・関ブロ大会が群馬県桐生市で開催され、第2回関ブロ大会が千葉県、第3回関ブロ大会が山梨県で開催され、今日に至っております。

第3回の関ブロ大会が山梨県に決まった経緯はわかりませんが、第2回の関ブロ千葉大会が決まったのは、第1回大会前夜のことであつたと聞いておりますので、おそらく山梨大会も慌ただしく決定したものと思います。

私は当時を振り返ってみて、そのような中で開催を引き受けられた吉岡忠喜会長の決断を立派とするとともに、先生の本県の研究成果に対する自信と、県研究会に対する信頼を羨ましく思います。このことは、昭和33年に文部省の産業教育研究指定校の合同発表を甲府南中学校で開催されて以来の「連盟」結びつきの強さであり、その後の県技術・家庭科研究会の実績であつたろうと思います。

第3回大会の思い出は、ぶどう畑の中の道を会場校で買ったぶどうの籠を下げて歩いたことであり、第14回大会の思い出は富士吉田市民会館？の立派さでありました。

この大会の分科会の研究テーマをみておきますと、「家庭電気」「家庭機械」など、現行の学習指導要領にはない領域があり、この教科の変遷の一端と、現場の苦勞が忍ばれます。

第24回大会当時は、私は教頭でしたので校内事情でぎりぎりまで参加できるかわからず、当日申し込みで分科会だけ参加しました。石和中学校「保育」の分科会でした。

実はこの時にいただいた分科会資料が、臨時教育課程審議会の「学校現場の聞き取り～中学校技術・家庭科の保育教育のあり方」に役立ちました。継続は力なり、とよく言いますが、中学校だけの研究会で全国全都道府県をカバーし、7地区のブロック大会と全国大会を30年間開催し続けた教科は他にはありません。この努力こそが力であり、教科を動かしているのです。社会の変化に主体的に対応し、常に変革を求められるのがこの教科の宿命だと思います。

時代は大きく変わろうとしています。「情報基礎」「家庭生活」の領域の新設、性差による学習内容の区別の撤廃などは、まさに時代の変化と要望に応えるものでしょう。しかし、「木材加工」「食物」「電気」のような不易のものを大切にしたいと思います。物を作る技は、知識ではなく知恵の結晶です。知識偏重の学校教育の中にあつて、知恵の教育を目標に掲げているのは、この教科しかないといっても過言ではありません。21世紀に生きる人間の育成という目標とともに、今、生徒は何を求め、何に感動しているのかをはっきり見つめながら、研究と日々の教育活動を進めたいと思います。

平成7年の、第34回全国・関ブロ山梨大会に期待しております。



## 編集後記

●『山梨の技術・家庭科40年の歩み』には、昭和54年（1979年）3月に刊行された『技術・家庭科20年の歩み』というモデルがある。本誌は、先輩たちの残してくれたこの20年史の編集方針に従ってほぼ構成してある。B5版、横書168ページの体裁も同様である。

今回の編集・出版の仕事には、山梨県中学校技術・家庭科研究会（平成9年度）事務局担当者全員があたった。事務局長・長田 靖（竜王中）／事務局次長・小宮山幸枝（小淵沢中）／事務局員・三枝 修（春日居中）・横内京子（泉中）・加々本哲也（押原中）・広瀬安男（塩山中）・清田礼子（山梨大附属中）・河野仁美（甲西中）・石川徹（芦安中）・小澤建二（長坂中）・杉本博之（北東中）・小野一人（甲府東中）・長久保 学（明野中）・鈴木 昇（山梨大附属中）・神宮司真佐子（富竹中）／会長・岩間孝吉（上条中）／副会長・斎藤 章（富竹中）・山田順子（笛南中）（順不同）

●呼び掛けに応じて、全日本中学校技術・家庭科研究会会長様、文部省初等中等教育局視学官様はじめ、山梨県内外の多くの方々から原稿をお寄せいただき感謝である。技術・家庭科の大先輩の皆様方や、歴代の指導主事・研修主事の方々からもご寄稿いただいた。

40年の歩みの中で、37年目の平成7年に全日本中学校技術・家庭科研究大会・山梨大会を、全国の方々の協力で開催することができた。その時の一木貞夫会長、清水禮子副会長にも執筆していただいた。20年史にはなかったものに、本研究会主催の「生徒作品展」があり、すでに11年の歴史を持つ。本研究会協賛のロボットコンテスト（ロボコンやまなし）も、自分で製作したロボットを持ち寄り男女中学生が県下で増え続け、5年目を迎えている。

「20年の歩み」がまとめられた後、「33年の歩み」をまとめる計画が立案されかけたけれど、困難な事情のため達成できなかったという。その折、すぐに4名の方々が玉稿をお寄せ下さり、後々の担当者に引き継がれていた。今回、その当時の状況を知る貴重な資料として、本誌に収録させていただいた。時機を失した掲載になってしまったことを、心からお詫びします。

●技術・家庭科担当教師の条件とは何か？…それは、技術・家庭科が好きということ。また、子ども（人間）と一緒にものをつくりだすことが好きな人間（教師）であることだろう。私たち一人一人の日々の小さな営みが、山梨の技術・家庭科教育40年の歴史そのものになっていくのではないか。  
[岩間孝吉・記]



1998年(平成10年)6月30日 発行

## 山梨の技術・家庭科40年の歩み

編集 山梨県中学校技術・家庭科研究会  
40周年記念誌編集委員会  
事務局長 長田 靖(竜王中学校教諭)  
〒401-0115 山梨県中巨摩郡竜王町篠原2030  
竜王町立竜王中学校 TEL0552-76-2636

発行者 山梨県中学校技術・家庭科研究会  
会長 岩間孝吉  
(甲府市立上条中学校長)

印刷所 トリオ印刷(有)

